

98-104

畠山健選輯



新辭林

東京
大阪

郁文社
發行

明治

28 4 13

丙交

例言

- 一 本書は普通文、口語文、書簡文、美文等、あらゆる文章を作るに當り、その詞藻をねり、語句をえらぶとき、座右に備へんがために、あまねく所要の材料を蒐集し、これに平易なる解釋を施せるものなり。されば内容の上よりいへば、一種の讀書辭典とも謂ふを得べし。
- 一 本書は從來坊間に流布する類書と其の趣を異にし、各自の思想を發展し、文意の暢達をはかるに緊要なる材料及び事柄は、一切これを網羅したり。
- 一 本書部類を分ちて、漢字用法、熟語、故事、俚語、名數、名物の六門とし、搜索の便をはかりて、秩序を正し、五十音順に排列したり。たゞし名數に限り、數字の順に従ひたり。
- 一 漢字用法は、同訓にして意義を異にする漢字を摘出して、經書の正醇なる用例に據りて、其の區別を明らかにしたり。動詞にては、

うつ 伐征討撃打撲拍
そしる 誹謗謔詆毀訕刺短
みる 視見看覽瞻視觀

などの如く、又名詞、形容詞、副詞、助辭等にても普通の用語は悉く舉げて區別し、用例をも示せり。例へば、

みち 道路途徑

よし 善良好佳

しばらく 暫姑且 須臾 斯須 頃 少間

なんぞ 何奚曷胡

などの如し。

一 熟語は無限に多数なれども、古今に通じて用ひらるゝものは、遺漏なからんことを勤め、且つ近來廣く使用せらるゝ新熟語をも採録し、字畫を正し、簡明なる解釋を加へ、且つ其の用例の一般をも示せり。例へば、

くわいしや 膾炙……………「人口に炙膾す」

たいご 態度……………「慎重の態度」

ちゆうこん 忠魂……………「忠魂義膽」

などの如し、なほ國語にて熟語のやうなるものをも多数に擧げたり。例へば、

あしわけをぶね 葦分小舟

ゆさん 遊山……………花見遊山

などの如し。

一 故事は、或る典故によりて、特別の意味を爲すもの多し。例へば、

かんだんのゆめ 邯鄲の夢

けんきんのい 獻芹の意

しゆつらんのほまれ 出藍の譽

しめんそかのこゑ 四面楚歌の聲

などの如し。猶我が國にて名高き故事例へば、

あかしのあらそひ 阿衡の争
こがねはなまぐ 黄金花咲く

の如く、或は亦詩歌の句などに屢々引用せられ、人口に膾炙せるものはつとめて挙げたり。例へば、

一將功成りて萬骨枯る

前途程遠し思を雁山の暮雲に馳す

秋風起て白雲飛ぶ

の如きことは出典を明かにせずば、其の意詳かならざるもの多し。依りて先づ穩當なる解釋を下し、出典は原書により、漢詩、漢文は盡く譯して出せり、これ初學者にも容易に了解し易からしめんことをはかもてなり。

一 俚語は、遍く世の口頭にのぼるものなれども、其の意を詳かにせざるもの多し。これには、つとめて平易なる釋義を加へ、且つ和漢の古書經典に出處をたづね、或は俳諧、川柳などの平民文學上に顯はれしも

のをも出せり、これを文に用ゐて寸鐵人を殺すの力あるべく、或は頤を解かしむる妙あるべければなり。例へば、

いせやひうがのものがたり 伊勢や日向の物語

うぢなうしてたまのこし 氏無うして玉の興

おなじあなのまつね 同じ穴の狐

らくはくのはね 樂は苦の種

などの如し。

一 名數は和漢洋の醫書、佛名、人名等を舉ぐれば、殆んどその限を知らざれば、作文上に用ふべきもののみを選びて出せり。例へば、

人の三不幸 人の三不祥 和歌の三夕 學問の三要

四計 四端 四恩 竹林の七賢 近江八景

の如し。

一 名物に就きては、浩瀚に亘り易く、これのみにても優に一大辭典を爲すに足るべければ、本書には、古雅なるものを省き、日常の事物につ

きて普通語のまゝに列挙し、これに類語異名等を列挙したり、されば、雅言詩語、隠語など、さまざまありといへども、皆正確なる出處あり、今は、一々附記するの煩を省きたり、例へば、

きく 菊 佳友 霜下傑 秋香 節花 重陽花 晚節香

こなみ 小波 瀾 淪

さいなみ 平波 細波

じぶんのいへ 自分の家 倭屋 弊館 柴門 蓬屋 陋居 草亭

さけ 酒 竹葉 天の美祿 含春王 醴泉 紅友 玉露春

等の如し、

一 本書は倉卒の間に稿を終へたれば、前後或は體裁の一致せざる所もあらむ、或は杜撰のふしもあらむ、そは再版の折を期して改訂する所あるべし、

實業團體大祝捷會舉行の日

明治三十八年四月

編者しるす

同訓
異義
漢字用法

同訓漢字用法



【嗚呼】は嗚呼と同一、韓退之の師說に、嗚乎、師道の辱らざるや欠しとあり、句讀にも用ふ。
 【嗚呼】はさてもく、と譯すべし、嘆美にも、哀傷にも、悲痛にも、總べてに通じて用ひらる、五代史に嗚呼天下梁を惡むこと久しと、又嗚呼楚の君誠に其道を得たりとあり、嗚呼盛哉。
 【嗚乎】は嗚呼と同じ、韓退之の師說に、嗚乎、師道の辱らざるや欠しとあり、句讀にも用ふ。
 【嗚呼】はこれに、と譯し、感心して發する語、又何れの場合にも用ひらる、嗚、我れ人を憫ふの如く用ふ、又二字嗚々と連用するも意味は同じ。
 【嗚】は何ともいふことのできぬ程呆れたる時の發語にて、國語にては只あ、と譯す、韓非子に嗚これ人に君たる者の言にあらざるなりとあり。
あかし 赤、朱、紅、丹、緋、緋、
 【赤】はあか色の中にて濃からず薄からず、中間の度をいふ、動物の血の色は即ち赤なり、又地に物の生ぜざるを赤地といふ、赤米、赤繩。
 【朱】は赤より少しく色濃きもの、あかしと用ふること少なく、赤き衣をば赤衣といはずして朱衣といひ、又赤冠といはずして朱冠といふが如く用ひらる。
 【紅】は赤に白の混じたるにて、即ち桃花の色の濃きなり。

辭なり、咨、四岳士と魯典にありて、古くは多く用ひたれど今は少なし。
 【嗚呼】はさてもく、と譯すべし、嘆美にも、哀傷にも、悲痛にも、總べてに通じて用ひらる、五代史に嗚呼天下梁を惡むこと久しと、又嗚呼楚の君誠に其道を得たりとあり、嗚呼盛哉。
 【嗚乎】は嗚呼と同じ、韓退之の師說に、嗚乎、師道の辱らざるや欠しとあり、句讀にも用ふ。
 【嗚呼】はこれに、と譯し、感心して發する語、又何れの場合にも用ひらる、嗚、我れ人を憫ふの如く用ふ、又二字嗚々と連用するも意味は同じ。
 【嗚】は何ともいふことのできぬ程呆れたる時の發語にて、國語にては只あ、と譯す、韓非子に嗚これ人に君たる者の言にあらざるなりとあり。
あかし 赤、朱、紅、丹、緋、緋、
 【赤】はあか色の中にて濃からず薄からず、中間の度をいふ、動物の血の色は即ち赤なり、又地に物の生ぜざるを赤地といふ、赤米、赤繩。
 【朱】は赤より少しく色濃きもの、あかしと用ふること少なく、赤き衣をば赤衣といはずして朱衣といひ、又赤冠といはずして朱冠といふが如く用ひらる。
 【紅】は赤に白の混じたるにて、即ち桃花の色の濃きなり。

【呼】は心中に疑ひ怪むとあるなり發する聲、サリトトと考ふる時に發するなり、呼、君何ぞ見る、ことの晩きや、
 【嗚】は人に呼びかけて依頼するが如き心を持ちて發する嘆、其の意呼より重し、
 【呼】は心中に疑ひ怪むとあるなり發する聲、サリトトと考ふる時に發するなり、呼、君何ぞ見る、ことの晩きや、
 【嗚】は人に呼びかけて依頼するが如き心を持ちて發する嘆、其の意呼より重し、
 【呼】は心中に疑ひ怪むとあるなり發する聲、サリトトと考ふる時に發するなり、呼、君何ぞ見る、ことの晩きや、
 【嗚】は人に呼びかけて依頼するが如き心を持ちて發する嘆、其の意呼より重し、
 【呼】は心中に疑ひ怪むとあるなり發する聲、サリトトと考ふる時に發するなり、呼、君何ぞ見る、ことの晩きや、
 【嗚】は人に呼びかけて依頼するが如き心を持ちて發する嘆、其の意呼より重し、
 【呼】は心中に疑ひ怪むとあるなり發する聲、サリトトと考ふる時に發するなり、呼、君何ぞ見る、ことの晩きや、
 【嗚】は人に呼びかけて依頼するが如き心を持ちて發する嘆、其の意呼より重し、

あかき (漢字用法)

にの色なり、梅に紅梅といふあり、又年少き人の顔色のあかきを紅頭といふ。

【丹】は赤の内にて最も濃き色にて、丹砂の色のこと、即ち少しく黒みを帯ぶる程なるをいふ、詩經に顔は渾丹の如しとあり。

【緋】は赤色の麗々しき色なり、もと衣服の染色より始まりし字にて、緋の衣、緋の袴などいふ如く、染め色の美しく光あるをいふ。

【赭】は赤と黒との混合せしへにがら色をいふ、赭山とはあか土の草木の生ぜざる山なり、赭と殷とは赭に同じ。

あがなふ

【賈】は金銀にて買ひとること、代りとして物を出すこと、賈求、購買、賈手金、賈物。

【賈】は物を罪の代りに出し、請ひて其罪を消すこと、贖罪、贖物。

あぐ厭、飽、飲

【厭】はいやになる程に、あぐみ満ちたる意、飲食に就いていふ、厭と音義通じて用ふ、即ち厭ひ嫌ふ程なるを強くいふなり、孟子に酒を樂みて厭なきは之を亡といふとあり、又酒肉に饜きて後反るともあり。

【飽】は欲する思ひに足り満つること、厭ひ嫌ふ程には至らぬをいふ、不足なく、充分に足れること、故に飽に飽きぬをいふ。

あむ

仁義に飽くなど用ふ、論語に、君子は食は飽くことを求むる無く、居は安きを求むるなし、又左傳に小人の腹は飽きて、猶服き足るが如しとあり、(飲)は馳走にあく事

あぐ(あがる)

【揚】は勢よく上に打ちあぐる意、又物を引きあげ衝きあぐるにも用ふ、旗を揚ぐ、紙風を揚ぐ、風船を揚ぐの如し、激揚、抑揚、揚々自得、(颺)は揚に同じ。

【舉】は下より物を取りあぐること、書經に晉國より舉ぐる所の者は、管庫の士なりとあり、管庫の士は庫番人なり、前漢書に人主は過ちて臣を舉ぐるることなしとあり、又杜甫の詩には鷹を舉ぐるとあり、されば揚よりは穩かに物をあぐる意あり、又感興美事などの如きは只行爲といふ程のことなり、推舉、一舉手一投足、舉行、

【扛】は重き物を入れて擔ぎあぐる意、國語に龍文の鼎を扛ぐと見ゆ、(稱)は音訓にて優めあぐる事

あた(あかし)

【暖】は氣候の暑からず寒からず、人身に適する暖をいふ、冬の日にても日中風なく、日和よき頃のあたかさをば冬暖といひ、又二三月頃の未だ雪なごある頃にふくあたかき風を暖風といふ。

【温】は水の熱度の甚だ高からず、又低からざるをいふ、温

泉、温湯の如し、轉じて人に接して穩かなる性質の人を温順、又温和なる人といふ、氣候の暖かきにも用ふ、温和。

【暄】は氣候のあたかになるをいふ、三四月比の花の開き始むる頃のあたかきなり。

【煦】は日光の爲めにあたかになること、又氣息にてあたかむること、禮記に氣を煦と曰ひ體を煦といふとあり、又手を以て之を煦むとは、息にて手をあたかむることなり。

あたる(あつ) 中、當、方

【中】は的に向ひ矢を射て、其中心を射貫くが如く、目的とする者に正しくあたりてそれに突入すること、左傳に季孫曰く、于家子亟々我に言ふ、未だ嘗て吾が志に中らざるなしとあり、于家子は人名なり、又暑に中りて死すとは、暑氣の爲に病となりて死ぬるなり、瘴氣に中るも亦然り、故に我が志に中る、我が望に中るとは、實に能く其事に合したるをいふ、的中、百發百中、中遊。

【當】は正面に對する義、兩者相適合して優劣高下なきなり、論語に仁に當りては師に譲らず、又尚相如傳に天下能く當るもの莫しと、又論語に君子は暑に當りては單帷子を必ず表衣として出づとあり、暑に當るは暑き時候に至り

あたる (漢字用法)

てはの意にて、皆他物に立ち向ふ心なり、相當、適當、恰當、正當、至當、擔當、當番、當時、當初、當年、當直、

【方】は事の起れる丁度其時にといふ意、まさにとも讀みて時に剛してのみ用ふ、東坡の前赤壁賦に曹操荊州を破りて江陵を下り流に順ひて東するに方り、軸輻千里、旌旗空を蔽ふとあり、方今、

あがる(あつ) 預、干、與、涉、關

【預】は本義にては、或事を成すに自分も其仲間となりて、それをなす意なり、故に今日普通にいふ他人の物品を自分が一寸管理して居るといふ意にはあらず、左傳に婦人をして國事に預らしむるなかれとあるは、即ち女をば國政を論する者の仲間に入る、勿れとの意なり、預金、

【干】はをかす又はもとも讀みて、自分の方より差出で、其事に係づらふこと、干與、

【與】は預と音通、義も亦同じ、

【涉】はわたるとよみて、其條に出だせる如く淺薄にして廣く通ずる意なり、而して差し出て、なす意をも含む、故に干渉と連用し差し出て、チヨックと或事にたづさはるをいふ、

【關】は或る事物に心のか、はり居りて、離れぬをいふ、即ち心が、りするなり、關心、關係、關聯、

あつし 篤、厚、敦

あつまる

あつむ (漢字用法)

【篤】は固く強くなる意、論語に信を篤くして學を好む、又史記流離傳に應侯遂に病篤しと稱すと、又禮記には儒行は行を篤くして信ますとあり、固く強くなる意より、又熱心なる意に轉用す、篤學の士、篤行の君子などこれなり、篤疾、危篤、篤實、篤行、篤學、

【厚】は薄に對し物のあつきをいふ、故に轉用して專念注意することにも用ふ、大學に其厚くすべき所の者を薄くして、其薄くすべき所の者を厚くするは、未だこれあらざるなり、又漢書に故舊に厚しとあり、厚と篤との差は、厚は事物に對し心を用ふることの深きをいひ、篤は行の熱心なるをいふと知るべし、温厚の君子、厚情の士、又風俗厚し、民徳厚しなど用ふ、

【敦】は厚の甚だ深きをいふ、孟子に柳下惠の風を聞く者は、鄙夫は寛に、儒夫は敦しとあり、敦篤、

あつむ(あつまる) 集、聚、萃、會、纂、輯、棧、

【集】は諸處に散在せるものを一つ所に寄すること、詩經に黃鳥飛びて灌木に集まる、其鳴くこと喈々たりとあり、又史記始皇本紀に天下雲の如く集まる、又商君傳に小都郷邑を果めて縣と爲すとあり、集合、集會、召集、密集、集團、集注、

【聚】は果に似たれど、聚はあつむといふ時も、自らあつまるの意に近し、又集は多數のことに用ふれど、聚は少數

むる集合の意にて、首を集むは首の落ちてあるのを拾ひあつむるなり、會合、集會、

【纂】書物をかきあつむること、編纂、

【輯】は彼れ此れ種々取り集めて一纏にすること、又集と音通じ同様に用ひらるることあり、書物を作るを編輯といふも編み輯めて一部の書となす意なり、纂輯、

【棧】は車の矢の轂へ寄り集まる如く、一處に集まる意なれど、其用法狭し、輾轉と連用して貨物を運搬する車船等の集まるに用ふ、

あつむ 跡、迹、蹟、址、痕、軌、

【跡】は歩みたる所、あしあとのこと、蹤跡といふ時は、去りたる方、行く方を用ふ、足跡、形跡、名跡、

【迹】【蹟】【址】は跡と同じく通用す、又事物の過ぎて後にのこるしるし、事蹟、不踐迹、墨蹟、遺蹟、往蹟、宮址、

【痕】はあとのつきて後に遺ること、墨痕、涙痕、瘡痕、

【軌】は車輪のあとの意、軌記、軌道、廣軌、同軌、

【侮】は心に侮るより、遂には言語動作にて、先方を輕視す

【慢】は心に侮るより、遂には言語動作にて、先方を輕視す

あはれむ (漢字用法)

あつむ (四)

のことに用ふ、柳宗元の郭橐駝傳に且暮吏來り呼びて曰く、官命なり、爾の耕を促れ、而の幼孩を字め、而の鵝豚を遂げよと、鼓を鳴らして、民を聚め、木を擊ちて之を召すとあり、促はとるなり、幼孩は幼兒をいふ、字は愛しいつくしむなり、遂は成長させるなり、又捕蛇者の説に其の始め大醫王命を以て之を聚むとあり、又易に方は類を以て聚まり、物は群を以て分つ、又前漢書に五星東井に聚るとあり、是れ郭橐駝の聚は、官吏が來り召すや人民が若し其命に背く時は罪せらるるを恐れて速かにあつまりり行くの急なる意、又次の捕蛇者の説の聚は極めて僅かの蛇を取るなり、又易經の聚はあつまるとよむ通りなり、又前漢書の聚も同じ、聚散、聚合、

【萃】は寄り集まること、俗語のヨリタカルといふに同じ、梁史に魏の精銳盡く此に萃まるとあり、又詩經に芻あり萃まり止まるともあり、聚に近し、拔萃、

【會】は相互に一所へ寄り合ふなり、禮記に會して以て聚を聚むとありて、あつむる意にあらず、あつまるなり、聚又萃の如く或一物を主として其周圍にあつまるにあらず、相互に同等の地位を以てあつまる意なり、故に友を會むとは一處に集合すること、友を集むとは自分の處へ引きあつむること、友を聚むは友達が寄り集まることなり、又首を聚むとは人々が自分の頭を一處へ差出しあつ

る意、侮より甚しきなり、されば侮慢と用ふるは、人をあなごる等の至極なり、又漢書に桀紂は暴慢なりとあるは、言語にては行為にては人を人と思はず、恰も己のみ人間にして、他は皆獸類かの如くになすをいふ、侮慢、慢侮、慢欺、怠慢、倨慢、驕慢、

【憫】は、人の艱難を傷はしくふびんに思ふこと、惻然、憫察、

【憐】は、いつくしみ、可愛ゆく思ふこと、愛憐、憐花、

【矜】はかなしみ傷むこと、哀矜、

【あは(あはす)逢、遇、遭、合、值、會、

【逢】は互に約束し置きて、彼方より來る者に面會すること、又は或る時節と會することなり、初めの場合には、一方は迎ふるにて逢迎といふ、又轉用しては彼方より來ること、此方にて知りて出會する時に、約束の有無に問はず用ひらる、左傳に民は山澤山林に入りて不若に逢はず、曠野同而能く之に逢ふことなり、不若とは怪物なり、又次の場合の例は晉書に、司馬孚廢立の際に逢ふも、未だ嘗て謀に預からずとあり、逢吉、逢着、逢福、

【遇】は期せずして偶然に出であふこと、左傳に期せずして會するを遇といふとあり、又史記公と宋公と滑に遇ふとあり、遭遇、奇遇、

あはれむ (五)

【遣】は時節と會するにも、人に行きあふにも用ふれども、皆圖らざる折の事、又は悪しき事に用ふ、禮記に道に先生に遭ふと、又柳子厚の文に君子は亂世に遭ふと、又天災地變に罹るをあふといふも此の字にて遭難といふ、火災に遭ふ、震災に遭ふの如し、然して遭遇と重ぬる時は時代に會する意なり、

【合】は上の諸字と異なり、物事の同じ様に相應じ一つになること、道に會すること、時節にあふことには用ひず、しかし時節に合ふとはかけども、此の意は或る時節には、其時節らしきことをして、時節に適當するの意、又時勢に遭ふとは其様な時勢に成り來れる時に、丁度自分も世に出でたる意、又互に人の面接することながら、一處に集まるをいふ時は、合を用ひて運送を用ひず、和合、吻合、集合、會合、配合、合同、合力、合成、合立、符合、合計、

【値】はある場合に會することなり、又あたることなり、蒙求に寤成の怒に値ふなしとあり、

【會】物の一つになること、會合など用ふるにて知るべし、會議、會話、會社、會計、

あへて 敢、肯、

【敢】はオシキツテといふ意、先方に對して憚るべきことも憚り遠慮せず、勢よくする意、從て又十分心に決心して、

其決心通りに飽くまでも爲すといふ意あり、故に忍び爲すなりと注せり、例へば敢て自ら量らずとは、如何なる場合にも屹度自ら量るといふことはせぬといふ意なり、又敢て自ら勉めざらんやとは、如何なる場合にも屹度自分にて勉むるといふ事をしなからうか、屹度自ら勉むるといふ意なり、我今征露の軍に従ふ、敢て鼻息の深きを忘れんや、只身を以て之に報ぜんのみ、敢争、敢問、敢爲、敢辭、敢戰、不敢、敢諫、勇敢、

【肯】は本字は肯の字なり、がへんずとも讀みて心に承諾し納得すること、肯て見ずとは見るとを心に承諾せぬこと、敢て言はざるに非らず、肯て言はずとは、屹度少しも言はぬといふことにはなれども、得心して言ふことを承諾せずといふ意なり、又露軍肯て河を渡らずと言は、これクロバトキン等露軍の位地よりの觀察なり、露軍敢て河を渡らずと書かば、日本軍より露軍を見たる時の有様なり、彼敢て進まずんば、我何ぞ肯て進まんや、猶漢文にては、不敢と敢不とは意味反對にして、敢不は反語にて敢て何々せざらんやとなり、不敢は敢て何々せずとの意なり、肯來、肯諾、肯爲、

あまねし 周、普、徧、遍、狹、恰、

【周】は隅より隅まで綿密に至り盡くし行きとく意なり、易經に知は萬物に周くして、道は天下を濟ふとあり、又

論語に君子は周くして比ならずとあり、比は偏頗なることなり、周到、

【普】は只一面、又は一體にかゝる義にて、細々しきことをいふにあらず、易經に見龍田にあり徳を施すこと普しと見え、又詩經に普天の下王の土に非らざるはなく、率土の濱王の臣にあらざるはなしとあり、又普及、普通など皆廣く一般といふ意なり、

【徧】は彼れにも此れにも残る所なく通することなれども、周の如く意強からず、又廣からず、即ち一ツペン通り行き渡ることなり、詩經に群黎百姓徧く爾の徳と爲すとあり、又史記蘇秦傳に室を開けて出でず、其書を出して徧く之を觀るとあり、

【遍】は徧の俗字なり、通照、

【狹】は水の地にしみとほる如く、一面に至り極まる意なり、論語に狹く行きて違ふなし、又詩經の序に此の詩の經たる、人事下に狹く、天道上に備はる所以にして、一理の具らざるなしとあり、

【恰】は狹に似て其事物に適合する意を含む、書經に生を好むの徳、民心に恰しとあり、又漢書賈誼傳に之を遠く徳教を以てす、徳教は恰くして民樂むとあり、即ち能く一面に至り通じて、民心に和合するをいふなり、

あまねし 殆、危、

【殆】は心に安からず、あぶなげに思ふこと、危殆と熟するにて知るべし、岌岌乎亦曰殆哉、

【危】はあぶなきの顛覆せんとするに迫り近づくこと、危急、危難、危峯、

あまねし 謬、誤、訛、錯、愆、過、

【謬】は一定の筋道を離れて、紛れ亂ることなり、前漢書司馬遷の傳に差は毫釐なるも謬は千里を以てす、又歐陽修の淮西狀に、謬りて恩寵を承くとあり、謬は終と通用す、禮記に一物の紕繆、民其死を得るなしとあり、謬見、謬察、謬信、

【誤】は手先の過失、又は注意の足らぬより、相似たること幾個もある爲めに生ずる不正のこと、晉書に天下の蒼生を誤らしむる者は、必ずしも未だ此人に非らざるなりとあり、誤謬、誤字、誤認、正誤、誤寫、魯魚之誤、

【訛】は世間多數の習慣となれる不正なる事をいふ、詩經に民の訛言は、寧ろ之を懲す莫しとあるは、何時となく漸々あやまり來りて常の如くなれるをいふ、旅を旅とかき祭を祭とかくが如きは未だ訛といひがたし、切の字を功とかくが如きは訛なり、誤字とは旅を旋とかき、祭を察とかくが如し、訛言といふも多數の人のあやまれる言葉なり、訛傳、

【錯】は物を紛亂して甲乙の正しき位置を取り違へたる不正

あらたむ (漢字用法)

意の過失なり、例へば旅宿とかくを宿旅とかき、入口とかくべきを口入とかくが如し、錯誤、差錯、錯雜、錯亂、失錯。

【意】と【過】とは上の諸字と語格異なり、あやまるに非らずしてあやまつなり、故に名詞ならばあやまちとなる。此差異混同すべからず。

【意】は考へ違ひ又は量見違ひの意にて、多く知らず知らずの間の正しからぬことに用ふ、書經に帝の徳は意つこと同し、下を御するに寛を以てすとあり、又意を繩し謬を糾すといふは、繩は直くするなり、糾は督なり正なり。

【過】は心付かず不注意にてなしたる失錯にて、意に對し實行に就て多く用ひらる、書經に過を宥すより大なるはなし、又論語に過ちては改むるに憚る勿れとあり、過失、あらたむ、改、革、更、悛。

【改】は徐ろに物事をしなほすこと、論語に過ちては則ち改むるに憚る勿れ、又易經に過ち有れば則ち改む、又色を改め非を改めすとあり、改正、改名、變改、改革、更改、【革】は本來の字義は、毛を去りて製したるなめし皮のこと、すみやかと讀む、故に事物を根本より急に變化さする意なり、易經に天地革まりて四時なる、湯武革命を革め、天に順ひて人に應ずとあり、又外國にて度々國家の主權者の變するを革命といふ、これ國の主權者迄急に變ずれば

あらはる

はなり、故に日本には改新、維新は國家の上に度々あれども、未だ曾て革命のありしことなし、萬世一系の皇室を戴けばなり、革新、改革、革命。

【更】は改に似たれども度々代ふる意あり、史記に事を擧げて變更することなしとあり、更易、更代、更々、更衣、變更、更新。

【悛】心をなほすこと、悔悛、あらはる(あらはす) 見、現、顯、著、形、露、覺、表、彰

【見】は隠れたる者の見ゆるをいふ、易經に卦の爻あるは卦の已に見れたる者なり、又見龍田に在りと、これ潛龍用ふる勿れに對したるにて、潛に對する見なり、又史記に情見はれて勢屈すとあり、又中庸に隠れたるより見ゆるは莫く、微なるより顯かなるは莫しとあり、發見、隱見、【現】は見と音も義も同じく隠れたる者の眼前に見ゆるに至りしをいふ、出現は只隱所より出て來りて見ゆるに至ること、現今とは昨日迄は將來にて見ること能はざりし今日を眼前に見るの意なり、現在、現存、現代、現時、現人、現任、現世、現象。

【顯】は幽の反對にて明かに光り輝きて見ゆるなり、中庸に微より顯なるは莫し、又孟子に晏子は其君を以て顯はるとあり、爵位高官高祿の人なごを貴顯士又榮顯人といふ、是れ人に見ゆるに至りしのみならず、名譽の光ある故なり、

り、顯達士、顯者、顯明、顯然、顯著、貴顯、顯職、顯出、顯要、表顯、光顯、貴顯、顯榮、顯徽鏡、【著】は顯と同じく明かに見ゆること、又あらはすこと、中庸に曲能く誠あり誠あれば則ち形はる、形はるれば則ち著し、著しければ則ち明なり、又大學に小人は其不善を掩ひて其善を著はすとあり、捺は蔽なり、又書物を作ることをいふ、著明、顯著、著述、著作。

【形】は現と同じく出現して形の見ゆることながら、今迄空なりし者の目に見ゆる物形となりて人目に入る意あり、又物の眞の形を出すに用ふ、大學に中に誠にして外に形はる、又易經の序に易の卦あるは易の已に形はれたるもの、又禮記に喪に居る禮は與瘠を形はさざるにありとあり、形狀、形體。

【露】は物の原野にありて雨露を蔽ふ者なく、外より見ゆるが如くに人目につくをいふ、俗語のむき出しにせらるなり、歐陽脩の文に龍は見ゆるを以て神となす、儼然として其形を露露すれば、是れ神ならずとあり、然して現と露との別は、現は只今迄或障害物の爲めに隠れて見ゆるに及ばずの意あり、露は被物ありしに其れが取り去られて眞體の見ゆるに至りしことなり、故に戶外に人體現はるとは、物が除けて見ゆるに至れる意にて、人體露はるは裸體の所の見ゆる意なり、又彼れ頭を

あらはる (漢字用法)

あり

【有】は無の反對にて物體の有無を直に指し示すもの、何々があるといふ様に名詞にがといふ手爾波のつきて其下に

あるを常とす、有力、有名、有爲、有年、有罪、有數、有情、有志。

【在】は居の意にて物體のある其場所を直に指し示す字、何處にあるといふ様に、場所を示す語の下に用ひらるるものなり、故に之をにありといふ、在留、在郷、在京、在位、在職、在家、在任、在宅、在役、在昔、在朝、駐在、在來、存在、在天之靈。

【表】は裏の反對にて、裏に置きたる物を人目に付く表に出す意なり、表出、表彰、表裏、【彰】は明かに筋目を立て、飾をつけて立派に人に見ゆるなり、五代史に顔子の行ありと雖も、仲尼に遇はざれば名彰はれずとあり、顯彰、彰明、彰著、【有】有、在、

現はすとば、物隆より出したるにて、彼れ頭を露はすとば、被物を頭にかけてすして居る意なり、露現、露出、露垂、露見。

【覺】は今迄注意せられざりし物の注意せられたること、即ち發覺なり、

【表】は裏の反對にて、裏に置きたる物を人目に付く表に出す意なり、表出、表彰、表裏、

【彰】は明かに筋目を立て、飾をつけて立派に人に見ゆるなり、五代史に顔子の行ありと雖も、仲尼に遇はざれば名彰はれずとあり、顯彰、彰明、彰著、

【有】有、在、

【有】は無の反對にて物體の有無を直に指し示すもの、何々があるといふ様に名詞にがといふ手爾波のつきて其下に

あるを常とす、有力、有名、有爲、有年、有罪、有數、有情、有志。

あり

いかに 如何、何如、若何、奈何、奚若、

【如何】は何に重き意ありて何としかうかといふ意、十八史略に公曰く易牙を宰相になすは如何とあるは、任すべしか又は任すべからざるかを強くいふなり。

【何如】は如に重き意あり、如は宜しきか宜からざるかといふ問ひにて、之に對する答は不可なり。

【若何】の若は如に通じて用ひらる、只如何より意輕し、

【奈何】の奈は如何の二音の合したる者にて、一字にて如何の意を含む、故に昔は一字用ひられたる例多し、奈何は如何よりも意輕し、

【奚若】の奚は何に通じて用ひられ、奚如とも用ひらる、意は何如に同じ、

いかにの種類多しと雖、先づ如何と何如との二つを能く辨へて用ふれば可なり、

いかる 怒、憤、悲、慍、忿、

【怒】はいかりの外にあらはるゝこと、尤も普通に用ひらる、心に甘腹して外面に表はれ、又それより種々の行爲を爲すをもいふ、意尤も廣し、怒氣、怒色、怒髮、怒言、怒聲、憤怒、暴怒、喜怒、赫怒、激怒、震怒、

【憤】は立腹して強く心中におさまへ、又は言語外貌に表はる

るをいふ、彼れ憤つて曰く汝若し去らずんば吾れ去らしめんの如く、憤は怒の内にと知りし、憤怒、憤懣、憤激、

【慍】は心に思々しく思ふこと、立腹して怒む情の強きをいふ、曠慍、

【慍】は心中に怒ることにて、外貌に出さざるをいふ、心に△ツとすること、論語に人知らずして慍らす、又君子ならずやとあり、

【忿】は心中に立腹する精神の暴沸して、正明を失ふ如きをいふ、史記魯仲連の傳に、今公一朝の忿を行つて燕王の臣なきを顧みざるは忠に非ざるなりと、即ち正しき判斷力を失ふ如きいかりなり、忿恚、忿懣、忿怒、忿怨、

いかに 息、憩、休、

【息】は氣安にやすむこと、氣を充分に入ること、安息、休息、

【憩】は息をつがんと小やすみすること、又暫時足を止むること、休憩、

【休】は務め又は仕事のやむこと、中途にてやすむこと、休憩、休暇、萬事休、

いたく 抱、懷、擁、

【抱】は兩腕にて圍みもつ意、抱負、懷抱、

【懷】は心に思ひこめてなる意、又ふところに入るること、

轉じて物を秘藏しおくことに用ふ、懷恨、懷璧、本懷、

いたむ 傷、瘡、悼、慘、瘡、

【傷】は本義は痛みに感じなやむことなれば、轉じて甚しく哀むこと、傷はしと思ふこと、の意に用ふ、李華の古戰場を甲ふ文に、心を傷ましめ目を瘡ましむとあり、哀傷、悲傷、毀傷、傷心、

【瘡】は痛みを覺ゆること、轉じて總べての事の切なるに用ふ、痛快、悲痛、瘡痕、瘡情、

【悼】はなげかほしと思ふ義、哀悼、追悼、

【慘】はかなしきさま、又むきたらしきをいふ、苦心慘情、慘害、慘酷、

【疼】は痛みのつゞきて始終やまぬこと、疼痛、

【懷】悲しく思ふこと、懷情、

いたる 至、到、詣、造、抵、格、臻、

【至】は此方より彼方に行きつくこと、又充分に極むる意、又或は及ぶといふ意もあり、例へば東京より大坂に至る、又中誠至徳、又朝より夕に至るとも用ふ、至誠、至極、冬至、夏至、至大、至小、至善、至尊、至福、至美、至正、知至、

【到】は此處より彼處にいたり、又被處より此處にいたる、

いかに 偽、詐、譎、伴、誕、詭、

【偽】は誠又は眞の反對なり、我が心より勝手に都合よき様

に作り、人に對しては、我が勝手に作りしにあらす、全

自然に斯く成りしといふやうにいひなし、人を欺く、故に人と爲とを合せて字を作れり、詐偽、眞偽、虚偽、偽作、偽物、偽朝、偽君子、

【詐】は人を欺き虚言を吐くこと、一時言葉の上にて無きことを有る如く、遺きことを近き如くにいふなり、故に誠の反対なり、偽は多くは物事を作爲する上にいふ、史記淮陰侯の傳に令兒女子に詐らるゝは、豈天に非らずやとあるは、一寸口先りにて欺かるゝことなり、偽より輕ろし、欺詐、權詐、詐偽、詐謀、巧詐不如拙誠、

【諂】は心に思慮し、謀を以て欺くこと、正道の反対なり、孤憤に人臣の主を諂り、私を便にする所以なりとあるは、思を凝してなす意なり、意最も強し、諂詐、諂曲、正諂、諂計、諂謀、

【伴】は眞似すること、史記范雎の傳に、范雎は魏齊に答撃せられて伴り死す、乃ち笄を以て卷かるとあり、

【誕】は物事を實際より大きく言ひ廣ぐることなり、荒誕、誕妄、虚誕、

【詭】は諂に同じく、たくみていつはること、詭詐、詭計、詭言、

573 焉、安、惡、烏、

【焉】は何といふ理ぞといふ意なり、正邪の念を含めていふ、子之を毀す、君焉ぞ之を用ひん、

【安】は得心して其地位に居られぬこと、泰山其れ頼れば、吾將安ぞ仰がんとは、心に安々と快よく仰いで居られずとなり、

【惡】はごうしてといふ意にて、先方を蔑視して其を壓伏しいふなり、即ち我が心中に獨斷して發する語、爾今幼し悪くんぞ國を識らんの如し、又天地無くんば惡ぞ生きんともあり、

【烏】は兩者の隔の甚しきを嘆じていふこと、父無くんば烏んぞ生れん、君無くんば烏くんぞ以て主となさん、の如きは、父の無きことと生るといふこととの間が、餘りに甚しく遠ざかる故嘆じて發する語にて、烏乎の意を含むなり、烏有

以上の語は、共に何れの處にか、いかでかなどの意なれば、下に推察の語を置くを常法とす、

575 寢、寐、

【寢】は臥床に就くこと、就寢、

【寐】はよく寝ること、寐寐、

576 祝、賀、

【祝】は吉事を喜び言ふこと、現在はもとより、行く末をいはひ祈る意あり、祝文、祝賀、祝詞、祝儀、

【賀】は大禮其の他の吉事に喜びを陳ぶること、賀狀、年賀、賀客、賀筵、

577 言、謂、云、曰、道

【言】は我が心に思ふを直に口に述ぶることにて、我が主にて應衆に重きを置かねば時に用ふ、故に對者なくて獨ごとする事を獨言といふ、又口づから相互に話す時にも言を用ふ、論語に與に仁義を言ふとあるは、仁義の道を用いて聞かざる意なり、又孟子に顔淵は善く德行を言ふとあるは、顔淵の自分を主としていふとの意なり、

【謂】は言と相似て同義に用ふることあり、又何々といふの如く物に名づくる時に用ひらる、形而上の者之を道と謂ひ形而下の者之を器と謂ふ、これ之を道と謂ふ、又殘賊の人之を一夫と謂ふ、皆謂の字なり、又うはさなす時、又話しかくる等にも用ふ、孔子顔淵に謂て曰く、孔子子産に謂て曰く等の如き是なり、

【云】は或人が此くいはれたり過去の意に用ふるもの、揚氏曾て之を云へり、又文の末に用ひらるゝことあり、何々と爾云ふの如し、コレと申すこととでありますといふ意なり、

【曰】は人の言葉を直にうつすときに用ふ、事實過去のことを曰とかけるは、其意を強くする爲めなり、論語に孔子曰く人の生けるや直なりとあるも、孔子いへりとするよりは、今現在孔子の語るやうにて意強し、又謂の如くトイフの意に用ふるもあり、これ他の人が述べたることを

579 家、宅、屋、舍、

【家】は一種の建物にして人の住居せる處を廣くいふ、故に家の數を以て直ちに人間の大約の數と見做すこと古來の習なり、禮記に二十五家を閭と爲す、又十八史略の注に井田法は九百畝を界して九區となし、中を公田となし、其八家各一區を受くとあり、然れども熟語となる時は此の區別なし、家内、家屋、家財、家産、家門、名家、舊家、家禽、家庭、

【宅】はいへといへとも一棟に限らず、一敷地内にある者は皆一括して宅といふ、即ち母屋も土蔵も下小屋も隣居屋も皆含めるなり、又土地の意にも用ふ、宅地税といふは此の意なり、又邸宅といふも同じ、又孟子の五畝の宅とあるは其五畝の土地の意なり、民宅、卜宅、屋宅、居宅

【屋】は屋根の意、皆屋根あるより此の字を用ふ、如何なるいへにても屋根ある者は皆屋なり、馬の居る處を馬屋と

いひ、牛の居る處を牛小屋といふ、されば大小の別なき故、酒を賣る家を酒屋といひ、菓子賣る家を菓子屋といへり、書屋といは、學問する處にて、板屋といは、板葺屋根の家なり、又娼屋は檢査し試験する處なり、白屋、屋宅。

【舍】は都市にある家にて、特に旅籠屋をいふ、即ち旅人宿なり、旅舎客舎の如し、又寄宿舎などの如く多人数の宿する處は舍といふ、某々學舎などいふも人を多く集むる故なり。

【まじむ】 警、戒、誠、箴、

【警】は人の爲す事に充分注意して、能く用心すること、又目をさまし驚かすことなり、左傳に軍衛警を徹せずとあり、又孟子に、吾に曰く、降水余を警むともあり、警察、夜警、警固。

【戒】は豫め固く用心せさせて、失錯せぬ様に注意し守らること、儀禮に主人は賓を戒む、又論語に之を戒むるは色に在りとあり、故に職務を戒むとは、職務を固く申付けて失錯なき様に守らること、職務を警むとは、其職務に關し不十分の處を見付けて、用心することなり、又警戒と連用する時は、あらかじめきびしく用心すること、警は戒より強し、即ち警は驚かして用心せしむる意、戒は固く引きしめて用心せしむること、心を戒むといふ。

【賤】は物の價の少なきを示すを以て水義とす、而し物の價少なければ、人之を輕んずる故にいやしといふ、故に賤の反對なり、貴は物の價の多きを本義とす、されば兩字俱に貝を有す、これ貝幣古代の價を表はすものなればなり、鄙賤、下賤、賤賤、賤臣、賤夫、賤妻、賤劣。

【卑】は尊に對する字、年長者は尊にて、年少者は卑なり、又賤は身分の上の區別にて、尊卑は其人の眞の人格の上下の區別とす、故に賤は只官位の上の別なれば、此の人爵を失はば、元の木工網となるも、尊卑は其人の品格をいへば、官位など人爵の有無に關せざるなり、大勳位侯爵も德行なくば亦卑なり、身を卑しくして禮を賤くすと東方朔の傳にあるは、即ち我が身を無學なる者として、以て先方に對する禮は、人爵などに拘らず單純になすといふことなり、卑賤、卑下、卑近、高卑、尊卑、卑劣、卑見、登高自卑。

【鄙】は都に對したる語、都は凡て美麗雅緻文華の中心となりて盛なるに、田舎は醜粗莽直にして文事をも解する者少なき故に、終に其醜粗文盲の人などを鄙人といふに至り、之に類する事物を鄙むに用ふ、論語に孔子曰く、吾少かりし時賤しかりし故に、今鄙事を多く能くすとありて、賤の處に卑と書かざるは、年少より風雅の性ありし故にて、鄙事とせば田夫野人のなせしことを自分もな

は、自ら心を固く引き締むるなり、【誠】は多く自動に用ひて、戒の引き締まる意に同じ、前漢書に前車の覆轍は後車の誡めとあり、又易經に小に懲り大を誡むるは此れ小人の福なりともあり、

【箴】は物の道理を立て、教へ諷むること、又意見することなり、且つ身に痛みを感じる程に急に惡しきことを正すなり、衍義に子孝にして箴むる能はざれば、則ち父を不義に陥るとあり、又日常側に置きて我が心の惡しきを正しくする文句を坐右の箴といふ、又程子には四箴といふことあり、皆心の惡しきを道理に従つて教へ正す意なり、規箴、箴言、

【む】 忌、諱、

【忌】は憎み嫌ふこと、不快に感じ排斥する意なり、小學に病を護りて醫を忌むが如しとあり、忌中、忌事、忌明、【諱】は避け憚かるなり、公羊傳に春秋は尊者の爲めに諱み、親者の爲めに諱み、賢者の爲めに諱むとあり、又論語の注に、孔子は自ら君の惡しきを諱むと謂ふ可からずとあり、故に今或人の行爲の惡しきを見て憎く嫌ふ心あるは忌むなり、其惡しき行を面前に言ふは其人に對し失禮なりと思ひて言はざるは諱なり、又いみなといふも此意にて、普通に言ふを避け憚かるべき名といふ意なり、

【まじむ】 (まじむ) 賤、卑、鄙、陋、

せしをいふ、鄙劣、鄙人、鄙賤、鄙陋、鄙怯、鄙吝、都鄙、鄙邑、邊鄙、

【陋】は本義は土地の狭まき意なるが、人心は狭まき程いやしきものなる故に、轉用して今は多く頑固にして、事理を解せぬ人の心の狀にいふ、卑陋、孤陋、陋習、陋巷、窳陋、固陋、陋屋、拙陋、形陋、

【まじむ】 愈、彌、

【愈】は段階をふみ漸次に増進する意、愈務めて愈彰はるの類なり、故に或一事物の實質が漸次に増益し、又は減する時に用ふ、

【彌】は増益し、又は減する意なるも、其物の實質に變化あるにあらず、只他の者が此物を然る如く考ふるまでなり、即ち天を仰げば彌高く、地を鑽れば彌堅しなごは、天地其物には變化なし、又愈久しくして彌新なりとも、又管公の眞筆愈古くして彌貴しなごも用ふ、

【まじむ】 入、納、容、

【入】は出の反對にて、外より中に進み入ること、出入、入内、

【納】は物を受けいる、義、收納、受納、結納、

【容】は器の中に物をいれること、人を容るとは、心を器にたとへていへるなり、

う得、獲

【得】は失又は喪の反對にして、手元になき物を自然に手に入るなり、易經に得を知りて喪を知らず、又孟子に求むれば則ち之を得とあり、又論語に夫子は溫良恭儉讓以て之を得たり、夫子の之を求むるや人と異なりともあり、得失、利得、取得、

【獲】は木來觀して禽獸を手にする意、轉じて急に事物を我が意の如くなすことなむ、左傳に西狩して麟を獲たりと、論語に賢者は難を先にして、獲を後にす、又孟子に下位に居りて、上に獲ずんば、民得て治むべからず、上に獲るに道あり、友に信ならずんば上に獲ずとあり、是れ下官の者民を治めんには先づ、其上官の意に十分適ふことなきざるべからず、又上官の意氣に十分取り入るには、同輩の者に信用せられざるべからざるをいふ、故に今金を得たりと書けば、金を手に入れたりの意にて、金を獲たりと書く時は、意外にうまく金を手にせし意、一獲千金の意なり、捕獲、

う種、種、栽、樹、藪

【種】は草木の種子を蒔くなり、菜を種うとは菜の種子を蒔くなり、故に種の字を用ふ、

うかがふ、窺、伺、候

【窺】はひそかに見ること、のぞくこと、又窺に機を待ちつくる意、

【伺】はひそかに様子をはかること、又問ふの敬語にも用ふ【候】は訪ふの敬語、伺候、趨候、

うく承、受、享、饗、稟

【承】は下のものの上の物を載する意、彼方より来るを、此

止、激動、反動、衝動、變動、動亂、鳴動、動作、震動、行動、騷動、

【搖】はゆらめくことにて定の反對、動の一部なり、波の動き木葉の散り落つる様の如きをいふ、故に人心に付ては落ち着かぬ意なり、固の反對なり、詩經に中心搖々とあるは安心して居られぬこと、動搖、搖落、群心搖、山岳搖、

【撼】は他動詞に讀む字にて、うごくとは讀まず、韓退之の詩に蚩蚩大樹を撼かすとあり、蚩蚩は小虫なり、又撼天動地とも用ふ、即ち俗にゆすぶる、又ゆするといふ意なり、【蕩】は揺と同義なり、震蕩、搖蕩、

うしなふ失、喪、亡

【失】は我が心を主とし、其の注意せざりし爲めに、物を取りうしなふをいふ、即ち不注意、不覚悟、又は知識の足らぬより、直ちに其物を取りうしなふ手はなすことなり、書經に時なるかな、此時を失ふべからずとあるは、失はぬ様に注意せしなり、又左傳に周の子孫は日に其序を失ふ、又君子謂ふ鄭の莊公は政刑を失へり、政は以て民を治め、刑は以て邪を正す、又君子是を以て桓王之鄭を失ふを知るよあるは、皆其不覺見にて正しからぬより、直ちに人望を取りうしなひ、政を亂すをいふ、失禮、失敬、失態、失火、失竊、亡失、失志、過失、遺失、失錯、失德、失

方にてうくること、孟子に、寡人安んじて教を承けん、又唐書に大禮の後を承くとありて、皆上にあるものを下の者のうくるなり、又漢代に承露盤といふ高樓ありき、是れ其樓上に金盤を置き、朝露を承けて飲む時は、人死せずといふ迷信の爲めに建てたるものにて、露をばより落つる者と思ひ、其盤に承け漏らすより名付しなり、又邦語にうけたまはると讀むも、うけは承の意にて、たまはるは敬語なり、承諾、了承、承知、

【受】は物を吾が方へうけ入る、意、命令を受くとば、只命令せられたること、命令を承くは仰せ下されたる命令をつしみるなり、即ち尊敬の意に強弱あり、故に承は奉承と續き、受は受納と續く、傳受、授受、

【享】は愛に同じ、福を享く、年を享くと用ふ、又神佛の供物をうくるには必ず享の字を用ふ、孝經に祭れば則ち鬼神を享くとあり、饗も享に同じ、

【稟】は天又は天より授かりし者をうくること、又上の命をうくること、大學の序に氣質の稟は齊しき能はずとあり、天稟の才、又稟命の業と用ふ、又古は受と同じく用ひたり、書經に臣下は命を稟くる位なし、稟賦、稟受、

うしなふ(うしなふ)動、搖、撼、蕩

【動】は靜の反對にて、大小輕重の事物に廣く用ふ、論語に知者は動き仁者は靜なりとあり、動物、動力、動詞、動

敗、得失、失政、

【喪】は失に似たれど意強くして二度取返し難き意なり、従つて外界の事情を主とし、其爲めに自然我が取り入るべき者をうしなふことに用ふ、論語に儀の封人孔子に見ゆ、出で、従者に向て曰く、二三子何ぞ喪を患へん、天將に孔子を以て水鏡となさんとすと、又人の死するを喪といふも、其身體の衰弱極まるにて如何とも爲し難き故なり、親を喪ふ子を喪ふ皆死するなり、若し子を失ふと書く時は見うしなふことにて、不注意より生ず、死することにあらず。

【亡】は喪失兩者を兼ね、影も形も無き程になる意なり、史記に平原君曰く、吾れ何ぞ敢て事を言はん、前に四十萬の衆を外に亡び、今又内郡鄆を圍まるとあり、又王蠋曰く齊王は吾が諫めを聽かず、國既に破亡すとありて、根底よりうしなふなり、滅亡、死亡、の如し、逃亡、亡國、喪、亡命、未亡人、

うたふ 歌、謠、謳、吟、嘯、嘯、嘯、嘯

【歌】は長く聲をひき節を付けてうたふこと、樂器に合すにも合せざるにも總じて歌といふ、説文に詩を詠するを歌ふと曰ふとあり、又十八史略に帝纘微服して康衢に遊ぶ、老人あり嘯を台み腹を鼓ち頰を擊ちて歌ひて曰く、日出て作し日入りて息ふ、非を擊りて飲み田を畔して食ふ、

帝の力何で我にあらんやとあり、康衢は四達路なり。【謠】はやり歌なり、即ち世人の多く好みて歌ふうたなり、徒然を慰むる爲めに歌ふことなり、説文に獨り歌ふ之を謠といふとあり、謠曲、歌謠、

【謳】は長き歌の内より一部分取り出して歌ふなり、淵淵類函に韓詩章句を引くを謳と曰ふとあり、又鼻歌をうたふも謳なり、多く謳歌と連用す、韓信滄何と語る、何之を奇とす、王爾鄭に至る將士皆謳歌して歸らんことを思ひ、多く道より亡ぐとあり、

【吟】はうなることにて、詩を詠することをいふ。呻吟、詩吟、

【嘯】は口を狭くして聲を長く引きのばすこと、口笛を吹くにもいふ、故に長嘯、悲嘯など連用し、虎のうそぶくにも用ふ、

【嘯】はとなふること、唱することなり、佛教の經文をいふるなり、唐書に王緝代宗にすいめ、内道場を作り晝夜梵唄すとあり、

うち 中、内、裏

【中】は場所、又は物に就ていふ時は中央、まんなかの意、中國、中天、

【内】は場所又は物のうちがはといふ意、外の反対なり、されば運動場内と書く時は、其境のうち、何處にても宜

し、東端も西端も、四方の角も中央も、皆含まる、故に中は内なるも、内は中にあらず、内國、内地、家内、屋内、境内、界内、範圍内、

【裏】は表の反対にて、本來は衣服の人目に見ゆる外を裏といひ、肌につく内面を裏といひしより、人目に立つ公の事を裏といひて、人目に隠れたることを裏といふ、裏面、

うち 伐、征、討、擊、打、撲、拍、搏

【伐】は正々堂々と此方より戦を挑み敵を伐つことなり、我方の便宜を主にしていふ、又通常太鼓を伐つ、木枝を伐つなど用ふれども、此字にはさるの訓もあり、左傳に凡そ師の鐘鼓あるを伐といひ、之なきを伐といふとあり、征伐、斬伐、

【征】は上より下の順はざるを伐つこと、天子の軍を征といふ、征伐とは天子が下の不服者をして正道に入らしめん爲めに出す兵なり、征東將軍とは東夷を伐つ様に天子の命を受けたる將軍なり、征夷將軍、征虜戰史、征虜論、征討、

【討】は命令を奉じて、罪ある者をば、其罪を世間に明唱し、以て其罪人を除去せん爲めにうつ軍なり、孟子に天子は討て伐たす、諸侯は伐て討たすとあるは、天子は天の命を奉じて正義の爲めにうつ者なり、諸侯は大義を唱ひてう

つにあらず、只一時の我が便宜の爲めにうつなりとの意、

又軍にあられども、大義を天下に唱へて罪ある者を殺すが故に、幕府時代に行はれし仇討といふに、討の字を用ひたり、然れども征伐討は多くは軍戦にのみ用ひて、其主意を表はす、天討、討伐、討誅、

【擊】は先方の物を破る爲めに、又はやぶる様に強くうつなり、叔孫傳に劔を抜きて柱を擊つとあるは柱を切り破るなり、又漢書に天下共に王莽を擊つとあるは、共力して王莽を破り殺すなり、伐つとは異なるなり、伐は一國の堂々たる兵の出づるにて、擊は小團體の兵の出づるなり、又北史に五石を以て公門を擊つとあるは、門を破るを目的とせるなり、擊退、擊殺、擊破、擊斃、突擊、打擊、攻撃、

【打】は軽くうつなり、廣く用ふる字なれば、強き事にも用ふれど、伐字の如きにはあらず、或る器を以て物をうつなり、打毬、打毬、打毬、毬打、打破、

【撲】は小撃にて、字音の如くはくくくと打つなり、流鏑を撲つとは關弓などにて軽く打ち落すなり、香氣鼻を撲つもの如し、又撲滅などは我に充分の力ある故に我が軽く打ちても其物は滅する意にて、充分にうち滅ぼす心なり、撲殺、撲斃、撲壞、撲盡、相撲、

【拍】は擊にて軽く打つこと、拍手、拍和、

【擲】は拳に力を入れて打つこと、平づから虎を擲つもの如し、又擲擲、擲擲等は、箇人の間の争ひに用ふ、
【擲】(うづ) 選、移、徙、寫、舉、描

【選】は場所の高きより低きに、又低きより高きに行くこと、又は位を上下互に變動するにも轉用せらる、寫は幽谷より出で、霽木に遷る、又人事に就いて只遷るとのみあるは、宜しき處に行くなり、孟母三遷の數などは是なり、左遷とあるは左字に惡しき意ある故に、貶謫せらるることになるなり、遷移、遷都、遷徙、遷怒、遷轉、遷居、遷引、左遷、遷遷、貶遷、遷謫

【移】は高下の別なく只居處を易ふる意なり、孟子に河内凶なれば其民を河東に移すとあり、又樂記には風を移し俗を易ふともありて、同等の事物にうつり行くなり、移轉、支移、遷移、移洞、移文、移住

【徙】は物を避けて他に移る意、又うつさるといふ時は惡しき處に送らるゝをいふ、論語に義を聞きて徙る能はざるは吾が憂ふる所なりとあり、徙は義を聞けば不義を避けて義に遷るの意なり、又孟子に罪なきに民を戮せば、士以て徙さるべしとは、貶謫せらるゝをいふなり、
【寫】は物をかきうつすこと、寫生、體寫、
【舉】は物の形を以てすること、舉水、舉傲、
【描】は物をうつすこと、描瀟、描舉、

易に水は濕に就くとある濕は、濕氣のある土地なり。

【沾】は【濡】と通用す、或物を總體にしめらすこと、史記に汗出て、背を沾すとあり、又淚巾を沾すとも用ひ、雨霧などの爲に、土地山林の濕氣あるにも用ふ、霽破、霽染、
【濡】は沾より一層水分多く、濡る程なるをいふ、韓退之の宰相に上る書に、手足を濡して毛髮を併がす、又張旭の傳に旭は大に醉へば頭を以て墨に濡して書すとあり、
【潤】は燥の反對にて沾と濡との間なり、物を一面にうるほすこと、又つやあること、易に、之を潤ほすに風雨を以てすとあり、沾は水分少なく足らざる意、濡は少しく過多なり、潤は其中を得て丁度よき度にあるをいふ、故に富は屋を潤ほし、徳は身を潤すと大學にあり、又潤澤とも用ふ、潤潤

うれふ 愁、憂、患

【愁】は心配事ありて、心の浮き立たぬこと、物淋しく思ふこと、憂愁、愁訴、客愁、愁歎、
【憂】は事の未來に起らんことを心配する意、岡を憂ふ、天下を憂ふは、將來天下の如何になるかを心配することなり、又憂に居るは憂に居ること、憂患、憂慮、憂懼、杞憂、憂鬱、内憂、
【患】は憂に反して、現在不幸なる境遇にあるを苦しむこととなり、故に憂は心を主とし、患は事を主とす、孟子に

うれふ (漢字用法)

うらぶ 春、憤、褻

【春】は無理にとること、力づくにてとること、強奪、奪取、
【憤】は下なるもの、上をうらぶひとること、箕賦、
【褻】 與へあるものなとりあぐること、位記褻奪、
【怨】 恨、憾、憾、憾、怒、
【怨】は人を憎む情の深きものにて悲りて仇とすること、史記伯夷傳に伯夷叔齊は蒼惡を忿ばず、怨是を以て稀なりとあり、怨恨、怨憤、私怨、仇怨、恩怨、

【恨】は怨の深きこと、又悔の如く残念に悔ゆる意あり、史記に李廣王朔に答へて曰く、羌の降者八百餘人、吾許つて盡く之を殺せり、今に至りて大に恨むとあり、これ悔の意なり、又悔恨、望恨、等も悔の意なり、人を恨むと用ふれば大に怨む意となり、何々せし事を恨むと用ふれば、自ら悔ゆる意となるなり、遺恨、
【憾】は恨と同じく悔の意に用ひらるれど恨よりは淺し、口惜しく思ふこと、孟子に生を養ひ、死を畏ひて憾なきは王道の始なりとあり、遺憾、
【怒】は互に怨み合ふ意なれば、心と對とを合せて字とす、
【忿】は多くの人の同じ様に怨むことなり、書經に凡そ民愁

【濡】は乾の反對にて、水分あること、しめりけのあること、
【濕】は濡、沾、濡、濡、潤、
【濡】は終身の憂あるも一朝の患なしとあるは、君子は事々物々先より先と十分に心配し考へ置けば、一生涯未來を憂ふる事は絶わされども、今目前の事に患ふることにはなしとなり、史記に臣主一心海内の患を憂ふともあり、
【患】、患眼、患難、患憂、患病、患苦、外患、

えらぶ 撰、選、擇、簡

【撰】はこしらへること、記述すること、碑文などに、文學博士中村某撰、重野某撰とあるは此義なり、撰者、撰述、
【選】は多數の物の中より吟味してのりぬること、論語に舜天下を有ち皋陶を衆より選びて舉ぐとあり、又文選、唐詩選といふも、皆其多ある中より粹を抜き出したる意なり、故に議員撰舉と書くは誤りにて、選舉と書くべきなり、選附、選擇、選出、選舉、選錄、
【擇】は善者を選び抜くにあらすして、只多數の混入せる物事を類を立て、區別すること、善惡をのり分くる意なり、論語に擇びて仁に處らず、焉ぞ知を得んとあるは、仁と不仁とを明に區別して知りつゝも、不仁に處るならば決して知者とはいはれぬとなり、又中庸に善を擇びて固く之を執るともあり、擇言、擇行、
【簡】は善きを抜取る事なれど、選よりは弱くして惡を除く

えらぶ

111

意なり、左傳に秋天に兵を閉して、車馬を備ふとあるは、不真なるを除きしなり、簡閱、

お

おくる 送、贈、遺、貽、饋

【送】は迎に對し、人の去るを送る意、來るを迎ふるの反對、目送とも用ひて、多く心中を主とす、韓退之の文に浮屠文暢師を送る序あり、又李白の文に張承祖の東都に之くを送る序とあるは、其人に物をおくるに非らず、其人を送るなり、然れども物品をおくるに用ひし例もあり、送別、送迎、送致、送付、

【贈】は物品をおくること、又先方の者を増す意もあり、詩經に、我れ舅氏を送りて涇陽に至る、何を以て之に贈らんかとあり、送は涇陽まで見送りたること、贈は物品をおくる意なり、又李白の文に、嵩山の焦鍊師に贈る詩の序とあるは、詩を焦鍊師に贈る意なり、贈呈、

【遺】は物品を先方に置き來る意に用ふ、清國皇帝 大日本皇帝に書を遺るとは、使臣をして書を持たしめて、我が陛下に奉らしめたるなり、又湯王葛伯に牛羊を遺るとは、葛伯の處へ牛羊を持ち行きて與へしなり、又其與へられし人より見れば、留め置かれたる物なれば、其意に用ひたる然る多し、遺棄、遺功、遺訓、遺言、遺物、遺

【興】は事物の出來て勢益々盛におこりたつこと、又は衰へ始めたる者が反て盛になること、即ち孟子に沛然として雨下れば、即ち苗勃然として之に興るとあり、又必ず王者の興るあり、又文王を待ちて後興る者は凡民なり、又中庸に君子國に道有れば其言以て國を興すに足る、史記賈誼の傳に賈生諫めて以爲らく、患の興るは此れより起らんとなり、復興、興隆、興廢、中興、再興、勃興、

【起】は伏したる者のおきあがること、孟子に王者起るあらば必ず來りて法を取らん、又聖人復起るも吾言を易へず、又梁書に張彪は始め若邪より起りて若邪に興り、若邪に終るとありて、作興起の三字相似たるも、作は始めといふこと重く、興は益々隆盛なることを重くし、起は伏して居る者がおきあがる意なり、起伏、勃起、起居、興起、起臥、おくる 驕、奢、侈、倨、傲

【驕】は自分の才學威權などを、人に誇り示したかぶること、謙の反對なり、驕奢、驕傲、驕慢、驕兵、驕恣、驕心、【奢】は儉に對して外貌の華美を好むこと、衣食住に就いて分を過すをいふ、禮記に國奢れば之に示すに儉を以てすことあり、奢侈、奢靡、驕奢、【侈】は約の反對にて衣食住の外貌を張大にするをいふ、奢と異なる所は侈は小狭にて間に合ふことを張大にするにあり、奢は只美麗にするのみなり、書經に位ある者は期

漢字用法

跡、遺産、遺烈、遺文、

【貽】は先方の立身の爲めになる事物を遺るをいふ、余此書を彼に貽るとは、自ら其書中に爲めになる文句の書かれたるを推すべし、又韓退之の文に李贄は年十七師説を作りて以て之に貽るとあるも此の意なり、殘し留むる意、【饋】は食物を神又は貴人に進むる意、孟子に昔者生魚を鄭の子産に饋りし者ありと、又、餉、餽共に饋に同じ、饋食、饋餉、饋羞、

おこたる 怠、懈、惰

【怠】は心のたるむこと、又爲すべき事を厭ひながら爲すをいふ、即ち確乎たる精神を以て爲さざるなり、怠慢、怠惰、【懈】は心をゆるむること、今迄の決心を緩かにするなり、禮記に喪に居て三日怠らず、三月懈らずとあり、懈怠、

【惰】は前の二字よりも甚し、勤の反對にて、我が爲すべき事をも爲さず、放逸なるをいふ、故に此三字の程度よりすれば、最初は懈にて、次は怠、次は惰なり、惰慢、懶惰、おこたる(おこす) 作、興、起、

【作】は事物の出來始むること、聖人作りて萬物皆ゆと易にあり、又孟子に天沛然として雲を作し、沛然として雨を下すとあり、沛然は雲の沛き出づる形容にて、沛然は大

雨の降り來る様なり、又聖人の道衰へて暴君之に代りて作る、又聖王作りて禮儀放蕩なりともあり、せずして驕り、疎ある者は期せずして侈るとありて、惡心ありてなすにはあらず、【倨】は恭の反對にて、先方に對し爲すべき禮法を爲さざるなり、故に禮義の上にいふ字なり、驕倨、倨傲、倨慢、【傲】は人を輕蔑する意、我を主とし彼を輕んずるなり、故に倨と異なり、倨はなすべき禮をなさざるにて、傲は人の我に禮せざるをばなさしめんとするなり、傲慢、傲倨、傲然、傲世、

おす 推、押、壓

【推】は力を用ひて彼方へやること、上へおすこと、又準ふこと、推進、推舉、推戴、推究、推心、推而可知、推考、【押】は上よりおしつること、おさふること、押送、押壓、【壓】は下へおすこと、又しひたぐる義、壓力、壓制、おくる 恐、懼、畏、怖、惶、懾

【恐】は將來のことを慮り疑ひ、又きづかひ憂ふること、史記に、龐涓は孫子の己より賢なるを恐れて之を疾む、又孟子に齊人薛に城を築かんとす、吾世だ之を恐る、又郷原を惡むは其徳を亂すを恐るなりとあり、郷原は一郷里にて徳ありと慕はるゝ人のことなり、又史記伍子胥の傳に、即公其弟嚭の昭王を殺すを恐れ、王と與に隣に奔るとあり、又おそらくばといふには、必ず恐を用ふべし、是れ將來を疑ひ氣使ふ意なればなり、恐懼、恐怖、恐懼、

お

【懼】は畏と同じ、事に差し當りておそる、こと、正韻邊に、恐は畏の前でありあり、前は彼方の意なれば、畏より一層未來のおそれをおそる、なり、懼は俗語のびく／＼するといふに當る、論語に勇者は畏れず、又孟子に公孫衍張儀は、豈に誠の大丈夫ならずや、一度怒りて天下懼る、又孔子は懼れて春秋を作るとあり、又五代史に三辰行を失ふも懼るゝに足らず、天象變見するも懼るゝに足らずとあり、三辰は日月星なり、又論語に孔子曰く吾れ必ずや事に臨みて而して懼れ、謀を好みて而して成さん者に與せん」とあり、亂臣賊子懼、

【畏】は事物の前後にも、本末にも、亦將來の如何にも、かかはらず、おそる、事の甚しきをいふ、故に多く謹慎の意をふくむ、論語に後世は畏るべきなり、焉ぞ來者の今に如かざるを知らんや、四十五にして聞ゆる無くば、亦畏るゝに足らざるなりとあり、後世は年少者なり、來者は將來なり、將來如何に大人物になるか分らぬをおそるの故に畏なり、又孔子曰く君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏るとあり、又五代史に山崩れ川竭くるは畏るゝに足らず、賢士藏匿するは深く畏るべし、四民業を遷すは深く畏るべしとあり、皆將來如何なる事起り來るかをおそれ懼む意なり、故に畏敬、畏忌などを用ひ、我知識にして計り知り難き者をおそるゝなり、

託、落手、籠落、落膽、落日、落命、落雷、落胤、低落、暴落、下落、陷落、

【墮】は下へ落ち込む程に強き意なり、韓詩外傳に星墜ちて水鳴るとあり、又左傳の杜預の序に、隱公はよく刑業を弘宣し、王室光啓す則ち西周の美、文の迹を却れて墜ちざるべしとあり、又晉書に温轡傷り酔ひて、手版を以て錢鳳を擊ちて幟を墜とすとあり、幟は髮に付くる巾なり、

【墮】は高き處より眞直ぐに落つること、易に天より墮つる者あり、又將に深淵に墮ちんとするが如しともあり、又左傳に星墮つる雨の如し、又此の十六族は世々其美を濟して、其名を墮とすとあり、墮石といふも天より落ち來れる石といふ意、

【零】は散り落つる意、草木零落すといふは、其葉が散り落つるにて、詩經に靈雨既に零り、彼の伶人に命ずといふは、さら／＼雨の降り來るなり、貴人のおちぶるゝを零落すといふも、木葉の散る如く段々に下へ落つる意なり、

【驚】は用法廣し、思掛けなき時急に恐るべき事物を知りて、心の惑ふ時に用ふ、俗にびつくりする意、故に怖と重用せらる左傳に莊公廝生して姜氏を驚かすと、廝生とは生れながら眼を開き居る嬰兒なり、驚惶、驚怖、驚天、驚

畏服、
【怖】は畏と同じ意なれど、多く驚かす時に用ふ、後漢書に巫祝鬼神に依託して、愚民を詐り怖れしむとあり、故に驚怖と連用す、おそると用ひたるは、他者に驚かされて恐るゝなり、又韓退之の文に汝怖るゝ勿れ、死は命なりとあり、

【懼】は恐れ惑うて爲んすべを知らぬ意なり、後漢書に百姓惶懼す、又韓退之の文に今智く舉選を停むれば、遠近驚懼すとあり、惶恐と重ぬるは天子に對してのみ用ふ、即ち恐れてうろたゆることなり、

【懼】は臆病にて少しの事に慄き震ふをいふ、荀子に小人は憂ふれば則ち挫けて懼るとあり、懼伏、

おとし(おとし) 墮、落、墜、隕、零

【墮】はすべり落つること、史記賈誼傳に馬より墮ちて死す、又詩經谷風の注に、辛芥粟の如し之を食して涙を墮すとあり、顏面を涙の流れ降る意なり、又前漢に李斯の姦詐も且に趙高の術中に墮ちたりとあるは、段々に欺かれて、何時となく其術中に引き込まるゝ意なり、又墮胎といふも胎兒はり出づる故なり、墮落、墮馬、

【落】は意味廣し、物の上より下へおちくだることば皆落といふ、梁書に蘇綽卒して宇文泰勸し、器用上より落つとあり、又落涙といひ、落馬といひ、落第、落花、落

嘆、嘆三驚、

【駭】は驚より強し、胸騒ぎして身體まで震ふ意なり、中庸に世を驚かし俗を駭かす事は則ち暫くすべくして、常に爲すを得ずと、又狹乘の書に馬方に駭き鼓して之を驚かすとあり、驚駭、震駭、

【愕】は駭より又一層重し、驚き起ちて周章狼狽する様なり、史記刺客傳に荊軻秦王を刺さんとす、秦王柱を環りて走る、群臣皆愕くとあり、驚愕、愕然、

おそ 逐、追

【逐】は外へおひいだすこと、おひはらふこと、排斥し放逐するなり、又おひまはすことにも用ふ、史記に秦の始皇帝の時逐客論ありといふは、秦の朝廷より客分たる政事家を逐ひ出す意、匈奴は水草を逐ひて居るとあるは、水草を求めておひまはし行くなり、逐次、逐一、逐歩、逐夜、逐客、放逐、逐臣、逐婦、

【追】は彼方此方へとおひかけまはす意、孟子に、今の楊墨と辯する者は放豚を追ふが如しとあるは、野に放てる豚を捕へんと後を追ふが如しとなり、楊墨は揚子と墨翟との學說なり、又孟子に往く者は追はず、來る者は拒まずとあるも、我を去り行く人は無理に追ひかけて捕へんとは必ずとなり、盜賊を逐ふとは家の近邊などに居るを遠方へ逐拂ふ意、盜賊を追とは盜賊を捕へんとて諸處方方

を追ひ廻はすなり、追及、追撃、追慕、追憶、追加、追跡、追想、道情、追討、追諡、追放、追捕、追究、追念、追従、

おぼえ、覆、蔽、蓋、掩、

【覆】は上にかけてかぶせ遮ること、覆面、

【蔽】はおほひかくし、つゝみかくすこと、隱蔽、

【蓋】はふたをするやうにおほふこと、蓋世之勇、

【掩】はさへぎりかくすこと、掩護、掩不善、

おぼえ、率、概、

【率】は比率の意にて、ならしみつものこと、率れかくの如しといふ類、

【概】おほそ、おしならしての意、概算、概略、

おもむ、思、懷、想、憶、念、惟、

【思】は二種の意あり、一は廣くして心におもひ考ふることに一切を含む、一は人を慕ひ思ふことにて意狭まし、史記に召公獄事政事を棠棣の下にて決す、召公の死後民人其政を思ひて、棠樹を植きて致へて伐らずとあり、又明史通紀に、朕創業の艱難を思ひ、守成の易からざるを念ふの如きは、其意狭まきも、易經にある君子は思其位を出でずの如きは廣き意なり、思慮、思考、慎思、思案、熟思、千思、思念、三思

【懷】はふと、るに抱き居る意にて、絶えず心に思ひ居るを

いふ、詩經に女あり春を懷ふ、吉士之を誘ふとあり、又馮衍曰く、人は漢室の徳を懷ふこと、詩經の召公を思ふより甚しと、又論語に君子は刑を懷ひ、小人は患を懷ふとあり、思よりも強し、懷戀、述懷、懷眷、懷士、追懷、【想】は思ひ遣る意、思ひまはすこと、先方の懐を我が心に思ひ浮べて察する意にて、世説に長松の下常に清風あるべきを想ふのみとあり、又歐陽脩の王彦章畫像の記に、其書を讀みて尙其人を想ふとあり、想像、夢想、思想、眞想、排想、豫想、冥想、

【憶】は古は意とかけり、常に胸中に覺る居るをいふ、世説に思は憶より生ず、憶はされば情なしとあり、

【念】は思より輕し、常に忘るゝこと能はざるなり、故に憶よりは重し、史記伯夷傳に、伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨を念ふといふもこれなり、願念、念頭、思念、

【惟】他念なくただ一圖に其事のみをおもふこと、伏惟、思惟、

おもむ、趣、赴、趨、

【趣】は一方におもむくこと、又こゝろ、わけの意、志趣、趣意、雅趣、

【赴】はある場處に行くこと、赴任、

【趨】は心にかけてはしり行くこと、拜趨、趨走、

か

かかばし(かばし)、かばし(芳、香、馨、

【芳】はホンノリとにほひ來ること、故に美しき意に用ふ、芳名、芳蘭の如し。餘芳、

【香】はかゝりの強く來るをいふ、香氣紛々などいふが如し、書經に至治は馨香神明に感ずとあり、

【馨】は香に同じく、かゝりのよきこと、

かかぐ、褰、揭、

【褰】は衣服のツマをとること、又は下に垂れたる物を引き上ぐるること、詩經に裳を褰げて渭を渉るとあり、渭は川の名なり、褰帷、

【揭】は高く引上げて人に見すること、文選に竿に掲げて旗となすとあり、又揚示、掲示揚などいふにて其意知るべし、揭載、

かがやく、耀、輝、曜、灼、暉、炫、煥、赫、

【耀】は光の遠方に達して照りわたりがやくをいふ、日月星のかがやくは耀なり、【輝】もほぼ同じ、

【曜】は耀と同じく、てりかがやく月日などの光をいふ、

【灼】はホンノリとひかること、

【炫】はハツキリともぬたつやうに見ゆるをいふ、灼灼、

【赫】はパツと光の見ゆること、

かかばし (漢字用法)

【炫】はキラ／＼とひかりかがやくこと、

【煥】は盛にひかること、光の盛大なるをいふ。煥乎、

【赫】もほぼ(灼)に同じ、

かか(か)る(掛、懸、挂、係、

【掛】はかかるとかゝると兩訓あり、即ち自動詞と他動詞との別あり、他動詞にかかるといふ時は、一物を他物に倚り傍へてひきかかるといふ意、即ち壁柱などに釘を打ち込みて帽子衣服等をかかるとは掛なり、然して其縁を他より見ていふ時は自動詞として帽子衣服など壁に掛かるといふ、又木の枝などにかかるとは掛なり、冠を枝に掛く、劍を木に掛くの如し、其他思を掛く、想を掛く、念に掛くとも用ふ、掛冠、掛念、掛物、

【懸】は掛と同じく兩訓ありて、かかるといふ時は吊るすことつりかかるとなり、即ち家の天井より紐を垂れてこれに懸、又はランプなどを吊りかかるといふ、又他より見れば懸ランプ懸るといふ、掛るとはいはず、孟子に輪倒懸を解くが如しとあるは、倒に吊るされたる人を解き放ちやるの意なり、又史記に百姓の命皆君に懸るとあるは、懸へていへるなり、懸軍、懸命、

【挂】は掛に同じ、

【係】はかかづらふこと、關係、係累、

かか(か)す(隠、藏、潜、匿、竄、

か

【隠】は見又は顔の反對にて、あらはれぬこと、見ぬ事なり、又かくすといふも見ぬの機にする意、易經に龍は徳ありて隠る、者なり、又中府に隠る、より見る、はなく、微なるより顯なるはなしとあり、又悪を隠して善を揚ぐともあり、又老衰して閑居する老人を隱居といふも同じ、隱謀、隱見、隱退、隱蔽、隱蓋、

【藏】は物を收め蓄ふる意、其收め蓄ふるものは外より見ればかくす、又はかくるといふ意に轉用す、論語に之を用ふれば則ち行はれ、之を會つれば則ち藏ると、又史記に知なるかな、留侯は善く其の用を藏くすとあるも、皆吾が身心の内に秘し收め置きて見はさぬことなり、又寶物を入れて保存し置く屋を寶藏といふも此の意なり。秘藏、腹藏、

【潛】はひそむと讀み、魚の水底にかくれ居る如く、人目に付かぬ機に動かす静かにし居る意、柳子厚の文に、王非既に死して黃氏逃げ來り、其深峭なる者を擲ひて海に潛るとあり、潛伏といふも、人に見付けられぬ機にと、靜かにかくれ伏し居るをいふ、

【匿】は逃げ隠るること、つゝみ隠すこと、論語に怨を匿くして其人を友とすとあり、後漢書に湖陽公主の背頭白日人を殺す、因つて主家に匿るとあり、背頭は背明を蒙れる從卒なり、又其姓名をかざるを匿名の書といふ、

【藏】は逃げまはりかくる事、熟語に逕竄といふるにて意明らけし、
かざる(かざる) 如是、如此、若是、若此、如斯、若斯 如之、

上の凡ては皆これの區別に従ふ、故にこれの處を見合すべし、而して若と如とは全く同意なり、
かさ笠、傘、

【笠】は手に持たずして頭に戴くかさ、俗にすげがさといひ炎天にも雨雪にも用ふ、故に天の形に似たりとて、破れたる笠をば敗天公といふ、

【傘】は字形の如く廣くして、其中心に長き柄あり、手に持ち又は車の上に立てて雨雪を避くる物なり、即ち雨がさ編幅がさには傘を用ふべし、暑さを避くるに用ふるを涼傘といふ、

かたし(かたし) 堅、固、牢、硬、

【堅】は脆の反對にて物の外面より中心まで、同體にかたきこと、事に就ては其根據の極めて確實なる意、金石のかたきは堅なり、隋書に高麗の諸城堅守して下らずとあり、堅城、堅固、中堅、堅強、

【固】はゆるがぬこと、外部のかたきをいふ、孟子に國を固するは、山谿の險を以てせずとあり。險固、堅固、頑固、固陋、固情、

む時は、會に誤り易し、嘗は今迄に幾度も經たる事を詰るに用ふ、

【會】は只今迄に一度なしたることに用ふるなり、故に我國語に釋する時は、嘗はかれ、又は常にといひ、會はかれて又ばちよつと一度なごいふが如し、例へば嘗て善ふる所の狗を殺すなどは、常にと譯すべく、君嘗て之を余に語れりなどは今迄に幾度もと譯すべきなり、我れ會て虎を見たり、我れ會て東京に行きたりなどは、一度見たること、一度行きたることをいふ、故に嘗は事柄に對して度数をいひ、會は時の上にて或時一度といふ意なり、

かなしむ 悲、哀、

【悲】は心に不憫に思ひ、憂はしむ思ふこと、悲哀、悲喜、慈悲、悲劇、悲觀、悲痛、悲傷、悲慘、悲嘆、

【哀】は心に深くいたむこと、哀傷、悲哀、哀悼、哀嘆、哀憐、哀痛、哀樂、

かなふ 稱、適、協、叶、

【稱】はつりあひ相應すること、名稱、實と用ふ、

【適】は相合ふこと、相當すること、宜しきを得たることに用ふ。適當、適宜、適合、

【協】は心の相あひて和合すること、協同一致、協力、

【叶】は協の古字、衆人と相和同すること、歐陽修の文に陳執事は人望に叶はずとあり、

【牢】は固と堅との中間なり、即ち中心まで全く堅きにあらず、又外部の固きのみにもあざざるなり、今此の三字の字を卵を以て例せば、生卵の外皮のかたきは固にて、之を湯で、半熟となれるは牢なり、全く熟したるは堅ともいふべきが、堅牢、牢固、

かつ 勝、克、捷、

【勝】は負の反對にて、相手より勢のまされるをいふ、大は戰爭より小は小虫の争にかつにも用ひて用法廣し、論語に賀葉なること文飾なることに勝つ時は、即ち野鄙となり、文飾なること賀葉なることに勝てば史となるとあり、史は史官にて雅美を好みて實少なきをいふ、戰勝、勝利、勝負、

【克】は困難なることを精力を出して成し遂ぐること、又は戰爭に勝ちて其大將兵卒を捕虜とせることをいふ、故に旅順の開城の如きは勝にあらず克なり、會稽の文に唐の太宗躬親ら陳の間をめぐり戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず克つとあり、己の私欲にかつとも困難なる故、之を克己といふ、克己其城、

【捷】はいくさにかつこと、克つの小なるをいふ、視捷、捷報、

かつて 嘗、會、

【嘗】はなむるとも、こゝろむるとも讀む字にて、かつてとよ

かは川、河

【川】は水の流れ居るは、大小長短に關せず、故に大なる川は大川巨川といひ、小なる川は小川細川といふ、即ち石狩川利根川の如きも、又十里廿里にして海に入るも川といふなり、禮記に天子は天下の名山大川を祭り、諸侯は名山大川の其地に在る者を祭るとあり、

【河】は支那の黄河のみをいひしが、黄河に流れ入る川をも河といふより、支那北部の諸流多く黄河に入るを以て河と稱せられたれど、古來より用法定まれる銀河、河漢、天河などの外は、新に用ひざるを宜しとす、河渠、

かはる(か) 變、化、渝、換、易、更、代、替

【變】は常の反對にて、急にうつりかはること、史記刺客傳に、階に至れば秦舞陽色變りて振恐すと、又書經に一度成りて之を變ふべからずと、又臨機應變といふ、皆其急にかはるを主とするなり、天變、地變、變轉、變色、變改、變易、世變、時變、變遷、

【化】は甲者かほりて乙者となる時に、其乙者を主とし、かはりたる結果を強くいふなり、然して全く原形を有せざる者はいふ、腐草化りて螢と爲る、醜化りて龍と爲るは、其變遷を強くいふなり、又死人化りて幽霊と爲るも、死人は別に珍らしき者にあらず、記者の心は其幽霊を強むるなり、又教化徳化といふは、能く其精神迄をかへしむる

なり、即ち化は物の質までかはる意にて、變は一部分かはる意なり、化石、化物、變化、

【渝】は悪しく變ずるをいふ、左傳に桓公鄭伯と越に盟ひて曰く、此盟を渝へば國を亡ぼすに至らんと、隋書に煬帝西苑を築き、其樹木の花落ち葉の色渝れば、則ち易ふるに新樹木を以てすと、これ盟を渝ふるも、葉色の渝はるも惡變なり、故に又染物の色のかはるにも此字を用ふ、

【易】は事物其れ自身のかはるにも、亦物と物とを取りかふることにも用ふ、然し其自身を變ずる意は廣く用ひられ、變易更易の如く上字の補をなすのみにて定まれる意なし多くは取りかふる意なり、易經に上古は人民穴居して野に處りしが、後世聖人之に易ふるに宮室を以てすと、又論語に子夏曰く賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其力を竭すと、又史記伯夷傳に周武王の殷の紂王を亡ぼししは、暴を以て暴に易へしなりと、又隋書に煬帝は西苑の木葉色渝れば則ち易ふるに新しき者を以てすとあり、皆在來の者を除きて其場所に他者を置くの意、若くは一物を彼方へ遣りて他物を此方へ取り入るること、即ち貿易又交易といふ意なり、

【更】はかはるとかふるとの同訓あれど、かはるといふ意は少し、更代をかはるがはると讀み、夜の時刻を初更二更三更四更五更六更といふはかはる意なり、然してかふる

といふときは、舊を去りて新を用ふる意なり、琴、三味線の絃を新にするを更絃又更張といひ、立柱を新にするを更柱といふ、改更變更更代皆かふるなり、

【代】にも亦かはるとかふるとの同訓ありて何れも多く用ひらる、孟子に暴君代々作るとあり、作は起るなり、又史記に蕭何は曹參を擧げて自ら代はるとあり、自ら代はるとは自分の位置を譲る意なり、故に代は甲者が乙者の位置を占めて、其かはりを爲す意なり、代人といひ代理者といふは、甲者が乙者の身分となりて、乙者の爲すべき事を取扱ふなり、代書人、代言人、代論士、名代、

【換】は或物を先方へ遣りて其かはりに先方より他物を受取る意なり、世説に金龜を以て酒に換ふとありて易に同じ、交換、

【替】は悪しき者と換ふることにて渝に似たれども、渝は其物自身の變ずるにて、替は他の悪しき者と取りかふるなり、柳子厚の文に玩を以て政に替ふと、又晋書に張軌は使を遣して賈馥せしむるに歲時替らすとあり、又今日爲替といふは、此方の善き金錢を彼方へ遣りて、小さき紙片を受取り、又此方は紙片を以て金圓を受取る故にや、誠に面白し何々、交替、時替、

かへつて却、反

【却】はあとしきりすること、即ち面は先方へ向きながら後

かへつて (漢字用法)

へ退くことにて、戰爭に退却と用ふるにても明かなり、大に策謀を巡らして大勝を得んと欲し、却て敵の術中に陥れりといはば、大勝を得るといふ方に面は常に向きながら、漸々何時の間にか後しきりして進み得ざりしこと、

かへりみる 願、省、眷

【願】は頭を後へ向けふりかへりて見るなり、これ後に在る者に就て心配する心なれば、後を見るといふ心より愛する意ともなる、願盼、願視、願望、愛願、眷願、願問、願念、思願、左願、狂願、

【眷】はみまはること、又吾が心を主とし熟々思考すること、利慾にのみ前進する心に對して、道徳を思考することとを省るといふ、論語に吾れ日に三度吾身を省みんとあり、又親を故山に省みるなごともいひて、心を主とし行を従とせるに用ふ、又落度失錯なき様に注意する意にも用ふ、余此文を草するや日に三度省み十日に三十餘度其改訂を加へたり、省察、省視、省覽、檢省、自省、省識、反省、三省、歸省、

【眷】は後背を見る意あれば、此より轉じて親み愛する意に

かへりみる

かへる (漢字用法)

用ひられ、心を主とすること多し、即ち目をかけ愛する心なり、書經に皇天は命を眷み、四海を奄有すとあり、眷顧、眷々服膺、親眷、

かへる(かへす) 還、歸、反、復、廻、返、

【還】は往の反對にて途中より今來し方へ、同じ道を立ち戻る意、續通無綱目に孟珙は蒙古を破り虜民二萬を還して歸るとあり、是即中より直に虜民を其國に還らしめ、自分は本國に歸りたるなり、還師、還來、還債、還俗、還魂、往還【歸】は我が落付くべき處へ戻ること、又出でたる處へ立ちかへることなり、故に本意を以てせば、天下に歸へる處は只一處のみ、されば婦人は嫁ぐを歸すといふ、是れ一生涯其家に落付くべき者なればなり、故に歸と還とは其見方を異にす、歸は其旅の目的地を示し、還は其の旅の有機をいふなり、歸國、歸順、歸音、歸嫁、歸納、歸依、歸鄉、歸朝、歸帆、

【反】は動詞の時返に同じく、前來し道を戻るか、又は其方向に戻る意なり、故に還に同じけれど急にして強し又正に對して理に戻ることをいへど、此等は他字と誤ることなければ略す、反動、反問、反照、反省、反論、反駁、【復】は今來し道を其處に在るをいふ、往復は即ち一點に到着して、其處より其處初めの位置に返り到着するなり、復歸、復還、復答、復春、復活、復職、復官、復籍、回復、來腹

かまびすし

本復、

【廻】は急に向を變じて引き戻し來る意なり、故に東京の人名古屋より廻へるとは急に東京へ歸り來るなり、又まはり戻ること、迂廻、

【返】はひろくかへるといふ意に用ひらる、故に實事を能く知れる人は其意味を其場合に從うて解し得べきも、此字のみにては正しき意を表はし難し、即ち還は身を廻して返ること、歸は落付き處に返ること、復は出發せし處へ返ること、廻は其處急に引き返すこと等の如し、返却、かまびすし 喧、嘩、囁、

【喧】は人の言葉を打ち消し、我が言を聞かしめんと、一層聲高に喋べること、

【嘩】は人言を耳に入らず、自分くくに喋べること、

【囁】は深山に聲をあげて、騒がしくかまびすしきをいふ、

かむかふ 考、稽、按、

【考】は事物の道理を思ひはかる意、又時代の上にて昔を考ふとは、昔のことに就きて事理を究め、以て今日の事を正しくすることなり、中庸に天子に非ざれば禮を議せず、度を制せず、文を考へすとあり、又君子の道は諸を身に水けて、諸を庶民に徴し、諸を三王に考へて採らずともあり、考查、考案、

【稽】は二者を引き比ぶる意なり、又深く注意して事物を考

銃、獵夫、

【田】も獵に同じく四季のかりの總稱なり、たゞし獵は大きなかりに用ひ、田は小なるかりに用ひたり、

【狩】は冬のかりをいふ、爾雅に春獵するを蒐と爲し、夏獵するを苗と爲し、秋獵するを獮と爲し、冬獵するを狩と爲すとあり、蒐は索めむる意にて鳥獸が作物を害する故に獵するなり、苗は、ち苗を荒す故に獵するなり、獮は鳥獸秋にマリて肥ゆる故打ち殺して食するなり、狩は獸類などの冬籠りして穴に居るを獵するなり、然し冬は獵するに最もよき故に此字廣く用ひらるゝに至れり、狩獵、茸狩

かわく(かわかす) 燥、乾、渴、

【燥】は潤の反對、火の熱にてかわくこと、高燥、

【乾】は濕の反對にてしめり氣の無くなること、乾ることなり、乾燥、

【渴】は喉に唾の潤ひの無くなること又水を欲すること、不堪渴、飢渴、

ふることに用ふ、書經に無稽の言は聽くなかれとありて、其注に無稽は古を考へざるなりとあり、されば古を考ふとは、古の事に由りて今日の事を正すこと、古を稽ふとは古の事と今日の事とを注意して比べ合はすることなり、

【按】は考按、按出、新按などいふ如く、胸に手をあてて篤と考ふること、

からし 辛、鹹

【辛】は芥子、蕃椒、生薑、山葵などの、烈しく香を刺して口に辛きこと、轉じて、ムゴシ、ツラシ、苦し等の意に用ふ、苦辛、辛酸、

からす(から) 枯、噎、涸

【枯】は海水の鹽がらきこと、又その生氣を失ひて枯ること、枯死、枯木、枯生、

【噎】は聲をからすこと、聲の盡くること、しはがること、

【涸】は乾して濕り氣を去ること、又水の乾ること竭ること、涸水、涸膠、

かり 獵、田、狩、

【獵】は春夏秋冬何時にても鳥獸をとるかりの總名なり、十八史略に呂尚といふ者あり、窮因して年老い、漁釣して周る至る、西伯將に獵せんとし之を卜すとあり、獵大、獵

からし (漢字用法)

き

き木、樹、

【木】は草と對し、草木と用ふる時は木の總名なれど、材木、木造、家屋など枯れたるをも木といふ、

【樹】は植木の意にて生力ある木の外、枯木には用ひず、木にて作れる橋といふに樹を用ふべからず、必ず木なり、然し樹の意味の所に木字を用ふるは差支なし、即ち樹葉繁茂せりといはずして、木葉繁茂せりといふ、

き(き)聞、聴、

【聞】は先の聲の耳に入ること、又おのづからきこゆることいふ、故にきこゆと譯すること却て適當なり、中庸に心此にあらざれば聽て而して聞けずとあるは、如何程此方に注意したりとて聞に來る者にあらざるとなり、聲聞、名聞令聞、見聞、聞達、新聞、

【聽】は我より注意してきかんと思ひてきくこと、教師の講義を聽くは勉強生なり、教師の講義を聞くは怠惰生の夢の最中なり、佛語に同聽異聞といふ句あるは、同じく注意して佛教を聽きながらも、其聞の方の異なるをいふなり、故に聽は我が心を主とし、聞は他物を主とし、聽覺、傾聽、拜聽、靜聽、謹聽、聽衆、傍聽、聽雨、

き疵、創、傷、瑕、

【疵】はあざの如ききず、疵瑕、小疵、

【創】ははもの斬りきず、創傷、

【傷】はておふこと、けがすること、百傷、

【瑕】は物の毀れ裂けなきしたること、又人の容貌、性質、行狀などの批難すべきところ、瑕瑾、

き衣、絹、帛、

【衣】は身に纏ふ着物の總名、但し語根は着布ならむ、衣服、着衣、

【絹】は蠶の繭より絲を延きて採れるもの、絹絲、

【帛】は前項の絹絲にて織れる織物をいふ、布帛といへば木綿と絹織との事、絹帛といへば絹絲の織物なり、

き(き)窮、究、極、谷、

【窮】は事物の最終の處まできかむること、故に困窮とは困の最終の處に至り最も難澁の意、又窮乏といふも乏しきに至り果てたる意なり、文選四都賦に泰きを窮めて侈を極む、五代史に梁朱异は園宅玩好一時の盛を窮む、又近思錄に高きも窮むべからず、遠きも極むべからず、又稗編に史記は上は黄帝に起り、下は漢武に窮まるとあり、窮達窮通、窮理、

【究】は物事の根源を推して、終りまでたづね至る意なり、行義に小人は欲に徇ふを以て事となす、故に日に汗下を究むとあり、又言行錄に柯葉殊に散するも、亦皆其至る處に

隨ひて其窮まる所を究むともあり、究竟、究研、研究、

【極】は本來屋根の棟のことなれば、轉用して最も高き處、又は物の最も極端至極の義とす、近思錄に高きも窮むべからず、遠きも極むべからずとあり、又續通鑑綱目に奢を窮め欲を極めて太平を扮飾すとあり、又極點極度などいふも此意なり、至極、究極、極限、極端、極月、極知、

き(き)肝、膽、

【肝】は膽と共にキモと訓ずれども元來肝は肝臓の事にて、イの膽とは異なるものながら、古來同訓にいへるは、生理學の發達せざる證據ともいふべきか、銘肝など用ひて、深く記憶し忘れぬに用ふる字とす、

【膽】は雄々しくて事物に應ぜぬ事、膽力、膽大、放膽などと用ふ、其反對に裏膽とも用ひ、又肝膽を推く、肝膽相照らすとやうにも用ふ、

き(き)清、淨、潔、

【清】は水の澄むこと、濁の反對なり、山高水清、清風、清涼、

【淨】は穢の反對にて奇麗なること、清淨潔白、淨土、

【潔】は汚の反對甚だ清きこと、いさぎよきこと、潔白、麗潔、高潔、純潔、

き(き)斬、翦、剪、截、鑽、切、伐、裁、

【斬】は一劃の者を斬り放つ意にて、多く動物を斬るにいふ、首を斬る、馬を斬る、腰を斬るの如し、斬罪、斬馬劍、斬殺、

【剪】は【剪】の正字にて、物をはさみ切る意なり、故にはさみを剪刀とかく、又物を曲まね様平にきるに用ふ、即ち翦を翦る、西瓜を翦るの如し、剪彩花、

【截】は縦かね様に斬り放つ意なるが、斬よりも細々にきるなり、其肉を截斷して犬に食はしむとは、細かく切りたるなり、梁紀に候景誅に伏し、其手を截られ齊に送らるとあり、截斷、

【鑽】はきると讀めど穴を穿つことなり、孟子に穴隙を鑽りて相窺ふとあり、又秦の南鞅三衛を以て孝公を鑽るなどは、説き付け難き人を説き伏せて我が思の如くなさしむるをいふ、故に刃物にて平に切斷するなごにはいはざるなり、

【切】は刀にてきりはなち、細かにきり刻むこと、切斷、

【伐】はたききること木をきるに用ふ、伐木丁々たりと詩經にあり、

【裁】は衣類を斷ち切るに用ふ、而して衣類は尺寸を正順に計りて切り放つ者なれば、轉用して道理により正に順ひて紛亂せることを判定するに用ふ、即ち裁判、裁定などの如し、裁斷、裁決、

くろく 朽、腐

【朽】は繩、水などの本質を失ひて脆くなるをいふ、俗語のぼろ／＼になるといふに當る、論語に朽ちたる木は雕るべからずとあり、又蛇をくちはなといふも其色の相似たるより名付けし名にて朽繩の意なり、

【腐】は肉果實などのくさりて、悪臭粘性を生じ、鮮清の物と異なるをいふ、故に腐敗腐爛などいふ、禮記に季夏の月に腐草は螢となると、又前漢書に高祖酒を置きて衆に對し蕭何を嘲りて腐儒と曰ふ、故に同じくくさるにても所謂ぼろ／＼といふには朽を用ひ、粘性あるべたく、ごろ／＼などいふ意には腐を用ふべし、

くだく 摧、碎

【摧】はひしぐこと、又種々に考ふること、破摧、摧心、【碎】はうちやぶること、細かにする意、零碎、破碎、

くだる 下、降

【下】は上に對し眞直ぐに下方へくだるなり、故に意強し、易經に賁を以て賤に下るとあるは、譬へていへるものにて、賁き身分にて賤き者にへりくだる意なり、

【降】は登に對し斜に坂路の如きをくだるなり、故に意弱し、故に敵に降ると書けば、敵に伏するにて只手回かほさる

らる、史記に魯の恭王子の宅を壞すと、又衍義に一念差へば則ち一事壞ると、又同書に虞世基の龍目に降くして隋の政日に壞るとあり、又春秋には魯の城門壞るとあり、破壞、崩壞、

【頽】は何時となく、自然に下地の基礎より破れ墜下するをいふ、禮記に泰山其傾れんか、梁木其れ壞れんか、又大學の序に風俗頽敗す、又人情日に衰頽す、又老年を頽齡といふも皆因て來る源より破るをいふ、廢頽、

くむ 汲、酌

【汲】は器にて水をくみ上ぐること、又くみ出すこと、海水を汲む、井戸の水を汲むの如し、汲々、

【酌】は酒を盃に注ぐこと、其盃に注ぐ時、溢れもせず、又不足ならぬ様にする心より斟酌と連用して、事物の本分をよく見料かるをいふ、また酌量とも用ふ、されば汲は通常の沙水などをくみ上ぐるに用ふる字にて用法甚だ廣く、酌は注ぎ込む意、且つ其物を上げ下げすること水を汲むに似たるより、くむといふ理なれば用法も狭まし、但し斟酌といふ時の斟酌はうめあはす意なり、

くらし 昏、昧、暗、闇、晦

【昏】は太陽西山に没して暈山漸く暮色を呈する頃をいふ、淮南子に日虞淵に至るを黄昏といふとあり、然し愚人を指して昏愚といふ時は暗愚といふと差なく、事物の道理

くづがる 崩、壞、頽

なり、敵に下るは敵の墜下につき其命を奉じ、反つて從來の同輩に對戦することあるなり、又例せば階段をくだるは降にて、井戸釣瓶のくだるは下の如し、降伏、降参、投降、勸降、

くづがる(くづが) 顛、覆

【顛】は上より下へ眞直ぐに墮つること、又下方の上になること、顛倒と連用す、顛下顛墜などは、上方の下になりて落ち來るをいふ、顛頽、顛沛、顛覆、顛仆、

【覆】は上方が下になり、下方が上になりて倒るる事、顛は仆れ横になるをいへど、覆は全く上か下に、下が上になるをいふ、覆盆の雨とは、盆に水を満たして覆したるが如く、雨の烈しく降るをいふ、又孔子家語に、夫れ物悪んで満ちて覆らざる物あらんやとありて、顛より急に且つ烈し、故に轉用して十分といふ意になる、即ち覆滅覆軍の如し、覆没、覆車、覆轍、覆番、覆了、覆倒、覆覆、

くづる(くづ) 崩、壞、頽

【崩】はくづるとくづすとの兩訓ありて、共に山岳などの大なる者のくづれ落つること、故に國君などの死するを之に喩へて崩去崩逝などいふ、

【壞】も兩訓ありて共に小なる物に就て少しづつ物のそこなはれ破れくづるをいふ、即ち壁壊垣などに廣く使用せ

に明かならぬ人の意なり、昏暮、黄昏、昏愚、昏暗、昏昏、初昏、昏冥、

【昧】は夕方の昏より少しくくづなりたる時をいふ、又夜明けにも用ふ、あやめの分かれ時なり、昧旦、昏昧、愚昧、暗昧、朦昧、

【闇】は音も義も共に同じく、昧より一層くらくして、晴天の夜のくらきが如きなり、暗愚、

【晦】は眞にくらき意にて、黒雲天に漲りて降雨大海を覆へすが如き夜景をいふべし、詩經に風雨晦の如しとあり、多く人目を避け我が身をくらし隠す意に用ふ、自晦、闇晦の如し、此の如く上の諸字區別あるは一日の時に付ての區別にして、之を人の知識の形容に用ふる時は、皆同意にて道理に明かならぬ義なり、故に一日を一語を以て分ては晝晩夜朝となり、其晩を分ちて暮と昏と昧とし、夜を分ちて月夜朦朧暗晦とし、朝を分ちて昧晨旦朝とす、但し此の朝は旦より後をいひ、前の朝は此等を含みていふなり、

くらぶ 比、競

【比】は二つの物を合はせて、其の差違を見ること、たくらぶとも訓ず、比較、比况、

【競】はきはひくらべて、勝負又は優劣を試ること、競馬、競力、

【苦】は艱みくるしむこと、辛苦の義、苦勞、苦心、艱苦。

【困】は難儀にあひてなやむこと、困難、貧困、困窮。

【窘】はたしなむること、こまること、窘迫。

け

【汚】は不潔なる水のこと、清水の反對なり、見苦しき意、後漢書桓帝紀に善を善とし其清を同じくし、惡を惡とし其汚を同じくすとあり、又汗は汚の今體なり、汚穢、汚水。

【穢】は汚の甚しきをいふ、淨の反對なり、韓退之の文に汚穢に處りて羞ぢず、刑辟に觸れて誅戮せらるるとあり、刑辟は刑罰なり、觸穢、穢多、穢土。

【瀆】は心に安んじ過ぎ、却つて無禮のことあるにいふ、又一度にてよきを幾度もして、却つて無禮となる時にも用ふ、故に汚穢は物を以て見苦しく他の物をけがすこと、瀆は言非行爲にて先方を不面目になす意なり、瀆は瀆と同じ、冒瀆。

【悉】は個々毎に數へて少しも残さず、事をきはめつくす義なり、故に水にある柿を皆取るに悉く取るなり、これ一個宛取るを以てなり、悉皆。

【盡】は或群を一括して残すことなきをいふ、即ち残らずの義、一師團の兵士一人も残らず出征するに盡くなり、盡率、盡滅。

【畢】は綱といふ字にて、綱にて捲ひ巻きをばりたる義にて、少しも漏れ残ることなきをいふ、大史公の文に天下の遺文古事畢く集らざる靡しとあるは、皆其綱に入りて外に漏れ残ることなきなり、然しをばりとも讀みて漸々になしつくす意なり、畢竟。

【彈】は音單に通じて、多くありしもの漸々に減じて最後の一となりしに、其一も亦残されぬ意なり、故に悉に似たり、只主となりて働く者に彼此の別あり。

【異】は同の反對にて、事物のちがひ、即ち彼此互に比較して同じからざるをいふ、史記に化して異物となるも、又何ぞ愚ふるに足らんとあり、異域、異同、異國、異姓、異人、異能の士、異日、異時、異口同音、大同小異、異聞、【殊】は別なり、事に區別あるをいふ、詳しくいへば、別は本來は彼此同じくして差支なき物を、都合上同じくせざ

【異】(異) 異、殊

【異】は同の反對にて、事物のちがひ、即ち彼此互に比較して同じからざるをいふ、史記に化して異物となるも、又何ぞ愚ふるに足らんとあり、異域、異同、異國、異姓、異人、異能の士、異日、異時、異口同音、大同小異、異聞、【殊】は別なり、事に區別あるをいふ、詳しくいへば、別は本來は彼此同じくして差支なき物を、都合上同じくせざ

漢字用法

【試、嘗、驗】

【試】は其の實を知らんとためす意、試問、試筆、試験。

【嘗】は試に同じけれど、時間の上にて極めて一寸の間といふ意、孟子に我不敏と雖も、請ふ嘗に之を試みんとあるは、暫時の間に其事を實行してためし見んとの意なり、【驗】は試みたる上の効力をいふ、試験、經驗、功驗。

【對】は問對と用ひて、人の間に對し委しく道理を明かにし一々口づから返事すること、目上の人に面接せる時に用ふ、左傳に晉侯其臣慶鄭に謂て曰く、寇深し之を若何せんと、慶鄭對て曰く、君實に之を深くす、若何す可き者ぞとあり、應對、對策。

【答】は先方の言に對して返事することにて、只一言の返事にて、亦書面にて返事するも、或は道理を明かにして詳に返事するにも用ふれど、先方を尊敬する意はあらず、問答、返答、速答、筆答、口答、答辨、答案。

【應】は先方の間に對して同意する時、又は否定する時に、一言又は一句などにて簡單なる返事をなすなり、孟子に沈同孟子に問うて曰く、燕は伐つべきか、吾れ之に應へて曰く可なりと、又應答と連用することあり、應接、應問。

ること、異は本來より同じからざる者なり、易に天下は歸を同じくして塗を殊にすと、これ人情風俗などの外面のことなるをいふ、又禮記に徽號を殊にし器備を異にすとあり、徽號は徽草と同じく旗章なり、他人と見誤られぬ様に旗章を別にするなり、器備は全く製法構造の違ひたる者を用ふるなり、又漢書に高祖令を下して曰く、今天下事異れり其れ天下の殊死以下を敎せと、殊死は身と首とを離絶すること即ち斬罪なり、これ其首と體とを別にする意にて異にするにはあらず、又同種類の木にて等しき大きに作られたる器物數個ある時は、各殊れども、異なるにはあらざるなり、特殊、殊死、殊能、殊遇、殊功、殊勳、殊異。

【爾來、爾來、以來、以降、以還】

【爾來】は或一時間よりして今日までといふことにて、其間の年月には意を注がぬなり、孟子盡心章に孔子由りして而來、今に至るまで百有餘歲とあるは、其間の日月を輕視せるなり。

【爾來】は或事のありし時よりとの意、日英同盟の成立せしより爾來日本の勢力殿々として隆盛となれりの如く、其始めに重きを置くなり。

【以來】は自來と同じく、只或事の起りし時より、其間の歲月を見渡して當時に至る心なれば輕重の點なし、孟子に

漢字用法

生民より以來、未だ能く民を濟ひし者はあらずとあり、
【以降】とは時に就て昔を上とし今を下と見做し、或事の起
りし昔より歳月を経て今日に至るといふ意にて以來と差
別なし、

【以選】とは或事の起りし時と、當時との間の年月の種々の
出来事に重きを置きていふ語なり、源平より以選徳川氏
に至りて兵政の儘全く將軍に歸し、朝廷は長くも無用の
長物の如くになれりとは、其間の鎌倉室町の幕府の三代
四選したる事をいふなり、

こひねがふ 冀、希、庶、幾、尙、幸、願、

【冀】は請ひ願ふといふ意にて、熱心に心を一方に傾けて其
事を待ち望み居るなり、漢書に武帝の冀は蓬萊に遇は
とあるも、其事を熱心に欲する意なり、仰冀、

【希】は稀の意にて通常ありがたきことを、出来る様になれるが
ひ欲する意、希望、希願、

【庶】はかくならば仕合なりとの意にて冀希よりも弱し、即
ちかくなり易からん事を望む意なり、詩經に我謀を聽き
用ひば庶くは大悔なからんとあり、然して庶幾と連用す
るも意には差なし、孟子に吾が王、庶幾は疾病なからんか
とあり、

【幾】は庶に同じく近くといふ意にて、將にかく成らんとす
る時に用ふ、通常庶幾と連用す、

こぼす 溢、零、

【溢】は水のごぼれ出づること、散溢、溢水、

【零】は涙、または露などの落ち散ること、

この 菰、薦、

【菰】はまこも、水草の名、葉にて席をあむ、之をこもむし
るといふ、

【薦】は粗く織れる席の義、元は前項のこもにて作れりと見
ゆ、今は多く藁にて作れるをいふ、菅藁、

こひねがふ 超、越、踰、

【超】は飛びこゆること、躍りこゆることなり、孟子に泰山
を挾みて北海を超ゆとあり、故に飛び上る意あり、楚辭
に寧ろ超然として高擧し、以て眞を保たんかともあり、
超過、超越、超躐、超群、超絶、超羣、超卓、超年、曉
格、

【越】は只こゆる意にて、常の如くにふみこゆるなり、書經
に五十にして車なき者は驅を越えて人を用らばず、又歐
陽脩上范司諫書に、縣其封を越ゆ、郡其境を逾ゆれば、賢
守長と雖も行ふを得ずとありて、急速にこゆるに非らず
して、漸々一歩一歩にこゆるなり、山を越ゆ、川を越ゆ
皆此字なり、僭越、超越、越職、越俎、
【踰】はひと跨ぎにこゆるなり、書經に敢て冠履して垣牆を
踰ゆるなし、又禮記に、禮は節を踰ゆるす僭侮せずとあり、

【尚】は誠心より願ふといふにあらすして先方を尊びていふ
語なり、書經泰誓に、爾尙くは予一人を彌けて、永く四
海を清めよとあるが如し、

【幸】は庶幾に同じ、朋黨論に惟人君は其君子と小人とを
辨ぜられんことを幸ふとありて、それを仕合せとする意
なり、

【願】は以上凡ての場合に用ひられて差支なし、従つて意は
冀希などより輕けれど、我心に欲して望む意は同じ、出
師表に、願くは陛下之を親み之を信ぜよとあり、願望、誓
願、願念、

乞、請、丐、

【請】は懇ろに所望すること、祈り求むる意にて、さきの機
子を伺ひ問ふ意を含めり、左傳に太子申生曰く、夷吾は
無禮なり、余帝に夷吾を討せんことを請ふを得たりとあ
り、請求、請願、請託、請問、申請、起請、請謁、

【乞】は物をこひ求むる心を主とす、故に我身に利得となる
物事を切に求むるなり、請は先方の心腹を主としていふ、
後漢書に李通病を以て上書して身を乞ふとあるも、先方
の都合は死に角に、我が身の爲めに願ふことなり、故に
非人を稱して乞食といふ、これ自分の衣食の爲めのみ
こふ故なり。乞、正、

【丐】は乞より輕くして物を所望することなり。乞丐、丐婦、

又月をこゆるにも用ふ、大傳に、士の親死すれば、月を
踰けて外親至るとあるは、これ一月過ぎての意なり、踰
牆

これ 是、之、茲、斯、維、惟、諸、旃、

【此】は彼に對して手近にある場所、又は形ある物體を指示
して明にいふ語なり、此本、此日、此案、於此、の如し、
文章中に今迄記述せしことを總括して此事といふ時は此
の字を用ふ、例へば尾長狼は尾極めて長く、體極めて輕
し、此を以て水を渡るに大に便なることありの如し、此
是の二字はコレ、コノ、コ、又はカクと訓す、此は指
す所切なれども、是は指す所汎くして輕し、

【是】は非に對する字なるを以て、心に正邪を斷すべき或る
道理に對して用ふるなり、此事有れば則ち是事ありとは、
此事がある結果として此のよき事ありといふ意にて、其
心には此の字と善惡の意とを共有せるものなり、是以、於
是、

【之】は是と此との兩者の意に用ひらるゝも其意共に輕く
上又は下にある事項の代名詞なり、故に上下に記述せる、
事、又は物を之と受けていふ語なり、之に從て之を見れば
齊楚のこと哀れならずやと史記にありて、上の之は此に
當り、下の之は是に當るなり、恒愛之謂仁、天命之謂性、
【茲】は指して強く茲といふ意なれば、此場合と譯す、時の

上に用ふる時は、此有様にてといふ意なり、余英語を學ぶこと茲に三年とは、今の如き有様にて三年前より英語を學ぶといふ意なり、今茲、來茲、

【斯】は此及び是よりも甚だ重くして、充分心を其方に向け、其物事の理合をも含みていふ語なり、此の筋合と譯するを可とす、論語に孔子が冉求の病を見舞はれたる時に、斯の人にして斯の疾ありといはれしは、此の道徳ある人にして、此の免れ難き病あるとはと嘆ぜられしにて、只かれこれと指したるにあらず、斯道、斯文、

【維】と【惟】とはこれと讀む時は全く同義にて、共に多く文句の始めに用ひ、人の注意を惹起せしむる時に用ふ、維時明治三十有八年何月何日、謹んで何處に於ける皇軍の大勝を祝すの如し、

【諸】は之と乎との二字結合の意を有せるを以て、其二字を用ふべき處に用ひ、又【施】は之と焉との結合字なれば之と同意なれども句の末を結ぶ時に用ふ、しかし二者とも今殆んど無用に屬すれば詳説せず、

さかひ 境、界、際、

【境】は境内と連用せる如く其さかひより内を主とす、孟子に臣始めて境に至れば國の大禁を問ひて然る後敢て入るとあり、境界、國境、

【界】は彼此のさかひなり、内外の別なし、孟子に民を域るに封疆の界を以てせず、國を圍むるに山谿の險を以てせずとあり、故にさかひの内外といふ時は境を用ひ、田島山林のさかひといふ時は界を用ふべし、又境界と重用する時は多くは界の意に用ふ、即ち孟子に仁政は必ず經界より始まる、經界正しからざれば井地均しからずとあり、

【際】は事のわかれめ、又きはをいふ、生死之際、さかふ 逆、忤、

【逆】は順の反對從はずもとること、大逆、順逆、【忤】は心にさかふこと、又もとること、不忤、

さかひ(さかんなり) 盛、隆、熾、壯、昌、

【盛】は其の反對にてさかひ最中、又は益々長大となること、又は其極度をいふ、易經に日に新なる之を盛徳といふ、又禮記には冰方に盛んなり、春秋に樹木盛なれば飛鳥之に歸る、又孟子に生民より以來未だ孔子より盛なるは有らずとあり、盛大、盛世、盛況、盛興、盛安、盛會、旺盛、

盛衰、

【隆】は替の反對にて、今後益々勢を得るをいふ、禮記に子思曰く吾先君は道を失ふ處なし、道隆なれば則ち隆んに、道汗るれば則ち從て汗ると、又荀子に君は國の隆なり、父は家の隆なりとありて、注に隆は尊なりとあり、故に盛世とかく時は賑しき世といふ意にて、隆世とかく時は國民に元氣ありて、益々勢を得る世といふ意なり、されば外面の装束のみを美麗になすを盛裝といふ、盛は外面の美にて隆は内部よりの美なり、故に此の二者を合せて完全となる、大學の序に宋徳は隆盛なりとあり、隆興、

【熾】は火の最も烈しく燃ゆるが如く勢の強きをいふ、左傳に元公初め寺人柳を惡みて殺さんとせしが、平公の喪に及びて元公の喪位の座に炭を熾んにし、公將に至らんとするに及びて其炭を去り、以て公を座せしむとあり、是其座地を温めたるなり、又行義には修心遂に熾なりとありて勢あることなれども、隆と異なり、只我が能力に任せて突き進む意なり、炎熾、昌熾、

【壯】は強くして大なること、又は強きの充實せること、ものつよきことなり、禮記に十年を幼學といひ、二十を弱冠といひ、三十を壯といひ室あり、四十を強といひ仕ふ、五十を艾といひ宮政に服す、六十を耆といひ指使す、指使は指して人を使ふなり、七十を老といひ傳ふるなり、八

【昌】は次第にさかんになることといふ、繁昌、

さかひ(さかんなり) 先、往、前、曩、嚮、向、

【先】は前と同じく、物の順序にも、時の上の區別にも、過去のことをいふにも用ふ、先日、先般、先月、先年、先人、先生、先入、先聖、先君、先天的、先考、先妣、先祖、先陣、先哲、先輩、先導、先主、先父、先例、先夜、先鞭、先代、先非、先登、先帝、

【往】は時の上にて過去のことにのみ用ふ、往年、往時、往古、往事、往昔、

【前】は時と順序とに混用す、前日、前年、前世、前非、前途、前程、前表、前驅、前裁、前言、前夜、前記、前夫前進、前後、前納、前代、面前、庭前、眼前、

【曩】は過去の久しきをいふ、故に久しともよむ、曩日、曩者、

【嚮】と【向】とは同じく過去のことながら、先前よりは久しく、曩よりは久しからざるなり、往は只一般に過去をさす、

割、裂、剖、劈

【割】は刃物の刃を横にして切り分けること、地を割裂すといふも切り分くる意なり。割腹、分割、割據、

【裂】は薄き物をサット引き裂くこと、紙布などを刃物なしに力にて引き裂くなり、歐陽脩の文に太祖怒りて其奏文を裂くとあり、四分五裂、

【剖】は厚き物を中央より切り開くこと、又は割き分くること漢書に符を剖きて功臣を封すとあり、又腹を剖きて腸を出すとも用ふ、解剖、剖判、

【劈】は刃物にて二つに打ちわること、薪をわること、劈薪といふ、

捜(さがす)

【捜】はさぐりもとむること、捜索、

【探】はうかがひまぐること、探偵、探險、

挟(はさむ)

【挟】は兩者の間に入れてはさみ持つこと、故に腋の下にかかゆるにも用ふ、孟子に泰山を挟みて北海を踰ゆとあり、従て心にさしはさみ持つて、我が情みとする意あり、孟子に長を挟まず兄弟を挟まずして友とし、其徳を友とし挟むこと有るべからずと、又史記蘇秦傳に張儀の強を挟みて、内に其主を切かすとあり、管にて物をはさみ持つて、釘抜の如きものにて物をはさむは皆然なり、又挾攻、挾

撃などいふも双方より押し寄せ來りて恰かも其敵をはさめるが如きなり、挾と狭と誤用すべからず、挾は手箒のある通り、物をはさむ意にて、狭はさま意なり、故に狹隘、狹路、狹巷など用ふ、挾子、挾護、挾持、挾輔、挾抱、挾者、挾矢、挾書、

【夾】は挾と音も義も同じ、但し抱くの意強し、

【挿】は甲者の中へ乙者をさし込む意なり、苗を田に植うるを挿苗といひ、木を地にさして成長せしむるを挿木といひ、髻を髪にさせるを挿頭といふ、插花、

覺(おぼし)

【覺】は外物を主とし、我が心が自然に其を知るをいふ、因知記に覺る處有れば之を悟といふとあり、又覺醒といふ熟語ありて、覺は眼の覺むるにて、醒は醉の醒ることなれば、此の眼より覺むるが如くに事理を解するを覺るといふ、知覺、覺悟、感覺、先覺、

【悟】は我心を主とし、外物を客とし、其の事理を自然に解するに至るをいふ、即ち善れ教師の吾等に教へし事は既に之を覺れども、未だ人生の何たるかを悟る能はずの如し、又歸去來の詩に余已往の諫むべからざるを悟り、來りの追ふべきを知るもあり、大悟、了悟、頓悟、悟道、頓悟、

【曉】は覺と同じく外物を主とし、我心は客となりて、自然

に事理を解し得るをいふ、又曉察とも用ひて、覺より弱し、通曉、超文義、

【了】は明かなる意、漸々尋れ行きて終に不明なる處なきをいふ、故に理會するなり、了解、了知、

覺(おぼし)

【覺】はうづうにかへること、眼覺、

【醒】は酒の酔の消ゆること、衆人皆醒、我獨醒、

【醒】は色のあせて變はること、醒色、

【醒】は目のさむること、醒寐、

【冷】は熱の漸く失すること、次第に冷ゆること。冷熱、

晒、曝

【晒】は麻布、綿布などの色を白くせんため、灰汁にて煮洗ひて、空氣にあつること、晒してあらはに、世の人の見聞にあたることも用ふ、

【曝】は物を露天におきて、雨風のあたるまゝになし置くこと、

去、遠、距

【去】は其所を退きて、他へ行くこと、來の反對、又物を取り除くこと、逝去、去年、去就、退去、死去、

【遠】は離ること、中庸に忠恕は道を遠ること遠からずとあり、即ち忠恕は正道と遠く離れては居らむとの意なり、

り、

【距】は至ること、此處より彼處に至る間、又は今より彼の時に至る間をいふ、故に海を距る數里の所に在りといひ、今を距る十有五年前なりきといふ、距離といふも此の意なり、

噪(さわがし)

【噪】は急に動きさわぐこと、靜の反對なれば、躁急、躁擾などと熟字す、

【譟】は人のやかましく數多にてわめくこと、喧譟、鬧譟、

【噪】は鳥虫などの數多聲々に泣くこと、蟬噪蛙鳴、群噪、

【騷】は忙はしくさわぎ亂る、義、騷然、騷動、騷擾、

竿、篙、棹、衡

【竿】は竹の幹の枝葉を去れるものをいふ、百尺竿頭、

【篙】は水底につきはりて舟をやることをいふ、

【棹】も篙に同じ、棹歌、

【衡】ははかりのさをなり、權衡、

然、爾、而

【爾】は先方の言ふ事を最もなりと我が承諾する事にて、然の字に似たれども今日多く用ひぬ故不用の字とす、

【然】は今日最も多く用ひらる、已に記述したることに就い

て、其道理は最もなりと我が許す意、故に先方の言を快諾することを然諾ともいふ、當然、尤然、

【爾】は此の通りと譯すべき字にて、自分の方に重きを置き、前に説述せる事を受けていふ、我が日露戦争観は實に爾りとは、我が見る處は以上に述べし通りなりとの意なり、云爾、

【而】はしかりといふ字にあらず、しかして又はしかもと次に直に續く意の字なり、故に事にか、はらずして、時間の上に関するなり、堂々たる天朝相率めて而して犬豕を拜すと、胡詮の高宗に上る封事にあり、

しかる叱、呵、
【叱】は【呵】と熟字して、叱呵(しか)なるを、活用して國語としたりといふ所あれど、如何あらん、叱は聲を勵まし言ふこと、叱呵、叱咤、

【呵】は叱よりも軽く咎めいふこと、呵責と用ふるが如し、呵々といふは笑ふ聲なり、

しきに類、切、連、
【類】は繁くつづけて、又は度々、數々などの意、類繁、
【切】はひとと、又は染々などの意、切思、親切、切迫、
【連】はうちつゞく義、連戦連勝、連年、

したが、隨、順、從、循、遵、率、
【隨】は先方の意の通りに事を爲すこと、即ち先方の心に任

に從ふ、又鳥や孝と爲すを得んやとあり、又順は心を主とし、從は實行を主として用ひらる、俗にツクといふ詞よく此字に適合す、從者、從順、從僕、侍從、從軍、從卒、從兵、從事、服從、適從、雲從龍、

【循】は或確實なる不動の事物を我が頼む所として、それに寄りそひて進み行く意なり、例へば垣に循ふとは、其垣の傍に沿うて行く意、近思錄に此の理は天命なり、順つて之に循へば則ち道なり、之に循つて之を脩め、各其の分を得れば則ち教なりと、又論語の註に君子は天理に循ふ、故に日に高明に進むと、是れ天理を一定不變の者として其れを手傳ひにして、常に淨き世を進み行くなり、理に循ひ、法に循ふといふも、亦常に我が胸に理と法とを保持して、萬事を此の兩者を以て決斷するをいふ、故に循環少數といふ數學の語も之に由れり、又淮南子の原道に天に循ふ者は道と遊ぶ者なり、人に隨ふ者は俗と交る者なりとあり、因循、

【遵】は大略循と同義なれども、無形の道理などに遵ふといふ時は、心に長敬して尊み循ふ意なり、孟子に先王の法に遵ひて、而して過つ者は未だこれ有らざるなり、又中府に君子は道に遵つて行ふ、又漢書に曹參蕭何に代りて相國と爲る、一に何の約束に遵ふ、又孟子に海に遵つて南に琅邪に至るなりとあり、これ海濱に沿うて琅邪に至るに

て我務を爲すなり、從の義に近し、左傳に人の善を論りて人の惡に隨ふ、又史記淮陰侯の傳に吾れ今日死なば公も亦手に隨ひて亡びん、又孟子の注に大人は則ち事に隨つて理に順ひ、時に因つて宜に處す、又論語の注に其材器に隨つて之を使ふとあり、皆我が心を先方に任せて、先方の心の欲する儘になる意なり、マニクといふ詞は此字に尤もよく適合す、隨身、隨行、隨順、隨從、隨分、隨意、隨筆、隨伴、隨處、追隨、

【順】は逆の反對にて物事に反對せず、そひてゆく意なり、河水の常に低きに流れて荷も高處に登らざるが如きなり、易經に君子の時に順ふは影の形に隨ふが如し、又論語に孔子は十五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する處に從つて矩を踰はずと、又中府に親に順ならざれば朋友に信ならずとありて、善く道理を考へ守りて、物事にしたがひ行くなり、隨の如く只專心先方の心には隨ふにあらず、順逆、順良、順風、和順、順序、耳順、順番、順天、孝順、

【從】は違の反對にて先方に從がひ違はぬ意、書經に己を舍てて人に從ふと、又民の欲する處天必ず之に從ふとあり、又論語に孔子は年七十にして心の欲する所に從つて矩を踰はず、又先づ其言を行ひて後之に從ふ、又孝經に父の令

て循に似たり、又法律を堅く守るを遵守、又は遵奉などといふ、又遵依、遵遵といふも同じ、

【率】も遵に同じ、率祖訓、
したが、慕、欽、
【慕】はなつかしく離れがたなきこと、景慕、愛慕、
【欽】は尊く思ひてしたひ敬ふこと、欽仰、欽慕、

したが、閑、靜、徐、寂、舒、奠、
【閑】は忙の反對にて、爲すことなくひまなるをいふ、大學に小人閑居して不善をなすとあり、又さわがしからぬをいふことあり、閑人、閑地、閑暇、閑眼、閑散、閑談、閑歩、

【靜】は動又は躁の反對にて、動かぬこと、躁がしからぬことといふ、靜肅、靜寧、靜安、靜止、靜座、靜默、靜穩、沈靜、

【徐】は疾の反對にて、言語動作の疾からぬをいふ、ゆるやかなる貌、徐行、徐々、

【寂】は喧の反對にて、物音の全く止むをいふ、轉じて靜の極淋しき程なるをいふ、寂寥、寂然、

【舒】は迫の反對にて、事物に切迫せられず、のびやかにゆつたりとせるをいふ、

【奠】は寂に似て物音なく、淋しきことなり、漠も同じ、然れども寂の如く單用すること少し、寂寞、

しぬ 死、崩、薨、卒、歿、夭、

【死】は生に對し貴賤高下の別なく、生物の生命を失ふ時此字を用ふ、故に尊貴の人に對して用ふる時は、動植物と同視する意となりて不敬なれば、他の諸字を用ふるなり、死活、死亡、戰死、病死、

【崩】は天皇の外用ふべからず、崩は本來山のくづれ落つる意なれば、それより一國の主權者の死するの大影響あるにたとへたるなり、崩去、

【薨】は天皇より下きも之に次ぐ貴人の人の死をいふ、即ち皇族方及三位以上なり、薨去、

【卒】は人臣の五位以上の者、又は其人を尊びていふ語なり、【歿】は物の水中に入り込む意より、人の死して世にあらざるをいふ、又多少尊敬の意あるに似たり、

【夭】は年若にして死するをいふ、博雅に夭年を薨さざるを天といふとあり、夭死、夭折、

しほらぐ 暫、姑、且、須臾、斯須、頃、少間、

【暫】は久しからの僅かの間、チヨットノマのこと、時の上にていふ、世を驚かし俗を駭かす事は暫くすべし、常になすべからずと中庸或問にあり、故に暫時と用ふ、

【姑】は事の上にて、其儘にして置くこと俗にマア〜チヨットといふ意、姑息、姑息、姑且、姑會之、

【且】は姑に似たり、即ち物に正しき位置あるに、少しの間、なり。

【屏】は略斥に同じ、只屏は緩くすると斥は急なるとの叫あり、漢書に曹操人を屏けて賈詡に問ふと、又隋紀に封徳彝は群臣の表裏の旨に忤る者は屏けて奏せずともあり、

【却】は俗字にて本字卻なり、あとしりして避くること、又退と同じ、漢書に且つ戦ひ且つ却く、又孟子に之を卻けて不恭と爲すとあり、又柳子厚の車説に曇と雨とを卻くる者は蓋なりとあり、又却掃とはあとしりしながら掃ふことなり、

しる 知、識、

【知】は深く事の本性を知ること、天を知る人を知るとは即ち其本質迄を爲と知ることなり、知己、知友、知道、知命、識其一二而不知其二、

【識】は事物の一部のみをしるるにて、知より淺薄なるをいふ、余は彼を知れりとは其性質まで心得居ること、彼を識れりとは其面貌などを覺ゆる居るなり、莊子天地篇に其一を識りて其二を知らずとあるも、其一大體は識れるも、其二の委細は知らずとなり、知識、學識、認識、面識、しるす、誌、識、記、録、

【識】は姓名をかきしるすこと、誌、

【識】文章をかきしるすこと、著者識、

【記】は書きとること、筆記、記述、

しる (漢字用法)

しりぞく 退、屏、却、

【退】は自動にも他動にも用ふ、其場所を後へ引き去ること、引き去らしむることにて進の反對なり、自動詞に用ふるときは、引き去りて事を叩ひ目にする意あり、論語に孔子曰く顔回と語り退きて其私を省みれば、亦以て發するに足ると、又禮記に君子は三揖して進み、一辭して退く、以て亂を遠くるなりと、又老子に功成り名遂げて、身退くは天の道なりとありて、謙遜の意の事もあり、又自ら去らんと欲したる時にも用ふ、退職、退官、辭退、退歩、退却、退軍、退隱、退席、退去、撤退、擊退、退位、

【斥】は他動に用ひ、急速に力強く除き去るなり、唐書に君子に親みて小人を斥く、又左傳に大國の求は禮を以て之を斥くる無し、何を以てか擯くこと有らん、又衍義に惡黨を斥けて濫官を清くすとあり、又斥侯兵の斥は遠の意なり。

しじ 白、素、皓、

【白】は黒の反對色にして、黒に對するしろき物の總稱なり、雪のしろきも、人の肌のしろきも、髪のしろきも、灰のしろきも、皆白なり、戰國策に澠津地に澠き白汗交流るとありて、汗の色はしろきとして白汗といふ、又白き物は文飾明かなる故に、白晝、白日の如く明かといふ意にも用ひらる、又潔白といふは、白は染められたる色にあらすして清き故に疑はるることなき意なり、又自白の白は皆ぐるといふ意、

【素】は白より意味狭まし、元來染めざる絹を素といふより、本質のまゝしろき者を素といふ、故に僧侶などの着する絹服を素絹といひ、首を黒りて素首などいふ、白は素なれども、素は白にあらず、

【皓】は白色の光澤あるをいふ、白より意狭まし、即ち雪のしろき月色の清らかなる如きを皓といふ、皓齒、

すくじ 少、鮮、寡、少

【少】は多の反對にて數又は量が多からぬをいふ、少數、少量の如く用法廣し、僅少、些少、多少、

【鮮】は少と同じく、數又は量の僅かなるをいへど、少より一層強くいふなり、論語に好言令色なる者には仁鮮しとあり、又鮮少とは數すくなきこと、乏しきことをいふ、

【寡】は衆の反對にて互に引きくらべて人數の少なきことをいひ、又多の反對に量の充分になきをいふ、易經に君子は寡多を以て寡を益すとあり、又禮記に諸侯は自ら稱して寡人といふとありて、寡人とは我が身に德行のすくなき人といふ意なり、寡髮、寡聞、寡德、寡欲、多寡、

【少】は鮮と同じく數量の極めて少しなるをいふ、

すくじ 救、援、濟、拯、

【救】は人を助けまもりて安全ならしむる意、火を救ふは火を消すなり、水を救ふは汎濫するを防ぐなり、救助、救援、救濟、救護、救命、救世、救恤、

【援】は引き寄せて助けすこと、孟子に嫂溺すれば之を援くるに手を以てすとあり、是れ手にて引き寄せて出し救ふなり、又民を困窮の中より援ふともあり、又我が力を分ち與へて、共に其艱難を斥くる意とす、彼れに援勢

を與ふ援軍を送るの如し、援護、援兵、援助、

【濟】は渡り難く越へかねる處を助けて越えさせ渡らす意なれども、廣く天下の人を相手にしていふ意あり、即ち韓退之の原道に醫藥を爲りて以て其天死を濟ふ、又易經には知萬物に周くして、道天下を濟ふとあり、又佛教にて衆生を濟度すとも用ひたり、即ち博愛の意なり、救濟、濟生、普濟、濟世之才、

【拯】は艱難なる事物に取り圍まれ、又は陥ち入りたるを引き出して助けすこと、孟子に民を水火の中より拯ふとあり、又溺者を拯ふ、焚者を拯ふは、其水火の中より引き出して助けすことなり、

すくじ 前、進、薦、勸、羞

【前】は後の反對にて、前方へ出づること、史記に夜中に至り、文帝席を前むとあり、又韓退之の詩に雪は驚駭を拂して馬前ますとあり、前進、前來、

【進】は退の反對にて前方に出づること、前と殆んど相似たれども、前より勢強く速かにすすむなり、易經に德を進め業を脩む、又禮記に君子は三揖して進み一揖して退くとあり、又軍隊のすすむにも通常進を用ふ、前は史記商鞅傳に商鞅秦の孝王に霸道を説くや、公與に譖つて自ら膝の席に前むを知らずとありて、進よりは弱し、進退、進擊、進歩、進行、進入、進取、進化、進路、先進、

行進

【薦】は本來は神に物をすゝめ供ふる意にて、それより轉じて人を高貴の地位に押し上げ進むるをもいふ、左傳に苟も明信あれば、潢汗行潦の水も鬼神に薦むべく、王公に羞むべし、又易經に股は之を上帝に薦むとあり、又人を推薦する時には必ず薦を用ふ、若し進を用ふれば其人の官位を自分が昇すこととなるなり、貢薦、薦賢、推薦、

【勸】は人に斯くせよ、斯くすべしと人に催しうながすこと、論語に善を擧げて不能者に教ふれば、則ち勸むと、是れ德を奨励する意なり、勸業、勸善、勸仁、勸告、勸學、勸進、

【羞】は重に食物を人にすすむること、即ち御馳走する時にいふ、膳羞と運るなり、

すくじ 捨、拾、舍、棄、弄、撤、廢

【捨】は用に對して用ふべき者を、とりあげもせず、かまひもせず其儘になし措く意、強ち濫墜へ投げすつる意にはあらず、漢書に過を捨てて功を録す、又鞍馬を捨て、舟楫に伏す、又隋書に李靖と李淵と驢あり、李淵將に李靖を誅せんとせしも、世民固く驢に騎ひしかば遂に驢を捨てたりとあり、用捨、取捨、

【舍】は捨と音義共に同じ、論語に孔子仲弓を評して曰く、犁牛の子驢く且角あらば用ふるながらんと欲すと雖も、山

すくじ (漢字用法)

すくじ 五二

川其れ諸を舍んやとあり、驢は赤なり、犁牛は斑色の牛なり、又之を用ふれば即ち行はれ、之を舍つれば則ち廢るとも、又孟子に梁の宣王孟子に問うて曰く、吾れ何を以て豫め不才の人物を識りて之を舍つべきかと、又操れば即ち存し舍つれば則ち亡ぶともあり、皆捨に同じ、

【棄】は捨より力強く、用に立たぬものとして打ちすつるなり、論語に樊遲仁を孔子に問ふ、答へて曰く善敬忠の三は、夷狄に之くと雖棄つべからざるなりと、又孔子曰く兵事を教へざる人民を以て戦をなすは、是れ人民を棄つるなりと、又孟子に孟子惠王に對へて曰く、熒然として鼓を打ち兵刃既に接はり、甲を棄てて兵を曳きて走り百歩にして止まると五十歩にして止まると何れか可なりとあり、これ強ちに打ちすて、逃る意なり、投棄、拋棄、

【弄】は棄の古字なり、又【拚】も同じ、左傳に宋の穆公疾み、孔父を召して曰く、先君寡人を以て賢となし、社稷を主らしむ、若し德を棄て、位を廢公に譲らずんば、是れ先君の罪を廢するなりとあり、墨子などをすつるは棄にて、取りあげて、用ふれば要ある物となるを打ち措きて使用せざるは捨なり、普通文に御用捨被下度候とかくも、本來は善き處は取り出して用ひ、悪しき處は其儘に打ち据る置きて、烈しく御告め下さるなどの意なり、

【撤】はとりのくること、撤回、撤去、

【既】すでに、すたりたるものとして置くこと、廢物、廢棄、
すでに既、已、業、

【既】は將(まさ)に(の)反對にして事の全く終りはてたる上にあらざれば用ひの字なり、つくる又おぼるとも讀めば、すでに讀む時にも、もはや餘程以前に其事の終れるをいふ意なかるべからず、

【已】は未(いま)いた(の)反對にて、其事の終るか、また終らざるかの間に言ひいたす辭なり、

【業】は或事の下地定まりて、今之を取り戻さんとするも、勢止むべからざる意、故に既に餘程前の事、已は一寸前又今の事、業は勢已に定まれる折の意なり、

すなはち則、乃、迺、即、便、載、輒、

【則】は上をうけ下につく辭にて、上の何々のときは、何々のときには、何々のときにも、又何々のことはいふ意の時に用ふ、君大叔に國を興へんと欲せば君は大叔に事へん、若し大叔に國を興へざらんと欲せば、則ち請ふ大叔を除けと左傳にあるは大叔を除くを主とし、結果に重きを置きていへるなり、

【乃】はそ、でと譯す、此處より我思ふ處を充分に明かにせんとする句の渡り合の處に用ふる字なり、斷界より斷界に出ると註せるが如し、又時の上より見れば少しく緩や

體、總理、

【凡】はおしなへ、およその、凡例、

【都】は一體に悉くの意、

すむ住、棲、栖、

【住】は居所を定めて居ること、

【棲】と【栖】とは鳥獸蟲魚などの巢に居ること、又其所を栖所として居ること、

せ

せはし狭、隘、褊、

【狭】はくつるぎなきこと、廣博、寬、濶等の反對にて、最も廣く用ひらる、狹隘、狹窄、

【隘】は間のせげきこと、轉じて度量の小なること、狹隘、

【褊】は衣服の身幅の狭きことなれど、轉じては附庸弱小なご地形にも、局量弱小なご心性の上にも用ひらる、

せまる逼、薄、迫、

【逼】は物と物との間の極めて接近せるをいふ、畫眞に逼るとは、畫ではありながら、眞物と見誤る程に善くかけるをいふ、

【薄】はうすしと讀む字にて、物と物との間の薄き意、逼に似たれども、薄は漸々にせまり行く意多く、逼は現に近

漢字用法

漢字用法

かなり、易經に見るれば乃ち之を象と謂ひ、形すれば乃ち器と謂ふとあり、見は現なり、現るればそこで其物を象と名付け、又形をなせば、そこで其物を器と名付くとなり、余木陸に兎の居るを見、乃ち銃を執りて之を撃んとせりの如く、一事より他事へ移る義、

【即】は乃に同じ、

【即】は即今の義、其端を離れず、直ちに、或は取も直さず其儘、ツヒ、スグニなどいふ意に用ふ、故に其の處につきて透間なく説明する義なり、徐行せば即ち死を免れん疾行せば即ち禍に及べんと史記項羽紀にあるは、徐行が取りも直さず死を免るゝことなりとの意、

【便】は急に手早くといふ意、即の字に似たれども即は直接にといふ意にて、事件と事件との關係なれど、便は時の上にて速かにの意なり、

【載】は漸次に前方へ進み行く意なれど、普通用ひず、

【輒】は何時も然ることあり、其のたびごとこの意、張買が女孫は五度嫁して、夫輒ち死す人故て娶ること莫しと、又姚崇と宋璟とが進見する度毎に太祖輒ち之が爲めに立つとあり、又彼を訪へば輒ち茶菓を出すの類皆度毎にの意にたやすき意をも含む、

すべて總、凡、都、渾、

【總】は糸を束める意より概括しての意に轉用す、總計、總

くせまり居る意なり、日西に薄るとは、太陽の西山の方に漸々近づき行くなり、肉薄すといふも身體を以て急にせまり行くなり、

【迫】は急激に迫ひ詰むること、又つまることなり、薄より一層強し、問もなく試験のあることを試験に切迫すといふが如し、逼迫、急迫、

せむ攻、責、譴、讓、

【攻】は城又は要塞を烈しくせめ伐つこと、又古くは人の過罪などを咎むるにも用ひたれど、今は多く戰にのみ用ふ、論語に己れの惡を攻めて人の惡を攻むることなかれ、とあり、又近頃人の弱點を指摘するを攻撃すといふも此の意なり、攻撃、攻城野戰、攻伐、守攻、

【責】は過罪ある者をば一々問ひ正すなり、故に咎むる意となる、漢書西域傳に常惠烏孫に使して還る、便宜諸國より發して兵五萬人を令せて龜茲を攻め、責むるに前に校尉賴丹を殺すを以てすとあり、常惠と賴丹とは人名にて烏孫と龜茲とは地名、校尉は官名なり、今日吾人の用ふるも此の法に従ふべし、又責任といふ時は或事に對して一々問ひ正され其咎に當ることなり、責務、責讓、言責、

【譴】は言葉にて罪過ある者を叱りとがむること、責と譴とは怒氣の滿ちたる否との差あり、又譴責と連用する時

は両方の場合に用ふ。

【譏】は責よりも一層穩かに事の仔細を問ひ正し咎むること。責讓。

そ

【害】は利の反對、不利の言が物事をそなひ敗るより他を

【損】はきすつけやぶること。毀損。

【傷】は打ちますつく又きり傷むること。負傷。

【暴】は憐れいたむること。暴殄。

【賊】は心性をいためやぶること。賊入之子。

【錯】はあやまり仕損ずる意。失錯。

【誹、謗、誣、詆、毀、訕、刺、短、

【誹】は道理を分明にして人の短處を非難すること、非は是に對して道理に違へるを示す字なれば、其非を言ふとき非と言とな合せて誹とす、戰國策に忠臣は誹らるべき事は我身に在りとし、聖めらるべき事は君に在りと爲すあり、誹謗、誹讓。

【訕】の本字は疵にて、人の疵なきを強ひて疵とすべき處を見付け出して非難する意なり、即ち今日蘇峯氏の文天下に轟く誠に名言一句に富む、學者と雖も之を警る能はず、

【短】人の智識のたけをはかりてそしること、

【注、沃、澆、洒、瀉、澆、灌、灑、

【注】は水路を通じて一筋に水を流しやること、又つきこむこと、書經に豐水東に注ぐ維萬の功績なりとあり、又小なる器の口より靜かにそそぎ出だすにも用ふ、即ち水入を水注といふも其口よりそそぎ出す故なり、而して其の水の流れ行く水筋を主としていふなり、注入、注射、注意、注目、貫注、流注。

【沃】は柄杓にて一度にザアリと酌みかくること、書經に乃の心を啓きて朕が心に沃げ、又枚乘の七發に湯の雪に沃ぐが如しとあり、又漢書に丁姬の椀戸を開けば火炎を出す四五丈、東平水を以て沃ぎ滅し廻ち入るを得たりとあり。

【澆】は湯布又は激浪などの近くに立てる時、水沫即ちとばしりのかゝるをいふ、史記蕭相如の傳に、相如曰く五歩の内相如誦ふ頸血を以て大王に澆ぐを得んとあり、是は首を刎ぬる時に血のとばしりのかゝるをいふ。

【洒】は少しづつ水を撒き散らす意にて庭などに水をうつこと、大學の序に洒掃應對などあるは、庭前などに水を撒き家の周圍などを清潔にするなり、應對は客人などに接するをいふ。

【瀉】は注に似て一層急に強く流れ落ちるをいふ、一瀉千里

【灑】

漢字用法

又君今彼れを警らんとせば反對の聲益々高からん如し、誹謗、譏警。

【謗】は本人の居らざる處にて、人の身の上を惡しざまに評判し語るること、即ち評判を惡しくするをいふ、譏勝、訕謗、反謗、嘲謗。

【譏】は先方の欠點、惡しき處を見出して咎めてそしり笑ふこと、譏刺、誹譏。

【詆】は面のあたり先方の迷惑なることを無遠慮にいひ辱かじめ、又は困らしむる意、韓文公の碑文に、退之は書を作りて佛を詆り、君王を譏るとあるは、佛法を排斥する極めて痛切にして、君主に對しては善く道理を分けて佛を奉ぜんとするを咎めたるをいふ、史記に莊周は漁父盜跖を作爲して、孔子の徒を詆警すとあるも、詆は忌憚する事なく充分に非難する意なり。

【毀】は善の反對にて、無き事も有りし如く、又小過あれば張大にして其人を害せんと、非難すること所謂針小棒大の惡言なり、論語に叔孫武叔は仲尼を毀る、又誰をか毀り誰をか譽めんとあり、毀譽、毀譽。

【訕】は謗と同じ、禮記に人臣たる者は諫むることあるも、訕ることなしとあり。

【刺】は急に鋭き言を以て面のあたり非難すること、禮記に爾の禮を刺る處は禮の替にあらすと、諷刺。

【澆】は注と沃の極めて速かなるをいひ、灑の流下するを瀉落といひ、吐瀉といふが如し。

【澆】は溝をつけて田又は池などに水を引き入ること、史記に漳水を引きて鄴に澆ぐとあるは鄴を水攻めになす計なり、而して其水の入り込む田池などを主としていふなり。

【灌】は澆と注との兩意を兼ね、水をながしこむこと、莊子に百川河に灌くとあり。

【灑】は洒と同じく水を撒き散らすなり。

【具、備、供、

【具】は物事の足り揃うて不足なくとなふこと、又そなはると讀むも同じ、衍義に秦は咸陽より起りて鐘鼓帷帳移さずして具はるとあり、鐘鼓帷帳は共に軍隊の器具なり、具足といふも萬つ完全せる意なり。

【備】は未來の事に對して物の數々を豫め支度し置くことなり、即ち準備豫備の備にて知るべし、又そなはると讀む時は具に同じ、物事の足り揃ふことなり、左傳に不虞に備へざれば以て師すべからずとあり、又晁錯の文に國捐瘠を亡ふ者は蓄積多くして備先づ具はるを以てなりとあり。

【供】はそなへものにすること、供御、供給。

【副、添、傍、貳、

五五

【副】は他物の掛け替となす爲に豫め備ふること、即ち副將軍、副總督の如し、副使、副官、名實不副、
 【添】は事物を増益すること、即ち作文を直すことを添削といふも、文意の足らざる處を増益し、不用の處を削除する意、又兵隊を増加することを添兵ともいふ、添加、添丁、添附、添書、
 【傍】は物の傍へ寄り附くること、即ち衣類などの壁にかゝるを傍ふといふ、

【貳】は同じ物を二つ重ねる意、其職分の等しき物をいふ、故に副とは異なれり、軍隊に參謀長あり、其下にありて萬一の折に參謀長に代り、又は扶けて事をなす人を參謀副官といひて參謀貳官といはざるが如し、

【叛、畔、反、背、倍、負、乖、】
 【叛】はうらがへるにて、全く反對に變心する意なれど、衆人合同して爲す時にいひ、多く軍事に用ふ、【畔】と同じ、史記に俊傑相立ちて侯王となり秦に叛く、又孟子に燕人畔く、王曰く吾れ甚だ孟子に慙つ、又史記に法令刻深にして畔かんと欲する者衆しとあり、叛逆、叛亂、叛徒、叛謀、離叛、

【反】は叛と同意なれど、其用法狭くして各人間のことにし、亦事物にも轉用せられ、物を打つや其反動力必ず來る、又彼れ愈に我が黨に反きて、某會に入れりの如く用ひらるる、

【其】はそのと讀む時より意味輕げれども、夫よりは重し、指すところありて用ふ、夫は、且つ夫れ、今夫れ、若夫れ、の如く用ひ、其は、豈其れ、何ぞ其れ、其れ猶ほ、其れ然り、其れ將た、の如く用ふ、

【其】は、古はそれと意味輕き處に用ひられしが、近來はその手近き物を明かに指示する處に用ひらる、
 【厥】は、古は手近の物を指すに用ひられしが、近來は用ひらるること少なし、濟厥美、

たかし 高、崇、隆、喬、

【高】は下の反對にて、他の物よりもたかきこと、見上ぐるやうにたかきにて意廣し、禮記に天は高く地は下しとあり、又山高く谷濶しの如し、

【崇】は山の峻しく高きをいふ、峻しくて見るも恐しき程なる形容より轉じて人を尊ぶに用ふ、易經に崇高なること富貴より大なるは莫しとあり、崇拜、

【隆】は中央の弓形に高くなれるをいふ、天の形を穹隆といふが如し、

【喬】は樹木の幹にあがれるをいふ、詩經に、黃鳥幽谷より出で、喬木に遷るとあり、

る、反對、反駁、謀反、

【背】はふりつること、漢書に君秦吏爲りて今之に背かんとす、又術義に至正の路に背きて荆棘の道に赴く、又師保の訓に背くなごありて、反に似たれど、反は今迄我が味方なりし者が變心して敵方に從ひて我を害する意あり背は之が爲めに我を害する程の惡意あらざるなり、背書、背戾、背反、背面、違背、

【倍】は背と字義同じ、禮記に信以て之を結べば乃ち民倍かず、又孟子に師死して遂に之に倍く、術義に親に倍きて以て君に適ふは人情に非らずとあり、倍文、倍書、

【負】は物を背にする義より、轉じて從來吾が前に置きて注意せし物を、後に置き換へて顧み注意することをなきをいふ、多く恩徳を忘却するに用ふ、李陵の蘇武に答へたる書に李陵漢室の恩に負くと雖も、漢室も亦徳に負くとありて無視する意なり、

【乖】物にさからひ違ふこと、乖離、
 【夫、其、】

【夫】は意味輕くして殆んど其字の指す處なきが如く一種の發語に似たり、口言のまゝに類す、但し指すところありて用ふる時もあり、國文の始めに夫と置くは宜しからず、それは抑に似て、前の意を止めて復新しき考を述べんとする發言なればなり、

たがひに 互、遞、迭、

【互】は物事の入りちがふこと、交互、

【遞】は物を次ぎ／＼におくること、驅遞、遞信、遞送、

【迭】は更りあふこと、内閣更迭、迭立、

たがふ 差、違、

【差】は事物のくちがひをいふ、晋書に太子適宮中に於て市を爲し、手に斤兩の輕重を揣りて差はずとあり、差違、差差、過差、

【違】は事物の甚しくたがふこと、違はなれ去ること、易經に其言を出して不善なれば、則ち千里の外之に違ふとあり、又論語に敬して違はず、勞して怨みすとあり、又歐陽脩の文に趙充國は詔に違ひて兵を罷むとあり、又易經に天と水とは違行すとあるも、天の日は西に行き、地の水は東流するをいふ、違背、違反、違法、違犯、違命、相違、

たがふ 蓄、貯、儲、

【蓄】は小量宛の餘裕をとり集めて藏めおくこと、禮記に國に九年の蓄無くんば不足と曰はんとありて、九年の間年々少量の餘分あるを庫に收藏して置く意なり、故に小供が小使を使用せずして箱に入れ集むるも此の蓄なり、蓄積、蓄貯、蓄髮、蓄聚、蓄産、蓄財、貯蓄、

【貯】は後日に入用だけをかくひ置くこと、豫め見積を立て

て一度に取職するところ、著と異なる、蓄は回程多くとも餘裕さへあれば職し置くなり、貯蓄、貯藏、貯業、【儲】は用意にたくはへおくこと、今使用せる者は他日用に立たざるに至れば、其時に使用すべきを豫めたくはへ置くないふ、故に人に就きても儲君、東儲といひ、漢書には家に儻石の儲に乏しともあり、即ち立て代への者を置くなり、國儲、倉儲、儲君、

たすく 輔、佐、助、扶、援、佑、祐、相、資、

【輔】は互に力の足らざる所を助け合ふ意、柳子厚の文に深泥積水は相輔けて害をなすとあり、輔佐、輔弼、輔助、【佐】は上の人の及ばざる處を、其傍にありてたすくるなり、論語の注に顔子は王佐の才ありと見ゆ、長佐、輔佐、【助】は最も廣く用ひらるゝ字にて力を添へてたすくる意、俗に手傳するをいふ、孟子に秋歛を省みて給せざるを助くとあり、給せずは衣食の不足なるなり、又漢書に家財を出して以て軍資を助くとあり、助力、救助、輔助、助勢、助手、助教師、助役、援助、

【扶】は倒れんとする者を手を添へて支へたすくること、論語に孔子冉求に謂て曰く、昔周任曰へることあり、力を陳べて列に就く能はざる者は止む、危くして持たず顛れども扶けずんば、將た焉ぞ彼の相を用ひんとあり、又史記に武王紂を伐つ、伯夷叔齊馬を叩きて諫む、太公扶け

て之を去らしむとあり、又扶持米といふは、人の生活に要する食料として與ふる米なり、

【援】は困難するものをひきあげたすくる意、孟子に嫂溺るれば則ち之を援くるに手を以てすとありて手にて救ひ上ぐることなり、又現今兵術にて援護射撃といふも味方の難戦を救ひ出す爲めの射撃なり、後援、援護、といふも此援なり、援兵、援助、外援、

【佑】は「祐」と同じく佐に似て人の傍にありてたすくることなれど、佐は緩緩に失するを諫めたすくること、佑祐は義理に違ふを諫めたすくるなり、衍義に天道は聰明にして、善を祐けて惡に災すと、又書經に上天は下民を孚に祐くとありて雄大のことに用ふ、天祐といひ神祐といふが如し、人臣にて國君を輔くる者を王佐輔佐などいふは王者に侍して輔くるなり、天のたすけ神のたすけは臣下のたすけより尊き故に、佑を雄大壯嚴の意に用ひ、佐を實際のたすけをなすものに用ふるなり、

【相】は輔に似て互に助け合ふ意なれども、長上の缺點をたすくる義なり、歐陽修の文に其の長とする所を擇びて以て其速はざるを相くとあり、

たすく 資、

【資】はもとてをやること、資力、

たすく 叩、敲、

【叩】は音のきこゆるやうにたたくこと、叩頭、叩門、【敲】は叩よりも甚しく打ちたたくこと、又詩文の音調を吟味すること、敲門、推敲、

たすく 正、訂、糾、匡、規、

【正】はたゞしと訓む時は邪の反對にて、筋道の眞直なるをいひ、又たゞすと訓む時は、紛亂せることを明かに筋道を立て眞直にひきなほすこと、又凡て事物の本性然るべき様になすことといふ、論語に其身を正す能はずんば人を正すを如何せんともあり、罪ある者を問ひたして、其事理を明かにするにもいふ、正理、正道、正義、正直、改正、正誤、

【訂】は書物の誤りを吟味して直すこと、書籍に訂正第何版などあるは此意なり、又訂盟、訂約などいふは、誓約を確實に定むるをいふ、

【糾】は事物を監督し、吟味し以て曲れるを直すこと、糾は糾に同じ、漢書に杜密曰く、道に違ひ節を失ふ士は、而密かに之を糾せと、又衍義に善を褒して、惡を糾すとあり、糾明、糾問、糾誤、

【匡】は正に似て四角四面に眞直にして少しも曲ることなきをいふ、正の如くたゞしと讀むことなく救の意あり、學

に唯天を大なりとなす、又易に其れ唯聖人乎ともあり、【惟】は唯と同じく、コレバカリといふやうに専らなる意、惟

【但】は口語のバカリといふ意に用ふるを本義とす、されどタシと訓む時は、それは然ありとも此は斯くありと二者をひき分けいふ意なり、

【只】は只今只獨の如く殆んど助語の如くに用ひらる、

【徒】は徒爲、徒法、徒善の如く、たゞ、たゞに、又は空しく、いたづらになごの意に用ひらる、

【管】は疑問又は打消しの語を添へて不管……、何管……、の如く用ひられ一字にて用ふるることなし、ソノダンヂハナシといふ意なり、

【戦】は両方より打ちたか、ひ勝負を決するをいふ、戦争、戦亂、戦端、戦傷、戦陣、戦役、戦没、力戦、戦略、挑戦、戦敗、激戦、亂戦、混戦、

【闘】は勝を争ふこと、孟子に今同室の人間は、鬪を被り纏冠して之を救ふも可なり、又郷鄰に鬪ふ者あり、又史記に季氏と郈氏と鬪を闘はすと、或は國亂れ鬪争止む時なことも用ひたり、闘競、決闘、格闘、小闘、争闘、血氣方剛、戒之在闘、

【拮】は闘の如く双方より打ち合ひ、赤手にて争ふに用ひら

經に君子は君に事へて其惡を匡救す、又論語に一度天下を匡すとあるが如し、匡正、

【規】は法則を以て人を正にかへすこと、規諫、

たつ建、立、起、

【忽】は案外急にして端緒なく構提すべからず、チラ／＼する意、形の上にていふ、雷鳴忽ち起り風雨之に従ふの如し、倏忽、忽焉、

【乍】は定まりなく變じ易き意、物事の上に就いていふ、彼將に泣かんとして乍ち笑ふ、燈將に滅せんとして乍ち明かりの如し、

たつ建、立、起、

【建】は基礎を作りて、其上に組みたて、打ち立つること、老子に善く建つる者は抜けずとあり、又國を建つ、家を建つ、皆其根底を据へて其上にたつるなり、漢書に劉備曰く日月流るゝが如く功業建たすとあるも、未だ其成功の端緒すらも見ぬとの意なり、建造、建立、建設、建築、建徳、建功、建業、

【立】はたてたる事物の後々まで繼續して居る意、即ちたてて居ること、仆の字に對する訓なり、左傳に師服曰く天子は國を建て諸侯は家を立つと、易經に君子は獨り立ちて懼れずと、又論語に子路丈人に夫子を見たるかと問ひしに答へて曰く、四體勤めず五穀を分たす執れなかつて

り、又史記に孔子易經を讀み韋編三絶絶つとも、又前漢書に鍾期死して自牙弦を絶ちて琴を破るとありて、後に續く者なき意なり、又絶世の美人といふは、世にたへて並ぶ者なき意なり、絶對、絶命、絶幸、絶佳、絶交、絶域、絶壁、

【裁】は絶に似て切り分くる意なり、通鑑に劉備江南より山に緣り城を截ち夷道に軍すとあり、截斷、

たつ原、尋、討、踪、

【原】は物事の源、よるところを押したづめる意、易に始を原れ終を要すとあり、

【尋】はある事に引續きて、それより其の筋に據りたづね求むること、尋問、尋求、

【討】は據りたづめる義、尋よりも重し、討詢、

【踪】は足あとをしたひたづめること、踪跡、

たつ譬、喩、況、例、

此處にいふたとひは、縱、假令等と異なる、彼れば、不確實なるものを確實の如く、又有るべからざることをある如く取りなしていふ語なれど、此のたとひは、或事物を説明するに便宜の爲め、他の相似たる事物を引用して、相並べんとすることなり、何れも名詞としても亦活用語としても用ひらる、

【譬】は或事を人に曉らせん爲めに他の類似せる事を假りに

たつ

(漢字用法)

たつ

六〇

となすと其杖を植て、芸き、千路供して立つとあり、植はつきたつるなり、是れ其處にたち止まれる意にて、坐せる者のたつにあらざるなり、立錫、立脚地、立身、鼎立、中立、孤立、獨立、立冬、立夏、立家、設立、確立、成立、立太子、立后、

【起】は坐の反對にて坐せる者が身を起してたつなり、起すといふは腰なきかけ居りし者の起して居る意なり、起居、起臥、

たつ斷、絶、截、

【斷】は物を二つに切り放つこと、易經に木を斷ちて杵と爲し、地を掘りて臼と爲すとあり、是立ち樹を伐りて上を斷ち下を斷ちて、其榦となす意なり、又二人心を同じくすれば、其利金を斷つとあり、利は鋭なり、又對志に門を閉ぢて客を斷つとあるも、閉門して客と我との間を兩斷する意なり、又天下の業を定めて、以て天下の疑を斷つとあり、是れ疑の紛れたるを兩斷して、其筋道を天下に明かにするなり、又斷雲とは切り放れたる雲、斷崖は切り放ちたる如き崖なり、斷片、斷絶、斷橋、決斷、判斷、裁斷、禁斷、斷訟、斷獄、切斷、果斷、

【絶】は物の切れ放れて續くべき次のなきこと、故に最も物の終りのことに用ひ、又並ぶ者なき意に轉用す、春秋傳に河を以て筆を獲麟に絶つ、其れ天道を以て終れるかとあり

作りかけ、引き出して論すことなり、譬へば井を掘るが如し、又西洋のクリスマスは、譬へば日本の年始の如しなど用ふ、能近取譬、譬喩、

【喩】は譬と同じく相似たる事を引き出して人に曉らすことながら、其内に諫むる意あり、故に教喩とはいへど、教譬とはいはず、人に教へんが爲に相似たる事を以て曉らすは即ち諫むる意あればなり、又譬へば何々の如しとかくは常なれども、喩へば何々の如しとかけば、教へ諭すこと何の如しといふ意となるなり、

【況】は俗字に況とかきて譬に似たり、相比較していふ意、比況、

【例】は尤も廣く用ひらるる字にて、多数の事實中にて其一例を探り、或は類似の事を擧げて説き示さんがため、たとへを引く場合に用ひらる、例語、例題、例言、凡例、

たつ縱、假、假令、假使、假如、假若、假而、借、籍、就、

【縱】はたとひと訓す、よしやといふ意、故に全くあるべからざることを假りに設けていふにあらず、只深き疑ひなり、

【假令】も縱に同じ、只縱は自ら行く意、假令は他人が強ひて行かしむるといふ時に用ふ、

【假】はたとひと、かりにとも訓する字なれど、たとひと

たつ

六一

いふ時は、縦に紛へば、かりにと讀むべし。此の字は全くあるべからざることを今一寸設けていふこと、假、君宮嶽を動かすの勇ありとも、余の説を變ぜしむべからず、【假令】はとて出来ぬことを、今假りに出来るとしてもしいふ意、史記に假令晏子をして在らしめば吾之が爲めに鞭を執ると雖も欣慕する所なりとあり、

【假使】は人を使役して或事業をなす時の假設に用ふ、假使太陽をして大海を湯と爲さしむるも、之を以て魚を得ること能はず、

【假而】は假に同じ、

【假而】は假に同じ、

【假】と【籍】と【就】とも亦假に同じ、

たに 谷、溪、谿、澗、澗、

【谷】は兩山の間の低き處をいふ字、其廣狹、深淺、又は水流の有無に關せず、深谷とは其兩山の間の深きをいふ、【溪】は俗字にて本字【谿】なり、水の混々として流れ下る谷をいふ、水流ある谷といふを重とせる意、故に水偏を用ひたり、又溪水といひ溪流といふは、皆其谷の水流をいふ、

【澗】は溪と同じく水の流下する谷なれども、溪より水量多く、又は廣き水流をいふ、溪と大小の差のみ、澗は舟楫を通ずる谷川をいへども、溪は細流にのみ用ふ、

【耐】は靜かに形を變せず、従前の通りにて、外部より迫害を物ともせず、持ちこたふること、自分の方の害せらるべきを忍ぶことなり、然るに堪は他物に對して我方より事をしかげんとするを忍ぶことにて、主とする處に自他の別あり、草木の性は寒に耐へずとは、寒烈なる時に依然として變形せずには居られぬといふ意なり、故に耐は勝堪よりも意輕し、耐忍、不耐煩、

たに (たに) 尊、尚、貴、崇、上、

【尊】は卑の反對にて、心中より其者の眞の性質を重んじ敬ぶ意なり、中庸に君子は徳性を尊ぶとあり、又孟子に、天下に達尊三つあり、爵一齒一徳一と、爵は官位高き人、齒は年齢多き人、徳は徳義のある人にて、此の三者は天下何處にても尊びて敬ふべきなりと、至尊、尊敬、尊朝、尊念、尊父、尊家、尊兄、尊長、尊彌、尊君、

【貴】は賤の反對にて、上品なるもの、又は價の高き物をいふ、敬ぶの意はなく、只上品なる者として賞し重んずるなり、孟子に徳を貴びて士を尊ぶとあり、是れ徳を上品なる者として重んじ、士を誠に頼もしき者なりと敬ふとなり、又下を川ひ上を敬す、之を貴を貴といふ、上用ひ下を敬す、之を賢を尊といふとありて、官位あるが爲めに大切に重んずるは貴ぶなり、官位なくとも徳行ある人をたふとは必ず敬ぶ心ある故に尊なり、又嬰

たのむ 娛、樂、

【娛】は憂を散すること、自らなぐさむこと、論語に鼓瑟は以て自ら娛しむに足れりとあり、娛樂

【樂】は心におもしろきこと、苦の反對なり、岳陽樓記に天下の樂に後れて樂むとあり、行樂、苦樂、

たのむ 頼、恃、負、

【頼】はたよる意、依頼心、

【恃】はよりたよること、心だよりにする義、倚恃、負恃、恃、恃力、

【負】はうしろたよりにする義、史記に負きを負みて權を好むとあり、

たのむ 堪、任、勝、耐、

【堪】は忍ぶこと我慢してこらへなすとぐること、又辛抱すること、左傳の君の欲已に甚し、其れ何を以てか之に堪へんとあり、

【任】は我が能力のつくこと、史記白起の傳に病みて行くに任へずとは、即ち行得る程の力なしとなり、擔任、責任、大任、

【勝】は兩者相争うて打ち勝つ意なり、當り得、挽ます支ふ義、左傳に張弮其怒に勝へすとあるは、即ち其怒れる氣に打勝ちて壓伏すること能はざる意なり、故に堪より意味狭くして力強し、

兒と雖も高位高官の家に生れし人は貴人なり、貴ぶべき人なり、然れども尊ぶべき人にはあらず、又金錢は貴きものなれども尊きにはあらず、又神佛は尊けれども、貴き者にあらず、貴重、貴顯、貴賤、富貴、貴金玉、

【尚】は上と音義共に同じくたふとき物として大切にし、我が上に置くこと、又上品なりとすること、尊に似たれども少し弱し、故に好む意あり、禮記に夏后氏は黒を尚び、殷人は白を尚び、周人は赤を尚ぶ、又梁史に、魏主武帝は釋氏を尊尚すとありて、尊尚と連用する時は尊敬して好む意となるなり、又風尚俗尚等は世人一般が上品として好むなり、又高尚といふも尚の長きことなり、

【崇】は尊に似たれどもあがめうやまふこと、長敬する意なり、尊より強し、衍義に武帝は儒術に於て特に其名を崇ぶのみとあり、又神佛を拜するを崇拜といふが如し、崇敬、崇尊、

【上】は尚と同じ、史記魯仲連の傳に、彼の秦は禮義を弄てて首功を上ぶ國なりとありて、上中下の位置に就きて最も上にする意なり、

たのむ (たのむ) 仆、顛、蹙、蹙、倒、踣、

【仆】は他助の時たふすとよみ立てるものを横に伏さしむること、自動なれば即ち伏すことにて俗にべつたりたふるなり、宋史に魏王燕、秦の始皇の石刻を見、排して

之を介すとあり、又小學に許り介れて地に臥すともあり、又蘇老泉の二子に名くる説に車介れて馬馳る、而も思ひ轡に及ばずとあり、

【節】は物の頂をいふ、然してたふるといふ時は、其頂點より其直下へ落つる意なり、左傳に子都下より之を射て頭すとあり、故に騎馬武者を射落す如きにいふ、顛覆、顛倒、顛墜、顛落、

【斃】は人に殺されて打ちたふること、又自然にたふれ死する意なり、書經に吾れ正を得て而して斃れんのみと、又敵を射て一人を斃す、又馬牛の如きを射て殺すも斃すといふ、又前の蘇老泉の車介れて馬馳るの如し、又斃死といへば行きたふれなり、斃而後已、【斃】も斃に同じ、

【倒】はのけざまにたふること、介と顛との意あり、唐書に堯君樂之を射れば弦に應じて倒るとあり、又物全くかさまにするに倒字を用ふ、世説に毎に參言を聞けば輒ち絶倒すとあり、轉倒、掉腹絶倒、

たま玉、珠、圭、璧、

【玉】は陸より出づる美しき石の總名にて、其色彩の如何に關せず、既文に玉は石の美なる者なりとあり、故に又美石にあらずとも、美しき者を形容して玉の如しといふことあり、即ち美男子の酒に酔ひて無作法なるを玉山崩るといふ、又玉食とは甘き食なり、

【珠】は水中に生ずる美しき貝類のたまをいふ、既文に蚌の陰精なりとありて眞珠の如き者をいふ、珠服とは珠にて飾れる服、又珠兒は頭にさす凡ての簪をいふ、

【圭】は水晶の如き形のたまなり、即ち細長くして頭尖りたるもの、昔支那にて國王諸侯など之を持ちて其位にある証據としたり、圭角、

【璧】は丸き玉にて、昔子爵男爵の人、之を以て其信實を表はしたる物なり、

たまたま 適、偶、會、

【適】は丁度折善く、又は其時といふこと、ゆきあふ意、史記に高祖適々旁舍より來るとあり、

【偶】は思ひよらず、ふとあひたること、詩の題に偶成といふは不圖思ひ付きて出來たる詩といふ意なり、偶然とも用ふるにて其の意知るべし、

【會】はをりしも、をりからの義、出であふ意あり、偶の反對とす、去夏會親友と宮嶽に登り險嶺を越ゆとは、夏以前より此事を心に思ひ居りしなり、

たまふ 給、賜、

【給】はしおくること、又あてがふこと、給與、支給、供給、

【賜】は事柄を賞して物を賜ふこと、恩賜、

あかふ 誓、盟、矢、

【誓】は言葉を用いて約束すること、故に人とちかふことにも用ふれど、亦我れ自ら我心に何々を爲さず、何々を爲さんと誓ふことにも用ふ、左傳に莊公母武姜の共叔段と反せるを怒りて城頭に出し、誓ひて曰く黃泉に及ばざれば相見ることなしとあり、誓言、誓約、誓契、誓願、誓軍、旅、作、誓、

【盟】は牲を殺して神に奉り、其血を双方共にすゝりて、若し此の言に違背せん者は、此の牲の如くに罰し給はれと、一場の式を以て神に誓ふこと、故に必ず双方同様なる心を以て神に告ぐるなり、誓は只一人のみ主となり、他人は其事に關せぬことあり、盟は兩者同じく責任あり、左傳隱公元年に公儀父と蔑に盟ふとあり、是れ隱公と儀父と其責任同等なり、盟は誓より強し、誓盟、盟主、合盟、

【矢】は誓より輕し、原義は矢の直行するが如く、決して變ぜざる意なり、書經に矢を出すとあるは一度口外せし上は、決して長く變ぜざる言をいふなり、誓の古字なりといふ、

つかさどる 典、司、掌、主、宰、

【典】は或事を充分に支配すること、きりもりする意、衍義に弘恭は宣帝の時より久しく樞機を典るとあり、又書經に朕三禮を典るともあり、典職、典藥、

【司】は目を放たず能く注意すること、又は人の頭となりて下を支配すること、禮記に天の日月星辰を司りて宿離惑はずとあり、又既文に司は事を外に司る者なりともあり、是れ頭役なり、國司、有司、

【掌】は掌の内の物の如く我が職分を自由につかさどることなり、禮記に有司之を掌る、又冢宰は邦治を掌るとあり、又歐陽修の文に、狄青は行伍より出で、遂に樞密を掌るともあり、即ち掌握して事を爲す意なり、執掌、

【主】は最も大切にする事、又自分が頭役となりて他の者を使役すること、

【宰】は主と相似て人の頭となりて自由に差圖し引きまはすこと、主宰者といへば、尤も權力ある者なり、

つかふ 仕、事、使、

【仕】は主人を取りて奉公すること、孟子に周幣問うて曰く古の君子は仕ふるか、孟子曰く仕ふとあり、是れ自分に適せる君主を見付けてつかはるゝ意なり、又孟子に諸

侯に仕ふとも大夫の家に仕ふともあり、仕官すといふも此意なり、奉仕、給仕、

【事】は自分が當然使役せらるべき人に使はれ、かしづくこと、論語に其已を行ふや恭、其上に事ふるや敬とあり、又親につかはるること、君につかはることは、皆事の字を用ふ、千夏曰く賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致す、又孔子曰く親生ける時は之に事ふるに禮を以てし、死すれば之を葬むるに禮を以てすとあるが如し、故に官に仕ふ、其伯爵家に仕ふ某陸軍大將に仕ふとかげども、親に仕ふ師に仕ふとかくべからず、又官に事ふ某氏の紹介を以て某侯爵家に事ふとかくべからず、事師、

【使】は指圖してつかふこと、使者、指使、使役、

【付、附、著、就、即、】

【付】は授け渡す意なり、韓退之の文に石洪に史筆を付すべしと、是れ石洪に史官を授くべしとなり、又付托といへば先方へ或事を任せ頼むこと、付録といふは送金することとなり、交付、

【附】は他物に引きつけて増益すること又ひきつること、つきしたかふこと、史記伯夷傳に顔淵爲學と雖も、驥尾に附きて而して行益顯はるとあり、其注に并蠅は驥尾に附して千里に致すとあり、又圓卷の人行を祇きて名を立て

んと欲するも、青溪の士に附くと非ずんば、惡きも後世に施さんやともあり、又附庸の地、附屬、附托などは皆増益の意なり、故に附益といふ、附會、附錄、附言、附隨、附從、附著、

【著】は附と同じく増益の意なれども、つき方の其物に密接なるをいふ、即ち衣服の身につくが如きなり、晋書に平底の木履を著けて前行すとあり、又前漢書に黑子面に著くともあり、又久しく其地に住せる土民を土著の民といふは、其間の關係極めて親しき意なり、此字をチヨといむ時はアラハスことなり、つきの時はチヤクナリ、著服、著用、到著、密著、實著、

【就】は近く頼り添ひつること、従ひつること、又其處へ行

くこと、續通鑑綱目に害に遠ひ利に就き、危を去り安に即くと雖も、猶或は恐る衆に沈溺せんことをとあり、又衍義には慷慨して死に就くも昇平の意なしともあれば日用文に何れ申候に就てはと用ふるは翻觀の用字法なり、去就、就死、

【即】は登る意、即位、

【衝、突、搗、撞、擣、】

【衝】は眞正面に進み行きて當ること、又當らずとも行き當るべき處にある物に用ひらる、黒炎天井を衝くとはい突の天井に當りて付くをいふ、又史記の孫子吳起傳に、孫子

繼ぐとあり、又繼父、繼母といふ意にて知るべし、繼配、繼類、繼承、

【嗣】は親の後を承継ぐをいふ、書經に舜は德に讓りて、がすとあり、天子の位を徳ある者に讓りて自分の子に嗣がせざるなり、世継ぎの人を嗣子といふ、

【接】は二物を續き合はするをいふ、前漢書に烏秭國の民は手を接して水を飲むとあり、即ち兩手を合はするなり、又木を接ぐ、牛紙を接ぐといふ如く、密著せしむる意あり、接木、密接、接近、

【次】は事物の順序の上にて續き来るをいふ、官制に長官の下に居る高官を次官といひ、又長男に續きて生れたる男子を次男といふが如し、位次といは、位の高下に從ひて座を占むることなり、次第、次長、次年、日次、

【襲】は前者の通りに重ね受け續ぐなり、即ち位を襲ぐとは先人の位を其儘に受け續ぐことなり、襲爵、因襲、世襲、

【悉】は心のあるたけなきはむること、盡力、盡瘁などいふにて知るべし、盡心、

【竭】は盡に同じ、

【殫】は残らずとりたつること、殫精、

【殫】は悉く盡すこと、殫滅、

【悉】は一つも殘さぬ意、悉皆、知悉、

曰く君其街路に據りて、其敵兵の方に處なる處を衝くに若かずとあるは、其兵に打ち當る意なり、又名詞にて行き當る處の意あり、宅は大路の衝に在りの如し、衝突、衝動、衝出、衝入、衝立、

【突】は不圖つきあたること、又不意に先方を破る爲に進み出づる事、故に衝より強し、又突は横繼に拘らずして必ず衝き當る意なり、突進、突擊、突貫、突元、突破、突然、突出、

【擣】は穀類などを舂くこと、つ字に力を入れて發音する故突などと誤ること少なし、物を敲くを本義とす、

【撞】は或物を以て他の物に打ち當つる意、禮記に撞く問ふ者は鐘を撞ぐが如しと、即ち柝を以て鐘に打ち當て、音を發せしむるなり、

【擣】は搗に同じく臼にてつくこと、物を敲き碎く意、擣楮、擣、繼、繼、嗣、接、次、襲、

【續】は斷の反對にて事物の斷ち切れたる處をつゞくること、又は個々の物の連りつゞくことなり、中庸の序に程夫子兄弟出で、以て、夫の千歲不傳の緒を續ぐとあり、程父子兄弟は程伊川と程明道との兄弟なり、千歲不傳の緒とは、聖賢の道なり、連續、陸續、續論、續集、續續、

【繼】は事物の後を受けつゞき、又は絶たれたるをつゞきて、前者の如くに務むること、孟子に業を創め、統を垂れ、繼ぐべしとなすとあり、又中庸に夫れ孝者は善く人の志を

造、製、爲

【作】は我が心に思ふ事を主とし、始めてつくり出し、こしらへはじむるをいふ、易經に易を作る者は其れ盜を知るか、又始めて八卦を作るとあり、作詩、作文、作爲、作歌、作畫、作家、造作、作意、作物、

【造】は物を組み立て、こしらへたつること、唐書に成實曆傳は仁均の造る所なりと、是れ曆は人の心にて作る者にあらず、又巧に言語を造るといふも、只見開のよき語を造る故なり、又物と物とを混してつくる意あり、故に造酒家とは書けど、作酒家とはいはず、作詩とはかくも造詩とは書かず、又造家とは大工など家を造る人のことにて、作家とは小説脚本等を作る人をいふ、即ち造は器械的につくる意にて作は思考力を以てつくる意なり、造語、造作、造醜、造賢、造化、造船、造物主、創造、

【製】は衣を裁する意にて衣を断ちて造る如く、物を工夫して造り出だすなり、製糖、製紙、製鐵、製品、製法、

【爲】は作の輕き意なり、左傳に諸侯は字を以て諱を爲ると、又孟子に此詩を爲る者は其れ道を知れるかの如し、作爲、遺爲、人爲、

つしむ 謹、慎、肅、欽、

【謹】は言をつしむこと、論語に弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて而して信ありとありて、信は其い

ふ所と行と一致する意なれば、謹は言に就ていふこと明かなり、又孟子に庠序の教を謹み、之に申ゆるに孝悌の義を以てすとあり、庠序は學校なり、夏の時に庠といひ、殷の時に序といひしなり、然して孝悌の義といふは心に關し、庠序の教とは言行に關す、謹言、謹直、謹嚴、謹慎、謹肅、恭謹、

【慎】は心を主としものを粗略にせぬこと、論語に事に敏くして言に慎むとありて、言は今發せんとする言語に就き、心に充分注意して判断すべきをいふ、又多く聞きて疑しきを闕き、慎みて其餘を言へば尤寡しともあり、又史記に項羽乃ち曹咎に謂て曰く、謹みて成軍を守れ、若し漢戰を排むとも慎みて與に戰ふ勿れとあり、慎思、謹慎、慎重、慎厚、誠慎、

【肅】は慎よりも強し、畏敬して瞻する意なり、嚴肅、肅然、

つしむ 勤、勉、務、力、勗、努、

【勤】は惰の反對にて、惰ることなく強く勤み出精すること、孟子に終歲勤動きて以て父母を養ふを得ず、又老子に上士は道を開き勤めて之を行ふとあり、進みて辛勞しつづ事を爲すなり、勤勞、勤逸、勤學、勤行、勤惰、勤送、勤直、勤番、勤王、

學、力戰、

【勗】は勉に同じく勵ます意、

【努】は一いきに精力を出し、力を入れて勵む意なり、しかし努力といふ時は、全力を注ぎて永く勵むなり、少壯は努力せず、老六は徒に非傷すといふ詩あり、又其字已に奴の力なり、俗にばか力といふに同じ、

つねに つね 毎、常、恒、庸、

【毎】はたびごとといふ意、故に絶えず連続せる事には用ひずして、時々出合ふ事物に就いて、其出合ふ度ごとにといふ意なり、東京に行く度に淺草公園に行くとは、東京へ行く度に、必ず淺草公園に行くとなり、

【常】は平常日常所當などの熟語ある通り、絶えず連続せる事をいふ、然して變、奇、怪の字に反對の義あり、吾人國民たる者は常に皇恩の無窮なるを懐ひ身命を投じて之に報ゆるの心得あるべきなりとは、夜も寝も臥ても起きても忘るべからずとの意なり、常服、常法、常典、常態、常狀、常情、常日、常生、常綠樹、常套、常住、常道、

【恒】は何時も變化せぬことなり、常にと同じ様に恒に用ひたる例少し、多く形容詞の如くに恒産、恒徳、恒心などと用ふ、故に日常の文には成るべく常を用ふべし、恒久、恒常、恒安、恒星、恒風、恒寒、

【庸】は常に同じ、庸人、庸主、庸君、庸時、庸劣、庸々、庸

【勉】は力の及ばざる所、困難なることを排除しつゝ強ひてつとむるをいふ、古文眞寶の序に眞寶の編は之を勉むるに勤を以てし、之を誘ふに忠孝を以てするを欲せざらんやとありて、随分困難なる事あるにも恐れず進み、随分倦怠の念起る時にも惰ることなく勤むることを教へん爲めなりとの意なり、中庸に誠者勉めずして中すとあるも同義なり、勉勵、勉強、勉力、勉學、勉哉、勉旃、

【務】は常に一途に力を専らにして従事すること、終日のわざとするつとめなり、論語に君子は本を務む、本立ちて道生ずとあるも、常に専ら徳の根本を修めんとする意なり、左傳に齊侯は徳を務めずして遠略を勤むとあるも、齊侯は徳行を常になさんと専ら力を用ひずして、遠國を侵略する事は少しも止むることなきをいふ、故に名詞として仕事といふ意に用ふ、家務、政務、勤務、本務、事務、先務、急務、職務、義務、官務、局務、專務、

【力】は我が全力を盡してつとむる意、身力精力共に用ふ、勉と異なるところは、勉は困難なる事を強ひてなし遂ぐる故に、其内に苦辛の心あれども、力は我が精神を主として勵めば、止むを得ず爲すといふ苦痛の心なし、中庸に聖を好むは知に近く、力め行ふは仁に近しとあり、學を好むとは心に悦びつゝするなり、従つて力むといふも苦痛の心なく、全力を盡す意なり、努力、力行、力政、力

つひに遂、卒、終、竟

【遂】は此の事よりして、彼の事に及ぼす影響をいふ語なり、左傳に莊公寤生して姜氏を驚かす、故に名づけて寤生といふ、遂に之を惡むとあり、寤生は生れし時に已に眼を明に開けるなり、又蘇秦の傳に蘇代蘇勳遂に燕に入るを聽かずともありて、最後の意にはあらず、

【卒】は時間の上より結局のことといふ字にて果てはと歸す、左傳に遂に邯鄲を灌漑に敗り卒に盟つて還るとあり遂と卒とは我を主とする意なり、

【終】は始の反對にして果ては又はトウ／＼などの意、結局を擧げていふ字なり、故に始めといふことを常に忘るべからず、終に戦はずとは、最後までも戦をせざる心にて、其内に始めよりといふ心は包まるゝなり、始終、結局、終結、最終、

【竟】は畢竟など用ひて、つまりといふ意、始めよりといふ考はあれど、最後に尤も力を入れていふ字なり、史記、留侯世家に、遂に北藍田に至り再戦して秦兵竟に敗るとあり、終と竟とは、我よりも他の人に主動力ある時に用ふ、

【具】は事に落ちたる、となき意、書經に具に蒙士に勸ふとあり、

つまびらか 詳、審

【詳】は略の反對にて、くはしく明細にすること、孟子に博學にして詳に之を説く、又中府の序に其之を慮るや遠し、故に其之を説くや詳なりとあり、詳細、詳密、詳記、詳説、詳明、

【審】は事物をとくと念を入れて確實にすること、論語の注に夫子が平日の一動一靜は、門人皆審に視る、而して詳に之を記すとあり、是れ即ち孔子の一擧手一投足に皆注意して、其機を事細かに記すなり、又中府に博く之を學び、審に之を問ひ、慎みて之を思ふとあり、詳は目に見ゆる處、心に知る處、耳に聞ゆる儘を事細かに表はすことにて、審は道理に就きて先より先を充分に解することなり、審に之を問ふとは、其究極の道理如何であるかを尋ねるにて、書經に極量を謹み法度を審にすとあるも、其法度を定むる根源の理を充分に明かにするなり、故に詳は我が心以外の物を主とし、審は我が心の働きを主とするなり、審問、審査、豫審、審理、審議、

つらなる(つら) 連、聯、列、羅、陳

【連】は個々別々物の筋の如く續くをいふ、珠を濯山つなぎつけたるを連珠といひ、山の次より次へつゞきたるを連

山といふ、又幾日もつゞくことを連日といふにて知るべし、連年、連理、關連、流連、

【聯】は縱横に切れぬ様に續くをいふ、玉露に陳后山京師に在り、張文潛晁無咎聯を聯れて之を過ぐとあり、又詩に聯句といふも、句を横に比べて意味互に關係すればいふなり、連は一筋の意にて、聯は幾筋にもなりて續く意なり、聯合、聯隊、聯隊、聯合軍、聯邦、

【列】はならびつらなること、行列、列坐といふにて知るべし、又位列とは位の直下に從てならぶをいふ、排列、羅列、列聖、列國、

【羅】は網の目、又は網目の如く、細かに順序正しくならぶをいふ、大寶藏に入珍を前に羅ぶるも食する所は口に適するに過ぎずとあり、又小學に子姪は階下に羅列すともあり、

【陳】は順序を立て、布きならぶること、列に似たり、種類分けしてならぶるにもいふ、陳列館といふは、物品を或る區別に従ひてならべたるなり、

つらむ 答、尤

【答】は道理にたがふか、法度にそむくか、又は約束などに違ひたるを責めとがむること、論語に既往は咎めずとあり

つらむ (漢字用法)

り、

【尤】は咎と違ひて不念にしたることとがむる意、論語に、言尤め責しとあり、不尤人、

つらむ 時、秋

【時】は文字の如く時分にわりつけて用ふ、廣く時節を指すに用ふること勿論なり、

【秋】は元來春夏秋冬の秋にして四時の一なり、秋は物の熟する時なれば、轉用して所要の時節といふことに用ひらる、出師表に危急存亡の秋なりとあり、

つらむ 所、處、攸、處、處

【所】は實語に用ふる時は、其場所又は方角をいふ、所以、所爲などは虚語の用法なり、

【攸】は所の古字なり、

【處】は場所にて居ること、在りこと、るの義に用ひらる、土地場所をいふ時には、此の字を用ふべく、又土地場所を指すといふ意なく、口調の如くに用ふる場合には所を用ふべし、即ち吾が東京に來りし所のものは、英語を學ばんが爲なり、到處、住處、

【處】は處の古字、略字にあらず、

つらむ (つら) 封、閉、闔、緘、杜

【封】は中へとちだめて内外の間を妨ぐる意、封面を入る、

つらむ

七一

袋を封筒といふ、旅順港封鎖の如きは、内外の出入を妨ぐる事となり、封入、封書、

【閉】は門又は戸をとつること、閉、啓、開などの反対、しめざる意なり、孟子に泄柳は門を閉ぢて内れず、又戸を閉つと雖も可なりとあり、又門戸の如く通路をとつるに用ふ、旅順の閉塞隊といふが如し、閉門、

【開】は門の戸を双方よりたてよする如く戸をたつること、開闔、

【縛】は物と物と互にとち合せて、出入の出来の様にすること、糸にて袋の口を締め括る如くち塞ぐこと、

【杜】は内へ入らぬ様に塞ぎ止むる意、杜絶、

【調】は事物の互に丁度程よく和合するをいふ、禮記に仲夏に卒筮箴養を調ふ、又通鑑に陰陽調はず悞るゝに足らずとあり、調劑、調諧、調順、調停、

【整】は物事を行儀正しくすること、又は秩序正しく置くこと、或は事に落度なき様にすることなり、詩經に王赫として怒り、爰に其旅を整ふとあるは、落度なき意、通鑑に衣を整へて危坐すとあるは、行儀正しく衣を着せしなり、又歐陽脩の文に、號令出で、從はず、紀綱弛みて整はずとあるは、號令法律などの秩序正しく其職分を成さざるをいふ、整頓、整理、

【問】は何事にまれとひたげぬること、質問、問題、疑問、問答、

【訪】は往きて人を問ひたづぬること、わざわざする意あり、訪問、

【訊】はとひたづぬること、訊問、

【通】は塞の反対、行きとほりてつかへぬこと、或は達すといふ意にも用ひらる、通計、交通、精通、貫通、開通、

【徹】は通に似て底までとほりぬること、徹頭徹尾の如し、徹上徹下、徹底、貫徹、

【透】は突きぬくる意、ぬきとほること、光線を透す、光波を透すの如し、又しみとほるといふ時も用ふ、透明體、汗透衣、

【俱】は一處に、ひとつにと云ふ意、小川少尉奮戦落馬して遂に村田一等卒と俱に斃るといふは、同じ處にて死せりと意、俱は二人にかゝる、兩虎俱闘、玉石俱焚、

【偕】は一處に相揃ふ意、偕行、偕樂、偕老、

【共】は共同にする義、多くの者相集まり相助けて一事をなす意なり、

【齊】は偏頗なく、物の先端を切り揃へたるが如く行儀よくひとつらにそろふること、論語に民を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば、民免れて死なしとあり、齊一、

【留】は一處に久しく居ること、又抑へてひきとめ置くこと、易に、君子は理に明かに憤みて刑を用ひて獄を留めず、又史記に莊生曰く疾く云ふべし憤みて留むる毋れとあり、留任、留致、拘留、逗留、滯留、留置、還留、留滯、淹留、

【止】は動かすこと、まる意、大學に人君となりては仁に止まり、人臣となりては敬に止まり、人子となりては孝に止まるとありて、其處に安んじとまる意、動止、禁止、廢止、中止、

【駐】は留に似て甚だ重きなり、蜀志に諸葛亮五丈原に止まり兵を分ちて屯田し、久駐の基をなす、又晉書武帝紀に、晉吳を伐つ或人曰く春水生するに方り、久しく駐り難しとあり、駐蹕、駐蹕、駐在、

【停】は中途にてしばらく其場に止まること、唐書に燭を停めて碑を介す、杜牧の時に車を停めて坐して愛す楓林の暮とあり、又行義に隋文帝一錢を盗む者以上皆繫市す、後之を停むとあり、又停車といふも暫時の中止まる意なり、

【與】は事物を相手にすること、又彼も此も同じくの義、世與少有、

【取】はとりて我が物にすること、ねらびとるにも、とり用ふるにも用ふ、捨、與の反対なり、大學章句に、嘗て竊に程子の意を取りて、以て之を補ふとあり、又孟子に揚子是我が爲めに取るとあり、取捨、奪取、

【執】は固く手に持ちて放さぬこと、故に心に固く守りて變ぜぬにも用ふ、中庸に之を誠にする者は、善を擲びて固く之を執る者なり、又論語に禮を執る者は、皆雅言なりとあり、是れ心に堅く守るをいふ、又執權職といふも、將軍に代りて萬端の政事を取り扱ふ權利を有せる故の名なり、執念、執筆、固執、執差吏、

【把】は執の輕きにて、持つ、握る、掴むの意なり、史記に湯は自ら劍を把りて余吾を伐つとあり、把持、把東、

【採】はねらびて摘み取ること、草を採る、花を採る、果實をとるの如し、故に又人の多數の内より特に抜き出して任用するを採すといふ、採擇、採拾、採集、

【操】は固くしかと持ち續け放さぬ意、孟子に操れば、即ち存し、舍つれば則ち亡ぶ、左傳に是れ猶未だ刀を操る能はざる者に割かしむるが如しとあり、即ち操は執に似て、久く持ち續くる點異なれり、義を立つるにても、志を立

つるにても、しかと立つるは操なり、女子の操といふも此意なり、獨樂園記に志倦み體疲るれば、即ち筆を投じて魚を取り、狂を執り樂を採り渠を決して花に漉き、刀を操りて竹を削るとあり、以て其意の別を知るべし、志操、操持

【操】ほとり集めひきままとめて、手に持つこと、總攬

ながし 長、永、

【長】は彼と此とを比較して長きをいふ語、形にも時にも用ふ、短の反對なり、孟子に今滕は長きを絶ち、短きを補は、將に五十里ならんとす、又、明史田汝成の傳には、父子長く離れて、魂魄永く喪ふとありて、限りある者の内にて長短を比較しいふなり、即ち長日、長年、長距離の如し、長命、長壽、長生、長身、長夜、長屋、長髪、才長

【永】は比較せず只時の無窮にながきをいふ、永久、永遠の如し、故に長眼といふは、眼り好きの人をいひ、永眼といふ時は死するをいふ、されば長き舟、長き川、長き路は正しけれども、永き舟、永き川、永き路といふは非なり、永世、永久、永年、永日、永夜、永切、江流水、なく、鳴、啼、泣、哭、

【鳴】は鳥獸の喜びて鳴くにも、悲みて鳴くにも一般に通じて用ひらる、又凡て物の音聲を出すに用ひ、なるとも訓ず、從て人の名聲の世間にきこゆるにも用ふ、詩經に鶉既に鳴けり、又樂記に鐘を叩くに大を以てすれば即ち大に鳴る、又莊子に汝は聖白の説を以て鳴るとあり、又春日禽鳥啼々として花間に鳴くとも、亦寒風凜烈馬悲鳴して進まずとも用ふ、又なるといふ意に用ふべきは此字のみに限る、島田三郎氏は辯舌を以て天下に鳴るの如し、又日記故事に、唐の章景駿が貴州縣の知事となりしに、父子互に訟ふる者ありしかば、其子に向つて曰く、我幼にして親を喪ふ、今汝幸に親あるに何の不幸ぞや、又汝に孝行を教へざりしは我が罪なりとて、嗚咽流涕し、之に孝經を教へしかば、孝子となれりとあり、和鳴、悲鳴、啼

【啼】は聲を立て、鳴くこと、人にも鳥獸にも用ふれど、人に用ふる時は、悲みて聲を高くしなくなり、鳥獸に用ふる時は、只聲を高くなく意にて悲喜の別なし、黃鳥既に老いて蜀魂月に啼くとありて、啼鳥といふ時はなくことを得る鳥といふ意、鳴鳥といふ時はなきて居る鳥の意なり、又人啼くといふは其心底よりなく意にて、心に重きを置き、人鳴くといふは只其聲の高きに就ていふなり、故に啼泣と連用す、泣は聲を高くせずして涕を出すなり、日記故事に後漢の江革、母を負うて難を逃れんとせしに、賊

起りて革獨り將の去らんとせしかば、革輒ち泣きて老母あるを告ぐ、賊之を釋すとあり、又趙の孫叔微幼兒の折兩頭蛇を見て之を殺して埋めて歸る、壺へて食せず、母其故を問ふ、叔微泣きて對へて曰く、兩頭蛇を見る者は死すと吾れ之を見たり、吾の死する日ならんとありて、泣は情尤も切にして聲の出でざるなり、

【泣】は涙を流してなくこと、泣血、啼泣、

【哭】は聲をあげ涙を流してなくこと、泣より重し、禮記に斯に歌ひ、斯に哭くとあり、哭號、

なげく 抛、擲、

【抛】は投げて遺ること、又なげ棄つる義、拋棄と熟語に用ふるにて意明かならん、

【擲】は抛と同じく、國語にては同訓同意なれど、主として投げつけることに用ふ、放擲、打擲、擲丸、

なげく 嘆、慨、

【嘆】は心に思ひ結ばるることありて、溜息をつくこと、又歎ひ哀むこと、轉じては切に、こい願ふ意にも用ふ、嘆息、悲嘆、嘆願、

【慨】は口儲しと思ひなげく義、慷慨、憤慨、慨嘆、

な(な)かれ 無、莫、勿、毋、亡、罔、庶、微、靡、

此の内、莫と勿と毋とは、なかれと讀む處に用ひられ、なしの意に用ひられる例なきにあらざり、古文なれば、毋

通にはなしの意に用ひざるをよしとす、

【無】は古文无の字をなしと讀み、有に對する意、なかれとよむこと少なし、二の例は存すれども普通には用す、有爲、皆無、無益、無慮、無感、無限、無地、無形、無念、無爲、無常、無極、無情、無方、無禮、無道、無盡藏、無聊、無罪、無名類、無能、無識、無謀、無理、無責任、無制限、無定見、無分別、無根脚、無花果、無始無終、無欺、無幾、無視、無比、

【莫】はなし又はなからんやと讀む字、なかれとも訓す、なし又はなからんやと讀む時は、互に比較して度合の極端をいふ、無は物事の有無に關係する字なれど、莫は常に比較上の語とす、孟子に不祥焉より大なるは莫し、焉より尊きは莫し、又韓非子に人君たることを樂む莫からんやとあり、華佗傳に多く酒を飲むこと莫れとあり、なかれと訓むには、時としては不の如くに用ふることあり、我觀は彼の如き莫し、禮を教ふる我が身の實行を以てするに如くは莫しの如し、何れも二者を相對していふ語なり、莫大、莫逆の友、

【勿】は(毋)と同く禁止する意にてなかれとのみよむ、論語に過ては即ち改むるに憚る勿れとあり、慎勿與戰、

【亡】はなしと讀む、存に對し從來ありし者のなくなる時に用ふ、ほろぶと讀むにても其意明かなり、論語に、顔回不

幸短命にして死せり、今は之に比す、べき者亡しとあり、又今淵明の書已に亡し、只獨り山川存するのみともあり、亡命者、亡滅、滅亡、亡國の民、失亡、亡狀、

【罔】は事物其物は、實際あれども、我が強ひて見ぬなくする意なり、晴雨と罔く晝夜を忘れて走す、罔雨、罔浪、罔家、罔然、罔極、罔依、

【蔑】は罔に似て實際ある者をなき如くすることながら侮りてなす心なり、故にないがしるにすと訓む、輕蔑、蔑視、蔑等、

【微】はなしといふ意なれど、なかりせばとよみて假定のことといふに用ふ、論語に管仲微りせば吾其れ髪を被り冠を左にせん汝微せば我殆んど免れ難かりしなりと、又中庸の序に程夫子微りせば、則ち亦能く其語に因りて其心を得る其きなりとあり、

【靡】は傾けなくす意にて、多分無くなるならんといふ輕き意なり、今文には用ひざるを可とす、

なす(なる) 成、爲、就、作、做、

【成】はなると讀む時は、よく事業の出来畢ること、又なすといふ時は、なし遂ぐること、或はなし遂げんとて事をする意にて、其の目的明かなるに用ふ、功を成すことを成功といふ場合には、なし遂ぐるにて、只事を成すと、事に重きを置きていふ時は、なし遂げんと目的にてする

の意なり、成業、成否、成績、

【爲】はなると讀む時は、事物の名の下にありて何々となる、何々になると自動の意にて、なすの時は、何々となす、何々になす、又何々をなすと用ふ、何々をなすと用ふる時は、成の如くなし遂ぐる目的あるにあらず、只するといふ意に過ぎず、故に成は強く、爲は弱し、無爲、有爲、

【就】はなし終ること仕とぐること、又出来あがることなり、故に事を就すといふは、してしまふといふ強き意あり、成就、

【作】はなし始むる意、故に就とは反對にて、事を作すとは、事をしはじむる意なり、作事、作製、

【做】は此の物を變へて、彼の物になすこと、見做、做湯、なほ繩、索、

【繩】は太き細きに關せず丁寧に作りたるなはいふ、三合繩とは三本の小繩を合せてよりたるにて、單繩とは二本をより合せたるなり、

【索】は又太細に關せず、粗末によりたるをいふ、故にあらなほを粗索、又索といひ、文久錢十文錢などを刺すなはを錢索といふ、

【猶、尙】

【猶】はまた、やはりの義、今後漸々進み來る物に就いて、未だ不十分なるをいふ意、吾れ猶史の闕文に及ぶとあり、

なら(なり) 習、效、做、肄、

【習】は物事のさし障り勝なるになやむ義、艱苦、艱難、なら(なり) 習、效、做、肄、

【效】は同じ事を、幾返も重ねてならひ熟すること、論語に學びて時に之を習ふ、亦悦ばしからずとあり、又歐陽脩の文に、我が病む所の兵を以て、彼の水土に慣習せる賊に當るとあり、復習練習などの意にて明かなり、習字、習慣、自習、獨習、俗習、

【效】は他の事物に似せてまねをなすをいふ、左傳に順を去りて逆に效ふは、禍を速かにする所以なりとあり、又人の眞似をなすを人に效ふといひ、先例に従ふを先例に效ふといふ、即ち或見本を置きて、其れに似せて事を爲すなり、【做】と【效】とは共に效に同じ、做は又效ともかく、模倣といふも同じ、

【肄】は藝術を復習する、と、業を肄ふと用ふ、なる(なり) 馴、狎、熾、褻、

【馴】は鳥獸の人に親しみなつくこと、雅馴、

【狎】は親しみて戯ること、狎妓、

【熾】は習ひて常となること、しばしば出で合ふこと、習慣

【褻】はくつろぎて、心安くすること、

【尙】は其の上に、またの意、前に盛なりし者が漸々退き去りて、今僅かに其餘の存するをいふ、漢時代の遺跡尙存せり、彼尙餘命を保てり如し、故に日なほ淺し、春なほ深し等の如きは猶なり、是れ漸々深くなり行く者なればなり、又米ながらなほ申したき事あり、彼れ口に文明を唱ふるもなほ此蠻行あるかの如きは尙なり、

【尙】は尙、曷、曷、胡、

【何】は先方の事の能く分らぬ時、なにぞと問ひ質す意なり、君何ぞ之に答へざる、又君の之に反對するは何ぞやの如し、何由、何以、何用、

【奚】は何に似て疑ひ問ふ意なれど、責むる如き意はなし、いつくとも讀む字なれば、深く源を尋ぬる意あり、論語に子奚ぞ政を爲さざるとあるは深く先方の心に立ち入りて、何といふ心底よりせざるのかと靜かに問ふ心なり、要するに【何】と【奚】と【胡】と【曷】とは意味の輕重の差に過ぎず、殆んど相似たる者なり、只何と胡とは尤も相似て、我が心中に決定して一言の下に先方を責め付くる意なるに、奚と曷とは、我が決心は後にして、先方の心底を先となしてと問ふ意なり、

【奚】はとど道ひつ思ひ煩らふこと、懊惱と用ふるにて知らるべし、轉じて痛みに苦しむことにも用ひらる、

【奚】はとど道ひつ思ひ煩らふこと、懊惱と用ふるにて知らるべし、轉じて痛みに苦しむことにも用ひらる、

なす(なる) 惱、艱、

【惱】はとど道ひつ思ひ煩らふこと、懊惱と用ふるにて知らるべし、轉じて痛みに苦しむことにも用ひらる、

【悪】は好の反對にして全く心底より遠げんとすつくいやがる意にて極めて強し、左傳に莊公癡生して母の武甕を驚かす、遂に之を惡むとあり、又大學に好みて而して其惡しきを知り、惡みて而して其美しきを知るとも、又惡臭を惡むともあり、憎惡、

【憎】は惡よりも意輕し愛の反對なり、つらにくく思ふこと、歐陽修の詩に夢魂を憎む賦あり、又譚人の國を亂す誠に疾むべし憎むべしともあり、又憎惡とも兼用す、

【疾】は嫉と同義にて、人の長處あるを心に不快に思ひて除かんとする意なり、故に疾は人へのみ用ひらるゝも、惡と憎とは他の動物にも用ひらる、史記孫臏傳に臏消孫臏の已より疾なるを惡れ之を疾むとあり、

逃、遁、北、脱、亡

【逃】は逃げかくる、義、逃走、

【遁】は逃に同じ、隱遁、遁世、遁避、逃亡、

【北】は敗北と熟字する字にて敵にうしろを見せにぐる、と、

【脱】は物のわけ出づること、脱走、脱出、脱兎、

【亡】はのがれさり、にげうすること、逃亡、遁亡、

荷、擔

【荷】は天秤にてかつぐる本義とし、轉じて頂又は擔のことと通用す、錢を荷ふ、笠を荷ふの如し、

【煮】は汁ある者をにけたりすにて普通の意、即ち汁を煮る菜を煮るの類なり、其中にある物のにゆるを適度とするなり、

【煮】は俗ににやく、にとほすといふ意にて、煮よりも重し、煮魚、拔兎菜、

似、肖

【似】は此れと彼れと同様に見ゆるをいふ、ナポレオンは西郷隆盛に似たり、鯨は魚に似たり、類似といふにても明かなるべし、似而非論、

【肖】は本来にるべき道理ありてにること、又は特にほせてうつすことなり、史記の茅坤の評に司馬遷は酷吏刺客等を傳ふ、文おのく其文に肖たりとあり、又玉露に姚燮畫工をして其像を肖せしむとありて、此れより肖像といふ熟語は起りしなり、

ぬ

ぬぐ(ぬぐ) 扱、挺、抽

【扱】は擽り出すこと、ひきぬぐ意、扱擽、選扱の如し、又ぬぐんすること、扱擽の如し、確乎として扱くべからずといふは、おとしいれ、攻めぬぐ意、

【挺】はぬぐんすること、挺身、挺出の如し、

【抽】は引きいだすこと、抽籤、

漢字用法

【擽】は肩に掛けてはこぶこと、國語のかたぐに同じ、負擽と熟字して一身に引く受くることにも用ふ、

はかに 俄、遽、驟、暴、卒

【俄】はやがて間もなくの意、前に一事ありて其の事より間もなきをいふ、即ち黑雲西山より起り一天かき曇りて、俄かに大雨下るの如し、俄然、俄頃、

【遽】は思ひも付かず、あはただしきこと、唐書に高宗萬年宮にあり、夜大水、上遽かに出で、高に乗る、俄かにして水陸殿に入るとあり、高は棟なり、遽は高宗が、少しも思ひがけなきに大水の來りし爲め、急速に出て、高に乗りしなり、又俄は高宗が棟に乗りてより、間もなくといふ意なり、急遽、驟遽、

【驟】は急に度々起ること、夏の雷雨の遽に降り出して急に止み、又急に降り出しては又止むが如きを驟雨といふ、

【暴】は猛烈なる勢にて突進し來るが如きにはかきなきをいふ、史記に風雨暴かに至り、樹下に休ふとあり、

【卒】は迅速のなち、卒然、忽卒などと用ひらる、吳子に卒かに敵人に逼へば亂れて行を失ふとあり、

ぬぐ(ぬぐ) 煎、煮、烹

【煎】は汁ある物を汁の失せて乾くまでにするをいふ、所謂につけていふ意なり、故に煎藥又煎茶の如く汁を少なくするまでにする藥茶に用ふ、

ぬすむ 盜、偷、竊

【盜】はぬす人といふ如く人の物を取ること、經濟に、生きては則ち其職位を盜み、死しては則ち其榮名を盜むとあり、竊盜、強盜、

【偷】は人の注目せぬ間隙を見料りて、かすめとるなり、即ち生を偷むとは、何の役にも立たずして他人よりは死ねかと思はれながら、偷は生存せるをいふ、又間を偷むといふも、人の見ぬ居らぬをいふにして少しの時間を自己の事に供するをいふ、故に盜の如く、有形の他人の所有品をぬすみとることに用ひず、

【竊】は人の見て居らぬ間を見料りて事をなすこと、書を竊みて讀むとは人の所有せる書をぬすみ取りてよむにあらす、所有者が其本を見て居らぬ間に、其本を見て讀むこと、又傍らより知られぬ隙にぬすむ時に用ふ、

ね

ねむ 妬、嫉、娟

【妬】は本字は折にて、婦人の夫をれたむをいふ、然し列子にも爵高き者は人之を妬むとあれば、男子にも用ふ、又離騷の注には美人互に害するを妬といふともあり、

【嫉】は己を上げて人を下さんと欲し、人の長處あるを憎むことなるが、又妬と混用す、然し妬よりも意輕し、離騷の

ぬすむ

注には賢を害するを嫉といふとあり。
 【媼】古註に夫の婦を妬むを媼と曰ふとあれど、以上三字互に通用す。
 【寢】は臥床に就く意、論語に宰予は寢寐す、又食するに語らず、寢るに言はずとあり、故に寢る處を寢處寢室といふ、寢衣、寢具、寢息、寢臥、寢寐、
 【寐】は場所にとらざる意なり、左傳に盛服して將に朝廷に出でんとせしも、朝猶早し、坐して假寐すと、又寢して寐らずともあり、又剪燈新話には獨り中堂に坐し寢して寐る能はずともありて、寐は只床に入るのみにて、寐は何處にてもれむる意なり、假寐、悟寐、不寐、夢寐、
 【眠】は寐と同じく場處にとらざれども、寐の如く充分にれむるにあらず、たゞ目をとぢてれむること、俗にトロ〜スルといふに當る、臥眠、
 【睡】は眠と同じくて寐に至らざる間ありむりすること、史記に孝公時々睡りて商鞅の言を聽かずとあり、即ち坐眠なり、熟睡、睡眠、
 【瞑】は只目を閉づるのみにて、心は寐眠するにあらず、故に洗心瞑目など用ふ、瞑想、

【遺】は後に留むること、遺產、遺言などの遺なり、又野に遺賢なしなどは、もれのこる意、遺失、遺亡など忘るゝ意なり、
 【胎】は後世子孫にのこすこと、詩經に厥の孫謀を胎して、式て子を燕翼すとあり、
 【殘】はあましのこすこと、殘餘、殘念、殘金、

づる意なり、左傳の隱公四年に衛人右宰醜をして洩みて州吁を濮に殺さしむとあるは、一寸其名をかりて州吁を殺すといふなり、即ち俗に顔出しするといふ程の字なり、洩又【泄】につくる意同じ、孟子に中國に莅みて四夷を撫すとあり、

【望】は首を長くし、視んことを欲して遠方を眺め又は高きを見ること、又此より轉用して心に待ち欲する事にも用ふ、又人に見上げらるゝことにも用ふ、詩經に瞻望するも及ばず、又萬民の望む所なり、又孟子に王は民の鄰國より多きを望むなかれとあり、仰ぎて天日を望む、遠く富嶽を望むの如し、望洋、遠望、希望、望見、望樓、望蜀、懸望、眺望、一望千里、仰望、人望、怨望、
 【臨】は高きより低きを見下す意なり、詩經に日月は下土を照臨す、又戰々兢兢として深淵に臨むが如し、又論語には事に臨みて懼れずとあり、故に高貴の人より下賤の者を見るに用ふ、君臨、賞臨、監臨、臨淵、臨下、
 【視】は臨と同じれども、其用法狭くして一寸と差し出

【宣】は廣くあらはし、普くひろむる意なり、宣言といふも世人に廣く知らする様にいふ言なり、宣言、宣告、
 【陳】は布きのべ列めること、又物を敷へ立ていふこと、物にも事にも用ふ、書翰文に陳ればと用ふるは前にいふべきことは略して、私の主要なる事を布きのべて申上ぐればとの意なり、陳情、敷陳、陳述、
 【演】はだん／＼に引き弘むること、演説といふも師かの題目を撰びて之を種々にいひ弘むるなり、又演繹法といふも、二つの定まれる法則を元として、漸々に引き弘むるなり、講演、演繹、演習、

【展】は舒に似て開く意あり、玉露に所藏の墨戲畫巻を展べて之を縱觀すとあり、展覽會といふも、藏品を開きて博く見する意、親展、開展、【申】と【信】とは伸に同じ、
 【伸】は舒の(のぼる)登、上、昇、昇、騰、
 【登】は高處へ斜にのぼること、もの、上にのぼることにて、降の反對なり、易經に初めて天に登る、又范仲淹の岳陽樓の記に、斯の樓に登れば則ち國を去りて郷を懷ひ、譚を憂へて譚を畏れ、滿目蕭然、感極まりて悲しむ者あり、又柳宗元の始遊潭西小邱記に嚴衝然として角列し、上る者は熊羆の山に登るが如しとありて、山にのぼる、屋にのぼる、木にのぼるは皆登なり、又城に登るとも用ふ、登城、登樓、登閣、登川、登臨、登極、登第、登祥、

のぼる (漢字用法)

【延】は屈の反對にて、人ののびをする事より、事物を強く

【伸】は屈の反對にて、人ののびをする事より、事物を強く

【上】は上にのぼるにて、下の反対なり、又登ることの速かなる時に用ふ、易經に雲天に上る、史記老子傳に龍に至りては吾其風雲に乗じて天に上るを知る能はずとあり、上升、上騰、上天、上道、日上、

【升】は勢よくすらくとのぼること、降の反対なれど、登とはいさゝか異なり、登は漸々一步々々に上へ行く意にて、其道筋の有様に重きを置き、升は其上へ行くべき方の勢あるをいふ、然して升登は共に高處へ行く間のことを主とし、上は其高處に到着して其處に居る意を主とす、故に天に登る、山に登る、樓に登るは漸々と一步々に進みのぼるにて、天に上る、山に上る、樓に上るは、のぼりて山に在り、又のぼりて樓上に在り、又のぼりて天上に在りといふ意なり、又天に升る、山に升る、樓に升るとは、勢よくのぼり行くなり、陳書に諸侯魏郡の臣朝廷に升る、又柳千厚の八駿馬を馴る圖に、穆王は八駿を馳せて崑崙の墟に升るとあり、又官位の進むを升位升官といふも此の意なり、

【昇】は日の升る意にて壯嚴雄大のことに用ふ、漢書に民三年の儲を有するを昇平といふとあり、又韓退之の南海神廟碑に、祝號祭式次と俱に昇るとあり、

【騰】は跳りあがる意にて、物ののぼるとは用ひず、韓退之の騰王開記に騰蛟起鳳とあり、又詩經に百川沸騰すと、或

【謀】は人と相談し思ひはかること、十分思慮を凝らし、深き秘密を守る意より、權謀陰謀等の惡意に用ひらるゝこととあれど、元來は然らず、易に君子は事を爲すに始めを謀る、又詩經に周爰に謀を咨るとありて、注に事の難易を咨るを謀といふとあり、又左傳に食しき者は必ず人を謀るともあり、又晉書に二人對議する之を謀といふとあり、又韓退之の崔立に答ふる書に、年二十の時に及び家貧しくして衣食の不足に苦み、所親に謀りて然る後、仕の唯人の爲のみならずを知るにあり、多くは相談する意なり、謀畧、謀計、參謀、遺謀、智謀、

【圖】は非常に重大なること、又は困難なることに、圖案を作りて、此れより彼れ、彼れより此れと、十分遠き將來迄順序を立て、思慮することなり、周禮に春は諸侯朝して天子の事を圖る、又漢書に宣帝曹節王甫等今之を誅せずんば、後必ず圖り難からん、又唐紀に圖らざりき今日復聖明を親んとはとあり、不圖といふ語こゝに起る、又唐書に王業を圖りて大事を舉ぐとあり、故に圖は計謀より一層意重し、但し不圖といふ語は原意程重からず、後圖、違圖、大圖、令圖、雄圖、圖策、

【量】は物の輕重多少、又は長短を見積ること、論語に唯酒は計り無し、亂に及ばすとあり、酒は飲む人と飲まぬ人とある故に、其分量の多少を定め置くこと能はず、只飲

はかる (漢字用法)

は馬の跳りはしるを騰馬といひ、物價の急に高くなるを騰貴といふ、皆騰る物の目的物あり、其上にのぼるにはあらず、騰駒、奔騰、騰躍、暴騰、騰出、

【吞】は嚙むことなく其儘丸のみにするをいふ、史記に吞舟の魚、又灰を吞みて嘔と爲るとあり、吞占、併吞、

【飲】は液體をのむこと、即ち酒を飲む、水を飲むの如し、故に刀を飲む飲舟の魚などはいはず、飲食、飲水、飲漿、

【咽】は音いんの時はのむことにて、おつのはむせぶ意なり、いん【咽】は只喉を通すこと、

はかる 計、謀、圖、量、度、料、測、諮、詢、

【計】は言に従ふ十より成る字にて、十は物の數をいふ字なれば數ふる意なり、さては轉用して豫想しはかる意、つもりを立つることにも用ふ、左傳に士彌牟城を成周に營む丈數を計り高卑を揣るとあり、士彌牟は人名なり、丈數は城の周圍の長さ、内部の配置の距離なり、又晉書に王褒家貧にして口に計りて田し、身に度りて糞すとあり、田は農利なり、蠶は養蠶なり、又鶴林玉露に利を計りて便に就くともありて、皆見積を立つる意なり、計畫、計策、計畧、計謀、會計、統計、設計、計度、大計、計算、

【度】ははかると讀む時は、音タクなり、元來物指のことにて、分寸尺丈引を五度といふ、是れより思考して物事の長短の度合を察するは、物指にて物をはかりて製作するに似たれば推測する意に用ふ、韓退之の文に力を量りて之に任じ、才を度りて之に處らしむとあるは、力の多少を見積り、才の長短を考へて、其れ相應の職をなさしむる意なり、又左傳に周の諺に山に木あれば工則之を度り、資に禮あれば則ち之を擇ぶとあり、又君子息國の亡びんとするを知る、夫れ徳を度らず、力を量らず、親に親まざればなりとあり、故に量と相似たり、只量は多くは強弱多少の意に用ひ、度は深淺厚薄大小に用ふ、付度、測度、計度、料度、

【料】は思慮する意なく、見識を以て事物の如何を推知し、洞破すること、又は欺きはかる意あり、史記蘇秦傳に外は其敵の強弱を料り、内は其士卒の昏不肖を度る、又蜀志に

はかる

吳の孫皓は料りて宮女を出し、以て無裝者に配す、又歐陽脩の文に、善、敵を料る者は必ず情偽の實を揣るとあり、又只數ふる意にも用ふ、兵を料り民を料るの如し、史料、
 【測】は水の深かさをはかること、轉用して物の長さ距離をはかるにも用ひ、又事物の本體を明かにするに用ふ、易經に陰陽は測られず之を神と謂ふ、歐陽脩の文に少しく權要の臣に忤れば、其禍測られずとあり、故に實際に深淺遠近長短をはかるには、必ず測を用ふ、即ち井の深さを測る、山の高さを測るの如し、測量、測度、推量、
 【詢】と【咨】とは略同じ、誠實に道理の疑はしきなほかり問ふに用ふ、咨詢と連用す、

はく、吐、嘔、嘔、哇、咯、

【吐】は急に口外にはき出すをいふ、苦しげなく滑かにはき出すなり、史記に周公一飯に三度嘔を吐くとあり、又唐書房冑傳に辭は華暢を吐くともありて、口より物をはき出す外、辭を吐く、氣を吐くの如く、流暢に言を出すにも用ふ、又月初めて吐くとは、月の急に東山の上に衝き出でたるをいふ、吐哺、吐氣、香吐、吐瀉、吐露、
 【嘔】は一寸氣息塞がり、勢を付けてはくなり、俗語のぶつぶつとはくといふに當る、莊子に嘔けは即ち大なる者は珠の如く、小なる者は霧の如しとあり、又草木に水を注ぐに用ふる如雨露を噴瀟ともいふ、以て其様を知るべし、嘔

水、噴泉、噴烟、噴飯、
 【嘔】は緩かに、且つ滑かに出すにて、俗語のすーつとふき出すといふに當る、嘔より勢なきをいふ、蒙求に饑巴獨り後れて至り、酒を飲み西南に向ひて嘔く、又酒を嘔きて雨と爲すともありて、口に含める液體をふき出すのみに用ふ、理學類編に水を日に背きて嘔けば、暈虹蜺を爲すと、虹蜺は虹なり、此は人々の試むる處なれば、其時のふき方を以てさるとるべし、
 【嘔】は幾度も續けて胃よりはき出すなり、他字とは故意にはき出す意をも含めと、嘔のみは自然にはき出す意、前漢書に中屠嘉血を嘔くとあり、故に血を嘔くとは非常に怒り、又は悲みの餘りに胃より血をはくにて、若し血を吐くと書かば、肺病などにて血を出すなり、嘔吐、
 【哇】と【咯】とは、共に咽喉塞がる如く、物を呑み下すこと能はず、直ちにはき出すこと、孟子に齊の仲子は兄の祿を不義として食はざりしに、母兄の鵠を殺し、伴りて與へしに、兄來りて是れ我が鵠なりといひしかば、仲子は出て、哇きしとあり、是れ口中にある物をはき出したるなり、
 【匣】は物を入るはこ、底ありて四面を圍める物は皆是なり、匣、篋、篋匣の如し、

はじめの始、初、創、首、

【箱】は物を入れて藏め置く蓋あるものをいふ、故に葛行李の如き物も箱なり、即ち匣より一層手入れよき物をいふ、
 【始】は未又は終の反對にて、副詞に始めて、動詞にはじむ、或ははじめ、名詞にはじめと讀む、主に事の上になじむていふ、孟子に始めて節を作る者は、その後無からんかとあり、又是れ王道の始めなりともあり、又詩經の奉風傳に時に秦君始めて車馬あり、故に國人始めて見て之を誇美すとあり、年始、始末、始終、元始、
 【初】は主に時間の上にていふ、禮記にそれ禮の初めは飲食に始まるとあり、これ禮を習ふには、先づ一番に飲食に關する事を始めとすとなり、又左傳に仲子の宮成る將に舞をなさんとし、隱公羽數を衆仲に問ひて其言に従ひ初め六羽を獻じ始めて六羽を用ふと、六羽は舞名なり、六羽は六列なり、是れ最初に六羽の舞をなして始めて六列をなしたり、未だ曾つて六羽を用ひたることなきに、此時川ひ始めたりとの意なり、初年、太初、初對面、初回、初歩、初歩、初學、初心、當初、
 【創】は事を新になし始むること、始より一層力強し、孟子に衆を創め統を垂るとあり、故に創立とは事業を始めて起し立つる意なり、創業、創始、草創、創設、
 【首】一番さきなること、首尾、卷首、

はじめ (漢字用法)

はしる 走、趨、奔、

【走】は目的地を見て其方面に向ひ急にはする有様、道中をいふ、かけ出すこと、にぐるにも用ふ、孟子に甲を棄て兵を曳きて走る、又左傳に預考叔軻を挾みて以て走るとあり、軻は車の轆なり、走入、走夫、競走、走路、脱走、敗走、奔走、
 【趨】は小足に早く歩むことなり、論語に鯉趨りて庭を過ぐと、鯉は孔子の子なり、禮記に先生に道に遇ふ、趨りて進むとあり、又之と與に言はざれば趨りて退くとあり、
 【奔】は目的地明かならずして涼然と逃げ行く、走よりは急なり、側目をふらず走る、こと、又にぐる、又史記に或人太子に謂つて曰く、他國に奔るべし、又左傳に翼侯隨に奔る、大叔出で、共に奔る、出奔すと言はざるは之を離るなりとあり、是れ皆避れ至るなり、奔馬、奔豚、淫奔、奔流、奔命、
 【旌】は竿頭に羽を押し非れたる房の如きものをいふ、廣輿記に天子の旌は高さ九仞、諸侯は七仞、大夫は五仞、士は三仞とありて、周禮の注に由れば、之を門を樹て、其家の譽となすといふ、
 【旗】は今日ののぼりの如きものにて、其れに龍虎を模様にかきたるなり、故に日章のはたは旗字尤も適切なり、國

はしる

旗といふも當れり、

【幟】は軍隊の標旗にして、漢書に趙幟を抜きて漢の赤幟を樹つとあり、其注に長さ一丈五尺にして幅は半分なりとあり、

【施】は吹き流しにて、近頃軍人などを送るに用ふるものは此の類なるべし、心は懸施の如しなごあれば、風の吹く時は翻々として翻るものなり、

はつ 恥、羞、慚、愧、辱、作、赧、慙、愧、

【恥】は、心に從ふ耳の字なれば、深く心にはちて、自ら耳まで赤くなるをいふ、且つ我が身の上を自分の心にて判断し、我缺點を自らはづる意重し、人に對して直接にはづるは意輕し、論語に子貢孔子に士を問ひしに、孔子曰く己を行ふに恥有り、四方に使用して君命を辱しめず、又君子は其言の其行に過ぐるを恥づとあり、又孟子には聲聞(名譽情實)に過ぐるは、君子之を恥づと、皆我が心にて正邪を判断して心に疾しきをいふ、故に中府には恥を知るは勇に近しとあり、耻は俗字なり、廉恥、破廉恥、恥辱、

【羞】は恥より意輕し、史記管仲傳に、鮑叔は能く我が小節に羞ぢずして、功名の天下に顯はれざるを恥づるを知れりと又、孟子に羞惡の心は義の端なりともあり、羞辱、羞恥、

れを主にして、人にはなして聞かざるなり、講話、訓話などに知るべし、

【談】は一つの前後のまとまりたるはなしをなすなり、忠勇美談などいふ意、故に相談といふは正しき意にあらず、話に似て少しく重し、吳越軍談、倭軍談などの如し、

【語】はかたると訓み、相方互に話し合ふこと、故にまとまれることを語すにあらず、

はなはだ 甚、太、孔、酷、痴、

【甚】ははなはだ、又ははなはだしとも用ひて、其用尤も廣し、他の物より一層目立つことをいふ處ならば何處にても用ふ、ひびく、又はキツウの意、第一番又は烈しきといふ意には用ひず、只通常のものより遙かに過きたりといふのみ、太甚、已甚、愈甚、甚哉、

【太】は太極又は太上といふ、第一番此上なしといふ字にて、甚より意強じ、宋玉の賦に美人を形容して、粉を著れば太だ白し、朱を施せば太だ赤しといふも、此上なしとの意なり、

【孔】は甚の古字にて、韻文の外用ひず、

【酷】は甚と同じくはなはたとよむ、惡しき意味か又は餘りに烈しくきびしきに驚き怖るゝ程の處に用ふ、外史に何ぞ左中將に肖たるの酷しきや、酷烈、酷愛、

【痴】は餘り度を過ぎて我が心に堪へ兼ねる程のこと、非常

はなはだ (漢字用法)

【慚】(慚)と同じ恥は我が心を主とするに反し、漸は他より嘲笑せらるべしと思ひて、面目を失ふ事なれば、他の心を主とするなり、孟子に燕人齊に畔きければ、宣王曰く、吾甚だ孟子に慚づと、又色を變する者は其好む者の不正なるを慚づるなりとあり、慚愧、

【愧】は慚より意強くして、決心の意あり、孟子に仰きて天に愧ぢず、俯して人に忤ぢずとあり、又韓退之が孟尙書に與ふる書にも、仰きて天に愧ぢず、俯して人に愧ぢず、内は心に愧ぢずともあり、慚愧、

【辱】は榮の反對にてはづかしめと讀む、外聞の惡しきことなり、恥辱、侮辱、汗辱、屈辱、

【忤】は慚に似たり、我が過失に心付き、忽ち心動き、顔色を赤く變するをいふ、論語に其言誰に忤ぢざれば、則ち之を爲すこと難し、又禮記に容貌は忤づる毋れとあるも、先方の非難を心配して急に心動くをいふなり、

【赧】は忤と同じく、顔面を赤にするをいふ、赧顔、愧赧、
【慙】と【愧】とは慚ちて顔向けの出來ぬこと、又はづかしながら、心には先方を慕はしと思ひ、欣慕せる時にも用ふ、人に對してはづかしながらの時は、慙、愧、慙、愧を用ふべきなり、

はな 話、談、語、

【話】は或事物に就きて、筋道を立て、人にはなすこと、我

なる愉快を痛快などいふ、

はな 早、蚤、夙、疾、速、

【早】は晩の反對にて日の出をいふ、早く行くは朝はやく行くこと、速く行くは、晝夜に關せずはや足に行くことなり、早晚、早朝、早起、

【蚤】は早と音通じ同意義に用ひらる、孟子に蚤起して良人の之く所に從ふとあり、良人は夫なり、

【夙】は早より一層はやくして、未だ夜の明けざる頃をいふ、詩經に、夙に興きて夜に寐ぬとあり、早は一日の内にていひ、夙は多く年月の久しき前といふ時に用ふ、夙に天下を一統するの志ありの如し、夙昔、夙縁、

【疾】はとくと讀み、徐の反對にて、足ばやに行くこと、疾走、疾行、

【速】は遲の反對なり、遲速、速達、快速、

はな 掃、拂、攘、被、

【掃】は靜かに拂づる如くにはくこと、俗にすつとはらふといふに當る、大學の序に洒掃應對とあるも、洒は水を散らすことにて掃は水を散らしたる處の塵を除くこと、禮儀正しくすべき者なる故辭かにはき除くなり、又唐書に淡く蛾眉を掃うて至尊に朝すとあるは、美しく蛾の眉の如くに眉を書きて、天子の前に出づるなり、又雪を掃ふ、地を掃ふ、掃除す等、皆靜かにはき除く意なり、掃

はな

塵

【拂】は急に物を除くこと、鷄の足にて地を掻き拂ふが如きをいふ、俗にはつゝとほらふといふに當る、日常家を掃除するはたきは拂塵、又は拂子とかく、支拂の拂も亦此意なり、拂去、拂拭、拂地、拂撥、

【攘】は此方へ進み来る者を逐ひ除くる意、掃拂の如く一處に靜止せる者を除くにあらす、唐書に寇至れば則ち仁王經を講じて以て之を攘ふとあり、仁王經は佛教の經文の名なり、又尊王攘夷論といふも、夷狄の迫まり来るを逐ひ退くるなり、又盜賊を逐ひ攘ふともいふ、熊郤、攘除、攘誹、擊攘、

【祓】を惡神などを逐ひ攘ふ意にて、祭事の外用ひす、祓除、祓禊、

はるか遙、還

【遙】は遠く隔り離れたるさまにいふ、
【還】は往還と熟字に用ひて、還の反對、遙よりも更にはるかなること、

ひざる帥、率、將

【帥】は智識を以て人の上に立ち、人々を我れに服従せさせて意の如くにひきゆくこと、又はひきたつること、論語

に千帥ゆるに正を以てせば、孰れか敢へて正しからざらんとなり、又今日陸軍にて元帥といふも此の意にて、將率よりも人を心服せしめる意深し、

【率】はひきあふるの意と、したがふ意とあり、帥より弱し、我が身に人々の従ひ来るをひきあふるの意なり、故に心服させるよりも伏従する様に仕向くるなり、左傳に趙盾、趙同曰く、師を率ゐて以て来るは、唯敵を是れ求むとあり、連率、軍率、將率、統率、率先、

【將】は才能を以て、多數の人の先に立ちて人を指揮するをいふ、左傳に子玉は若傲の六卒を以て、中軍を將帥とあり、即ち今日大將中將などいふも、これより來れるなり、將帥、將軍、

ひく引、曳、牽、挽、挽、延、援

【引】は弓偏に従ふ如く、弓をひき張る意より、轉じて引き延ぶ、引き寄す、引き廻す、引きさぐ等の意に用ひらる、又語氣を強くする爲めに用ひらるゝこともあり、史記蘇秦の傳に錐を引きて自ら其股に刺す、又衍義に其喻を引くや深切なりとあり、人を誘ひ行くを誘引といひ、期限を延ばすことを延引といふ、皆我が方へ引きよする意なり、引力、引書、引水、引領、拘引、引用、

【曳】は物をひきづる意にて、他物を伴ひつゝ進み行くなり、歐陽脩の文に僕夫耕を曳きて堂下を過ぐ、又禮記に孔子

ひそかに竊、私、密、潜、陰

【竊】は人目を盗みて知られぬ様に、しのびやかに事を爲すなり、論語に子曰く、述べて作らず、信じて古を好み、竊かに我が老彭に比すと、老彭は殷の賢大夫なり、此處に竊かといはれしは、謙遜のことばなり、又孟子に竊かに負うて逃ぐともあり、竊は竊の俗字なり、竊盜、竊取、竊考、

【私】は公の反對にて、人に知らさず内證にてなすなり、竊より意弱し、孟子に子未だ孔子の徒たることを得ざるも、予私かに諸人を人に善くせりとあり、是れ自分の心中丈けはといふ意なり、私淑、私情、私考、

【密】は人目に觸れぬ處に閉ぢ籠りてなす意、俗にひそく、又こつそりといふに當る、易に機事は密ならざれば則ち成るを害すとあり、密行、

【陰】はかげにする意、陽の反對なり、陰行、其私、

ひく均、等、齊

【均】は度合量目などの差なく等分なるをいふ、平均とは秤にかけ輕重なく、天秤の平なること、衍義に晏子の言は、

蚤く作き、手を負ひ杖を曳きて門に逍遙すとあり、柳子厚の文に裾を名卿の門に曳くともあり、是れ裾をひきつりつゝ行くなり、曳尾、曳柴、曳杖、

【牽】は綱を着けてひき行くなり、牛を牽く、羊を牽くの如し、左傳に申叔曰く、或人言へり牛を牽きて以て人の田を徑にす、而して田主之が牛を奪ふ、牛を牽きて以て徑する者は信に罪あり、之が牛を奪ふ者は罰甚だ重しとあり、天に牽牛星といふ星あるは、牛を牽ける象をなせる星の名なり、又衍義に男は欲を牽きて其剛を失ふとあり、常に我身にひきつくる意なり、

【挽】は力を込めてひくこと、引より強し、弓を挽くは弓を引くより力を入れてひく意あり、又挽回といふは強くひき返すことなり、挽歌、

【輓】は挽と同じ、只車をひく意より、車偏に従ふ、輓今とは近取といふことなり、

【接】は此方へまわること、延、接、
【接】ひきかけて、引き寄すること、接能、
【卑】は主として位のひくき事に用ふれど、崇、高、尊の反對には、すべてに用ひらる、卑下、卑近、
【低】は高の反對なれど、これ亦ひくき意として廣く用ひらる、高低、低廉、

ひびに (漢字用法)

上下均しく常に知るべき所なりとあり、均一、均衡、【等】は差等など用ひ、シナと讀みて段のこと、轉じて全く相類似せる事物をいふ、此の本と彼の本とは、等しき物にて同じものにあらず、又富は王侯に等しとは、富と王侯の如き人爵と差別なきなり、

【齊】は長短なく、一樣に正しく揃ひたること、即物と物との間に差別なき意なり、兵術に二齊射擊などあるは、萬銃一度に發して、恰も一砲の如く差別なきをいふ、齊一、

ひびに單

【單】は複の反對にて、物の相重らむこと、轉じて漸き意に用ふ、單身、單騎、單衣、單脚、

【偏】はひたすら、一筋になど、其の事にのみかたまれる意、片意地の意にも用ふ、偏頗、偏僻、

ひま隙、間、罅

【隙】は物と物との透き間のこと、史記に白駒の隙を過ぐるが若しとあるは此の意なり、それより轉じて交の中惡しきこと、申たがひの義に用ふ、史記に沛公と隙ありと見ゆ、隙を伺ふといふは、事を行ふによき時機をいふ、

【間】は仕事なき間、手すきのこと、間暇、間散、

【罅】は物の割れ目をいふ交の隙のからぬに轉用す、左傳に入豎なければ則ち妖自ら作らずとあり、罅隙、罅端、

ひろし廣、博、濶、寬、弘、汎、

ふむ

九〇

【廣】は狭の反對、障害物なく遠方迄見通すことを得る意なり、轉用して大なる事にも用ふ、中府に君子は徳性を尊び、學問に由りて廣大を致し精微を盡すとあり、廣野、廣原、廣袤、廣大、廣告、廣言、廣博、

【博】は廣と略同じ、善く廣きこと、又巾のひろきこと、中府に諸侯を懐くれば則ち徳の施す所の者博し、而して威の制す所の者廣しとあり、博聞、博識、博愛、博學、博文、博原、博士、博覽、

【濶】は物の双方に限りあれど、其間のひろきことをいふ、ひろさといふ時には此の字を用ふ、詩に潮は平かにして兩岸濶しとあり、廣濶、

【寬】は物を内に容るゝに充分なる間あるをいふ、如何なる事にも怒らぬ人を寬人又寬大といふは、人の過失侮辱など怒る迄に未だ空處多らず、怒るに足らぬこととするなり、

【弘】は廣大なることなれども、物に就きていはす、事に就きて多く押しひろむる意に用ひらる、論語に人能く道を弘む、道の人を弘むるにあらずとあり、弘道、

【汎】はひろくて深からぬこと、汎論、汎愛、衆、

ふむ合、銜、哺、

ことなり、禮記に吾れ端冕にして古樂を頌げば、則唯臥するを恐るとあり、故に人の寢處にてれることは、伏すにあらずして臥すなり、臥薪、臥龍、臥虎、坐臥、

ふせぐ防、禦、拒、

【防】は後日の出來事を豫想し、其時の用意を豫めなし置くこと、用心なり、擇言解に水を導きて防がざれば反つて患となる、又術義には人主たるものは常に未萌の欲を防ぐべしとあり、又豫防、防備とも用ふるは、皆將來の憂に先ちて用心する意、堤防、防風劑、防寒草、防瘴具、防臭、

【禦】は目前の事に差當りて備へふせぐこと、通鑑綱目に未だ言れ其義を防ぎ侮を禦ぐの謀を見すと又鶴林玉露に南方の人には檣櫓を以て茶に代へ、以て瘴を禦ぐと謂ふとあり、敵を禦ぐとは今眼前に迫り來れる敵に對してふせぐこと、敵を防ぐとは敵の後日攻め來るを豫想して備をなす意なり、寇を禦ぐ、災を禦ぐも防より急なり、防禦、

【拒】はこぼとも讀みて、近邊まで來りし者をも、近く我身に寄せ付けぬ意なり、孟子に邪説を息め、敵行を拒ぐと、又來る者は距かずともあり、距は拒と同意義なり、距否、距絶、

ふむ踏、踏、踐、履、躡、蹠、

【踏】は通常歩むやうに地をふむこと、又ふみつくる意あり、

【含】は口中へ物の全體を入ることなれど、たゞふくむこととに用ひらる、含著、含嗽、

【銜】は口にくはふること、枚を銜むとは口に紙をくはへて聲を擧げぬ様にするなり、

【哺】はく、むこと、水又は食物などの口中にあるをいふ、周公三度哺を吐くの如し、

ふま俯、伏、臥、

【俯】は仰の反對にて、頭を下方にさぐることを、うつむくといふ、禮記に俯仰屈伸を習へば容儀莊を得と、又孟子に仰いて天に愧ずす俯して人に忤むざるは二樂なりとあり、俯向、俯臨、俯視、

【伏】は起の反對にて、身體を地上に横へ、先の者に見付けられぬ様に隠るゝ意、身を地面に向けて横ふる意より、先方を極めて畏敬する時、地に伏すと轉用せらる、詩經に潜みて伏すと雖も、亦甚だ之を昭せりと、又史記に郷の群臣曰く、必ず此の如くんば、吾れ將に劍に伏して死せんとすとあり、劍を地に立て、之に伏し咽をつくなり、又今日兵術に於て伏射といふも此意なり、又拜伏等は先方を畏敬し、身を伏する意にて隠るゝにあらず、敬伏、隱伏、伏誨、伏從、伏匿、伏兵、伏線、潛伏、起伏、畏伏、

【臥】は坐に對する字にて身體を横にすること、又伏は面を地に向くることなれど、臥は横又は上に向けて横たはる

ふむ (漢字用法)

ふせぐ

九一

【踏】は玉篇に足地に著くこととありて、軽く故意に足拍子を取るなり、故に踏歌といひ踏鞠といふ、又西洋の踊りの會を舞踏會と釋するは誤にて、舞踏會とかくべきなり、

【踐】は前の事物の形跡を其通りに固くふみ付け、其處に止まる意にて、俗にふまへて居るといふこと、論語の注に其言を踐まんと欲すれば、豈難からざらんやと、又信は義に近く、言は踐むべきなりと、又周公は天子の位を踐むなど皆同じ、言を踐むは、其言の通りに實際に行ふこと、天子の位を踐むは、先祖の天子の位に居られし通りにすること、又天子の位に即くを踐祚といふ、祚は位なり、躬行實踐、

【履】は踐の如くにふまへて一處に居るにあらず、ふみながら進みあること、易に霜を履みて堅氷至ると、又虎の尾を履むが如し、或は射ら節儉を履むと晉書にもあり、履歷書といふも世に生活する道を歩む如く見做し、其一步づゝ履み來りし有様を書きたる物との意、履行、履徳、【蹠】はふみつけ置きて先へ行き去る意、又先方の後をつけ行く意、史記に足は行伍の間を蹠む、又張良漢王の足を

文とはいふべからず、古詩古文は昔の人の作の意なればなり、舊曆、舊幕時代、舊大臣、舊年、舊詩、舊家、守舊、【陳】は新に對し、年月経て悪しくなるをいふ、史記に太倉の粟は陳々として相因るとあり、太倉は穀倉なり、陳々は幾年も官庫に入れし儘にて手を付けざれば、變色して悪臭を生ずるをいふ、又陳米陳倉米などいふも同じくひね米なり、陳粟、陳腐、陳言、陳登、

【故】は舊、陳と略同じく新の反對に用ひ舊に近し、論語に故を温め新しきを知らば、以て師と爲すべしとあり、新しき事のみを驅らるることなく、舊くなりたる事をもよく心に留めて温習すべしとなり、古人といへば昔の人のこと、故人といふは年久しく交れる人をいふ、漢書に嚴子陵は光武の故人なりとあり、又故某々といふ、故は物故をいふ、死したる人をいふ、されば久しき前の物、又は使用してふるくなしたるには古を用ひ、又新に改めずして長く存せるには舊を用ひ、又以前より緣因ありてふるきには故を用ふべし、生れし地を故郷といふも、緣因ありて慕はしき意、若し孤郷とかかは只新郷に對していふのみ、東京の人京都に行きて住すること二年、さらに大坂に行きて住する時は、京都は舊郷なり、故郷にあらず、昔の郷にもあらず、又住みふるしたる郷にもあらざればなり、楚辭招魂に故居に反るとあるも緣因ありて慕し

【踏む】とあるが如し、【蹠】と【跣】とは俱にふみにじること、又ふみちらす意、蹠と連用す、

【古】は今に對し、時に關して久しき以前をいふ、書經に爰に古の帝堯を稽ふるにとあり、稽は考なり、又詩經に古人を思ふとあるは近頃の人にあらずして昔の人といふ意、又古器古物といふは、昔存在したる器物、又今出來の物にても昔の物の如くなれば、形容して古朴古雅など用ふ、古跡、古代、古聖、古賢、古訓、古者、古字、古文、古城、古記、古往、古賦、古詩、古來、復古、上古、太古、萬古、

【舊】は新に反對にて、事物の順序に關し多く月日を経過したるをいふ、論語に伯夷叔齊は舊惡を念はずとあり、已に過ぎ去りたる以前の惡事を念はずとの意、又左傳に晉侯之を思ふ、與人の語を聽くに曰く、原田毎々たり、其舊を捨て、其新を是れ謀れとあり、原田は大なる曠野、毎々は草の繁茂せる様、晉侯の徳の大なるを頌するなり、其舊きを惠を顧みることなく、楚子と戰をなし、新なる功を立つべきをいふ、又詩經に其新は孔だ嘉し、其舊は之を如何とあり、孔は甚なり、此等皆以前といふ意、自分の幼少の折作りし詩文を、舊詩舊文といふべきも、古詩古

き意あり、故因、故事、故國、故實、故者、故舊、ふるふ、奮、震、振、揮、

【奮】は俗に奮の字を用ひ、頭をふり立て、勢よく勇み進むこと、馬の立て鬣をふりて猛く進み出づる様なり、易に雷は地を出て、奮ふ、又柳子厚の文に幸に天子近臣の爲めに其舌を奮ふを得ん、又漢書に龍は靈徳を奮ひて蒼生を溥すとあり、蒼生は萬民なり、又極めて速かなるを奮迅といひ、氣を張りて事を爲すを奮發といふも、皆勢よく進みてなす意なり、奮進、奮闘、奮戰、奮起、

【震】は雷聲の轟き渡りて大地を動かす意、物の中心よりふるみ動くこと、春秋に地震ふとあるは、地震にて地の中心より揺り動くなり、又唐書に一度其心を奮は、名は四方を震はさんとあるは、人心を慄きふるはしむる意なり、又震怒といふ時は、烈しく怒りて身體も靜かならざるをいふ、震動、震起、

【振】は震に似て意緩し、荷子に新に浴せし者は其衣を振ふとあり、俗にはたゞふるふこと、又歐陽脩の文に唐の太宗の威は夷狄に振ふとあるも、震の如く人をして心中より伏せしむる程に勢強きに非らず、寧ろ偉大なりと嘆賞する氣味あり、又行義に譽望益々振ふとありて、震の如く強からず、又書を振ふとは書物をふるひて塵を落す意、振動、振怖、振揮、振起、振氣、振作、

【揮】は振よりも弱く、且つ小き物を手に持て、ふるること、俗にちよいといふに當る。毫を揮ふ、手を揮ふの如し、王粲の詩に涕泣揮ふべからずとあり、扇を使ふにも揮扇といふ。

くたひ(くたひる) 隔、阻、

【隔】重の立つ意、間に物の入ること、相距ること遠ざかることといふ、隔年、隔離、間隔、隔絶。
【阻】は道路山川などのへだたる義、嶮阻、山阻などの如し、轉じては諫を阻つた、寒き止むる意にも用ふ。

くたひ(くたひる) 諂、佞、

【諂】は利のために人の氣を取らんとして、心にも無きことないひ、流從し媚を呈すること、諂諛。
【佞】は諂に同じ、而諛、阿諛。
【佞】は先方の氣心を知りて喜ばず様に甘くいひまはすと、奸佞、佞者。

ほ

ほ(ほ) 誇、矜、伐、

【誇】は實際の事物よりも大きく言ひひろげ自慢すること、仰山にいふ意、誇大、誇稱。

【矜】は自ら我が身の賢きを高ぶり語ること、書經に、汝惟矜らず、天下汝と能を争ふものなしとあり、矜伐、
【伐】は我が功を語ることを、即ちてがら自慢なり、

ほ(ほ) 縦、横、放、肆、恣、擅、

【縦】は欲する事を自由自在に爲す意、擇言解に言を縦にして慎まざれば反つて禍ありと、又術義には自ら克つ功は少くして、自ら縦にする功は多し、又論語の注に縦は限量を爲さざるなりとあり、放縱、縱覽、縱選、縱橫、恣縱、
【横】は欲する事の理不慮を顧みず、無理に實行する意、縦には無理にも自由にするといふ強き意なし、紙なども縦には容易に裂き得るも、横には力を用ひても正しく破れざるが如し、通鑑綱目に初め租庸調の法定されり、横に調歛あるを得ずとあり、調歛は税金の過多をいふ、又韓退之の文に縦横ありとあり、横歛、横集、專横、擗行、

【放】は羈の反對にて縛されず、事物に拘泥せぬこと、善惡兩意あり、放逸、放恣などは、惡意にて、俗にやりばなし、又は我儘勝手の意、豪放曠放などは、膽力の大にして利慾法則などに注意せぬをいふ、故に多く己人の上に用ふ、縦は緩の意なり、禮記に放に流歛する毋れとあり、歌は飲なり、放縱、放蕩、放逸、放游、放談、放論、放心、
【肆】は力極めて自由自在にする意強し、韓退之の文に揚靈

ほ(ほ) 邊、側、畔、瀕、

【邊】は周邊の如く、物のふち、又は水邊の如く、きはをいふを本義とす、邊鄙、邊境などは、轉じて片よりたる意に用ひしなり、

【側】は片わき程近き意、ソバといふに同じ、君側を清むといふは主君の侍者の御側さうね悪しきものを去ること、
【畔】は河の畔など用ふれど、元來は田界のクワをいふ、夫より邊の意に轉用す、

【瀕】は水のほとりなり、

ほ(ほ) 褒、譽、美、賞、讚、贊、頌、稱、

【褒】は貶の反對、衣に従ふ字なれば、人の目に立つ様に物品を與へ、若くは言葉にて其功德をほむること、左傳に春秋は一字を以て褒貶すと、又揚れや字を稱して之を褒むるやとあり、褒は俗字にて本字褒なり、褒美、褒貶、褒賞、褒狀、褒大、

【譽】は毀の反對にて譽に従ふ言の字、言葉にて人の徳を過分にほむる意、莊子に好みて面のあたりに人をほむる者は、好みて背面に之を毀るとあり、又論語に吾の人に於けるや誰をか毀らん、誰をか譽めんと、又孟子に不虞の

譽あれば求士の毀ありとあり、過分といふことに注意すべし、榮譽、美譽、名譽、毀譽、聲譽、

【美】は刺の反對、功徳を心より好みて美とする事、公羊傳に魯人以て美談となすとあり、又詩經に甘棠の詩は召伯を美むるなりとあり、美譽、美名、賞美、嘆美、稱美、

【賞】は功徳を慕ひ、又は獎勵する爲めに物品を贈る意、罰に對す、賞賚、賞嘆、賞詞、賞狀、賞品、賞罰、賞與、賞典、

【讚】と【贊】とは共に隠れたる徳を世人に知らしむるなり、贊詞、讚美、讚美歌、

【頌】は其功徳をほめて文字に書き記し、世人に見する意、故に頌徳碑などいふ、

【稱】はもてはやし慕ふ意、論語に君子は世を没して名の稱せられざるを疾むとあり、

ほろぼす(ほろぼす) 滅、亡、

【滅】は事物の其處にて其儘にあとかたもなく消ゆ失する事、火のきゆることを滅といふ、韓退之の文に、古の聖人なくんば、人の類滅すること久しからんとあり、故に消の意ありて消滅と連用す、討滅、滅亡、寂滅、破滅、泯滅、

【亡】は無と同じく、有又は存の反對にて、あるものなくなる意、時としては全く消ゆ失せたる意にも用ふれども、滅の如く強からず、李文叔の文に、名園は唐と共に滅び

て俱に亡び餘すところなしとあり、滅は全く消ゆ失せてあとかたもなくなりしこと、亡は其處に存せずとの意、逃げ隠るゝを逃亡といひ、死去して此世に居らぬことを死亡といふ、身亡、滅亡、存亡、敗亡、未亡人、

まこと(まこと) 誠、信、真、固、實、

【誠】は偽の反對、中庸に誠は天の道なりとあるが如く、人間が便宜の善き様に勝手に作り爲すことの反對なり、大學に心を正しくせんと欲する者は先づ其心を誠にし、又は智至りて后意誠なり、又天の誠、聖人の誠なきあり、韓退之の文に豈誠に味より旨からんやとありて、少しもつくるはぬこと、誠實、誠心、誠意、至誠、忠誠、

【信】は本来論語に朋友と交りて言つて信ありの如く、言葉に就て違ひたることなき意なるを以て、全く其の通りならばと前の言を受けて確むる意なり、易經に其遷依する處を失へば信に不可かとあり、故に信は前の事を受けて其通り全くとの意にて、誠は實際に全くとの意、前を指す意なし、されば誠は句の始めに用ひらるれども、信は始めには置かれず、信義、信實、

【真】は偽の反對にて誠より意強し、韓退之の文に嗚呼其れ真に馬なきか、其れ真に馬を識らざるかとあり、史記に

中のこと、時の上にては今現在ののこと、又は最も時の差しせまりし事にいふ意極めて強し、方今、方且、方將、方當、

【將】は既に既の反對、今少し時を経れば、オウツケ、ヤカテナといふ意なり、將に門に入らんとすとは、今少し時が過ぎば、門に入らんとして居るの意なり、且將、必將、將必、行將、

【且】は將と同じく、今少し時を経ればの意なれど、將よりは急にして意もつよし、史記に孫武愛也を且に斬らんとするを見て、王大に駭くとあるは、今少しにて刀が姫の頭に達せんとする一刹那のことなり、

【増】は減の反對にて一通りある事物の上に、更に積み重ね多くする意なり、史記に、月口歳に増すとあり、増收といふは一通りの收入ある外に更に多く重ねて取り入ることなり、増俸、増給、増加、増兵、増員、増額、増益、増水、

【益】は損の反對にて、利益ある機に次第に増し加ふること、即ち音にてゆきと讀み、利益純益といふ意なり、通鑑綱目に初め世祖權茶司を置き、以て其税を徵す、今復増して之を益すとありて、利益にする意なり、

【滋】はますくともよみ音、雜草などの空虚なく多く繁り

此れ眞に將軍なりとありて、誠は人の心又は其行ふ事に就きていひ、眞は物の實に就きていふなり、天真爛漫、眞實、

【固】はもとよりと讀む字にて先方の語を受けて如何にも其通りなりとの意なり、韓退之の文に、雲は固に龍より靈ならずとあり、又孟子に天下は固に齊の強きを畏るゝなり、又固に願ふ處なりとある、皆先方の言を受けて實に本来其通りといふ意なり、

【實】は虚の反對、信實なること、篤實、實績、實地、

【正】は其物の有るべき場所正しく眞向きにある意にて邪ならぬ意を含む、故に時の上に關せず、道理の上にて正邪の判斷を含むなり、史記に秦の暴行を正に天下に告ぐとあるは、正々堂々として天下に報じて、之を譬さんとする意なり、

【當】はまさにと讀むときは、正に似て道理の上にていふことなれど、又未來の意をも含めり、當然斯くある筈との義、故に此くするが道理にかなふといふ時に用ふ、當に彼を歸らしむべしとは、彼をば歸らするが當然のことなり、歸らするがよきなりとの意、されど未來の意は極めて弱し、

【方】は眞盛りなる時をいふ、今方に戰酣なりとは、激戦最

生ずる意、ふゆること悪しきこと、の次第に多くなるをいふ、孟子に弟子の惑は滋々甚しとあり、又日に益し、歳に滋すなどありて、略同意に用ひらるれど、益より根強く多くなる意、はびこる意味あり。

また又、亦、復、

【又】は其外また、其上またの義にて、相似たることを幾度も重ぬること、余は去年大坂に行き、今年又京都に行かんとすとは、去年大坂に行きたる旅行に似たる事なるが、今年又京都に行かうとの意、又は今年或は京都といふ名詞にかゝらず、今年京都に行くといふ一事と、去年大坂に行きたる事との二文を結び付くる意もあり、余は本を讀み、君は字を習ひ、彼は又数学をなせりと、此の三文を連結せるなり。

【亦】はもまたといふ字にて、名詞と名詞との關係をいふ字、文と文との關係にあらず、此事も亦といふ如く、事と明かに名詞として表はしたる時は、これをも用ふることもあり、余本を讀めば、君も亦本をよむとは、君と余との關係にて、余が本を讀むといふ事と君が本を讀むといふ事との關係にあらず、史記に功あるも亦誅せられ、無きも亦誅せらるとは、者といふ字を略したるなり、又同類の名詞を重ぬる時は、初めより亦を用ふることあり、論語に友あり遠方より來る、亦樂しからずやとあり、

またし全、完、

【全】は我が思ふ十分に、事物の足り具はりて殘るところなき意なり、史記に社稷を全くして劉氏の後を定むとあり、又禮記には、交を全くすとありて意強し、又多數の物の皆揃ひたるは全なり、即ち本居宣長全集といひ、全部出版などいひ、又一團の人皆養成するをば全體養成すといふが如し、全勝、全力、全文、全盛、全美、全篇、全圖、全部、全市、全世界、全家、全軍、全滅、全愈、全治、全能、全般、互全、全體、

【完】は思ふ充分にはあらねども、先づ不足する、となく缺くるところなきをいふ、史記に子弟の立つべき者を探ひて之を立て、以て諸侯に贈せば、則ち家室完からん、然らずんば父子俱に居りて爲すなきなり、又父兄子弟を完くする能はずとあり、又歐陽脩の王彦章傳に、百餘年なり、之を完くし復百年なるべし、又予其壞を見るに恐びざるに、備既に全し、因て予が得る所の者の後に書して之を藏せしむとあり、是皆思ふ十分といふ強き意にあらずして、先づ舊體を破らざる限りに於て不足な

【復】は同じ事を二度する時にいふ語にて、吾復孟子を讀むとは、前に一度讀みて今は二度目なることなり、亦是主動者たる名詞異なりしに、此の復は、其主動者は同一にて、一度なしたることを繰り返すことなり、此三字を互に比較すれば、彼は又本を讀むとは、前に外の學科を勉強せし意にて、彼も亦本を讀むは、他の人が本を讀めることに比べていふ意、彼は復本を讀むは前にも本を讀みて、此度も亦本を讀むことをいふなり、復習、復歸、復還、又復、且復、

また待、俟、

【待】は確かに來る人、又は起るべき事などをまつ意、易經に君子は身を藏し、時を待ちて動くとあり、又左傳に吳王乘轅を改めて而して管に次りて晉軍を待つとあり、管は地名なり、次は野營なり、又君三たび伏兵を爲して、敵の來るを待てとありて、皆將に來らんとする者をまつことなり、接待、待遇、期待、

【俟】は其來る事物の何時なるか、又果して來るや否や疑しき時、又は自然に來るをまつ時に用ふ、柳宗元捕蛇者説に此説を作りて以て夫の人風を觀る者を得るを俟つとあり、中庸には君子は易きに居て以て命を俟つ又百世以て聖人を俟ちて惑はざるは人を知るなりとあり、是其人風を觀る者、又百世の後の聖人は、其來ること極めて漠然た

また祭、祀、祠、

【祭】は時を定めて神をまつるをいふ、禮記に天子は天地を祭り、諸侯は社稷を祭り、大夫は五祀を祭り、天子は天下の名山大川を祭るとあり、是皆年に何度祭をなすべく、春は何時、秋は何時と毎年定めてまつる意なり、又春夏秋冬の四時まつりをなすを時祭といひ、春のまつりを春祭といふにて知るべし、祭禮祭日も亦然り、祭式、祭典、【祀】は定まりたるまつり、其時に應じて神靈を安んずる爲めに式を擧げてまつる意なり、

【祠】は社を建て神體を其内に安置してまつる意なり、詩經に烝嘗を祠るとあり、烝は秋の祭なり、嘗は冬の祭なり、故に時日を定めて其を主とする時は祭といふ、神武天皇祭、春季皇靈祭の如し、又祀は或場合に會して儀式を盛にしてまつる時に用ふ、即ち某戦死者の靈を祀るの如し、

るべき目的地をも含有し、路は只道の一部分をいへるに
て、其目的地の意味せず、例へば東海道といふは江戸よ
り京都に到るみち、中仙道といふも亦同じ、即ち兩地間
を通づる者は道にて、其行くべき地點必ず定まれり、故
に古來德行上の規律を正しくするに道を用ふ、路は道の
内にて殊に必要なる地點のみを意味し、且道に比しては、
小さきみちをいふ、即ち路傍の棧といひて、道傍の棧と
いはざるは、其棧のある處は、只道の或一處なればなり、
又路上の大石といひて、道上の石といはざるも、此地よ
り彼の地に到る間、一面に大石あるにあらざればなり、路
はもと街道筋の意なれば、轉用して、人の行く末を末路
といひ、人の世渡りを世路といふ、大路とは長き道にあ
らず、中廣き路なり、小路は巾狭き路にて行く先遠き
を意味するに非らず、路頭、小路、大路、行路難、路傍
、源路、

【途】は小道なり、論語に道遠途説とありて、途と途とは同
音同義なり、又兩地間の道を歩行する時間の上に用ひら
れ、又轉用して凡て事の始終の間をいふ、史記に晏子出
て之と途に遭ふとあるは、道の大小にあらずして其間
にての意、又事を中途にして止むといふも只其間にてと
いふに異ならず、故に中途にて人に會せしは、途か又は
路を用ふべくして道を用ふべきにあらず、又遠きみちの
込めて一杯になること、故に多く充實と重用す、

【盈】は縮又は虧の反對にて、漸々に満ちて溢るる意あり、
易經に損益盈虚時と偕に行ふ、又詩經に卷耳を采り來る、
筐に盈たす、又維に鶴巢ありて維に鳩之を盈たす、又孟
子に富の爲めに強ひて戦ひ、地を争ひて以て戦ひ、人を
殺し野に盈ち、城を争ひて戦ひ、人を殺して城に盈つと
ありて、満と盈との差は、満はみつること主として溢
る、程にみつるにて、盈は漸々にみちて終に溢るゝに至
るなり、盈満、盈虚、

みづから親、自、躬、

【親】はしたしくと訓みて、身體はいふまでもなく、心よりし
たしくする意なり、禮記に立春の日、天子親ら三公九卿
諸侯大夫を帥めて春を東郊に迎ふとあり、使者代理にて
も濟むべきを自身に出でて當るをいふ、資治通鑑に李愬
親ら行きて士卒を見る、又孟子に親ら堅を被り銳を執る
ともあり、親掖、親閱、親任、親展、

【自】は他に對する字にて、自身にの意他の指揮を待たず、我
が手にてすること、孟子に一人の身にして百工の爲す所
備り、如し必ず自ら爲して而して後に之を用ふれば、是
れ天下を率ゐて路するなりとあり、親は他に對するにあ
ら下身みづからの意、例へば繪畫を自ら見るとは他人に
指圖せられずして自分より畫を見ること、親ら繪畫を見

時は道を用ひ、他の字を用ふべからず、されば道は塗路
と異なり長く續く者なれば、堯舜の道、大學の道と用ひ、
道は大路の如く然りなご、用ふ、

みづ 満、充、實、盈、

【満】は有形無形に拘らず、凡て物一杯になる意にて缺の反
對なり、酒杯に満つ、正大の氣天地の間に満つ、又月の
圓くなりたるを満月といひ、自滿すといふも自ら才藝に
満ちたれりとする意なり、満潮、圓滿、滿杯、滿山、滿
面、滿場、滿開、滿腔、滿身、滿招損謙受益、

【充】は物を一々押し込めて空處なき意なり、歐陽脩の文に、
行内に充たざれば、徳人に備らず、又衍義に、理義日に
充つ、其れ堯舜を去る遠からずとあり、又みたすの意に
て、缺の反對なり、員を充たすとは缺員のありたる位置
に入り込むなり、故に満は自然の意ありて弱けれど、充
は強ひて一杯にする意にて強し、満員とは乗客の漸々に
來りて満ちたるにて、充員とは其空きたる地位を充たす
意なり、充満、充實、充大、補充、

【實】は物に一杯入りて確乎とせる意、溢るゝ意なし、虚の
反對なり、史記に萬民に親みて府庫を實たす、又隋書に
煬帝は嘉禾異草を求めて以て園苑に實たす、又歐陽脩の
文に飯を以て酒屬に實たして食すとあり、皆確乎と押し

るとは、人に見させて濟むべきを自ら臨みて親しく視
る意なり、故に更に換言せば、自は他人に對し、親は代
理させぬ意なり、

みな 皆、咸、

【皆】は皆無、悉皆など用ひて、ある限り残らず悉くの意、
【咸】は皆に同じ天下咸服、又は咸其の徳を一にするの如
く廣大なるに用ふ、

みる 視、見、看、觀、覽、瞻、視、觀、

【視】は物に近寄り注意し心をとめてみる事、此方にて充
分みんと思ふ用意あるなり、故に目の本分は視にて、耳
の本分の聽に對す、孟子に君の臣を視ること手足の如く
なれば、則ち臣の君を視る腹心の如し、又文王民を視る
こと傷むが如し、又大學に十目の視る所、十手の指す所、
其れ嚴なるかなとあり、是れ皆我が心を主とせる働きな
り、蔑視、輕視、直視、邪視、正視、熱視、近視、遠
視、視、視聽、視察、

【見】は現と同意に、あらはると用ひらるることあり、此方
より注意して視るに非らず、先方の物の自然に此方の眼
にみゆる意なり、故に視を能動詞とすれば、見は所動詞
なり、されば只見るとあるも、其主たる働きは先方にあ

りて、此方には彼がみわたるればよいと望む意なり、易經に飛龍天にあり大人を見るに利あり、又孟子に孟子梁の恵王に見ゆ、又論語に陽貨孔子に見ねんと欲す、孔子見ゆすとある等、皆見ることを得るや否やは先方に由て決せらるゝにて、先方が主にて我は客なり又大學に心此處にあらざれば、視れども見ゆず、又小人は人の己を視ること其肺肝を見るが如し、又衍義に公卿王鳳を見る、目を側て、視るとあり、見聞、見識、陰見、望見、卓見、瞻見、拜見、

【看】は目の上に手を擧げてみつむるといふ字、心に思案して熟々みる意なり、書を看る、山を看る、看守、看瘡の如き、皆注意したる上に、彼れ此れと思案する意なり、看護、看護婦、看疾、看相者、看守、看破、

【觀】は傍にて或事物を見物する意、又考へ察しくはしく見る意あり、左傳隱公府に棠に如き魚者を觀んとす、又禮記に觀者は堵牆の如し、史記に孫子王に報せしめて曰く、王試みに下りて之を觀るべし、又術を觀る、海を觀るの類、皆見物の意、易に大觀は上にあり順にして巽なり、論語に父在せば其志を觀る、又周公の美才あるも驕奢の人は其餘を觀るに足らずとあるは思ひ察する意なり、又史記に嬰、壘上より觀るに、且に王の愛姫を吳子の斬らんとするを見て大に駭くと、これにて觀見の意明ならん、觀

梅、觀客、觀賞、壯觀、主觀、洞觀、

【覽】は本字、俗に覧と書く、見物する意ありて觀に似たれど、觀よりも目を留めてみる意深し、又視の意に用ふることもあり、多く天子に就いて用ふ、漢書に聖上古今を覽ると、又衍義には唐の太宗明堂射雉圖を覽るとあり、熟語には觀の意に用ひしものあり、天覽、御覽、聖覽、上覽、博覽、觀覽、遊覽、一覽、周覽、

【瞻】は仰ぎ視ること、又首をさし伸ばして視る意なり、詩經に瞻望するも及ばず、又彼の日月を瞻るともあり、故に手紙などに瞻仰又は、瞻望と用ふるは先方を尊みて上に居る人として仰ぎ視る意なり、

【觀】と【觀】とは、見に同じ、

む

むかふ、向、迎、邀、

【向】は背の反對、めあての方へ真正面に打ちむかふ事、莊子に洋を望み、若に向ひて嘆すとあり、若は海神をいふ、又むけるといふ時には必ず此字を用ふ、

【迎】は先方より來るに先きだち、此方より出でむかふること、送の反對なり、中庸に往くを送り來るを迎ふ、史記に城門を開きて迎ふとあり、物にききたちて動くことなり、歡迎、

【邀】は要と同じく、先方より來るものを、強ひて途中に遮り出でむかふる意、隋書に煬帝東都に幸し、梁郡に至れば、郡人駕を邀へて上言すとあり、又李白の詩に杯を擧げて明月を邀ふともあり、戰爭にて敵の攻め來るを待ちまうけて戦ふを邀撃、又要撃といふ、

むくの報、酬、讐、

【報】と酬とは、同一に用ひらるれど、報は恰も人に問はれたることに對し、是非を答ふるが如く、其時に際し我が欲する事を自由にむくゆる意なり、詩經には我れ木瓜を得て之に報ゆるに瓊瑤を以てすとあり、瓊瑤は俱に玉なり、又論語には直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆとあり、又孟子に幣を以て交る、之を以て報いすとあり、報徳、報恩、

【酬】は本來宴會にて、主人より杯を客に返すこと、轉じて一般にむくゆることに用ふれど、尙先方より受けし通りに返しむくゆる意なり、善を以て善に酬い、直を以て直に酬い、怨を以て怨に酬ゆる等の如し、報の如く、直を以て怨に酬ゆる例なし、報酬、酬杯、

【讐】は先方より受けしものを其通りに返すこと、善意に用ふることに少し、禮記に言は讐いざるなく、徳は報いざるなしとあり、復讐、相讐、讐敵、仇讐、

むすぶ結、締、

【結】は目

むなし空、虚、曠、

【空】は有の反對、中に全く物のなき意、からのこと、昭烈記に吳蜀を攻めて、先づ一營を攻めしに利あらず、諸將曰く、空しく敵に殺さるゝのみとありて、確乎たる圍み處なき意なり、空山空論といふも、山の形ありて良材なく、雄辯流水の如しと雖も、其内に一つの確乎たる論據なきなり、外形は存するも眞體なきなり、空器、空中、空理、空言、空宅、太空、長空、空拳、

【虚】は實に對し、眞實ならぬこと、又空は物の全くなき意なれども、虚は少し意弱くして、多少ありても、中のすきて一杯につまらざることなり、左傳の序に鱗出づるも其時に非らざれば、其應を虚しくして其歸を失ふ、又歐陽格の文に號令は虚しく出さすとあり、故に空論といはば實際に應用し難き論にて、虚論といはば偽りの論なり、又空器とは何もなきにて、虚器といはば全く何か多少ある意なり、又空宅とはいふべきも虚宅とはいふべからず、虚字、虚症、虚心、太虚、虚空、虚實、

【締】は目をあたにつひやすこと、曠日彌久、

め

めぐる 繞、環、巡、周、旋、回、廻、運、

【繞】は葛又蔓草などの木に巻き付く如く、確乎と物に付き沿ひ、物のまはりめぐりまはること、宋史に宋主太子を廢せんと欲し、徐湛之と人を屏けて語る、湛之自ら燭を乗りて壁を繞りて檢行すとあり、是れ巻きつく如く壁に沿うて上下を視ながら注意してまはるなり、纏繞、圍繞、

【環】はまほりを取りまきて輪をなすこと、衍義に四方より幅濶し、内に面して之を環觀すとあり、又韓退之の文に今環寇の師、殆ん且に十萬ならん、又史記に荆軻秦王を刺さんとす、王柱を環りて走り、群臣皆愕くとあり、是れ其極めて速かに輪をなして走れるなり、又歐陽脩の醉翁亭の記に滁を環る皆山なりとあり、故に環堵とも用ふ、環視、

【巡】は事物に注意して視まはること、孟子に天子の諸侯に適くを巡狩といひ、巡狩は守る所を巡るなりとあり、巡守、巡視、巡行、巡行、巡視、巡視、巡視、

【周】は物のまほりを隅から隅まで一とめぐりすること、禮記に棺は衣を周り、梓は棺を周り、土は梓を周るとあり、

めぐる

是れ其衣の上下四方を取り圍みて普き意なり、周圍といふは物のめぐりなり、周圍、周遊、周行、周覽、

【旋】は物の轉すること、又は中心を作りて幾度もまはる意、旅風といひ、旋轉といふが如し、羅旋、旋行、

【回】は元來水の渦巻くをいふ、旋の如く幾度もまはることながら、回は同じ道を幾度も通る意、又は物をぐるりとまはすことなり、説文の注に、滄天の氣は天地相承く、天は地外を周り、陰陽五行は其中に回轉すとあり、又唐書に魏徵は善く人主の意を回らすとあり、又荀子には天下を掌上に廻すとありて、(廻)は回と同じ、又人主の意を回らす、天下を廻らす、事を廻らす等は今迄とは、全く異なる方向へぐるりとまはす意なり、回天動地、回轉、回風、回想、回恩、回又、回願、回答、廻幸、回春、回生、回波、回復、

【運】は移りつゝ進み行く意、絶えず次より次へ轉じ行くなり、易經に日月運行すと、又書經に帝徳廣く運るとあり、又四時運行すと用ふ、是れ日月の今の今日の月は、直ちに去りて又次の日次の月と追々に來りて絶えず、又四時の變化も春過ぎて夏來り、秋去りて冬至る如く、皆次へ次へと移りつゝ進むなり、天運といふも之に同じ、運命、世運、運轉、氣運、

も

もつとも 尤、最、

【尤】は事の上にて一等抜き出でて優れたるをいふ、はなはだとも、ことごとく訓じ、目立つ意あり、

【最】は或種類のもの、衆き内にて一番といふ意、最は他に比較していふ意なれど、尤は比較することなく、只甚だと感ずる時にいふ意なり、韓退之の文に惟ふに回鶻は唐に最も親し、職を奉ずる尤も謹むとあるは、回鶻が唐に親むことは、他の諸侯に比べて見るに一番親しく、又職務を奉ずる點に於ては比較すべき國はなき程に謹んで居るといふ意なり、最初、最近、最上、最多、最中、最下、最少、最大、最末、最終、最後、最初、

もと 原、本、元、固、素、舊、故、

【原】は水の湧き出づる源の意、物事の因て來る源にさかのぼり、尋ねる意、事の始まりをいふ、蓋那は禁すべからず、是れ原と錢より起ると、原因、原心、原始、原由、原本、原料、原來、原籍、原稿、原理、原質、原語、根原、

【本】は末の反對にて樹の根の少し上部をいふ、之に對して幹枝末の語あり、物の始終を一本の樹に譬ひて、始めを本とし、終りを末とし用ふるに至れり、故に形ある一物の始終に就ていふ、豐臣秀吉は木尾張の人なり、君子は

本を務む、本立ちて道生ず、本元、本末、本末、本支、本性、本質、本山、本堂、本寺、本教、本務、本體、本然性、本能、本紀、本原、本月、本邦、本心、

【元】は大なりと訓じ、事の首始をいふ、もとといふ字の本義は此字にありて、他の本原等は意味をかり用ひたるなり、宇宙のものをいふにも、此字を用ふ、從て意味壯嚴なる故に、日常に用ひず、又事物が宇宙に始めて出來し大本をいふ字なれば、普通度々起る事に用ふるは當らず、元年、元旦、元日、元帥、元勳、元首、元氣、元子、元始、元老、元祖、元素、

【固】はもとより、又まことにと訓する字にて、他のもとと異なりて、前々よりといふ意なり、列國、固より露國を恐るとは、元來恐れ居る義にて、以前より今に至る迄續ける様を確實にいふ語なり、故に又勿論、或は實際といふ意ともなる、例へば此の如きは吾人の固より願ふ所なりとやうに用ふ、

【素】はもと、又もとよりとも訓す、是れ其字已に意を表はせり、字形は主に糸なり、糸は絲の本たるべき物なれば、それを主とするは、即ち物の本質を失はざる意なり、糸の染めざるを素といふ、故に山縣有朋は素より寛大の長者なりとは天性なごいふに當る、或事物の始めて生じて未だ何らの變化をも受けぬ有様をいふ、下地とも土壘と

も歸す、平素、元素、雅素、繁養、素質、居素、素服、質素、素朴、素本、素讀、素志、素願、素懷、素絹、
 【舊】はまへかた、曾つてといふ意にて、時の上にて過去のことを指す意、彼れ舊令聞高かりしも、今や故山に閑居して知る人少しとは、其原因を尋ねるにあらず、只過去のことを指したるのみ、故に以前といふに當りて、新といふに相對して用ひらる、(故)も同じ、舊知、舊習、故舊、
 もとむ 求、索、于、需、覓、尋

【求】は意廣くして、物を探りもとむるにも、尋れもとむるにも、亦乞ひもとむる意にも用ひらる、又手元になき物を取り寄する意には凡てに用ふ、易に同氣相求む、又齊書に魏主詔して遺書を天下に求む、又左傳に趙括趙同曰く、師を率ゐて唯敵を是れ求む、又楚の少宰晋の師に如きて曰く、將に鄭を訓定せんとなす、豈敢て罪を晋に求めんやとあり、請求、要求、求索、求雨、購求、
 【索】は搜したつれもとむる意にて、求より意狭まし、通鑑綱目に梁主淨居殿に臥し口苦し、蜜を索めしも得ずとあり、搜索又は探索と用ふるにて知るべし、

【于】は困難なることを強ひてもとめ、望みて行ふなり、書經に道に違ひて以て百姓の譽を干むるなし、又論語に子張祿を干むることを學ぶ、(學は問ふなり)又史記に韓信數々策を以て項羽を干むとあり、是れ仕へたと願ふ意なり、

【需】は必要な物、無くてならぬものを心に期して、待ちもとむる意なり、論語に軍國の需は皆是を量るとあり、又今日普通君の需に應じて書すなどの如く用ひらる、需用、軍需、需要、常需、
 【覓】は尋ね求むること、又は搜し索むる意、通常より小さい物をもとむるに用ふ、晋書に張翰は富貴帝郷を辭して菘菜を故土に覓む、又是れ猶山に登らんと欲する者の、舟航を涉りて路を覓るが如しとあり、菘菜の少量を狭小なる故土に得ること、又小路を搜す意なり、
 もとむる 悖、戾、悞、悞

【悖】は道理に逆ふことの強きなり、うらばらになりて強くさからふこと、中庸に道は並び行きて相悖らずとあり、又悖德とは德義に逆ひ背くなり、悖禮、悖理、悖逆、
 【戾】は和の反對にてねじけ曲りて眞直くならぬをいふ、詩經の序に王は暴戾にして親しきなりとあり、曲戾、違戾、背戾、乖戾、
 【悞】は人の言ふことに従はず、反對して返言するをいふ、孟子に勇を好みて闘ひ狼り、以て父母を危くすとあるも此の意なり、
 【悞】は心よりもとりて人に従はぬこと、剛悞、悞諫、もの者、物、

【者】は動物を意味する代名詞、特に多く人間を指す時に用ふ、論語に孔子曰く、我れ未だ仁を好む者と、不仁を惡む者とを見ず、仁を好む者は以て之に尙ふる無し、不仁を惡む者は其れ仁を爲す、不仁者をして其身に加へしめず、能く一日其力を仁に用ふる者あらんか、我れ未だ力の足らざる者を見ざるなり、蓋し之れあらん、我れ未だ之を見ざるなりとあり、尙は加なり、又子貢孔子に問うて曰く、如し博く民に施して而して能く衆を濟ふ者あらば、仁と謂ふべきかと、又史記に人迹の至る所、臣たらざる者なしとあり、又事を指す代名詞に用ひらるることあり、中庸に天下の達道五あり、以て之を行ふ所の者三あり、曰く君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友の交なり、五の者は天下の達道なり、知仁勇の三の者は天下の達徳なり、以て之を行ふ所の者は一なりとあり、又夫れ孝は善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述ぶる者なりともあり、使や、從者、隨伴者、觀者、行者、旅者、漁者、智者、仁者、善者、長者、生者、賢者、治者、貧者、
 【物】は形體ある動物以外のものをいへど、時としては動植物等の區別なく、一般に此の宇宙に存するものを指していふことあり、中庸に誠は物の終始なり、誠ならざれば物なし、是の故に君子は之を誠にするを貴しと爲す、誠は自ら己を成すのみにあらざるなり、物を成す所以なり、

己を成すは仁なり、物をなすは知なりと、又天地の道は一言にして盡すべきなり、其物たるや或はざれば、則ち其の物を生ずる測られずとあり、或は差違なり、又天は萬物を覆ひ、地は萬物をのす、又易に雲行き、雨施し、品物、形に流ると、施しは沛然として雨降るなり、形に流るは萬物の形は水の流る、如く、漸々に生成化育するをいふなり、即ち物は外觀だけにて、者は内觀をいふ、故に大者小者は大人小人の意、其容貌には區別なきも、大物小物は大なる形物小なる形物にて、其精神の大小に拘らず、されば逃亡せし人なごを、其人相がきを以て搜索するを物色といふ、又人物といふは其人の心状と外貌とを兼ねていふ意なり、事物、生物、名物、乾物、作物、遺物、品物、財物、物價、物具、物産、物名、物論、物議、物質、物件、着物、反物、優物、景物、
 や 矢、箭、
 【矢】と【箭】との別は、方言に曰く關より東は矢といひ、關より西は箭といふと、又淮南汎論訓に曰く、詔して勝たざる者は一束箭を出し、乃ち箭を矯めて矢となすと、其注に、是れ箭の筈の狂がれるを治むるなりとあり、されば箭は矢柄にて、矢は常のものなり、然れども弓矢と用

ふるは古今に通用され、弓箭を用ひしは後世の書に多ければ、矢は箭より古き字なるべし、今日にては差別なけれど、普通に矢を用ふ、
やしなふ、養、畜、牧、育、

【養】は動植物をおほし立て、はくみて育つること、又生ひ立ちゆく様にする、養育、養生、培養、

【畜】は牛馬などを飼ひやしなふこと、牧畜、家畜、

【牧】は野に放ち飼ひすること、牧馬、牧場、

【育】はくぐみ又は教へ、或はかひそだつること、育兒、教育、愛育、飼育、

やすし 安、寧、康、緩、泰、易、

【安】は危の反対にて危きこと心配すべきことなく、靜かに種なるをいふ、孔子家語に安くして危きを忘れずとあり、又論語に貧しきを患へずして、安からざるを患ふとも、禮記には人禮あれば則ち安く、禮無ければ即ち危しともあり、安穩、安危、安泰、

【寧】は安と定との合意にて、安らかに定まるをいふ、書經に野に遺賢無んば、萬邦咸寧しとあり、即ち賢才の人を皆登用すれば、邦は安かに定まり治まるとなり、安寧、

【康】は樂と安との合意にて、樂しみ安んずるをいふ、安康とは安く樂むことなり、康寧は定まり樂むなり、康樂、

【緩】はやすんずと讀むべき字にて、靜かに安んずる意、故

やぶる 破、敗、徹、壞、

和解、溫和、平和、

【破】は品物の他力の爲めに急にわるいこと、つぶるること、くだること中庸に、君子大を語る時は、天下も能く載する莫し、小を語る時は天下能く破るなりとあり、是れ極めて、小にして、天下に之を猶一層細小に打ちやぶる者なことの意、又破笠とは裂けてこぼれたる笠、破屋といふは烈風などの爲めに屋根落ち壁仆れなごして完全せざる家、又破竹の勢といふは、竹を打ち裂く如き烈しき勢なり又破談とは互に相談し始めたことを止めにする意、破鏡、破歌、破帽、破顔、破倫、破道、破産、破損、破裂、破壊、破滅、破音、破衣、破顔、破盡、破破、洞破、破天荒、看破、

【敗】は成または勝の反対なり、事物其物の内に悪しき所ありて、漸々に何時となくはれやぶるをいふ、孟子に王曰く、寡人の身に及びて東齊に敗れる、又歐陽脩の上書に、中國頻りに元昊の敗る所となると、又衍義には天理を蔑して人紀を敗るとあり、人紀とは猶人道といふが如し、又大學の序には、風俗頹敗すとあり、是皆其物自身の内欠點ある爲めに、自然にこぼれゆく意重くして、他力の影響少なき意味す、歐陽脩の文に、曹操三十萬の青州の兵を以て、大に呂布を敗り、退きて許に歸り、復

に吊り下げたる物の動くを靜かにするに用ふ、
【泰】は安と寛大との合意にて、一寸したる物事などには心もつけず、心安らかにあるをいふ、論語に君子は泰くして驕らずとあり、安泰、

【易】は難の反対、事物の爲しやすきこと、容易、平易、難易、

やすら 宿、舍、

【宿】はやすとして居ること、とまること、旅寐すること、單に止宿するにも用ふ、宿泊、宿舍、

【舍】は家の處にいへる如く市屋の義、轉じて止宿の義にも用ふ、舍營、舍館、官舍、

やすら 楊、柳、

【楊】は枝の上に向ひし立ちやすきをいふ、本草に楊は枝硬くして揚起す、故に之を楊といふとあり、

【柳】は枝の下方へ垂れたるしだれやすきをいふ、本草に柳は枝弱くして垂流す、故に之を柳といふとあり、楊柳と重用する時は、只やすきといふ意、

やすら (やはらか) 柔、軟、和、

【柔】は剛の反対にて主として人の氣質性情のやはらかに極かなるに用ふ、柔弱、柔順、

【軟】は硬の反対、堅からぬこと、柔軟體操、軟派、

【和】はやはらかになること、靜まること、なぐさ、和合、

た二萬人を以て黃紹の十四五萬を破るとあり、又史記に吳晉疆を争ふ、晋人之を撃ちて大に吳の師を敗ると、又衍義には李牧數々秦軍を破走せしむとありて、破敗共に不利の軍に用ふれども、破は敵の力全く強く急にして、終に利あらざるにて、敗は味方の兵器又は訓練、或は策謀の宜しからざるより利あらざる意にて緩し、腐敗、敗船といふも、年月久しくなりて、追々に悪しくなり行く状なり、又破衣とは引き裂きなごしたる意にて、敗衣とは着古したる衣なり、しかし衣類には次の徹を用ふべし、敗北、敗走、敗戦、敗滅、敗遠、敗類、敗績、敗切、敗家、敗天公、敗軍、敗訴、敗亡、失敗、興敗、成敗、勝敗、

【徹】は敗字に似たれども、衣服履物などの古くなりてやぶれたるをいふ、論語に孔子曰く、徹れたる縵袍を衣て狐貉を衣る者と立ちて耻ぢざるは、其れ由かとあり、縵袍は賤者の着る衣服なり、狐貉は狐や貉にて作れる毛衣にて、貴人の服なり、由は手路のことなり、衣は着なり、又孟子に舜の天下を棄つるを視ると、猶徹履を棄つるが如しとあり、罷徹といふは、疲れたること、徹衣、勞徹、

【壞】は形正しく存したる物の崩れやぶる意なり、衍義に一念差へば則ち一事壞る、又歐陽脩の文に少しく主の疑を沮めば、則ち必ず已成の計を壞るとあり、是れ即ち礎より漸々積み上げたる物を、其礎まで打ち崩す意なり、故

に擾亂、又擾扇と用ふ、破は急にして敗は緩なり、敵は敗に近く、壞は破に似たり。

【病(ぢび)】病、疾、疫、瘡、

【病】は身にそくなへる所ありて健やかならぬこと、わづらふこと、病氣、病身、

【疾】は病の急にくること、疾病と熟語すれど、疾は軽く、病は疾の重くなるをいふ、

【疫】ははやり病なり、疫病、時疫、

【瘡】は持病にて容易にならぬ疾病、

【止(とど)】止、已、罷、歇、

【止】はとまりやむこと、とどむること、廢止、停止、禁止、中止、

【已】は已止の已にて、果てやむこと、

【罷】は事の終ること、又とどむること、廢つること、罷業、

【歇】はやみとまること、間歇、

【稍、寢、良、帳、差、

【稍】は度合の小なること、漸の意、チト又はチトツ、なごいふに同じ、民心稍穩なりの類、稍々、

【寢】は度合が追々に増進すること、教育の制度寢備はるといふは、道々には完備する心なり、若し稍とすれば、少く備はりたる意にて今後のことに及ばず、

【良】は時間の上にて、カナリといふ意、一寸の間といふ意

如し、

【行】は歩みて往く意、其目的地明かなるにも用ふ、止の反對なり、此字用法極めて廣く、走歩、往來を兼ね、漢書

に行く者は還らず、往者は反る莫し、皆生を聊せずして亡逃相從ふと、又左傳に天子に於ては則ち諸卿皆行くとあり、行人、行旅、行商、兼行、進行、

【適】は行き先きを主としていふ意、孟子に天子諸侯に適くを巡狩といふ、又蒙求に魯衛室邑の女は時を過して未だ人に適がず又史記の伯夷傳に、神農虞夏忍焉として没す、我安くにか適いて歸せんとあり、

【逝】はゆき去りて再び歸り來らざる意なり、論語に逝く者は斯の如く晝夜を會てすと、又古詩に支鳥逝きて安くに適かんと、又死することを逝去といひ、河水の流下するを逝くといふ、皆此の意なり、遷逝、長逝、永逝、

【如】は之に似て其目的地明かなるに用ふ、左傳に鄭伯周に如きて始めて桓王に朝す、又齊侯鄭伯紀に如くとありて、先方へゆきつく意なり、

【讓、遜、禪、

【讓】は已を後にして人を先にすること、辭讓の如し、又己れ捨て、他に授くること、讓與、讓渡、

【遜】はおのれ退きて他に與ふこと、謙遜、

【禪】は天子の位をゆづり渡すこと、禪位、受禪、

【漢字用法】

(漢字用法)

にはあらず、史記に吳起默然たり、良久しうして曰く、之を君に屬せんとあるが如し、良久、

【較】は事物を比較し、僅かの長短優劣あるを示すなり、春寒うして花晴遅しとは、例年と比較して僅か遅しとなり、

【差】も亦比較して其差別をいふ、敵は敵に似て差大なりとは、比較して見るに其異なる點は、僅か大なるのみといふこと、

【往、之、行、適、逝、如、

【往】は來の反對にて、さきへ進みゆく有様を指す、其往き先きの目的は含まず、孟子に孔子は成人に就きて突れをか取れる、其招くに非らざれば、往かざるを取れるなりとあるが如し、又易には多く往を用ふ、素下傳に遷は西南に利し、往きて中を得たりとあり、利はよろしとよむ、

又解は西南に利し、往きて象を得たりと、又往く處あれば、夙吉、往きて功ありともありて、皆其目的を明に有せざる時に用ふ、故に道路を往來といふ、又ゆきて歸り來るの意を含む、往復、往還、往昔、往時、

【之】は彼の地にゆくなり、目的地明かにゆくことを強くいふ意、韓退之の文に、齊に於て不可なれば、則ち去つて宋に之き、鄭に之き、秦に之き楚に之くとあり、又論語に、夷狄に之くと雖も擊つべからずと、又孟子に、昔大王帝に居りし、狄人に侵され岐山の下に之くとあるが

ゆるし(ゆるやか) 緩、縦、寛、

【緩】は繩絲などの引きはりて緊びしからぬこと、急の反對なり、緩急、緩歩、遅緩、

【縦】は心のゆるやかなること、ゆるむること、縦心、

【寛】はくつろぎありて、きびしからぬこと、度量の廣きに轉用す、寛猛、寛大、

ゆるす 許、赦、釋、宥、恕、允、免、

【許】は先方の欲するところをそれにてよしとゆるすこと、其通りになさしむること、許可、許容、許諾、聽許、特許、免許、

【赦】は罪過をゆるすこと、易經に過を赦し罪を宥すとあり、過ちて罪ある者をゆるすなり、大赦、特赦、赦免、曲赦、

【釋】は赦と同じく罪過ある者をゆるすこと、又は束縛せし者を解き放つことなり、書經に無辜を開釋すとあり、無辜は罪なき者なり、又史記に有華の美女を見て、紂曰く以て西伯を釋すに足ると、乃ち赦すと、又韓退之の文に、其の粟の吏に在る者を釋して徴さずとあり、釋放、

【宥】は特別に、寛大にして、過罪を宥めず見のがすこと、易經に過を赦し、罪を宥すとあり、普通文に御宥恕など用ふるも此意なり、

【恕】は過罪をば人情によりて、強ちに罰し難きことあるを、寛大に了簡してゆるすなり、世説に情を以て恕すべしと

【漢字用法】

一一三

あり、
 【允】は先方のいふところを實事と信じ、よしと見とめ承諾する意、允可、允許、
 【免】は罪又は責に當るべき者を或る事情の爲めにゆるすと、轉用しては許の如く所謂積極的にゆるすことにも用ふ、マヌカルと訓する字なれば、ゆるすといふ時にもマヌカレしむる意あり、免許、免狀、御免、赦免、放免、
 よ世、代、
 【世】は世界の上の人類の種々の現象をいふより、帝王の領國をも世界に比して世といふ、はじめより、終りまでの、
 時世についていふ時、世の字を用ふ、世紀、世次、
 【代】は父子相代りて位に居り、又は家督に居る間の稱に用ふ、されど世と同義にて唐の代など用ふることもあり、先代、時代、

よ 能、善、克

【能】は自由自在に爲すことの出来る意、又業をよくすること、孟子に吾れ未だ能く行ふことあらずとある能は、吾れにかゝる、吾れに充分なる力なくして、自在に行ふこと能はずといふ意なり、故に其の働く者を主としていふ、多能、能文、
 【善】は他より見て見よしといふ意、能を善の意に用ふるは能は十人なみにすること、善はそれより優れてよくする

よ 自、從

も亦同じ、又大聲酒を呼んで高樓に坐すと西都怪談の語にあるは、酒を持て来よとよばはるなり、號呼、喧呼、
 【喚】は寐入る人をよび醒ますが如く、急に大聲を發し呼ぶなり、俗にライ、コラなどいふに同じ、又寐入る人をよび起すことを喚起といふ、喚聲、
 よ自、從、
 【自】は事物の起り来る源の場所又は物を示す意、雨は天自り降り来る、水は地自り湧出す、太陽は東自り出で、西に没すの如し、故に自は只其源を示すのみ、其後の順路などには關係せず、
 【從】は自の源ばかりを示すに對して、其後の漸々經歷する順路を示す意あり、彼れは九州從り來るとは、海路又は陸路の便を以て來りし意あり、自は事の始と終とのみを考ふる時に用ひ、從は始より漸々經歷せる中間のことと終とを考ふる時に用ふ、此二字俱に活かず、又自從と二字重ねて用ふる時は、始中終總てないふ、又從は方角を示すに用ふることもあり、史記に王稽范雎を載せて秦に入り、車騎の西從り來るを望見すあり、
 よ 因、由、依、據、賴、仍、憑、倚、寄、緣、
 以上の文字皆多くはによりと釋す、
 【因】は源因といふ熟語ある如く、或事の起り来る源を表はす意なり、史記に聲は生れながらにして其手に文あり處

意にて能よりも強し、孟子に我れ善く吾が浩然の氣を養ふと、又善く說辭を爲し、善く德行を言ふとあり、又史記に白起は善く兵を用ふとあるは皆十人なみを優れてよとの意、又世説補に、范曄は善く琵琶を彈じ、能く新聲を爲す、又通鑑綱目に李邦彥は應對便捷にして、善く誦讀し、能く蹴鞠すとあり、又續綱目に僕散は忠義にして、善く將卒を取し能く其死力を得たりとあり、又書を善くすとは、他の人の見ていふことなり、書を能くすは自分の身になりていふ語なり、
 【克】は困難なる事を成就する意にて、賞むる如き意あり、克く己に克つ者は眞の勇者なり、克く俊徳を明にするなどの如し、克用、克讓、克己、克當、
 よ 善、良、好、佳、
 【善】は善惡の善にてあしの反對、善意、善良、善心、
 【良】は物のすぐれてよきこと、良夜、賢良、改良、良二千石、
 【好】は醜の反對、貌の麗はしくよきこと、
 【佳】は好の字の義と相似たり、佳人、佳宵、佳境、佳良、よ 呼、喚、
 【呼】は聲を立て、遠方にあるものを近くよび寄せまねくこと、又わめき呼ばるること、舟を呼ぶといへば、沖にある舟を岸の方へよび寄すること、童を呼ぶ、人を呼ぶ

といふ、故に因つて遂に之に命じて虞といふとあり、其手に虞の字ありしは原因としていふ意なり、因果、
 【由】は或事物を主とし、此方より其の方に傾きよる意なり、故に是に由りて之を觀ればとあるは、此の事を確實なるものとして、心を其方に傾けて觀ればといふ意なり、又由來など時に用ふるは、自と同意なり、
 【依】は或事物を主として其れに密着すること、附添ひ離れぬ意、依頼など用ふるは、其人の心に密着して其人の心に隨ふ意なり、草木の生ずるや土に依るとあるは、土に密着して、其土性に隨ふとの意、
 【據】は固くとらへて、執り守り放たぬ意なり、柳子厚の文に、其遠近細大は手づから其圖に據りて究むべしとあるは、其地圖を固く信じて視るべしとなり、無據といふは、意正しからず、若し上の如く書かば、證據として固守すべき物なしといふ意なり、故に證據とは尤も適切なる用字法なり、據城、本據來歴、
 【賴】は後日我が助けとなるものと思ひ、喜び慕はしく心をよせて思ふこと、たのみとしてそれによる意、場合に出りて或は御蔭でといふ意ともなる、衍義に人材衆多にして、國賴つて以て興る、又民の徳は必ず神聖の君に賴るとあり、
 【仍】は其儘にて、又は重ねて頻りにといふ意、集まること

るなり、我軍遼陽を陥る、仍て奉天を攻むといふが如し、
 【憑】は凭仗と俱にもたれかゝる意なり、凡に凭る、椅子に憑るの類、左傳に君王軾に憑つて之を觀る、又佛教は憑信するに足らずの如きは、意を強くする爲めに椅子などにまたれかゝる如くに用ひたるなり、

【倚】は一方へよりかゝること、壁又は木などによりつくこと、たてかゝることなり、戰國策に汝朝に去りて晚に來らば、吾門に倚りて望まんとなり、

【寄】はたよりつくこと、寄居、寄寓の如し、或事物をば助けになる善きものとして、よりつく意なり、又よするとも讀む、幼にして父母を失ひ、兄弟三人其寄る處に迷ひ、遂に身を賣りて奴となるとあり、寄倚などに異なること例を見て知るべし、

【緣】は他物によりつく意なり、しかし其意漠然たれば、只其字の場所に適する様に解すべし、臨機の譯、此の字に於ては難からず、孟子に、木に緣りて魚を求む、水に緣りて下る、柳子厚の文に緣りて性を役すとあり、

【喜】は悲、憂の反對、うれしく思ひてよろこぶこと、俗に機嫌善しといふに當る、孟子に子路は人々に告ぐるに過あるを以てすれば、則ち喜ぶとあり、又陳書に、齊主高緯は、言語澁咽にして朝士を見るを喜ばず、又論語に子

解ぶとあり、

わ

わかつ(わかる) 分、別、判、班、頒、頌、訣、

【分】は合の反對にて、別々に引きはなつこと、又物の離ること、孟子に分かつに財を以てす、之を燕と謂ふとあり、吾か財を人々にわかち與ふるなり、又分析、分擔、皆一事物をひきわくる意、分業、分解、分布、分配、分秩、【別】は此の物は此の物、彼の物は彼の物と、混雜せぬ様に引わくること、又は差別などの意にて、事物の相異なるをいふ、孟子に夫婦別あり、又書經に天子の妻は、別姓にして哭することありとあり、又區別を立つ、辨別を要すなどは、混雜せぬ意、又訣別、離別などは、引きはなれわかる、意なり、別莊、別邸、別家、送別、特別、別天地、別世界、別狀、格別、分別、區別、
 【判】は二つに切りはなつこと、即ち半と刀とを合せたる作字にて明かなり、晉書に逆順を茲に判つとありて、逆と順とを明かに切りはなつ意、又衍義に正邪の情狀を判つと、裁判、判斷といふも此意なり、判定、談判、判獄、審判、判決、剖判、
 【班】はある物を多數の人に分ち與ふること、書經に瑞を群后に班つとあり、后は君主なり、即ち多くの君主に分配

わかつ (漢字用法)

路之を聞きて喜ぶともあり、喜色、喜怒、喜憂、悲喜交至、

【悦】は悦と同じく、心にかなひて中心より樂む意なり、論語に學びて時に之を習ふ、亦説ばしからずやとあり、又史記に魯仲連曰く、吾將に秦王をして梁王を烹醢せしめんとす、新垣衍は快然として悦はずとあり、故に悦樂といふ時は、心中よりよろこび樂む意、喜樂といふ時は、或事を快よく樂める意にて、悦は喜より強し、悅樂、喜悅、悅服、

【歡】は悲の反對にて、心に憂ふことなく、嬉しよろこびて騒がしく勢ある様をいふ、禮記に菽を啜り、水を飲み、其歡を盡すとあり、人を歡迎するも此意にて、悦よりも強し、歡喜、歡樂、

【懽】はよろこびの餘り氣の騒かききないか、歡よりも強きなり、

【欣】は戚の反對にて、忻と同じくよろこびの外に出でたること、懽よりも落ち付きて居る様なり、孟子に欣欣然として喜色ありとあり、多く重用して欣々欣喜と用ふ、即ち心中に深くよろこべるなり、欣然、欣舞、欣業、

【怡】は外より顔色の嬉し氣に見ゆるをいふ、史記に左右既に前みて軻を殺す、秦王怡ばざる者良久とあり、

【瀟】は長くよろこぶこと、書經に以て先王之命を受けしをすること、又禮記に請ふ諸を兄弟の貧しき者に班てとあり、

【頒】は班と音相通じて、義も同じ、明史に帝は佛典を塞外に頒つとあり、塞外とは支那本國を中國といひ其外方の夷狄をいふ、又頒布と連用し一般に布くことに用ふ、

【訣】は死に別ること、又人にわかること、永訣、訣別、訣袂、

わ(わかす) 涌、鑠、沸、

【涌】は水の地中より噴き出づること、涌出、

【鑠】はとらかすこと、鑠金、

【沸】は湯のたぎること、轉じて水の逆か卷く勢にもいふ、沸騰、

わざはひ 禍、災、殃、

【禍】は福の反對、まがごとく不幸なり、淮南子に禍は福の倚る所、福は禍の伏する所なりとあり、

【災】は思ひ設けぬ不幸、天災、災難、

【殃】は神の咎めを受くること、易經に積不善の家には必ず餘殃ありとあるは、たゞの災難、凶事のいひにはあらず、

わざる 妄、遺、

【忘】は覺わたる事を失ふこと、記憶よりはつすこと、忘却、忘失、

【遺】はふと心に取り落すこと、遺失、遺忘、

わ

わたる 渡、濟、涉、亘、徑、

【渡】は音も義も度と同じく、海川を舟にても又徒歩にても通り過ぐる事、史記に江上に一漁父あり船に乗り伍符の急なるを知り、乃ち伍符を渡す、伍符既に渡りて其劔を解きて曰く云々、又前漢書に猶江河を渡るに維掛亡しとあり、又轉用して時間を經過するにもいふ、晋書に一日保つを得ば十年を渡るが如しとあり、又世に生活して生を送るを世渡りといひ、其職業を渡世といふ、又物をわたすと讀む時は、甲より乙へ物を傳ふるをいふ、又渡舟場とは舟にて人を彼岸へわたす處なり、

【濟】はわたるとも讀めど、多くはわたすと訓みて、人々の通り越し難き川を苦辛して通り渡らしむること、孟子に子産鄭の政を聽く、其乘輿を以て人を漆淅より濟せりとあり、乘輿は乗る所の車にて、漆淅は二つの川名なり、又君子其政を平にせば、行くに人を辟くとも可なり、焉ぞ人々にして之を濟すを得んとあり、辟は開らくなり、されば此の意より又すくふといふ意にも用ふ、論語に子貢曰く、若し博く民に施して能く衆を濟ふことを得ば、仁といふべきかと、又佛法に衆生を濟度すといふも萬民を苦界より彼岸へ濟ひ度す意なり、救濟、濟生、濟民、

【涉】は膝位の淺き川を徒歩にて度り越すこと、水と歩とを合せて字とす、孟子に年の十一月徒杠成り、十二月輿梁

成らば、民未だ渉るを病まざるなりとあり、徒杠の杠は橋にて徒歩者の渡るなり、輿梁の梁も橋にて輿にて渡る橋なり、史記に渚沱を渡り易水を渉るともあり、又早く渡る意より至るといふ意に轉用せらる、玉露に足、茶坊酒肆に渉らすとあり、又書記を渉獵すと用ふるは、博覽なるをいふ、跋渉、徒渉、干渉、博渉、

【亘】はあまりく至り極まり行きとく意なり、明史紀に赤虹二道西北より東南に徑り天を亘るとあり、赤虹二道は赤道と虹道となり、即ち西北の隅より東南の隅迄引きわたれること、又文選に樹うるに青槐を以てし亘すに縁水を以てすとありて、物の隅より隅まで長く行き届きたる意なり、

【徑】は眞直くに通り行くこと、又眞直くに長く引き延びたる物をいふ、直徑といふも直ぐなるさしわたしなり、史記に高祖酒を被りて夜澤中を徑るとあり、又漢書に、汝水は汝州の大息山より出で、蔡潁州を徑りて淮に入るとあり、又赤虹二道西北より東南に徑るも、皆眞直に通過する意なり、徑路といふも直ぐなる近き路、

【僅】は物の數量の少しなること、晋書に兵輿りてより六十餘日戦ひて殺害せらるる者僅かに十萬人とあり、又歐陽脩の文に説は古今に達せず、學は僅かに章句を知るとあり、

人我、彼我、

り、生きて歸る者僅かに三人の類なり、僅少、僅々、
【纒】は或事件の内にて最も必要なる點を擧げ、其點の豫想外に僅かなりし事をいふ意、只といふ程なり、ヤツトと釋す、明史に一面僅かに道あり、纒かに一人を通すと、又宋史に高祖死して纒かに三年、又史記に大男子と雖も纒かに嬰兒の如しとあり、纒はわづかの時は音サイなり、
【才】と【財】と【裁】とは皆音さいにて、纒に通用せられ音義共に同じ、

わらふ 笑、咲、晒、嗤、

【笑】は閉ぢたる口をひらくこと、失笑、冷笑、笑罵、

【咲】は花唇の開くこと、花咲、

【晒】は口を開きて齒をあらはす程にわらふこと、微笑の意、

【嗤】は嘲りて笑ふこと、詆嗤、嘲嗤、

われ 我、吾、余、予、

【我】は彼に對する字にて、自分を強くいふ、資治通鑑に李愬曰く、朗山に利あらざれば則ち賊は我を輕んじて備をなさずとあり、又論語に孔子曰く我に陳蔡に從ひし者は、皆門に及ばず、又孔子門人等の顔淵を厚く擗りしを責めて曰く、顔回は予を視ること父の如くなりしに、予が視ること猶子の如くするを得ず、是れ我にあらず夫の二三子なりと、夫は彼なり、二三子とは門人中の人を指す、門人の二三人と孔子とを對したるなり、我慾、唯我、物我、

【吾】は我の字の人に對すると述べて、對する者なく、只自分獨りにていふ字なり、論語に孔子顔路に謂て曰く、鯉死して棺あれども梓なし、吾れ徒行せず、又之が梓をも爲らず、是れ吾れは、大夫の後に從へるを以て徒行すべからざればなりとあり、又孔子曰く顔回は我を助くる者に非らざるなり、吾が言に於て説はざる所なしとあり、是れ顔回は孔子の言を一々理解して、少しも質問せざる意にて始めの我は彼れなる顔回を助くることあるも、我を助けてくることなしとの意、終の吾は即ち自分の言をば皆心に感じて説べるが如しとなり、又孟子に我れ言を知る、我れ善く吾が浩然の氣を養ふとあり、又彼は其言を以てし、我は吾が仁を以てす、彼は其爵を以てし、我は吾が義を以てすともあり、
【予】と【余】とは同じ、朱子の説に由れば、余は平かにして、吾は偏なりとあれど、論語に孔子其の弟子等、顔淵の擗を身分不相應にせるを責められて曰はく、顔回は予を視ること父の如くなりしも、予が視ること猶子の如くするを得ざりき、是れ我れに非らざるなり、夫の二三子なりと、又孟子に擗は何人ぞや、予は何人ぞや、又離騷に、余に名づけて正則といひ、余に字して靈均といふとあり、これによりて案するに余、予、共に吾の意に近しとの説も

あれど、我の弱く謙遜したる語と見る方適當ならん、

畫

【畫】は物の形を寫しかきたるもの、彩色の有無にか、はら

す、凡て畫といふ、今日にては多く彩色なきものをいふ、畫は畫の俗字なり、孟子に瓦を墜ちて地に畫すとあり、又繪畫といへば一切を含む、油繪、繪畫などには、畫を用ひず、

【繪】は彩色したる畫なり、本來は五色の糸にて縫模様を作るをいふ、

【圖】は事物の形を其儘正しく寫したるもの、地圖、系圖の如し、圖と畫との別は、圖は實際の事物の通りを主としてかきたるもの、畫は實際の事實に加ふるに、更に多少の想像力を交へて畫きたるものなり、故に寫眞の如きは圖にて、畫工の筆力を揮ひてかきしは畫なり、

【描】はうつすこと、描寫、

を

【侵】は或者が其位置にのみ居らずして、何時となく人知れず漸次に他の位置へ密かに入り込むこと、侵略といふは左

【犯】は或る規定せる事物を無視して、無遠慮に事を爲すをいふ、人の領地を犯すとは其領地に境界あるにも拘らず、恰も無きが如くに人の領地に入りて害を爲すなり、又法を犯すとは、既に定められたる規則を全く無視して事を爲すなり、俗にないがしろ、漢語にて蔑如するといふ意あり、論語に有子曰く、其人と爲り孝弟にして上を犯すこととを好む者は鮮しとあるは、上長者をないがしろにする者は鮮しとなり、犯罪、犯顔、犯上、犯則、犯人、犯逆、

【干】はもとむと訓する字にて、人に乞ひ願ふ意の強きなり、其用方は他字と異なりて、權貴の人などの心に欲せざることを此方より、強ひて請ひ願ふ意なり、もとむの條に

【冒】は物を褻りて進む意なり、風雨を冒して戦ふとは、風雨を全身に蒙りながら戦ふこと、雪を冒すも亦同じ、故に養子となりて他人の姓を稱するにも姓を冒すといふ、されば多くは障害物を意ともせぬこととなり、我軍苦辛を冒して戦ふ、寒氣を冒して撤營す、難を冒して行くなどの如し、

【治】は多くの物をそれごとくに注意し、能く其正しき処に居らしめ、安んぜしめて、無理無法の事をなさざるをいふ、大學に、古の明德を明にせんと欲する者は、先づ其國を治む、其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふとあり、又孟子に昔者堯は舜を天に薦めて、天之を受くるは、百神舜の祭を享くればなり、之を民に暴して、民之を受くるは、舜をして事をまらしむれば、事治まりて百姓これに安ずればなりとあり、又奚ぞ禮義を治むるの暇あらんやともありて、民を治むとは、人民に各自相應の地位に居らしめ、其分に安んぜしむる様に注意するなり、治亂、平治、治民、治國、治罪、治安、治績、衰治、

【脩】は事物の悪しき部分を、漸々に改め善くする意なり、孟子に君子の守る所は其身を脩むるにあり、而して天下平なりと、君子は其身の悪しき處を追々に正しく改め行くのみ、是れ其身を正しくすれば天下自ら治まればなり、又大學に天子より以て庶民に至るまで、壹にこれ皆身を脩むるを以て本とす、其本亂れて末治まる者はあらず、又中庸に春秋に其祖廟を脩め、其宗器を陳ぬとあり、春秋とは春夏秋冬をいへるなり、祖廟は祖先の廟なり宗器は先祖より傳はれる寶器なり、即年に四度祖先の廟の壞れた

【納】は大切に物の中へ入ること、書經に九江より錫の穴龜を納むとあり、又納税といふも、官庫へ税を納りなく入れをさむる意なり、奉納、受納、上納、獻納、皆納、血納、

【教】は將來必要あることを常々をしふること、教育といふも、目下の必要よりは、寧ろ未來に必要な事を教ふる

【教】は將來必要あることを常々をしふること、教育といふも、目下の必要よりは、寧ろ未來に必要な事を教ふる

意なり、しかし廣く一般のことに通じて方法を設けて教ふるにも、言葉にて教ふることに用ふ、教官、教訓、教誨、教化、教唆、教則、教導、

【誨】は事に臨み言葉にて曉し教ふるなり、朝夕側に侍して王に其の徳を誨ゆとは、王者の徳は絶ゆることなれば、常に事に臨めるなり、教は誨の意をも含めども、誨は教より用方狭まき故、教の處に必しも用ひられず、

【訓】は道理を以て人をなすへ曉すをいふ、歐陽脩の文に、此に兵を教ふるの虚名ありて、兵を訓ふるの實義なしとあるは、只言語のみ兵法らしく聞ゆるも、實際に兵法の道理を明かにして訓ふる事なきをいふ、

をしむ 惜、吝、吝、愛、

【惜】は捨てがたく思ふこと、残り多きこと、愛惜、惜別、惜名、

【吝】は惜の意、又しわきこと、吝嗇、

【吝】は物を妄に費まわること、失はん事を恐るること、吝嗇、

【愛】はめでたしと思ふこと、愛別、愛惜、

なはる 終、畢、卒、了、

【終】は始又は初と對し、物事の始めより最後までを一體にいふこと、終日、終年といふは、朝より夜まで、年始より、年暮までの意、又或特別なる時より以後最後までといふ時も終なり、例へば彼れは十八歳の頃、酒樽草の有

害なるを知り、終身垂も之を口にせざりきの如し、終世、始終、

【畢】は物事の全く済みをはるを重くいふ意、終生の事業と畢生の事業とは後者の方其意味強し、畢日、畢歳、

【卒】は物事をし果たせるをいふ、學校を卒業すといふは教へらるゝ事を爲し果たせるなり、卒事、

【了】は畢の意、事のすむこと、書を讀み了るとは書を讀みをはつたといふ意なり、結了、終了、完了、校了、讀了、了了、

同訓漢字用法終
異義

熟語

蒼蒼哀吟
 藹藹哀吟
 哀吟傷悼

熟語

二あ

ああ 嗚呼 ひろく物事に感じて發する聲、あら、あな、
 「嗚呼悲しいかな」類語多し、漢字川法を見よ、
 ああ副 嗚呼 からくと笑ふ、「笑言嗚々たり」
 あいあい 副 哀哀 いとほしみ哀しむ、「哀々たる父母」
 あいあい 副 藹藹 氣の和きたる狀、盛に多く満ちわたる
 貌、「和氣藹々として」
 あいにく 名 愛育 愛情もて養ひ育つ、「子女を愛育す」
 あいうつ 副 蒼蔚 草木の盛なる貌、又小草の茂るをいふ、
 あいぎん 名 愛吟 平生愛して誦吟する詩歌、
 あいぎん 名 哀吟 哀傷悼情など、悲みを詠じたる詩歌、
 あいせやう 名 愛敬 可愛げの見ゆる事、人づきのよきこ
 と、あいせやう、愛嬌、
 あいせやう 名 愛郷 我が郷里を愛すること、「愛郷心に富
 む」
 あいぐわん 名 哀願 情實を明して願ひ出づる事、「哀願す
 る事敬度」
 あいぐわん 名 愛玩 大切に遊ぶ事、「盆栽を愛玩す」
 あいけい 名 愛敬 情深く敬ぶ事、「長上に事ふるに愛敬を
 以てす」
 あいご 名 愛願 ひいきする事、「御愛願を蒙る」
 あいご 名 愛護 愛して保護すること、「子女を愛護す」
 あいごう 名 隘巷 狹隘なるまち、「隘巷に住す」
 あいこく 名 愛國 國家を愛すること、「愛國心に富む」
 あいさう 名 愛想 人を待つに情深き事、「愛想ある人」愛
 想つかとは此の反對、
 あいさつ 名 挨拶 (一)返辭、(二)挨拶に窮して、「(二)
 返禮、答禮、會釋、
 あいじつ 名 愛日 冬の日をいふ、「冬日愛すべく、夏日此
 る可し」
 あいしふ 名 愛執 愛情に執着すること、「愛執の念」
 あいしやう 名 哀傷 悲しみ嘆くこと、「哀傷に堪へず」
 あいじやう 名 愛情 情深き心、「人を待つに愛情の深淺あ
 り」
 あいせき 名 哀惜 哀み惜む事、「亡友を哀惜す」
 あいぜん 副 藹然 心氣の和きたる狀、「藹然たる和氣」
 あいそ 名 哀訴 情實をあかして訴へ出づる事、「百姓交々
 哀訴す」

ああ 熟語

あぐわん

あひだり名 愛憎 愛すると憎むと、「愛憎常ならず」。
 あひだり名 愛別離 雲霞などのたなびく状に言ふ、「紫雲
 愛別離として」。
 あひだり名 哀悼 いたみ哀む事、哀傷、傷悼、「恭しく哀
 悼の辭を呈す」。
 あひだり名 愛着 深く愛情に執着する事、「愛着の念深
 し」。
 あひだり名 副生憎 あやにくの詛、「生憎不在なり」。
 あひだり名 哀別 哀しき別れ、「幼時父に哀別せし所」。
 あひだり名 愛別離苦 親愛する人に別れ離る、痛
 苦、生死ともにいふ。
 あひだり名 哀慕 慕ひ哀む事、「哀慕の情に堪へず」。
 あひだり名 曖昧 分明ならぬ事、「曖昧模糊」。
 あひだり名 哀感 あはれみ哀む事。
 あひだり名 哀樂 哀みと樂みと、「人哀樂なき能はず」。
 あひだり名 愛憐 憐み愛する事、「愛憐の情に堪へず」。
 あひだり名 副快快 不満足に、樂み無きこと、映映、「快々
 として樂ます」。
 あひだり名 懊懊 憫み苦む状、懊惱に同じ。
 あひだり名 謳歌 歌をうたふこと、「太平を謳歌す」。
 あひだり名 奥義 奥深き義、藝術などの秘奥をいふ、「奥義
 を極む」。

あつちり名 塵殺 塵らす殺しつこと、みなごろし。
 あつちり名 鞅掌 鞅は荷、掌は捧ぐる意、忙しく公事に
 従ふ事、「事務に鞅掌す」。
 あつちり名 臥秘 臥深く、秘密にて肝要なる義、「奥秘を傳
 ふ」。
 あつちり名 鸚鵡返 人より言ひ掛けられたる事を少
 し改め、又は其の儘用ゐて返答する事。
 あつちり名 阿吽 息の出入のこと。
 あつちり名 阿衡 撫政のまたの名、故事の部を見よ。
 あつちり名 足搔 足にて地を搔くこと、「馬の足搔」、又動き
 動くこと。
 あつちり名 赤心 まごころ、せきしん、木心、「赤心
 を盡して」。
 あつちり名 藜藿の名 藜藿 粗末なる食物の形容に用ゐ
 る、藜の義、「藜の藜幾何か人の役を爲さむ」。
 あつちり名 動明暮 月日を經過す。
 あつちり名 赤旗 赤地の旗、平家の旗なり。
 あつちり名 赤裸 全く裸體なる事、あかはだ、赤裸、裸。
 あつちり名 赤鬚 (一)赤き鬚、(二)西洋人を罵りて言ふ
 語。
 あつちり名 赤顔 赤みを帯びたる顔付。
 あつちり名 副 倏忽 (一)たちまち、俄に、(二)かりそ
 めに。

あつちり名 副明白 あらばに、分明に、「明白に言ひけ
 れば」。
 あつちり名 供物 神社佛閣などに、參詣人が神佛に
 供へしものを稱する語、「供物の多寡」。
 あつちり名 明處 あかるき處。
 あつちり名 秋霧 秋立つ霧、春霞に對して言ふ。
 あつちり名 飽性 物事に飽き易き性質、「彼れば飽性
 なり」。
 あつちり名 秋心 秋の物淋しき心。
 あつちり名 秋聲 秋の物淋しき聲、風の音、砧の響な
 どの類、「秋の聲物淋しき」。
 あつちり名 動飽果 いやになる、「世の中にあきはてて」。
 あつちり名 明間 (一)すきま、隙間、(二)人の居ぬ室、あ
 りて呼ぶ語。
 あつちり名 明旨 (一)そのひ、清旨、(二)無學者を罵
 りて呼ぶ語。
 あつちり名 惡意 惡しき意志ある事、惡心、惡念。
 あつちり名 惡縁 惡しき因縁、又男女の縁の思ふまゝな
 らぬこと。
 あつちり名 惡漢 わるもの、漢は男の義、無賴漢。
 あつちり名 惡感 惡しき感情、「惡感なし」。

あつちり名 惡行 惡しき行爲、惡事。
 あつちり名 惡逆 極めて道に背きたる行爲。
 あつちり名 無灰汗氣 灰汁を飽くに言ひ道はせたる
 語、満足せず。
 あつちり名 惡言 人を惡しく言ふ事、惡口、誹謗、罵詈。
 あつちり名 惡相 惡しき人相。
 あつちり名 惡疾 癩病などの惡しき疾、惡疾不治の症
 なり。
 あつちり名 惡習 惡しき習慣、「習惡に染む」。
 あつちり名 惡性 (一)惡しき性質、(二)淫奔、惡性男。
 あつちり名 握手 手を握り合ふ事、西洋の禮式。
 あつちり名 副 齷齪 事に拘りて暇なく、あくさく。
 あつちり名 惡錢 (一)質の惡しき金錢、(二)無理非道に
 して得たる金錢。
 あつちり名 惡態 惡口を言ひ掛くる事、惡罵、「人を惡態
 する勿れ」。
 あつちり名 惡黨 (一)惡人の仲間、惡徒、(二)惡人。
 あつちり名 惡道者 わるもの、あくたれ、惡漢。
 あつちり名 惡女 (一)惡心ある女、(二)容貌の惡しき女。
 あつちり名 惡念 あくいに同じ、「惡念増長して」。
 あつちり名 惡筆 手跡の拙き事。
 あつちり名 惡風 (一)惡しき風俗「惡風に染む」、(二)暴

あしやう名 亞相 大納言の唐名、

あしゆら名 阿修羅 梵語アスラ、(一)佛説に六界の一、略して修羅とも云ふ、「修羅の巷」、(二)修羅道は阿修羅に

行く道、(三)阿修羅王は、佛經の神の名、力強くして、梵

天帝釋と權を争ひ戦ふといふ、「阿修羅のあれ廻る如し」、

あしよわ名 足弱 足の弱き人、

あじろ名 網代 (一)氷原を捕らん爲、冬、川の瀬に編み

列のるもの、(二)總べて檜の木へのぎ又は竹葉なごにて網

の目の如くしたるもの、網代輿、網代車、網代笠、網代天

井、

あしわけなぶね名 葦分小舟 葦の茂りたる中を押分け

て漕ぎ行く小舟、「葦分小舟障り多し」など物事に障りある

ことに譬していふ、

あすかのはのふせ 句 飛鳥川の淵瀬 飛鳥川は大和高

市郡にあり、川流の變化多きを以て、世の變遷常なきに譬

していふ、

あせふき名 汗拭 汗を拭ふに用ゐる布帛、手拭、又はは

んげちの類、あせぬぐひ、あせのこひ、

あせをぬぐる 句 握汗 危く思ふ、「手に汗を握る」、

あそごころ名 彼處此處 あしこころに同じ、

あそびあひて名 遊相手 遊ぶ友、あそびともだち、

あそびぐらす 動 遊暮 遊びて日を過す、

あだ副 婀娜 麗に美しきこと、「婀娜たる華容」、

あだうち名 仇討 仇を報ゆる事、敵討、復讐、

あだな名 徒名 (一)うはきもの名のたつこと、徒名、

(二)人の面貌性質舉動などによつて實名の外に其の人に負

はする名、綽號、

あたまかず名 頭數 ひとかず、人數、

あたまわり名 頭割 人數に割りつくる事、

あたまをさぐ 句 低頭 頭を垂る、

あたまをなます 句 惱頭 思ひ煩ふ、

あたりまゝ名 當然 理の然るべきこと、尋常なること、

あたりさばり名 當障 さしひびき、かかりあひ、影響、關

係、

あたりをばらぶ 句 排當 勢盛にして當りに寄り難くあ

ること、

あぢきなし 形 無味氣 (一)面白くなし、物憂し、(二)か

ひなし、

あぢこち名 彼方此方 あなたこなた、あちらこちら、か

なたこなた、

あぢをさむ 句 占味 其の味を忘れずあり、

あつは名 中暑 暑氣に中りて病む事、

あつさく名 壓搾 壓して搾る事、

あつゆのみ名 榨弓 榨といふ木にて作れる弓、絞詞にも

川よ、

あつよげ名 避若 暑さを避くる事、ひしよ、

あつさりのと 副 淡泊 淡く、さつぱりと、あつさりと、

あつせい名 壓制 強ひて壓しつくる事、抑制、

あつせん名 幹旋 能く事を週旋する事、「幹旋の勢」、

あつたう名 壓倒 (一)壓しつけて倒す事、(二)他人を凌ぐ

事、壓服、

あつばれ 感 天晴 驚歎して讀むるに發する聲、適、

あつぶく名 壓伏 壓しつくる事、おしふする事、

あつまる名 東屋 四方へ屋根を葺きおろし四水柱にして

壁なき家、四阿、

あつもの名 羹 菜肉など温に煮たる汁、すひもの、

あつよく名 壓抑 強ひて抑ふる事、

あつりよく名 壓力 壓しつくる力、

あつれき名 軋轢 車のきしり合ふこと、轉じて、不和、紛

争などの意とす、

あつする 句 當擦 他の事にかこつけて勝る、あてつく、

颯す、風紙、機杼、

あつごころ名 當事 充てて頼みとする事、

あつじ名 當字 (一)國語に當てて書く漢字、(二)勝手に

當てたる字、假借字、

あつすのぼろ名 當寸法 めめて無くして事をする事、

あつあ

熟語

あてな名 宛名 手紙などに宛てて送るべき人の名、受信

人の名、

あてなしに 副 無當 目的も無く、あてごも無く、

あてかたづけ名 跡片付 總て物事の跡を片づくる事、

あてかたなし名 無跡形 跡も形も無きこと、

あてがま名 後釜 前の人の代となるべき者、候補者、

あてけなし 形 無思慮 幼なげに思慮なきこと、

あてき名 前後 あととさきと、先後、

あてつき名 跡繼 家督を繼ぐこと、相續人、藝術などの

系統をつぐにもいふ、

あてのまつり名 後祭 (一)祭禮のありて次の日、(二)事

の終りたるあと、

あてひまり名 逡巡 後へ退く事、

あてぶつ名 阿堵物 錢の事、故事欄を見よ、

あてまはし名 後廻 後に廻す事、

あてまどり名 後戻 (一)後へ戻る事、(二)事の退歩する

事、

あてなぐらます 句 晦跡 行方を隠す、あてなかくす、

あてなつける 句 追跡 跡を追ひて探る、尾行す、

あてなかし 句 穴賢 噫、長しの意、

あてながた 副 強 分に過ぎて、強ひて、おして、

あてながし名 穴探 人の缺點を探索する事、

あてな

二二九

あなだこなた 名 彼方此方 あちこちに同じ。
あなはからん 名 副 豈斗 思ひがけ無く、意外に。
あはあはし 形 淡淡 (一) 甚淡し、(二) 趣味なし。
あはう 名 阿房 愚なる事、たはげ、痴。
あはたつ 動 粟立 (一) 寒さ又は恐怖の爲め、肌の毛孔起つ、毛起、(二) 雲など深く立つ、「雲のあはたつ山」。
あはち 名 感 嗟哉 事の成に起らんとする時、驚きて發する聲、「あはちや落ちんとする時」。
あひえんきせん 名 合縁氣縁 男女の縁、氣心のよくあひたる縁。
あひおひ 名 相生 同じ處に諸共に生ひ出づること、「相生の松」。
あひきやく 名 相客 旅宿にて同室の客。
あひくち 名 匕首 短刀のこと。
あひたい 名 相對 (一) 互に向ひ合ふ事、(二) 二人だけにて事を計らふ事。
あひたがら 名 間柄 つつきあひ、關係、「親類の間柄」。
あひづ 名 合圖 (一) 軍中にて烽火又は號旗などにて事を知らずる事、(二) 轉じて手眞似、掛聲などにて事を知らずる事。
あひて 名 相手 (一) 相共に事をする人、あひぼう、(二) 相向ひて闘ふ人、「碁の相手」。

あひのり 名 相乘 (一) 車などに共に乗る事、あひのりぐらとの略。
あひぼう 名 相棒 (一) 駕籠かきの相手、(二) あひてに同じ。
あひみたがひ 名 相身互 互に助けもし助けられもすること、「武士は相身互」。
あひもち 名 相持 (一) 共に持つ事、(二) 費用などを等分に負擔する事。
あひやど 名 相宿 旅會に同宿する事、合宿。
あひさき 名 副 合離 合ふさ離るるに、とかくに、此方彼方に、これにつけ彼れにつけ、一方よければ一方悪くて等の義、「あふさきをさきに思ひ亂れて」。
あひじやう 名 壓狀 (一) 人を壓しけつて強ひて書かする文、(二) 轉じて強ひて壓しつけらるる事、「無理壓狀」。
あふとつ 名 凹凸 土地の窪き處と高き處と。
あふちやく 名 押着 押し強く我が儘なる事。
あふへい 名 押柄 騎り高ぶる事、傲慢、尊大。
あふらみ 名 脂肉 肉の脂肪多き部分。
あふらぶ 名 油繪 繪の具、みつだの油を加へて、紙布などに描く一種の繪。
あぶらばさる 名 取油 人を責めて苦ましむ。
あぶこ 名 副 反對 さかさまに、はんたいに、

あま 名 阿蒙 支那の俗語、こごもとの義、吳下の阿蒙を見よ。
あまほほひ 名 雨覆 總て雨を防ぐ爲に物に覆ふもの。
あまがける 動 天翔 空をかけること、鳥などにも、靈魂にもしやぶ。
あまがさ 名 雨傘 雨天に用ふる傘。
あまぐも 名 雨雲 雨の降らんとする時出づる雲。
あまごひ 名 雨乞 旱の時、降雨を神佛に祈りをふ事、祈雨。
あまごかる 名 天離 都より田舎を見れば、天と共に遠く離りて見ゆるより鄙の林詞とす。
あまた 副 數多 數多く、甚しく、「數多見ゆ」。
あまつひ 名 副 刺 あまひさへの音便、あるが上に、
あまつひ 名 雨續 雨天の續く事。
あまつひ 名 天津日嗣 天皇の御位の尊稱。
あまつひ 名 天津乙女 天女、又五節の舞ひひめ。
あまご 名 雨戸 家のめぐりに立つる戸。
あまのがは 名 天河 小き遊星が集りて秋夜空に一帶の河の如く見ゆるもの、銀河。
あまのひ 名 鰯の鱗 漁夫のもの言ひをいふ、漁夫等の詞の詠りな、鳥の鱗にるに譬ふ。
あまのたくなは 名 海士の栲繩 海士の引く綱につけた

あまのはら 名 天原 泛く天上を指す語、大空。
あまもやう 名 雨様 雨を備す景色、あめもやう、雨意。
あまよ 名 雨夜 雨天の夜「雨夜のつれづれ」。
あまなぶね 名 鰻小舟 流りに用ふる小き舟。
あみた 名 阿彌陀 梵語、無量壽佛と譯す、四方淨土の佛。
あみど 名 編戸 竹また木など編みて作れる戸。
あみもの 名 編物 (一) 總べて編み造るもの、(二) 特に毛織などに造る編細工。
あんあん 副 暗々 暗さま、聲の仄に聞ゆる状、「暗々として靉深」。
あにい 名 安意 意のやすまること、安心。
あにい 名 安慰 心を安んじ、なぐさむること。
あにい 名 安逸 勞苦せず安樂に月日を過す事。
あなが 名 晏駕 天子の崩去の事。
あなごう 名 安康 安らかなること、おだやかなること。
あながう 名 暗號 符牒を以て定めたるしるし。
あながふ 名 暗合 物事の自然に符合する事。
あなかん 名 安閑 身は安く、事は閑なる事、又徒らに口を暮す事。
あなき 名 安危 安穩と危急と、「國家の安危に關す」。
あなき 名 暗記 そらに記憶する事、そら覺ゆ。

あんぎや 名 行脚 僧の諸國をめぐりて修行すること、
あんぐ 名 暗愚 愚にして理に暗き事、
あんぐう 名 行宮 天皇の行幸の時所在に設けらるる假宮、行在所に同じ、
あんぐわい 名 安臥 安らかに臥すこと、
あんぐわい 名 案外 思案の外、意外、存外、慮外、
あんぐ 名 闇黒 眞に闇き事、くらやみ、「闇黒世界」、
あんざ 名 安坐 落ちつきて坐り居ること、又あぐらをかきて居ること、
あんざつ 名 暗殺 人知れず殺す事、やみうち、
あんざん 名 暗算 心の中にて計算する事、心算、
あんざん 名 安産 やすらかに子を産む事、平産、
あんじつ 名 暗室 闇黒なる室、
あんじつ 名 庵室 逃世者のすみか、又いほり、
あんしん 名 安心 (一)心配の無き事、安堵、(二)悟を開きて心に怖畏なき事、
あんしんりつめい 名 安心立命 生死の悟を開きて未來永劫の安心を得る事、
あんじやく 名 暗弱 懦弱にして暗愚なる事、
あんじやく 名 暗誦 詩文等を暗記して讀む事、
あんせう 名 暗礁 海底に隠るる巖石、
あんぜん 名 安全 無事なる事、安寧、「家内安全」

あんぜん 副 晏然 安心して、「安を晏然として止むべけんや」、
あんそくじつ 名 安息日 耶蘇教にて日曜日稱、
あんたい 名 安泰 やすらかなる事、平安、安寧、
あんたん 名 暗憐 暗くして憐なること、又まびしきにもいふ、
あんち 名 安置 (一)据え置く事、(二)神佛の像などを崇め祀る事、
あんご 名 安堵 堵は牆なり、牆内に安んじ居るをいふ、(一)安心して住む事、(二)轉じて心の落着く事、安心、
あんない 名 案内 (一)物事の内幕、内情、「案内を知る」、(二)道をしるべしする事、導、(三)告げ知らせる事、通知、(四)まねき、招待、
あんないじやう 名 案内状 事を告げ知らせる書状、通牒、
あんねい 名 安寧 禍亂なきなくしてやすらかなる事、安泰、安全、平安、
あんばい 名 安排 (一)物事をよき程に排へ据うる事、(二)よき程に味をつくる事、調味、鹽梅、(三)程合、具合、加減、程度、(四)病氣の容體、病勢、
あんび 名 安否 安全なると否らざると、「安否を訪ふ」、
あんま 名 按摩 (一)身體を揉みて悪血を散す法、「按摩を取る」、(二)按摩の療治を業とする人、多く盲人の業なり、

(三)轉じて盲人、瞽者、

あんみん 名 安眠 安らかに眠むること、
あんみんぼうがい 名 安眠妨害 夜、大聲なき發して安眠の妨害をする事、
あんな 名 暗夜 暗き夜、やみのよ、闇夜、
あんらく 名 安樂 らくに樂しき事、
あんるる 名 暗涙 人知れぬ涙、暗涙に咽ぶ、
あんなん 名 安穩 やすらかに穩なる事、平穩、無事、「國家安穩」、
あめい 名 蛙鳴 蛙の鳴くこと、其聲きわがしければ露しき形容に用ふ、「蛙鳴蟬噪」、
あめつち 名 天地 天と地と、てんち、
あめのした 名 天下 (一)國土の總稱、てんか、(二)特に日本全國、
あやなく 副 生憎 (一)心の儘ならず、(二)折悪しく、詭りて、あいにく、
あやめ 名 文理 すぢあや、差別、わけ、「あやめも分かす」、
あやめ 名 阿諛 媚ひ諂ふ事、おもしろこと、諂諛、
あざあらし 形 粗粗 甚粗末なり、
あざあらし 形 荒荒 甚荒し、猛、
あざだつ 副 荒立 荒くなす、激動す、「人の心荒立つ」、
あらて 名 新手 (一)新しき兵隊、生兵、(二)新に仲間に入

加入したる人、

あらひばり 名 洗張 衣服などを洗濯して板に貼り日に乾す事、
あらまし 副 大概 おほかた、あらかた、あらあら、大抵、大略、「大概にいふ」、
あらゆ 名 新湯 未、浴せざる風呂湯、
あらゆる 副 所有 有る限り、有るだけ、
あられうぢ 名 荒療治 手荒き療治をする事、
ありあけ 名 有明 (一)月の有るまま夜の明くる事、殘月、(二)夜の明くるまで點じ置く燈、ありあけ行燈、
ありあひ 名 有合 差し當り其場にあるもの、ありあはせ、見在、
ありあり 副 有有 分明に、はつきりと、
ありか 名 在處 物の在る處、所在、
ありがたし 形 難有 (一)有る事難し、稀なり、希世、(二)かたじけなし、忝、
ありぎり 名 有限 有る限り、ありたけ、
ありつゝ 副 在着 (一)身の置き場定る、住み着く、(二)似合ふ、
ありとあらゆる 句 有限 世に在る限り、
ありのままに 副 有儘 辯ひかくしなごせず有儘に、姿のまゝに、

あはれす 動 舞す 舞臺をなす、馳走す、あるじは、名詞にて主人をいひ、やがて其の主人の舞臺することをいひ、

あはれほど 名 彼程 あればかり、あれぐらゐ、

あわたたし 形 惶急 あはてたる状態にてあり、

あわゆき 名 泡雪、沫雪 雪のこと、又春の雪、消ゆ易きよりいふ、

あなうなばら 名 青海原 蒼々とみゆるひろき海、

あなざらし 形 青臭 青草の如き臭あり、草氣、

あなざら 名 青空 青々と晴れたる空、青天、蒼天、

あなざら 名 青二歳 物慣れぬ少年、

い 副 怡怡 和樂の状、嬉しき状に言ふ、よろこばしき意「顔色怡々として」、

い 副 依依 柔弱なる状に言ふ、「楊柳依依」

い 副 依違 依るが如く違ふが如く決せざる状に言ふ、猶ほ「依違決せず」、

い 名 異域 異國、他國、「死しては異域の鬼と爲らんと」、

い 名 友愛 兄弟又は朋友間の愛情、

い 名 優渥 やさしく、れんごなる事、

い 名 遊興 遊びたのしみ、

い 名 優懼 憂へ懼るゝこと、

い 名 優遇 手重に待遇すること、優待、

い 名 幽懷 物しづかなる意、

い 名 憂患 うれへわづらひ「外患内憂」、

い 名 有形 形を具へたるもの、形而下、無形に對して言ふ、

い 名 遊藝 歌舞など遊興の藝能「遊藝三昧」、

い 名 遊撃 戦列の外にありて、必要に應じ味方を援けて敵をうつつこと、

い 名 幽玄 趣旨深くして知り難きこと、及び難く勝れたること、

い 名 有功 てがらの有る事、「有功章」、

い 名 幽谷 山深く静なる谷、「深山幽谷」、

い 名 憂國 國事を憂ふること、「憂國の士」、

い 名 憂愁 うれへ、憂思、

い 名 優柔不斷 ぐづぐづとして決せざる事、優游不斷、

い 名 有識 物事を廣く識れる事、「有識の士」、

い 名 郵書 郵便にて送る手紙、

い 名 由緒 傳へ來れる事柄、由来、ゆゑ、

い 名 宥恕 ため許す事、「宥恕を乞ふ」、

い 副 優優 落着きて急かぬ状、氣長に、

い 副 幽幽 かすかに、奥深し、「幽幽たる南山」、

い 副 自由 (一)自の状に言ふ、油、「由々として退く」(二)猶豫の状に言ふ、「由々として進む」、

い 副 呦呦 鹿の叫び聲に言ふ、

い 副 悠悠 (一)氣長く、のんきに、優優「悠悠閑閑」(二)遠き状に言ふ「蒼天悠悠として」(三)憂ふる状に言ふ「悠々として思ふ」、

い 名 誘引 誘ふ事、

い 名 遊鱗 氣の静して晴れぬ事、憂鬱症、

い 名 游泳 水をおよぐ事、

い 名 有益 利益の有る事、

い 名 誘掖 誘ひ扶くる事、人を教誨するにいふ、

い 名 遊宴、遊行、遊燕 いづれも放蕩にあそぶこと、

い 名 優艶 やさしきすがた、あてやかなること、

い 名 誘拐 詐りてかどわかすこと、

い 名 幽界 日に見ゆぬ幽冥の世界、

い 名 遊學 他國に行きて學ぶ事、「遊學生」、

い 名 友誼 朋友のよしみ、

い 名 遊戯 (一)遊び戯るる事、(二)特に體操の一種、

い 名 幽居 世をさけ静かなる地に住む、又其住居、

い 名 優劣 力優りたる者勝ら、力劣りたる者敗るる事、

い 名 有職 ものしり、又故實を明らかにする事、

い 名 遊食 職業に就かずして暮し居る事、浮浪、「遊食の民」、

い 名 幽邃 景色などの奥深くして閑靜なる事、

い 名 優勢 敵に優れたる軍勢、

い 名 郵稅 郵便物を送るに要する税金、

い 名 遊說 己が意見を説きまはるること、

い 名 優詔 有り難き詔勅、

い 名 郵船 郵便物を運送する船、

い 名 幽然 雲の沸く状「天油然として雲を起す」、

い 名 悠然 氣長に、落着きて、

い 名 郵送 郵便を以て送達する事、

い 名 遊道 遊びなまぐる事、

い 名 遊道 交り遊ぶに同じ「遊道日に廣し」、

い 名 優待 厚き待遇、もてなし、

い 名 誘導 誘ひ導く事、

い 名 優長 氣長なること、心の落着きてあること、

い 名 優等 物事の優れたる事、劣等に對して言ふ、

いさむく名有徳 徳あること。徳を具ふること。
 いさび名優美 やさしく美しき事。
 いさぶく名有福 何の不自由も無くゆたかなる事。裕福、蓋有。
 いさぶつ名尤物 (一)絶異の物、逸物、(二)特に美人の稱。
 いさへい名幽閑 人を一室に閉ぢこむこと。
 いさほ名遊歩 遊びあること。散歩。
 いさまう名勇猛 勇ましく強く、猛きこと。
 いさめい名幽明、幽冥 くらきと、あかるきと、此の世と冥土、「幽明其境を異にす」。
 いさめい名有名 名高き事、知名、著名、有名無實は名のみにて、實なきこと。
 いさもん名憂悶 憂へもたふる事。
 いさや名遊治 容貌のみ飾りて遊び居ること。遊治郎、いさよ名猶豫 (一)決せざる事、ためらふ事、躊躇、(二)時日を延す事、延引。
 いさりよ名憂慮 氣に懸けて憂ふる事、心配。
 いさりよ名有力 勢力有る事、有力者。
 いされき名遊歴 國國を歴廻る事。
 いされつ名優劣 さざりおとり「優劣劣敗」「優劣なし」、いうる名有爲 役に立つべき事、「有爲の少年」。

いさもん名遊園 公衆の遊ぶ爲、設けたる廣き庭園、遊苑、公園。
 いえつ名怡悅 うれしと喜ぶこと。
 いかう名意向 意の向ふ所、「意向を聞く」。
 いかく名異學 異端の學説、「異學の禁」。
 いかばり副如何許 (一)どのくらゐ、何程、幾何、「いかばかりあらん」(二)どのやうにか、何程か、いかに、「いかばかり喜ばん」。
 いかものつり名噴物造、怒物作 殿しく拵へなしたる太刀。
 いき名意氣 (一)心だて、氣張、「意氣揚々として」(二)風采のみやびたる事、瀟洒。
 いき名意義 意味に同じ「意義を曉らす」。
 いき名異議 他に異りたる議論。
 いき(き)副活活 勢盛に、活潑に、「活々と水を上げたるつくり花」。
 いきぢ名意氣地 氣の張り、氣力、「意氣地無し」。
 いきやう名異郷 境異なる地方、他國。
 いきやうやう副意氣揚揚 誇り顔に、意を得たるさまに「意氣揚々として自得す」。
 いきく副昱昱 輝きて明に。
 いきく副郁郁 盛に榮ゆる狀、

いささのには名軍の庭 戰場、戦陣。
 いさじ名育兒 小兒を養育する事。
 いさたび副幾度 何度、幾回。
 いくたり名幾人 (一)いくばくの人、(二)多くの人、「幾人も来る」。
 いさごおん名異口同音 衆人均しく語を發する事。「異口同音に答ふ」「異口同音に歌ふ」。
 いさば副幾何 いかばかりに同じ。
 いさへにも副幾重 ひたすらに「幾重にも頼む」。
 いさわい名以外 此の外、其他。
 いさわい名意外 思ひの外、はからず、意外外、「意外に抄取らす」。
 いさある副生捕 生きながら捕ふ、生擒す、「敵を生捕る」。
 いさばな名活花 草木の花枝を瓶に生け置きて、室内の飾とするもの、挿花、生花。
 いけん名意見 (一)心に思ふ所、見込、(二)意見を告げて諫め替はる事。
 いけん名異見 人と異なる見込、異存。
 いご名以後 此の後、以來。
 いご名呬語 讀書の聲、「呬語の聲」。
 いかさうじ名異口同辭 各人の言ふ所の言、皆一致

いさごおん名異口同音 衆人均しく語を發する事、異口同音、異口同音。
 いさつわい名意想外 いわいに同じ。
 いし名異志 不軌を圖る心、謀叛心。
 いし名意思 (一)こころざし、かんがへ、料見、(二)心理學の語、動作をなさしむる心意の作用。
 いし名懿旨 あり難き思召し。
 いし名願使 願にて人を差圖す、「願使に甘んず」。
 いし名異事 異常なること、非常なること。
 いし名異時 他日、いつか、「異時を期す」。
 いしき名意識 眞理を認め知る心の力。
 いしずり名石摺 (一)石碑などの文字を紙に摺り取る事、(二)書簡に刻みて廻りの地を黒く刷りたるもの。
 いしじつ名異日 他日、いつか、異時に同じ。
 いしのきぼし名石階 石にて造りたる階段、いしだん。
 いしがみ名石碑 紀念の爲に其の記事を石に刻み付けて建て置くもの。
 いしん名異心 善からぬ見見。
 いしん名懿親 殊に親しき父子兄弟等の間。
 いしんでんしん句以心傳心 口にて述べ盡くせぬ理法、心より心に傳ふる事。
 いしやう名意匠 (一)心づもり、趣向、「慘澹たる意匠」(二)發明せる特別の工夫、「意匠家」。

いぢぢう名 異常 世の常ならぬ事、非常。
 いぢぢう名 以上 (一)これより上、(二)上の如し、書状、目録などの結語に用ゐる。
 いしゆ名 意趣 (一)心意の趣、心ばせ、(二)怨恨、
 いしよく名 移植 植物を植ゑかふる事。
 いしよく名 衣食 (一)衣服と食物と、衣食足りて榮辱を知らず(二)こころしむき、生計、
 いすう名 異敷 特別の禮遇に言ふ辭、
 いぜん名 以前 (一)これより前、(二)古昔、往時、
 いぜん副 依然 元のまゝに、其の儘に、
 いそぶ名 磯振 磯に寄する浪、磯浪、
 いそん名 異存 他と異なる存じ寄、異見、
 いそもの名 磯物 海藻の稱、昆布、鹿尾菜、若布の類、すべてにいふ、
 いそわ名 磯回 磯の邊、磯のまはり、
 いたいけ名 痛氣 幼稚に可愛げなる状、「痛氣盛り」、
 いたいたし形 痛痛 甚、いたまし、いと氣の毒なり、
 いたぐ名 依託 委ね預ける事、「依託金費消」、
 いたしかゆし句 痛痒 相半せる利害に決定し難き狀に譬へこふ、
 いたづき名 勞、所勞 勉むること、骨折りすること、また、病氣、

いたで名 痛手 重き手さず、重傷、深手、
 いたみいる動 痛入 心に痛み思ふ、恐れ入る、
 いたん名 異端 (一)正道に非ざる事、(二)異教、
 いち名 意地 (一)心に思ひ込みたる事、(二)思ひ込みたる事を張り通さんとする心、
 いちい名 一葦 小き舟、「一葦帶水」、「一葦の如く所を縦にす」、
 いちおう副 一應 ひととほり、ひとわたり、
 いちがいに副 一概 (一)おしなべて、(二)一時に、
 いちぎ名 一義 一義、一理、一理屈、わけ、
 いちげんこれをおほふ句 一言蔽之 一言にして其の意を盡す、
 いちご名 一期 生れてより死ぬるまで、一生涯、
 いちごん副 一言 (一)ひとことば、(二)少の言、
 いちご名 一時 かつて、ある時、
 いちせんきん句 一字千金 筆蹟又は文章などを非常に珍重する意に言ふ、
 いちじつせんじり句 一日千秋 物事を待ち詰ぶるに用ゐる語、一日の間も千年の如き心地す、「一日千秋の思」、
 いちじつのおちやう句 一日長 少しく優れる事、
 いちぞん名 一存 己れ一人の考、
 いちぢぢう副 一定 必ず、確に、きつと、

いちじに副 一途 ひとすぢに、「一途に思ひ込む」、
 いちぢく名 一讀 一通り讀む事、
 いちぢん名 一任 事、事を委任する事、
 いちねん名 一念 一筋の念、一心、
 いちはん副 一番 (一)甚しく、最、第一、「一番好し」、「一番低し」、「二ひとたび、假に、「一番試み給へ」、
 いちぶ名 一部 書籍の一つつき、「二部の書」、
 いちひいらく句 一別以來 一度別れてより此の方、
 いちぢぢうじん名 一味同心 心を合せて味方すること、
 いちぢいひをばさるかす句 一鳴驚人 一たび手を下せば人を驚かしめんとすの意に言ふ、
 いちめん副 一面 おしなべて、全體に、
 いちもつ名 逸物 衆にすぐれたるもの、
 いちぢう副 一樣 同じ有様に、
 いちぢぢらぢぢ句 一陽來復 陰曆十一月又は冬至を言ふ、極陰の十月去りて、一陽の十一月來り復る、
 いちぢう名 意中 心の中、かんがへ、意裏も同じ、
 いちぢう名 移住 他へ移り住む事、
 いちらん名 一覽 一わたり見る事、見るに便にしたる表の類、一覽表、學校一覽、
 いちり名 一理 一の道理、
 いちぢぢがく名 一利一害 一方には利益となり他方

には損害となる事、一得一失、「一利一害は數の免れざる所なり」、
 いちぢぢ名 一律 一樣に同じ、「千通一律」、
 いちぢる名 一縷 ひとすぢ、「一縷の望」、
 いちれん名 一聯 律詩の一對句を聯といふ、
 いちあん副 一圓 全體に残らず、
 いちぢぢてまんをしろ句 以一知萬 一理を推して萬理を知るとの意に言ふ、
 いちう名 逸遊 遊びくらすこと、
 いちかう副 一向 (一)ひとすぢに、(二)全く絶えて、「一向知らず」、
 いちかげん名 一家言 自己の主張して唱へたる一派の論說、又獨斷の言論、
 いちき名 一揆 (一)程度の同一なる事、(二)轉じて徒黨、同盟、
 いちきたうせん句 一騎當千 一人の騎士の勇にて千人の衆に當るべし、「一騎當千の勢」、
 いちぢに副 一氣 (一)すぐれた、ただちに、(二)ひととき、「一氣呵成」、
 いちぢよ名 逸居 怠りて暮すこと、
 いちぢよ名 一舉 一度する事、「一舉して之に勝つ」、
 いちぢよ名 一興 一つの面白み、「當座の一興」、「時の

一興
 一擧手一投足 一度手を擧げ、一度足を動す如き僅少の勢力、
 一擧兩得 一つの事をして二つの利益ある事、
 一攫千金 一つかみに千金を得る、冒險事業をなすに喩ふ、
 一貫 一すぢに貫く事、「首尾一貫、」
 一系 同じ血筋、「萬世一系、」
 一件 一つの事柄、「二或事件、」
 一見 一目見る事、「一見して知る、」
 一刻千金 一刻の時間に千金の價値ありといふ事、「春宵一刻價千金、」
 一箇人 一人一人、「二公の資格を去りたる身分、一私人、」
 一切 すべて、悉皆、「一切衆生、」
 何時 どの間の間に、「知らぬ程に、」思ふよりいつしか満るる秋かな、「いつか、早晚、」
 一心不乱 外に心を散さぬ事、
 一唱三歎 一人之を唱へて僅、三人之に和するのみなるも餘音の不盡なるを稱美して言ふ、「誤りて一たび之を唱へて幾たびも歎稱する意に言ふ、」

一緒 ひとまとめ、合一、
 一所懸命 二一所の知行を命に懸けて大切に思ふ事、「二訛りて一生懸命、いのちがけ、必死、」
 一齊 ひとそろひ、一度、一列、「一齊射擊、」
 一笑 二一度笑ふ事、「二一つの笑ひぐさ、」
 一洗 さっぱりと奇麗にすること、
 一層 ひときは、ひとしほ、「一層の面白み、」
 一體 二おしなべて、一統、一般、全體、自然、世間一體、「二本を言へば、元來、一體事の起りは、」
 一端 ひとし、一部分、一斑、「其の一端を知るべし、」
 一旦 二一時、一度、「一日思ひ立ちたる事、」
 一致 同一になる事、同意、
 一張一弛 或は張り或は弛むる事、
 五車 五車に積む程の書籍の多きをいふ、「博學の儒學五車に富む、」
 一定 一つに定りたる事、一樣、「一定の收入、」
 一丁字 一個の文字、「一丁字を識らす、」

一朝一夕 假初なる事に用ゐる語、「一朝一夕には行はれ難し、」一朝一夕の故にあらず、
 一轍 二同じごと、「古今一轍、」二筋に思込みて物に動かぬ事、「いつく、」
 一天四海 一天の下、四海の内、宇内、世界、
 一統 二一つに統へ括る事、「天下に統一に歸す、」二同「御一統、」
 一得一失 一方に得て他方に失ふ事、一利一害、
 一鵝争 雙方争ひつゝある間に第三者に獲らるる事に譬へて言ふ、「鵝争は漁夫の利、」
 一敗塗地 一朝にして敗れて復起つ能はざるに言ふ、
 一般 二いつたいに同じ、「世間一般、」二世の常、なみ、「三同じき事、」
 一斑 二いつたんに同じ、「一斑を見て全豹を知る、」
 溢美 過當に稱美する事、「溢美の言に非ざるなり、」
 一筆 二一本の筆、「二墨つきなしにひと筆にて書きし事、」二筆に書く、「三筆を執りて書く事、」

一筆啓上仕候、「
 一斷 喜憂の顔付に言ふ、
 一擧 毎度、
 一夜 夜二更今の十時なり、し夜の鐘は天子の讀書せらるること、「甲夜事を視、乙夜書を觀る、」
 逸樂、佚樂 逸豫又は游豫と同じ、
 逸話 すぐれたる話、
 以逸待勞 我れの餘裕を以て、敵の疲勞に乗ずとの意に言ふ、
 移牒 回章をまはすこと、
 移轉 引越、住所をうつすこと、
 異等 特別に異りて、人物の勝れたるをいふ、「秀才異等、」
 異同 同じきと、異なるも、又同の義にも、異の義にも用ふ、
 移動 他所に移ること、
 懿德 美德に同じ、懿は醇美なり、
 以內 此れより内、
 往年 過ぎ去りし年、往時、
 犬死 徒に死ぬる事、徒死、
 命限 生命のある間、生涯、
 懸命 命を失ふをも顧みずして事を行ふ事、

いばしんぞん 句 意馬心猿 情意の制し難きをいふ。「心猿猴の如し」「心馬惡道を馳す」

いはつたふ 句 傳衣鉢 (一)佛法の傳授、(二)轉じて藝術の血儀を傳ふるにも言ふ。

いはまほし 形 欲言 言はんと欲す、言ひたし。

いはゆる 副 所謂 世に言はるる所、常に言ふ所。

いははす 動 言交 (一)互に言ふ、(二)語りて誓ふ。

いひかひなし 形 無言甲斐 (一)言ひて益なし、いふかひなし、(二)卑法なり、ふがひなし。

いひぐさ 名 言種 (一)物言ふ種、言分、申分、口實、辭柄、(二)不平を鳴す事。

いひつたへ 名 言傳 言ひ傳へ來れる事、口碑、傳説。

いひつる 動 言募 言ひ張る、主張す、昇論す。

いひならはし 名 言習 習慣として言ふ事、口癖。

いひめけ 名 言脱 言ひ抜くる事、遁辭。

いひひらき 名 言開 言ひて理由を明にす、いひわけ、辨明、辨解、分曉。

いひやう 名 言條 言ひさま、いひまはし。

いひわけ 名 言譯 いひひらきに同じ。

いひやう 名 悒悒 心安からず憂ふること、ふさぐ、鬱憂鬱。

いふく 名 畏服 畏れて服従すること。

いふじやう 名 揖讓 互に禮して譲り合ふこと、支那の禮なり、遜讓、謙讓などに同じ。

いふばかりなし 形 無言計 言ひ盡されず、不可言。

いへう 名 意表 思ひの外、案外、「意表に出づ」

いへぢ 名 家路 (一)其の家の方へ行くべき路、(二)我が家に歸る路、歸路。

いへめし 名 家主 (一)一家の主人、戸主、(二)貸家の持主又は差出人、大屋。

いほきり 名 五百霧 深くこめたる霧。

いまいま 形 忌忌 (一)思ひ慎まれてあり、(二)思ひ嫌はし、厭ふべし、(三)憎く腹だたし、「いまいましき事をせり」

いまさら 副 今更 今に至りて事新しく、「今更如何にかせん」

いまどき 名 今時 現時、現今、當時、當世などに同じ、いまもつて 副 今以 今となるまで、今に、

いまやう 名 今様 歌の一體、七五、七五、七五、七五の四節八句より成れるもの、又今風、當世風。

いみ 名 意味 こと、意義。

いみしちやう 句 意味深長 意味奥ゆかし、「意味深長の文」

いんいつ 名 淫逸 放逸に同じ、爲すこともなく、心のま

まに遊ぶをいふ、安佚、快樂。

いんいん 副 陰陰 寂寞たる状に言ふ、「陰々として、山寺の鐘遠く聞ゆ」

いんいん 副 殷殷 (一)賑はしく盛なる状に言ふ、(二)雷鳴砲聲などに言ふ、「こゝろこゝろ」「殷々たる砲聲」

いんいん 副 淫淫 流るる状に言ふ、「涙淫々として霞の若し」

いんう 名 陰雨 (一)空曇りて雨降る事、(二)しほほしほと降る雨、ながあめ、霖雨、淫雨。

いんうん 名 細縷 天地の氣合して和するをいふ。

いんうつ 名 陰鬱 (一)心氣の沈む事、埋鬱、(二)樹木の蔽ひ繁れる事。

いんうん 名 陰雲 空を覆ふ暗き雲。

いんえい 名 陰影 うつりかけ、かげ。

いんえん 名 陰縁 連続せる状をいふ、又他につままはる意にもいふ。

いんえん 名 因縁 (一)ちなみ、ゆかり、由來、由緒、(二)定まれる事。

いんかん 句 殷鑑不遠 鑑み戒むべき事は遠く古代に求めずとも近く目前に在りとの意に言ふ、鑑み戒むべき例、失敗の模範、過失の實證などいふ義。

いんき 名 陰氣 陽氣に對する語、(一)物靜にして活動せ

ざる事、(二)氣の塞ぐ事、幽鬱。

いんきり 名 飲泣 すすり泣きすること、聲を立てずに泣くこと。

いんきん 名 懇懇 (一)れんご、丁寧、鄭重、(二)懇懇を述す、

いんきよ 名 允許 ゆるし、允可、許諾。

いんぐわ 名 因果 (一)原因と結果と、(二)原因に對する結果、むくい、因果應報、「(三)悪しき果報、不仕合」

いんけつ 名 引決 自殺すること、責を引きて身を殺すこと、「引決自裁」

いんけん 名 引見 召し見ること、對面すること、接見。

いんけん 名 隠見 ほの見ゆること、見ぬ隠れすること、「燈火隱見」

いんけん 名 陰險 外貌には、さあらかげにて内心の狡猾なる事。

いんご 名 隱語 意味を隠したる語、かくしことば、謎符、微。

いんごう 名 咽喉 (一)のど、(二)要害の地。

いんごふ 名 因業 佛經の因縁ある惡果より出でて、無情頑固なることをいふ。

いんさつ 名 印刷 版にて文字などを摺る事。

いんし 名 淫祠 祀るべき理なきに祭れる神、怪しき社、淫

いんしふ名 因襲 前よりの習慣、沿襲。「因襲、日久し
く。」
いんしん名 殷賑 豊に足り充ちて賑ふこと、殷阜、殷富、
殷修、繁昌。
いんじゆん名 因循 (一) 舊きに循ひて行ふ事、(二) 進む
心の無き事、意氣張なき事、「因循姑息」
いんしやう名 引證 證據を引くこと、「引證該博」
いんせき名 姻戚 結婚したるに於いての親屬、姻族。
いんそつ名 引率 引き連るる事。
いんたう名 允當 正しく當れること、適當、正當、
いんどう名 陰徳 人に知らせず善を行ふ事、
いんかく名 陰匿 かくす事、秘密にする事、
いんなん名 隱遁 世を厭ひて、山林などに隱るること、隱
遁者、隱士、
いんび名 隱微 微細の物の暗處に隱れたる意、外に顯れ
ぬ事、幽微、玄微、
いんぶんいんぶ名 允文、允武 文武に長じたるをいふ、
允は信なり、
いんそい名 隱蔽 包み蔽ふ事、
いんめつ名 湮滅 亡び絶ゆる事、自然に廢れて跡方なく
なること、埋微、

いんやく名 隱約 隱微にして簡約なること、
いんよう名 引用 引證に同じ、引證に用ふる書物、
いんりん名 淫霖、霖霖 長雨に同じ、久雨之を淫といひ
淫之を霖といふ、霖雨、
いとおつなしに 副 無否應、是非を言はせず、無理無體
に、
いやく名 意譯 文章の意味を翻譯する事、
いやはてに 副 彌果 最後、最後などの意、
いやすし 副 彌増 いよいよ多く、ますます、
いらい名 依頼 人に依り頼む事、たのみ、倚頼も同じ、
いらい名 以來 (一) 其れより此のかた、(二) 今より後、以
後、「以來慎むべし」、
いらいらと 副 刺刺 刺さるる感に言ふ、(二) 氣
のせく狀に言ふ、
いりかはり名 入替 入り替る事、交代、
いりかはりたかはり 副 入替立替 入替立替、出入の
頻繁なるに言ふ、
いりちがふ 動 入違 (一) 間違ひて入る、(二) 互に入込
む、犬牙、
いりん名 彝倫 人の常を守るべき道理、彝は常、倫は理
なり、
いれちあ名 入智恵 他より注入したる智恵、

いろころも名 衣、彩衣 種々の色に染めたる衣服、色
の美なる衣服、
いろつや名 色艶 (一) 色とつやと、光澤、(二) 顔の色、
いろん名 異論 意見を異にしたる議論、
いろう名 以往 (一) 此の後、後來、以後、(二) 誤りて、以
前、往時、
いゝ名 依違 決しかねる貌、「依違決せず」、
いゝ名 異域 異國、他國、「死しては異域の鬼と爲ら
ん」、
ういう名 烏有 いづくんぞあらんの意、全く消失する理
「烏有に歸す」、
うえん名 有縁 因縁ある事、ゆかり有る事、「有縁無縁」
うかうか 副 浮浮 (一) 心落着かずして、(二) 思慮分別も
無く、輕忽に、飄然、「うがかか日を送る」「うかうかして水
に陥る」、
うがふ名 烏合 寄り集りの軍勢、「烏合の衆」、
うきうき名 浮浮 心の浮かるる狀に言ふ、「うきうきとの
みなる心かな」、
うきしづみ名 浮沈 (一) 浮くと沈むと、(二) 盛なると衰
ふると、榮枯、

うきたつ 動 浮立 (一) 大に浮る、「うきたつ」、(二) 騒ぎ
立つ、騷擾す、「世の中うきたちて」、
うきよ名 憂世 (一) 憂多き世、濁世、塵世、(二) 水に浮
へるが如き世、定めなき世、浮世、(三) 此の世、現世、
うきよく名 紆曲 ながりくねり、廻り違きこと、
うくわ名 羽化 (一) 蝶の卵を生じて飛ぶ事、(二) 仙人に
なる事、「羽化して登仙するが如し」、
うくわい名 迂回 逆まはりをする事、
うくわつ名 迂濶 深く考へずして、うかりと、輕率に、迂
濶に、「迂濶に心は許されず」、
うけあひ名 請合 請け合ふ事、保證、
うけおひ名 請負 豫め損益を見積りて、其の事業を引受
くる事、
うげき名 羽檄 檄は木簡、徵召に用ふ、戦時のふれ文、「羽
檄を以て兵を徵す」、飛檄、
うげこむ 動 受込 引受く、
うげしよ名 請書 承りたる旨を記せる證書、
うけつけ名 受附 物を受附くる事、取次、(二) 官署會社
などにて物を附くる處、
うけどり名 受取 物を受取りたる旨を記す證書、領收證、
うけひく 動 承引 承諾す、うけがふ、
うけもち名 受持 受け持つ事、擔當、

うつく 名 烏黒 眞黒なること。
 うきん 名 胡散 疑しく怪むべき事、不審、可疑。
 うじつじつ 副 透巡 (一)ためらひて、くつぐつと、(二)うごめきて、蠢々。
 うしやう 名 羽觴 美しき杯。
 うじやう 名 有情 生きて情有るもの、動物。
 うしろだて 名 後楯 (一)背後を防ぐ楯、(二)松の樹を後楯に取つて闘ふ、(三)陰に援くる人、うしろみ、黒幕、後援、「後楯となる」。
 うしろめたきころ 句 後痛心 後の方、心にかかる、願感。
 うすうす 副 薄薄 ほのかに、いささか、微。
 うすぐらし 形 薄暗 少し暗し、微明なり。
 うすく 動 昏 (一)白にて物を掲ぐ、(二)夕日、山の端に入らんとす、「日西山に昏く」。
 うせつ 名 迂拙 下手なること、巧みならぬ事。
 うそぶく 動 嘘 (一)口をつはめて聲を出す、(二)詩歌を吟詠す、(三)長く烈しき聲を出す、吼ゆ、「虎嘯く」。
 うたい 名 宇内 宇は天地四方をいふ、天地の間、天下、
 うたいのみ 句 有待の身 凡夫の身といふが如し、有待は佛語、老少不定の意。
 うたげ 名 酒宴 さかもり、掌を拍ちあげてまわぐ意。

うちははせ 名 打合 (一)互に打つ事、(二)豫め談じ合ふ事、交渉する事。
 うちり 名 宇宙 天地、世界、「宇宙洪荒」。
 うちかじ 動 打勝 (一)勝つ、(二)討ち平ぐ、討勝。
 うちけし 名 打消 (一)消す事、無くする事、(二)文典の上にて、動詞の動作を覆し言ふ事、常にす、まじの如き助動詞にて其の意を示す、讀まじ讀まず、讀まじ、などの如し。
 うちこぼす 動 打毀 打ち碎く、打ち破る。
 うちたたく 動 打擲 ながる、うつ。
 うちたす 動 打倒 打ちほろぼす。
 うちかがひに 副 打違 (一)筋違に、交叉して、(二)行違に。
 うちつげに 副 打附 さしあてて、率附に。
 うちとく 動 打解 (一)事を打明して、親む、款、(二)心配なくなる、緩解、(三)緩む、油断す。
 うちどめ 名 打止 をほり、はて、千秋樂、「相撲の打止」。
 うちはらふ 動 打拂 (一)拂ふ、「塵拂」(二)銃砲を放ちて敵を追ふ、砲撃す。
 うちほろぼす 動 討滅 攻め平ぐ。
 うちまかす 動 打任 事物を擧げて任す、委任す、(二)世の常と見る、放任す。

うちまかせては 副 打任 世の常にては、大方は、
 うちやうてん 名 有頂天 一心不亂にして他事には、うはの空なる事。
 うちやぶる 動 打破 (一)破る、(二)うちにはすに同じ、(二)銃砲を放ちて敵を走らす。
 うちやぶる 動 打遣 (一)遣る、(二)捨て置く、措く、放下す。
 うちわけ 名 内譯 總高の内を小分して記す。
 うつあう 名 鬱奥 むし暑きこと、あつ苦きこと、「盛夏の鬱奥に苦む」。
 うついろ 名 鬱憂、鬱幽 共に氣のふさふさこと。
 うついろ 名 鬱悒 氣の結ばるること、不平。
 うついろ 副 鬱鬱 (一)心沈みて、思ひむすばれて、怏怏、「鬱々として志を得ず」(二)樹木など、こんもりと、鬱蒼。
 うつろふ 副 鬱鬱 うつろつに同じ、又木のこんもりと茂ること。
 うつろひ 名 鬱屈 心の塞ぎて暢びぬ事。
 うつろひ 名 鬱結 心の塞ぎて晴れぬ事、鬱悒。
 うつろひ 名 鬱散 鬱したる心を散す事、氣ばらし、消遣。
 うつろひ 名 鬱心 鬱しき心、夢心地の反對、はつきりとしたる心地。
 うつせん 副 蔚然 物の盛なる状に言ふ。

うつそり 副 鬱葱 草木の盛に繁れる状、こんもりと、
 うつたうし 形 鬱陶 (一)心沈みて晴れず、(二)雨天にて心晴やかならず、「天氣鬱陶し」。
 うつろひ 副 恍惚 氣を喪へる状に言ふ。
 うつろひ 名 鬱憤 晴れぬ怨、積る遺恨。
 うつろひ 名 鬱勃 心に深く籠りたる思、不満の情。
 うつろひ 名 鬱悶 心塞ぎて苦み悶ふること。
 うつろひ 名 移變 次第に變り行く事、沿革、轉變、變遷。
 うつろひ 名 腕前 はたらきぶり、技量、技倆、技能。
 うつろひ 名 鳥兔 金鳥玉兔の漢語より來り日月に譬へて言ふ、歲月、「鳥兔匆々」。
 うつろひ 形 踈疎 甚疎し、疎遠なり、太疎。
 うつろひ 名 有徳 尊むべき徳行あること、「有徳の僧」。
 うつろひ 名 有得 富み榮ゆること、富有得分の意、裕福、富豪。
 うつろひ 動 項垂 項を前にして頭を垂るること、低首、低頭。
 うつろひ 動 頷 肯ふ意を示さんが爲に、頭を前へ助す、點頭、頷。
 うつろひ 名 海原 廣き海、滄海、「青海原」。
 うつろひ 名 上書 書狀、書物などの表に文字を書く事、表

うはがは名 上側 物の上方、表面、外側、
 うはが名 噂 世に言ひ廻らす、世評、風評、風説、風聞、
 飛語、
 うはべ名 上邊 上に見ゆる處、表、(一)表ばかり其れと
 見する事、外側、陽「上邊を飾る」、(三)愛想、世辭、
 うひうひし形 初初 初めてらし、物馴れぬ状なり、
 うひぢん名 初陣 初めて軍に出づる事、初戦、
 うまれつき名 生付 生れながらのさま、生得、性質、天
 性、天資、天稟、稟性、天資、資性、天賦、賦性、
 うみぢ名 海路 海上にて船の通ふ路、航路、
 うむ名 有無 (一)有ると無きと、(二)應諾と否と、「有無
 を論ぜず」、(三)佛教の語、有の見と無の見と、
 うんぢう名 蘊奥 物事の奥底、奥義、道理の深秘、「奥間
 の蘊奥を極む」、
 うんうん名 云云 うんぬん、(一)詞を尋する時に用ゐる
 語、しかじか、(二)言ふに言はれぬ事情、「云々の譯」、
 うんえんくわかん句 雲煙過眼 物事の等閑に付し置く状
 に言ふ、又一時の愉快、長く執着せざる事、
 うんか名 雲霞 (一)かすみ、又雲と霞と、(二)雲霞の如
 く夥しき狀に言ふ、「雲霞の如き軍勢」、
 うんかく名 雲客 雲の上人、殿上人、

うんげい名 雲霓 雲の立ち上る事、「大旱の雲霓を望むが
 如し」、
 うんざう名 運漕 船にて物を運ぶ事、
 うんじ名 耘籽 耘は草ぎること、籽は土かふこと、農業、
 うんじ句 云爾 漢文に用ゐる結語、しか云ふ、斯く云ふ、
 うんしふむさん句 雲集霧散 衆人の往がする狀に言ふ、
 うんする名 雲水 雲か水かの如く居所の定まらぬ義、行
 脚の俯をいふ、「身雲水の如し」、
 うんそう名 運送 運び送る事、運搬、
 うんちう名 運籌 謀り事をめぐらすこと、「籌を帷幄の中
 に運らす」、
 うんちく名 蘊蓄 深き蓄へ、深く修養を積むこと、素養
 の深きこと、
 うんちん名 運賃 運送に要する賃錢、
 うんてい名 雲泥 雲と泥と、天と地と、霄壤、「雲泥の相
 違」、
 うんでいばんり句 雲泥萬里 物事の非常に遠ふ意味に
 用ゐる語、霄壤の差、
 うんてん名 運轉 (一)回り回る事、(二)うんように同じ、
 「金の運轉」、
 うんばん名 運搬 物をはこぶこと、運輸、搬移、
 うんびつ名 運筆 筆の運び方、

うんむ名 雲霧 (一)雪と霧と、(二)空の曇る事、
 うんめい名 運命 天命の廻り合せ、運「運命極る」、
 うんよう名 運用 轉じて用ゐる事、働す事、運轉、活用、
 利用、
 うんりうせくあ句 雲龍井蛙 懸隔の甚しきなをいふ、雲龍
 は貴に喩へ、井蛙は賤に喩ふ、
 うんる名 云爲 云ふ事と爲す事と、言行、
 うめあはず動 埋合 利と不利と相償はず、損益乗除、
 うよ名 紆餘 (一)まはり遠き事、(二)言ひまはしを巧に
 する事、
 うよつとる副 蠕蠕 蟲なき、蠢くさまに言ふ、うごうご
 と、
 うよく名 羽翼 (一)羽と翼と、(二)補佐、「猶、飛鳥の羽翼
 有るが如し」、
 うらうらら副 長閑 うららかに同じ、「うらうらと照り
 して」、
 うららかに副 麗 晴れ渡りて、のどかに、うらうらと、
 うりたす動 賣出 (一)賣り始め、發賣、發售、(二)賣出益
 々繁昌、
 うりん名 羽林 近衛の大甲將の唐名、
 うれしなみた名 嬉涙 嬉しさに出づる涙、感涙、
 うろ名 迂路 まはり路、

うろろう副 彷徨 行方に迷ふ狀に言ふ、うろつく、ま
 こまこと、
 うろん名 胡亂 怪しく疑はしきこと、涉疑、
 うわうわに副 右往左往 八方に散亂する狀に言ふ、
 ちりぢりに、四散、「右往左往に逃ぐ」、
 うてんべん名 有爲轉變 世事の常無く、移り變り行く
 事、
 うえん名 迂遠 まはり遠き事、迂闊、
 え
 えい名 銳意 意を鋭くして事を爲す事、
 えいけい名 瑩城 墓地の事、「瑩城に葬る」、
 えいけい副 營營 盡力往來する狀に言ふ、
 えいかん名 叡感 天子の感嘆し給ふ事、
 えいき名 英氣 するどき氣象、銳氣「英氣を養ふ」、
 えいきやう名 永久 永く久しき事、
 えいきやう名 影響 物の影と響と、(二)他に差し響
 く事、
 えいきよ名 盈虚 満ちかけすること、「月に盈虚あり」、
 えいぐわ名 榮華 (一)花をしく榮ゆる事、(二)驕を極む
 る事、
 えいけつ名 英傑 衆に匹れたる人、「英雄英傑」、

えいげつ 名 永訣 死に別れ、訣別、
 えいげふ 名 營業 生計を営む職業、なりはひ、
 えいご 名 榮枯 盛なると衰ふると、浮沈、消長、「榮枯盛衰」、
 えいご 名 顯悟 さとく賢き事、
 えいさい 名 英才 極めて秀でたる才、顯才、
 えいし 名 英資 英邁なる資性、
 えいし 名 英姿 姿の高尙なること、前條の意にも轉用す、
 えいじやう 名 嬰城 城にこもり守る事、
 えいじよ 名 榮辱 榮ゆると、辱めらるると、
 えいせい 名 叡聖 天子の賢明に在らせ給ふ事、叡聖文武、
 えいせい 名 永世 永久の世、永代、
 えいぜん 名 營繕 つくろひ、修復、修理、
 えいぞく 名 永續 永く續く事、ながもち、
 えいたい 名 永代 ねいせいに同じ、
 えいたつ 名 榮達 出世昇進すること、
 えいたん 名 咏歎 長聲にて歎息する事、「咏歎之を久しうす」、
 えいだん 名 英斷 敏く決斷する事、
 えいち 名 叡智 極めて優れたる智恵、「聰明叡智」、
 えいちう 名 裔胃 裔は末、胃は後なり、後裔、後胤、
 えいてつ 名 英哲 勝れで賢き人、

えいはつ 名 映發 映じあふこと、
 えいびん 名 銳敏 敏く鋭き事、
 えいぶつ 名 英物 傑出の人物、「眞の英物なり」、
 えいぶん 名 叡聞 天子の聞召す事、「叡聞に達す」、
 えいほう 名 銳鋒 するどききつさき、
 えいまい 名 英邁 優れて、鋭敏に進歩する事、「英邁の資」、
 えいみん 名 永眠 死ねる事、
 えいやう 名 營養 飲食物より滋養を取りて、身體を養ひ、維持する事、
 えいゆ 名 贏輸 勝負、
 えいゆう 名 英雄 たいけつに同じ、「英雄豪傑」、
 えいよ 名 榮譽 好き名譽、ほまれ、
 えいらん 名 銳覽 天子の覽給ふ事、
 えいり 名 銳利 刃物などの鋭き事、
 えいりよ 名 叡慮 天子の御考へ、
 えいあん 名 永遠 末永く遠き事、「永遠の策」、
 えいそう 名 搖々 不安の貌、又憂の慰むべき所なき状、「中心搖々」、
 えいそう 名 杳杳 靜にして深冥なる状に言ふ、
 えいおん 名 拗音 二字の假名を用ゐる音、きゆう、くわつ、の如きもの、

えうかい 名 幼艾 容色美好の少年をいふ、
 えうがい 名 要害 (一)我れには要とし、敵には害とする處、(二)皆、
 えうきう 名 要求 (一)是非に求むる事、(二)請求する事、
 えうくわい 名 妖怪 ばけもの、變化、
 えうげき 名 要擊 待ち受けて撃つ事、
 えうけつ 名 妖孽 禍、又わさはひの種、
 えうけん 名 要件 必要な條件、
 えうげん 名 要言 約めていふこと、
 えうげん 名 耀眩 光彩の爲に眼のくらむ事、
 えうさい 名 要塞 要害の處に築ける築「要塞砲兵」、
 えうしやう 名 要償 償を求むる事、
 えうじゆ 名 天壽 若死にと長生、
 えうじよ 名 要衝 肝要の場所、大切なる處、
 えうせつ 名 夭折 早死をいふ、夭逝、天死、天札、
 えうそ 名 要素 必要な元素、必要な條件、
 えうち 名 幼稚 (一)年幼き事、(二)未熟なる事、
 えうてう 名 窈窕 容貌美にして貞靜なる婦人、「窈窕たる淑女」、
 えうてん 名 要點 必要な部分、
 えうはい 名 遙拜 遙に拜する事、「遙拜式」、
 えうへう 名 窈渺 極めてほのかなること、幻渺、杳々、窈

えうりやう 名 要領 必要な所、大綱、
 えうろ 名 要路 (一)必要な道路、(二)樞要の政務を掌る官吏の地位、
 えうえい 名 榮耀 榮華 驕奢に流るる事、
 えうえき 名 副役 力を勞する状に言ふ、「終身役々として其成功を見ず」、
 えうえき 名 副奕奕 大きな貌、盛なる貌、
 えうえき 名 釋釋 相連る状、盛なる貌、
 えうさう 名 釋駭 引きつゝく事、
 えうさく 名 易贊 臨終の事、死ぬる事、
 えうせい 名 奕世 世を重ねる事、累世、
 えうこ 名 依怙 偏りて愛する事、偏頗、「依怙最負」、
 えうたりかしこ 名 副得賢 折を得て喜び迎ふる状に言ふ、
 えうい 名 噫噫 咽び泣く事、
 えうけん 名 謁見 まみゆること、
 えうぶく 名 悅服 悦びて服従する事、
 えうらん 名 閱覽 しらべ覽る事、
 えうれき 名 閱歷 踏み行ひ見聞きして過ぎたる事、經歷、
 えうて 名 得手 得意の事、長所、「得手勝手」、
 えうちや 名 緞茶 染色の名、銀色に茶色を帯びたるもの、

鯉茶の袴、鯉茶式部。

えんあん名 宴安 酒もりして樂む事、燕安に同じ、

えんいう名 奄有 盡く所有する事、「四海を奄有す」、

えんうつ名 湮鬱 塞り埋れて晴やかならぬ事、

えんえん名 燄燄 火の盛に燃ゆる状に言ふ、「燄々として

天を焦す」、炎々も同じ、

えんか副 縁家 血縁の續ける家、ゆかりある家、

えんか名 嘸下 飲みくだす事、

えんかい名 沿海 陸地の海に沿ひたる處、

えんえん名 奄奄 精氣の閉藏せる状にいふ、息も絶え絶

えなること、「氣息奄々」、

えんえん名 蜿蜒 長き物の連なる状にいふ、

えんか名 烟霞 けむりと霞と、

えんかく名 沿革 世事の變遷、うつりかはり、

えんがん名 沿岸 河、海などに沿ひたる岸、

えんき名 延期、愆期 定めたる時期を延す事、愆期は時

刻を過つ事、

えんぎ名 演義 意義を敷衍していふ事、「三國志演義」、

えんぎ名 縁起 (一)神社佛閣などの由来を書きたるも、

の、(二)前じりし、きざし、兆「縁起善し」、(三)祝ひ、祝賀、

えんきよ名 燕居 安息して居る事、

えんけん副 腰塞 騰傲なる状にも、衆盛なる状にも、高

えんねつ名 炎熱 ほんしよに同じ、

えんば名 煙波 水の上のもやと波と、

えんばう名 延袤 ひろき、横と縦と、東西を延、南北を

延といふ、

えんむ名 烟霧 烟と霧と「烟霧濛々」、

えんりう名 淹留 久しく滞る事「淹留數月」、

えんる名 縁類 親類、

えんれい名 艶麗 うるはしき事、麗麗、

えんいはず副 得不言 言ふ事の出來ぬ程、

お

おいふ名 於邑 憂善、悶煩する事、

おいほれ名 老衰 老いて鈍くなる事、老體、

おうつ副 蔚鬱 樹木のこんもりと繁れる状に言ふ、

おうか名 謳歌 徳を稱揚して歌ふ事、又徳を稱詠して之

に歸服する事、

おうき名 應急 急激なる事變に際し、直に處置する、

と「應急の手當」、

おうせつ名 應接 (一)あへしらす事、もてなし、(二)面

會する事、

おうだ名 毆打 打ちたく事、なぐる事、「毆打創傷」、

き状にも、舞ふ状にも言ふ、

えんげん名 淵源 事物の本源、根本、根源、

えんご名 緣故 ゆかり、つづきあひ、

えんざい名 冤罪 無實の罪、

えんざう名 醜藏 肉などを鹽漬にして貯藏する事、

えんざんにしたかふ 句 從鉛槧 文筆を事とす、

えんしふ名 演習 (一)さらひ習ふ事、(二)軍隊の訓練、

えんしよ名 沿襲 前の事物に因り循ふをいふ、

えんせい名 炎暑 燄くが如き暑熱、炎熱、

えんせう名 厭世 世を厭ふ事、

えんせき名 延燒 火災の燃ゆる廣がる事、

えんせつ名 演説 人の前にて意見を演ぶる事、

えんぜん副 焉然 巧に笑ふ状に言ふ、「焉然として一笑

す」、

えんそう名 淵叢 淵は魚、叢は獸の聚る所、故に物の多

く聚るをいふ、淵叢、

えんたい名 延滞 物事の滞る事、

えんたいのふで名 椽大筆 (一)極めて大なる筆、「椽大

の筆を揮ふ」、(二)大手筆、

えんたう名 沿道 行路に沿ひたる道

えんにん名 延引 事の引く事、ねんいん、

おりたい名 應對 其の間に答ふる事、應答、

おりど名 嘔吐 飲食物を吐く事、はきけ「嘔吐を催す」、

おりほう名 應報 むくい「因果應報」、

おりぶん名 應分 身分に應ずる事、

おりよう名 應用 つかひこなす事、適用、

おうえん名 應援 援に應ずる事、たすけ、すくい、加勢、

おかけ名 御蔭 (一)神佛の冥助、たすけ、加護、(二)人

の恩恵、めぐみ、庇蔭、高庇、

おきのりわな名 除事 かけにて買ふ事、物を買ひて、代

價を借りおこなふ、

おきふし名 起臥 (一)起くると臥すと、(二)朝夕、日常、

「起臥思ひ煩ふ」、

おくい名 奥意 底の心、又奥の手、秘密、

おくき名 奥義 技藝學問などの深く高尚なる所、

おくせつ名 臆説 推し測りのときごと、

おくそく名 臆測 推し測る事、

おくたん名 臆斷 想像を以て斷定する事、

おくてう名 億兆 (一)限無き數、(二)多くの臣民、萬民、

「億兆心を一にして」、

おくびやう名 臆病 (一)臆する病、(二)臆する氣質、おぢ

け、卑怯、

おくふかし形 奥深 (一)奥の方深し、深遠、(二)意味頗

おつた

深し、深奥、
 おくめん 名 臆面 臆する顔色、氣後れする面色。
 おくゆかし 形 奥懐 (一)奥深くして趣味あり、遠、(二)深き意思ありけなり、微妙。
 おくりじやう 名 送状 物を送る時、添へて遣る書付。
 おくりな 名 謚 人の死後、其の徳を稱して追贈せる名。
 おくればせ 名 後馳 (一)他に後れて馳せつゝ事、(二)他に後れて、思案の出づる事、落後。
 おしりする 動 推移 移りかはること、過ぎゆくこと。
 おしりする 名 押詰 (一)歳末に近くなる、今年もおしりまりて、(二)きはまる、切迫す。
 おしとほす 動 押通 (一)押し通す、(二)成し遂ぐ、
 おしなべて 副 押並 押しくるめて、なべて、すべて、
 おしはかる 動 推量 理を推して思ひ量る。忖度。
 おしやべり 名 饒舌 (一)多く物言ふ事、(二)ことばの多き人。
 おしよす 名 押寄 進みて集り来る、攻め寄す。
 おそかれはるか 副 早晚 晩きが早きか、其の中に、いつか、さうばん。
 おそれる 動 恐入 (一)甚、恐る、(二)過失を詫ぶ、恐謝、(三)有り難く思ふ、「これは恐入る」
 おそれおほし 形 恐多 甚だかしこし、勿體なし、恐惶、

おそれながら 副 乍恐 畏しと思へど、勿體なければども、不願恐懼。
 おちあふ 動 落合 同處にて出合ふ、
 おちつく 動 落着 (一)居着く、安堵す、「其の地に落着く」(二)鎮定す、なままる、「騒動落着」(三)沈着にす、軽率ならず、
 おちおれ 名 零落 落ちぶるる事、れいらく、落魄、
 おでい 名 淤泥 ざろ、
 おどおど 副 戰慄 怖ぢつつ、恐怖、
 おどかひをさく 句 解頤 甚しく笑ふ、
 おどつれ 名 訪 おとづるる事、訪問、消息、通信、
 おどなげなし 形 無大人氣 大人の如き舉動にあらず、
 おどなひ 名 音 音信、訪問、音、響、消息、おどつれ、
 おどろおどろし 形 物凄し、怖し、仰山などの意、
 おのがじし 副 各自 各々みづから、かくじ、めいめい、
 おのほれ 名 己惚 みづから惚れたりとする事、自信、
 おのれにかつ 名 克己 我意私欲に打ちかつ事、
 おひうち 名 追撃 敵の逃ぐるを追ひつめ撃取る事、尾撃、
 おひおひに 副 追追 後より續きて、逐次、漸次、「追々に來る」
 おひげのちりをばらふ 句 拂御毳塵 媚ひ諂ふ、
 おひたち 名 生立 (一)生長する事、(二)經歷、系統、

おひかう 名 帶封 郵便物の上下を開けて封する物、
 おひわけ 名 道分 街道の左右に岐るる處、
 おひけなし 形 無負氣 身分不慮なり、過分、
 おひつか 名 詔歌 詔びて言ふ事、へつらひ、
 おひく 名 大息 歎息する時、發する長き太息、ため息、「大息をつく」
 おほうち 名 大内 皇居、
 おほかた 副 大方 (一)十に八九までは、多分、大概、大低、(二)おしなべて、一般、
 おほのみ 名 大君 (一)天皇を申す、(二)諸王を申す、
 おほひのこ 副 大袈裟 おほきやうに、仰山に、
 おほじかけ 名 大仕掛 仕掛の大なるもの、おほがかり、
 おほしめし 名 思召 思ひ給ふ事、
 おほつかなし 形 無覺束 (一)分明ならずあり、髮髻、(二)確ならずあり、心許無し、不安、
 おほほほり 名 大通 市街の廣き路、おほほ、ほんごほり、
 おほはは 名 大幅 布帛の幅の名、木綿幅の二倍なり、
 おほまほり 名 大廻 遠くまはりて行く事、迂回、
 おほみそか 名 大晦日 十二月三十一日の稱、おほつこもり、
 おほみだから 名 大御寶 國民を天皇の統治し給ふに就きていふ、公民、百姓、兆民、黎庶、

おほみち 大節 (一)幅廣き路、大道、(二)里數の名、三拾六町を一里としたるもの、
 おほむね 副 大率 あらまし、大略、大概、大旨、大凡の趣意、
 おほめに 副 大目 ゆるやかに、寛大に、
 おほやう 副 大様 (一)おほかたに同じ、(二)心廣くゆたかに、おほまかに、
 おほよそ 副 大凡 およそ、すべて、大略、大概、概略、
 おほろくに 副 臆氣 不分明に、
 おほろつきよ 名 臆月夜 おぼろなる月夜、春の月夜、
 おんあひ 名 恩愛 なさけ、いづくしき、「恩愛の契」、
 おんが 名 温雅 おだやかにはて品よきこと、
 おんかく 名 音樂 樂を奏して人を樂ましむるもの、
 おんぎ 名 恩義 恩をうけて報ゆべき義務あること、
 おんきやう 名 音響 音と響と、
 おんけい 名 恩惠 めぐみ、なさけ、恩、
 おんご 名 恩顧 恩恵を蒙る事、あはれみ、
 おんごしん 句 温故知新 もと習ひし事を復習すれば新に得る所あるをいふ、又一説に古き昔の事をしらべて、新しき今の事を知ること、
 おんし 名 恩賜 恵みて賜る事、「恩賜の御衣」、

おんし 名 恩師 恩深き師匠。
 おんしん 名 音信 おとづれ、たより、いんしん。
 おんしやう 名 恩賞 恵み賜ふ賞與。
 おんじやう 名 音聲 (一)人の聲、おんせい、(二)こわつ
 かひ。
 おんしやく 名 恩借 恩恵によりて借り受くる事。
 おんたく 名 恩澤 恩恵のうるほひ、おかけ。
 おんてう 名 音調 音の調子。
 おんてん 名 恩典 恩恵を施す事。
 おんごく 名 恩徳 めぐみ。
 おんごく 名 音讀 (一)漢字を音のまま読む事、訓讀に對
 していふ、(二)聲を發して書を読む事、歌讀に對して、
 おんぼう 名 襦袍 綿入の衣。
 おんみつ 名 隱密 秘密に事をする事。
 おんめい 名 恩命 ありがたき思召し、辱けなき命令。
 おんもごへ 名 御許 書簡文の宛名の下へ書く語、何某御
 許へ。
 おんらい 名 恩賚 たまもの。
 おんる 名 恩威 恩を施すと威を示すと、「恩威并び行は
 る」
 おもかげ 名 面影 (一)顔のさま、顔付面容、(二)かたろ、
 姿、容貌。

おもひろし 形 面白 喜ぶべし、興あり。
 おもたつ 動 重立 頭だつ、主となる。
 おもてむき 名 表向 表だちたる方、公。
 おもはずしらす 副 不思議 知らず識らずに、ふと。
 おもひおもひに 副 思思 各自思ふ所を異にして、心に、
 おもひかけなし 形 無思掛 思ひ掛けず、不慮、意外。
 おもひかへす 動 思返 改めて思ふ、思ひ直す、回思。
 おもひつき 名 思付 (一)思ひ付く事、(二)考へ、工夫。
 おもひで 名 思出 (一)前事を思ひ出して慰む事、おもひ
 いで、(二)思の届く事、遺心。
 おもひなかはにす 句 思過半 思考して過半は自得すへ
 ことの意。
 おもひまはす 動 思廻 種種に思ふ、回顧。
 おもひやり 名 思遣 推し量りて思ふ事、想察「思遣り深
 き人」
 おもひよらず 副 不思議 不意に、思掛なく。
 おもひまじりに 名 思様 意の如く、存分に、おもひいれ、
 おもひまじりに 副 思儘 思ひ通りに、意のままに。
 おもむくに 副 徐 靜に、そろそろと、舒。
 おもむく 名 親許 (一)親のもと、親里、(二)奉公人など
 の親類を行ふ家を指して言ふ語。
 おもむくし 名 及越 (一)隔たれる物に手を及まんが爲に

か

立ちながら、體を屈むる事、(二)轉じて熱心ならぬ事、
 かあう 名 苛殃 まがつみ、むじたらしき災禍。
 がい 名 我意 我がままなる事、剛愎、「我意に任す」。
 かい 名 介意 意にはさまむこと、氣に掛くる事、心懸、隔
 意、「介意すべからず」。
 かいり 名 嘉猷 善きはかりごと。
 かいりん 名 凱運 運の開くる事。
 がい 名 凱歌 戦勝を祝ふ歌、禮歌、「凱歌を奏す」。
 かい 名 借借 強壯なる貌。
 かい 名 階々 なり物の調の合ふ事、又鳥のまはらぎ
 なく聲。
 かい 名 潜々 水の盛に流るゝ状。
 がい 名 階階 雪の積りて白き狀に言ふ、「白雪階々と
 して」。
 かいかう 名 偕行 ともに行ぐ事、「偕行社」。
 かい 名 開圖 開き閉づる義。
 かい 名 改革 改めかふる事、「官制改革」。
 かい 名 海國 廣く含容する事、海容。
 かい 名 階級 した、くらゐ、等級に同じ。
 かい 名 皆動 若干日の間一日も缺動せざる事、

がいきやう 名 概況 概略の状況、あらまし。
 かい 名 諧謔 (一)おどけ、滑稽、(二)戯れたるこ
 とば、おどけ、しりぞ。
 かい 名 街衢 ちまた、往来。
 かい 名 開裕 心裕に廣くしたる事。
 かい 名 概括 總へ括る事。
 かい 名 開業 營業を開く事、職業を始むる事。
 がい 名 概見 大概の見積。
 がい 名 戒嚴 嚴重に警戒すること、「戒嚴令」。
 がい 名 概言 大略を述べ言ふ事。
 かい 名 誣誤 あやまり、まごはす事。
 かい 名 解悟 分り悟る事。
 かい 名 邂逅 偶々出會ふ事、期せずして巡り逢ふ事。
 かい 名 陸國 建國に同じ。
 かい 名 海國 四方に海ある國、本邦の如きをいふ、
 かい 名 開墾 荒れたる地を開きて田舎とする事、開
 拓。
 かい 名 皆濟 残らず濟す事。
 かい 名 介在 間に夾りて在る事。
 かい 名 睡眈の恐 睡眈はにらむ事、僅少
 の怨。
 かい 名 海藻 總べて海に産する植物、海草。

かゝる 名 改竄 詩文等を改め直す事。
 かゝる 名 概算 大略の計算、あらづもり、おぼづもり、
 かゝる 名 介心 大きやかなる心、「君子介心」、
 かゝる 名 改心 心を改むる事、
 かゝる 名 改進 舊弊を改め文明に進むこと、
 かゝる 名 戒心 警戒する事、用心、
 かゝる 名 介錯 後見と同じく介抱する者、附添人、
 かゝる 名 開城 城又は要塞を明けて敵に渡すこと、
 降伏、「旅順開城」、
 かゝる 名 改春 説きて理義を明にする事、説明、
 かゝる 名 改春 年改りたる春、新春、新年、年始、改
 曆、
 かゝる 名 改悛 心を善に改むる事、
 かゝる 名 戒飾 戒め訓諭すること、
 かゝる 名 慨世 世事を憂へなげく事、
 かゝる 名 蓋世 氣象高く秀でて一世を蓋ふ事、「力拔山
 氣蓋世」、
 かゝる 名 海嘯 海水の俄に起りて陸に打上ぐる事、つ
 なみ、
 かゝる 名 割切 最、適切なる事、「議論割切なり」、
 かゝる 副 介然 瑣事にも氣を掛くる事に言ふ、又さび
 しいこと、

かゝる 名 凱旋 戦勝ち凱歌を唱へてかへる事、凱陣、振
 旅、
 かゝる 名 階前千里 下情の君に通ぜざるをい
 ふ、
 かゝる 副 慨然 いかにも慨しき状、憤然、「慨然として
 志を立つ」、
 かゝる 名 駭然 さも驚きたる状に言ふ、愕然、
 かゝる 名 咳嗽 せき、しばぶき、
 かゝる 名 開塞 開くと塞くとの義、取扱の義に轉用す、
 概略の規則、
 かゝる 名 拐帶 もちにげに同じ、
 かゝる 名 駭態 愚な様子、
 かゝる 名 該當 適切に當て嵌る事、
 かゝる 名 開拓 かゝるに同じ、
 かゝる 名 解答 説明して答ふる事、
 かゝる 名 慨嘆 概き嘆く事、歎息、
 かゝる 名 介胃 よろひかぶと、具足、介甲、
 かゝる 名 改築 改めて建築する事、
 かゝる 名 凱陣 がゝるに同じ、凱旋、
 かゝる 名 開帳 秘佛などの厨子の帳を開きて參詣人
 に親しく拜せしむる事、
 かゝる 動 啓撥 取り扱む、撥、拵、

かゝる 名 階梯 (一)きざし、(二)學術などの手引、
 かゝる 名 割憐 心だてのよき事、「割憐の君子」、
 かゝる 名 孩提 小兒の幼稚にて愛らしきをいふ、
 かゝる 名 皆納 悉く上納する事、
 かゝる 名 概念 多くの觀念中より共通のものを抽象し
 て綜合したる觀念、
 かゝる 名 介抱 (一)助けて世話する事、保持、護厄介、
 (二)病人を看取る事、看病、看護、
 かゝる 名 海防 海岸の防禦、
 かゝる 名 該博 博く學術などに通ずる事、博識、
 かゝる 名 開關 世界の開けし始、
 かゝる 名 開封 書簡の封を開く事、
 かゝる 名 凱風 南の風をいふ、
 かゝる 名 開閉 開くと閉づると、あけたて、
 かゝる 名 皆無 全く無き事、虛無、
 かゝる 名 海容 いかかんに同じ、「御海容被下度候」、
 かゝる 名 艾老 年五十の事、總て老人をいふにも用ふ、
 かゝる 名 偕老同穴 老いを偕にする意、夫
 婦の和合を言ふ、
 かゝる 名 借樂 共に樂むこと、樂を共にすること、
 かゝる 名 解纜 船の纜を解きて出づる事、出帆、
 かゝる 名 海里 海上の里程、十六町九間餘に當る、

かゝる 名 介立 孤立助けなき事、際立って普通のもの
 と肩を比べざるをいふ、
 かゝる 名 改良 改めて良くする事、
 かゝる 名 概略 あらまし、大抵、大略、梗概、
 かゝる 名 改曆 かゝるに同じ、
 かゝる 名 考案 考へ、工夫、
 かゝる 名 好意 親切なる心、又したしむ意、
 かゝる 名 豪逸 猛くすぐれて絶なる事、
 かゝる 名 膏雨 よき雨、よきしめり、甘雨、
 かゝる 名 衡宇 粗末なる家、
 かゝる 名 幸運 よき運命、幸なる運、
 かゝる 名 幸榮 さいはひ、幸福、冥加、「何の幸榮か之
 に如かん」、
 かゝる 名 交易 (一)かゝるに同じ、(二)互市、貿
 易、
 かゝる 名 校閱 他人の文書を読んで訂正する事、校訂、
 かゝる 名 講筵 書物を講する席、
 かゝる 名 絳霞 色の赤き霞、
 かゝる 名 高雅 高尚に風雅なる書、
 かゝる 名 贅牙 強硬にて人の云ふことなど聞き入れぬ
 事、又文辭の用方の難澁なる事、
 かゝる 名 耿介 節を守りて動かざること、心明かに執

かつか 熟語

る所堅くして、世俗と相容れざること。
 かつかい名 航海 船にて海上を渡ること。
 かつかい名 慷慨 世を憤り慨く事、「慷慨悲憤」「悲壯慷慨の七」。
 かつかい名 梗概 がいりやくに同じ。
 かつかう副 耿耿 (一)光の鮮明なる状に言ふ、(二)不安の状に言ふ、「耿耿々として」。
 かつかう副 皎皎 純白なる状に言ふ、皓々も同じ。
 かつかう副 浩浩 廣き状に言ふ、廣々と、
 かつかう副 鏗鏗 石などの鳴る音に言ふ、鏗爾、
 かつかう名 抗衡 相對して避け下らざるをいふ、
 かつかう名 滴々 水の白く光る状、
 かつかう名 皓皓 明かなる貌、又白く清き貌、
 かつかう名 衡行 横行に同じ、
 かつかう名 瀾瀾 水面地面などの廣大なる状に言ふ、
 かつかう名 昂昂 (一)志の高く擧れる状に言ふ、(二)馬の行く状に言ふ、
 かつかう副 行行 剛強なる状に言ふ、
 かつかう副 嗷嗷 (一)聲の嘯しき状に言ふ、嘯しく、
 かつかう副 轟轟 (二)怒み罵る聲、
 かつかう副 轟轟 轟く音に言ふ、轟轟ると、「轟轟轟々」として、

かうが 一六〇

かうがうし形 神々 かみがみしの音使、何となく尊き状、神さびてある貌、
 かうかつ名 狡猾 わるがしき事、狡僧に同じ、
 かうかん名 向寒 寒氣に向ふ事、「向寒の候」
 かうかん名 浩瀚 廣大なる貌、「浩瀚なる書物」
 かうがん名 抗顔 強情、あつかましき事、つれなきこと、
 かうき名 綱紀 國家を經理する事、紀綱、綱維、「四方を綱紀す」
 かうき名 抗議 他人の言動に異儀を入る事、
 かうき名 厚誼 親切にする事、厚き親しみ、
 かうき名 豪氣 氣力の大にして剛なる事、
 かうき名 巷議 政治の得失に關する在野の議論、世のうはさ、
 かうき名 巧技 巧妙なる技能、
 かうき名 交誼 交際のよしみ、交情、「交誼を缺く」
 かうき名 剛毅 志の確乎たる事、雖に屈せずして忍耐強き事、「剛毅の詞」
 かうき名 恒久 永久、また永遠に同じ、
 かうき名 講求 買ひ求むる事、
 かうき名 講究 説き究むる事、
 かうき名 號泣 聲をあげて泣くこと、泣き叫ぶこと、
 かうき名 考據 考へる據り所、

かうぐわ名 高臥 隱遁して世に高ぶる事、
 かうぐわ名 効果 できはね、しあげ、
 かうぐわ名 豪華 おごり、奢侈、
 かうぐわい名 高會 大會、盛會に同じ、「置酒高會」
 かうぐわい名 狡獪 かうぐわいと同じ、
 かうぐわい名 郊外散步 野に出て散步する事、
 かうぐわい名 狡猾 奸智に長けたる事、わる智恵、狡猾、
 かうぐわん名 交驩 共々に喜び交りて心を獲ること、
 かうぐわん名 交換 とり換ふる事、引替、交易、
 かうけつ名 耿潔 あきらかに清きこと、
 かうけつ名 高潔 高尚にして潔白なる事、
 かうけつ名 豪傑 智勇の優れたる人、「英雄豪傑」
 かうけん名 效驗 ききめ、しるし、功能、
 かうけんれいしよく名 巧言令色 虚飾にして眞實の少き事、「巧言令色、鮮し仁」
 かうこ名 江湖 世の中、世間に同じ、
 かうこ名 好古 古の物事を好むこと、
 かうこ名 向後 今より後、きやうこう、以後、
 かうご名 更互 互に、かはるゝに、
 かうこつ名 硬骨 硬はかたき魚骨、其の骨の魚體を支ふるより、國家柱石の臣又は節操がたくして利害の爲に動かざる人ないふ、

かうご 熟語

かうご名 交叉 たがひちかひにすること、
 かうご名 巧詐 巧みなる詐り、
 かうごい名 交際 つきあひ、交り、
 かうごい名 咬菜 寒蕪に堪へて野菜を食し居る事、
 かうごう名 高燥 土地の高くして濕氣なき事、
 かうごう名 交錯 彼れ是れ入り交ること、「犬牙交錯」
 かうごう名 高察 推察の敬語、「御高察の如く」
 かうし名 嚆矢 事の始め、おこり、第一番、
 かうし名 考試 學業をためしみること、試験、
 かうし名 高士 世俗を離れて志操の高潔なる人、
 かうじ名 好事 喜ぶべき事、「好事多し」、又善行、「好事門を出でず」
 かうしそうじく句 行尸走肉 人となり調劣無能なるものの、無智無神經なるものをいふ、
 かうしつ名 膠漆 (一)膠と漆と、(二)交際の親密なるに譬へて言ふ、「膠漆の交」
 かうじ名 倥傯 石などの鳴る音に言ふ、鏗鏗、
 かうじん名 幸甚 幸福に思ふ事、書翰文の末に用ゐる語、
 かうしや名 巧者 巧みなる事、又其の人ないふ、
 かうしや名 高尚 (一)氣高き事、上品なる事、(二)學術などのむつかしきもの、
 かうしやう名 翱翔 鳥の飛びかける事、

かうじ 一六一

かうじやう名 交情 かうぎに同じ。
 かうじやう名 浩穰 用あまりありて豊かなる事。
 かうじやう名 膏壤 肥たる土地、「膏壤沃野」。
 かうじゆん名 交詢 信實を以て交ること、親密に交ること。
 かうず名 好事 物好き。
 かうする名 交綏 敵味方とも、相引きに陣をひくこと。
 かうする名 稿悴 草木の枯れかじける事。
 かうせい名 詰誓 言を以て誓ふこと、口約束、誓言。
 かうせい名 好晴 好く晴れたる事、「天氣好晴」。
 かうせい名 校正 原稿と引き合せて訂すること。
 かうせき名 考績 人の賢否と事の得失とを考へ察すること。
 かうせふ名 交渉 かけあふこと。
 かうせふ名 巧笑 媚び笑ふこと、おせじ笑ひ。
 かうせふ名 交睫 まつげを交るにて、眠ること。
 かうぜん 副 浩然 放膽の状に言ふ、心の大なる貌、ゆつたりと、廣やかなる状、
 かうぜん 副 皎然 白き貌、明に、
 かうぜん 副 囂然 囂しく、
 かうぜん 副 轟然 とるること、一時に爆然する状に言ふ。

かうぜん 副 傲然 傲慢無禮なる有様。
 かうぜん名 濠塹 城郭の外堀をいふ。
 かうそ名 強訴 衆を頼み無理を通さんと訴ふること。
 かうそく名 高足 弟子中の第一流なるもの、高弟。
 かうそく名 梗塞 ふさがりたること、「道路梗塞」。
 かうたう名 高踏 世事に拘はらず、高くとまること、又辭職して身を潔くする事、「高踏勇退」。
 かうたう名 浩蕩 心のゆつたりしたるをいふ、又水などの廣大なる貌。
 かうたつ名 豪奪 掠め奪ふこと、掠奪、略奪に同じ、強奪。
 かうだん名 高談 (一)高高と物語する事、(二)他人の談話の敬稱、「高談雄辯」。
 かうち名 巧遅 巧なれども成功の遅い事、「巧遅は拙速に如かず」。
 かうちう名 膠柱 氣のきかぬ事、杓子定、臨機應變の處置の出来ぬこと、「柱に膠して瑟を鼓するが如し」。
 かうちう名 行厨 辨當の事。
 かうちよ名 較著 明白なる事、著明、「彰明較著なる者なり」。
 かうてい名 高弟 かうそくに同じ。
 かうてい名 肯定 うけがふこと、否定の反對。

かうてい名 扛鼎 力の強きこと、強力、「力鼎を扛ぐ」。
 かうてい名 校訂 文章著書などを校閲訂正する事。
 かうてつ名 更迭 改り代る事、更替、「官吏の更迭」。
 かうてん名 昊天 天に同じ、又夏の天。
 かうと名 狡兔 能く走る兔、「狡兔死して其狗烹らる」。
 かうとう名 龍頭 書物の上欄に注を加へたるもの。
 かうひ名 高庇 おかげに同じ。
 かうびん名 幸便 好きたより、「幸便に托す」。
 かうふう名 高風 氣高き風采。
 かうふう名 剛愎 強情なる事、「剛愎不仁」。
 かうぶん名 高聞 聞く事の敬語、「高聞に達す」。
 かうぶん名 行文 文章の綴り方、文字の配置。
 かうま名 降魔 悪魔を降伏させること、「降魔の利劍」。
 かうまい名 豪邁 心つよく勝れて進取の氣に富むこと、又志操堅固に勇敢なること。
 かうまつ名 毫末 毛の末端をこしなること。
 かうまん名 傲慢 おごり高ぶること、不遜、倨傲。
 かうめう名 高名 (一)名高き事、かうみやう、有名、著名、(二)他人の名の敬語、おなまへ、
 かうもく名 綱目 重なる分ち、綱は大きく、目はそのこわけ。
 かうゆ名 膏腴 土地の肥れたる事、「膏腴の地」。

かうらん名 高覽 覽る事の敬語、御覽、貴覽。
 かうらん名 概亂 かき亂す事。
 かうり名 行李 (一)旅行の荷物を入るる具、こり、(二)旅行中の荷物。
 かうり名 毫釐 物事の分量の差、少小なること、「毫釐の差、千里の謬」。
 かうりやう名 綱領 要領に同じ。
 かうれい名 伉儷 夫婦の配偶。
 かうれん名 孝廉 孝に父母によく仕ふる事、廉は清潔にして廉隅あること。
 かうわ名 講話 講釋めきたる談話。
 かうわ名 媾和 和睦に同じ。
 かが 副 呵呵 笑ふ聲に言ふ、からからと、
 かが 副 峨峨 巖石などの高く聳わたる状に言ふ、「青山峩々として」、峨峨は大なる軍艦、峨々は美人の形容、嬋妍に同じ。
 かがい名 河海 河と海と、「河海は細流を擇ばず」。
 かがう名 佳肴 よき肴、うまさ肴、「佳肴珍味」。
 かがき名 嘉卉 美しき草木、又めでたき草木。
 かがき名 嘉儀 喜びごと、祝ひの式、賀儀に同じ。
 かがき名 嘉季 夏の季節、夏の時侯、「夏季休業」。
 かがん名 瑕瑾 (一)きず、痛み、(二)はぢ、恥辱、名折。

かきやう名佳境 最、快く思ふ所、「漸佳境に入る」
 かく名佳句 よき文句、名句
 かくい名隔意 心の打解けぬ事、隔心、介意
 かくら名架空 事實ならぬ事を作り設くる事
 かくか名閣下 貴人の名の下に添ふる敬語、又貴人を呼ぶ代名詞の如くも用ゐる
 かくかく名赫赫 (一)光り輝く事に言ふ、「光明赫赫」
 (二)殊に著しき事「功名赫赫として」
 かくかく名諤々 率直にして節を折ることなきをいふ
 かくき名客氣 はやりぎ、かるはづみ、「少年の客氣」
 かくくわい名客懐 旅にて故郷を思ふおほい
 かくくわい名格外 格を外るる事、法外なる事、格別、格段、別段
 かくくわいのうづ名隔靴搔痒 靴を隔てて痒みを搔くが如き感に言ふ「隔靴搔痒の歎」
 かくけい名學藝 學術と技藝と
 かくげつ名隔月 一箇月づつ隔つる事、一月おき
 かくげつ名客月 あとの月、あとげつ、去月、先月
 かくげん名格言 法とし則るべき言
 かくこ名確乎 確に、固く、「確乎として抜く可からず」
 かくこ名覺悟 (一)理を悟る事、(二)豫、待ち構へて居る事、用心、期待、「覺悟せよ」

かくこん名恪勤 かくこ、職務を怠らずよく勤むる事
 かくさい名客歲 こそ、去年、昨年、客年、昔年
 かくじ代各自 各々みづから、めいめい、おのがじし
 かくし名學資 勉學する費用に充つる資金
 かくしき名學識 學問と見識と
 かくしつ名確執 互に我意を張りて譲らぬこと、又不和なる事
 かくじつ名隔日 一日づつ隔つる事、一日おき
 かくじつ名確實 確なる事、相違なき事
 かくじゆん名恪遵 つしみて、したがふこと
 かくしよ名學殖 學を成す事、「學殖豐富」
 かくせつ名隔絶 遠く隔たる事、懸隔
 かくせん名愕然 驚く事に言ふ、びつくりと
 かくだん名格段 かくくわいに同じ
 かくちく名角逐 競争驅逐する事
 かくてい名確定 確に定る事、治定
 かくど名赫怒 大に怒る事
 かくどう名客冬 去年の冬、昨冬、昔冬
 かくどう名格闘 たいきあふこと
 かくねん名客年 かくさいに同じ
 かくのうき副如斯 此の通り
 かくはうり名確報 確實なる報知、「確報に接す」

かくばん名隔番 一度若くは二度以上を隔てて番する事、交替
 かくびつ名欄筆 筆を揃へ事、書く事を止むる事
 かくぶつ名格物 事物の道理を極めつくすこと、哲學を格物致知の學といふ
 かくべつ名格別 かくくわいに同じ
 かくぼく名學僕 師家又は學塾の僕となりて修業する者
 かくん名家訓 家庭の教訓、庭訓
 かくめい名革命 王者の代のあらたまること、國體を改むる事、「佛蘭西革命」
 かくわい名雅懷 風雅なる思想
 かくめん名客員 (一)客、(二)客の人数、(三)正員にあらずして、客の待遇を受くる人
 かけあふ動掛合 (一)此れと彼れと相かかばる、照應す、(二)談じ合ふ、協議す
 かけい名家兄 他人に對して言ふ我が兄の稱
 かけい名家計 家の暮し向き、活計
 かけい名夏畦 夏日に田を耕すこと
 かけい名雅兄 男子を親み尊びて言ふ語
 かけつ名可決 よしと決定すること
 かけつ動驅付 驅けて到着す、馳せ到る

かけひなた名陰日向 (一)日陰と日向と、(二)裏面と表面とにて、其の行爲を異にする事
 かけふ名家業 (一)家を支ふる職業、なりはひ、生業、かけまも副掛卷 ことばに掛けて申さんも、「掛卷も長し」
 かけん名家言 一家言に同じ、一家の見識、偏見
 かげん名雅言 正しき善き言、みやびことば、俗言に對していふ
 かけもち名掛持 両事を兼ねて受持つ事、兼務
 かくく名苛酷 人情薄くして手ひごき事、苛刻
 かくつ動動託 言ひたてにす、事寄す、言ひなす
 かこん名下悃 悃は志の純一なること、下心、心持
 かさい名家財 家内に用ゐる器具、家具、家什
 かさく名佳作 巧に作られたる詩文などの稱
 かねがね副重重 ちゆうちゆう、返へす返へす、「重々相濟ます」
 かさん名家産 家に付きたる財産
 かさん名加餐 食物を加ふる事、養生する事、衛生
 かし名河岸 (一)河の岸、かはぎし、(二)轉じて海湖の岸、(三)魚の市場
 かし名瑕疵 (一)きず、缺點、(二)あやまち、過失
 かし名家事 (一)家に関する事、家内の用向、「家事經

濟「(二)家事科の略。

かしかり名 貸借 貸す事と借る事と、たいしやく、かしかる名 畏 (一)畏れ敬ふ、かしくむ、畏敬、「かしくまりて候ふ」(二)意を詫ぶ、恐謝、(三)謹みて承る、敬承「仰をかしくまる」(四)敬ひて跪く、

かしふ名 家什 家器、家具の類、

かしん名 嘉辰 よき時、めでたき時、佳辰、

がじやう名 牙城 城の本丸、本營、

かしやく名 呵責 叱り責むる事、苛責、

がしゆ名 雅趣 風雅なる事、雅致、風致、

かじゆく名 家塾 私に設けたる學舎、私塾、

かしく名 稼穡 穀物を植付け、耕作收納すること、農業、

かしらがき名 頭書 (一)書物の本文の欄の上に注釋批評などを記す事、監頭、標注、(二)總べて紙面の上の方に書く事項、

かすかず名 副數數 數多く、あまた、許多、「數々見ゆ」

かすならぬ名 形不數 物の數に入らぬ、取るに足らぬ、

かすみのほら名 霞洞 仙人の住居、轉じて仙洞御所、

かすみのころも名 霞衣 ただ霞といふに同じ、

かする名 歌吹 歌舞しつゝ、樂器を吹きならす事、

かせい名 家聲 家の名譽、「家聲を願す」、

かせい名 家政 一家の治め方、「家政裁縫」、

かせい名 加勢 勢を加ふる事、助くる事、又其の人、

かせい名 苛政 苛酷なる政治、壓制なる政治、虐政、「苛政は虎よりも猛し」、

かせい名 家稅 家の借り貸、屋賃、店賃、

かせつ名 佳節 祝すべき日、祝日、良辰、

かせつ名 假說 假に設けたる説、

かせのたより名 風便 うばさ、風聞、風評、風説、

がせん名 副俄然 にはかなる貌、

かぞく名 家族 一家の者共、

かぞく名 雅俗 雅と俗と、風流と野卑と、

かたいち名 片意地 我意を固く守りて移らぬ事、執拗、偏性、

かたう名 家道 家計、家政、

かたうど名 方人 味方、味方する人、

かたおや名 片親 (一)兩親の中の一人、(二)兩親の中の生存せるもの、

かたがき名 肩書 (一)本文の右の上部に書き添へたるもの、(二)爵位、勳等又は官職などの稱、

かたかけ名 肩掛 婦人の冬日外出する時、肩に掛くるもの、

かたかた名 片方 (一)二つの中の一つ、一片、(二)片寄

かたみ名 形見 (一)亡き人又は遠方に居る人の形として見るもの、「後の形見」、紀念、遺念、(二)形見の物品、遺物、

かたみち名 片路 往復の路の何れかの一つ、

かたん名 荷擔 力を添へて助くること、加勢、

かたよる名 動片寄 (一)二方へ寄る、偏、(二)傍に添ふ、遮く、

かたのなか名 片田舎 都を遠く離れたる田舎、偏鄙、僻郷、

かたをならぶ名 比肩 同等に並ぶ、

かち名 價値 物のあたひ、れうち、

かち名 鍛冶 かもうちの約なるかめちの略、金屬を鍛へて器物を造る事、又其の人、

かちいろ名 茶褐色 染色の名、柿色の黄ばみたるもの、軍服などに用ゐらるる色、かき色、

かち名 雅致 がしゆに同じ、

かちき名 勝氣 人に負くるを甚しく忌む氣質、

かちく名 家畜 人家に畜ふ鳥獸、牛馬羊豚犬雞の類、

かちどき名 勝鬨 戦に勝ちて一齊に上ぐる鬨の聲、

かちどり名 楫取、舵取、楫師 楫を取りて船の方向を定むるもの、船頭、

かちまけ名 勝負 勝つと負くと、しようぶ、勝敗、

かちやう名 家長 一家の主人あるじ、片主、

りたる方、

かたがた接 旁 其の傍に、兼れて、且、書翰文に用ゐる語、「御見舞旁上致候」、

かたかは名 片側 左右又は表裏の中の一つ、

かたき名 堅氣 心の堅實にして浮薄ならぬ事、

かたくな名 頑 偏りて移り難き心、頑固、偏風、

かたぐるし名 固苦 餘り嚴格なり、偏風なり、

かたすみ名 片隅 片寄りたる隅、かたわき、傍側、偏脚、

かたづ名 堅睡 心を含め力を入れたる時、口中にたまる唾、「堅睡を飲む」、息を凝らして見まもる貌、

かたづく名 片付 (一)整ふ、治る、整頓す、(心)とゞく、感す、

かたなし名 形無 (一)徒になりたる事、(二)取るに足らぬ事、

かたは 動片端 (一)世の常ならぬ事、(二)身體に具はらぬ所ある事、又其の人、不具、

かたはし名 片端 (一)一方の端、一端、

かたはらいたし名 傍痛 (一)傍より觀ても氣の毒なり、(二)甚をかし、

かたびら名 帷子 (一)古、凡帳に垂るるに用ゐし布帛、

(二)古、單衣の總稱、(三)後に、麻草の單衣の稱、

かたほ名 片帆、片帆 眞帆に對して物の調はぬをいふ、

かつあ (熟語辞典)

かつあい 名 割愛 愛り惜しきを強ひて別るること、
かつかう 名 恰好 (一)好く似合ふ事、適合、(二)形、姿
體、なり、「恰好悪し」、(三)價の低き事、廉價、
かつかう 名 渴仰 深く仰ぎ望むこと、熱望する事、
かつかう 名 渴迎 切に待ち受けて迎ふること、
かつがつ 名 且且 十分ならず先づといふ程の義、少しづ
つ、ほのかに、辛うじて、一方から、
かつきう 名 葛裘 葛は葛布の衣にて夏用ふるもの、裘は
毛衣にて冬用ふる衣、共に隠者、處士などの服、
かつきよ 名 割據 土地を分ちて占領する事、
かつさい 名 喝采 じよめき褒むる聲、「拍手喝采」、
かつしやう 名 合掌 兩掌を密に合する事、佛を拜するに
行ふ、
かつじやう 名 割讓 土地の一部を割いて譲り渡すこと、
かつしよれんくわう 名 合從連横 離合向背に言ふ、
かつぜん 名 憂然 劍、石など堅きもの、打ちあふ聲、
かつそう 名 合奏 同時に各種類の音楽を奏する事、
かつて 名 勝手 (一)自己に便宜なる事、氣儘、隨意、自
分勝手、(二)厨、膳所、(三)家の暮し方、家計、活計、「勝
手向」、
かつたつ 名 葛藤 もつれ、鬭着、紛争、
かつばう 名 渴望 頗に望み欲する事、

かつば

かつばう 名 割烹 食物を料理する事、
かつぶく 名 恰幅 身體の成立、
かつぶし 名 鯉節 鯉の肉を干し固めたるもの、
かつぶとく 名 句禍 釋 初めて仕官すること、禍の粗服を
捨て、禮服を着する義、
かてい 名 家庭 家の内、
かていけういん 名 家庭教育 家庭にて施す教育、
かてん 名 合點 心に承知する事、得心、納得、會得、
かてく 名 家督 (一)家を相続する事、(二)家を相続する
者、嗣子、相續人、
かどたつ 名 動角立 (一)角が立つ、稜起、(二)荒荒しく言
ふ、生圭角、「論議角立つ」、
かどなみ 名 副門並 家内に、毎月、沿戸、
かどふた 名 門札 氏名を書きて門に打付くる札、表札、門
標、
かなぐ 名 金具 金属にて作れる器具の總稱、かなもの、
かなたごなた 名 副 彼方此方 あちらこちら、あちこち、方
方、
かなふ 名 嘉納 嘉して其の言を聴く事、
かたふ 名 加入 仲間に加はる事、
かねがね 名 兼兼 かれて、豫「兼々思ふ」、
かねごご 名 豫言 豫れて言ひおける言、約束しおくる言葉、

かねじやく 名 曲尺 ものさしの名、鯨尺の八寸を一尺と
す、
かねん 名 嘉年 よき年、めでたき年、
かねん 名 加年 年齢を加へ重なる事、
かのこまたらに 名 鹿の子疋に 鹿の子の毛の如く疋文
あるをいふ、
かはがり 名 川狩 川にてする漁、
かはがり 名 斯許 かぐばかり、この位、かほご「斯許の
事」、
かはごし 名 川越 (一)徒歩にて川を渡る事、(二)人を背
負ひて川を渡り越すを業とする者、川越の人足、
かはせ 名 爲換 (一)取替にする事、交換、荷爲替、(二)
遊方へ金銭を送る一種の切手、
かはそひ 名 川沿 川にそひたる處、川邊、
かはばた 名 川端 川のほとり、川邊、河岸、河畔、
かはん 名 河畔 かはばたに同じ、
かはゆらし 名 可愛 (一)愛らし、かはいらし、(二)小さく
して美し、
かはらけ 名 土器 (一)土焼のままの陶器、瓦器、(二)特
に土焼の酒盃、
かはりがはりに 名 副 代代 互に代り合ひて、かばりばんに、
かばるがばる、

かねじ 熟語

かばり

かばりめ 名 替目 物事の遷り變る時、「時候の替目」、
かひ 名 下婢 はしため、しもをんな、下女、
かひ 名 蛾眉 美人の眉の麗しきに譬へて言ふ、三月月の
如き眉、
かひがひし 名 甲斐甲斐 (一)まじめまじめし、忠實なり、
(二)詮ありげなり、勇し、精悍なり、
かひつ 名 加筆 他人の文章を添削する事、
かひなし 名 無甲斐 (一)ききめなし、詮なし、(二)弱し、
未熟なり、
かひん 名 佳品 佳き品、良品、
かふ 名 下付 さげ渡す事、
かぶ 名 歌舞 歌ふと舞ふと、「歌舞音楽」、
かぶ 名 樂府 漢詩の一體、
かふい 名 合意 意に合ふ事、心に適ふ事、
かふう 名 下風 (一)かざしも、(二)他人の下に立つ事、
かふう 名 家風 一家の風習、家例、
かふきん 名 合巻 婚禮に杯を交ふること、
かふけい 名 合計 (一)合せ數ふる事、(二)合せたる高、
しめ高、
かふせん 名 嗑然 笑ふ聲に言ふ、「嗑然として笑ふ」、
かぶつ 名 下物 酒の肴、
かへう 名 餓拳 飢ゑて途上に斃れ死ぬる者をいふ、「野に

かへすがへす 副 返返 幾度も、しばしば、再三、再四、重
 重、
 かへにみみあり 句 壁有耳 密談などの洩れ易きを譬へて
 言ふ、
 かへりがけ 名 歸途 歸路の序で、
 かほ 名 嘉謨 國家を治むるにまさき手段方法、嘉猷、
 かほく 名 家僕 しもへ、下男、家來、
 かほご 副 斯程 かげかりに同じ、
 かほをうる 句 膏顔 面目を施す、
 かほをたつ 句 立顔 其の人の面目を施さしむ、
 かほをのぶす 名 潰顔 其の人の面目を失はしむ、
 かまう 名 鷲毛 (一)鷲鳥の毛羽、(二)純白なるに譬へて
 言ふ、(三)轉じて雪の事、
 かまびすし 形 喧 騒し、やかまし、喧嘩、「争ふ聲喧し」、
 がまん 名 我慢 (一)みづから誇る事、自慢、(二)我意を
 張る事、剛愎、執拗、(三)耐へ忍ぶ事、堪忍、
 かみがき 名 神垣 神社の周圍の垣、忌垣、玉垣、瑞垣な
 ど皆同じ、
 かみかけて 副 神掛 神に祈り誓ひて、
 かみかざり 名 髮飾 (一)結ひたる髪を美しく飾る事、(二)

髮飾の道具、
 かみかたち 名 髮形 髪を結ひたる姿、
 かみくづ 名 紙屑 紙の用をなして最早、捨つべきもの、紙
 紙、
 かみさぶ 動 神閑 物凄しくあり、「境内神閑ぶ」、
 かみしむ 名 嚙緊 (一)力を入れて噛む、咬緊、(二)善く
 味ふ、齧味す、(三)事の趣を深く考ふ、
 かみそり 名 剃刀 髪髭などをそるに用ゐる刃物、
 かみたのみ 名 神頼 神に祈りて身の上を頼む事、
 かみなりよけ 名 雷除 雷の落つるを避くる事、又其のも
 の、避雷針、
 かみのく 名 上句 和歌三十一文字の初の三句の稱、
 かみやう 名 家名 一家の名目、かめい、「家名相續」、
 かみより 名 紙捻 紙を捻りて糸の如くしたるもの、こよ
 り、
 かみわく 動 嚼分 (一)食物を嚼み味ふ、齧味す、(二)能
 く事理を分別す、咀嚼す、
 かんい 名 簡易 手軽き事、
 かんいう 名 姦雄 姦智にたけたる人物、
 かんいう 名 含有 其の中に含む事、
 かんえう 名 肝妥 必要なる事、緊要、肝心、
 かんおり 名 感應 信心の神佛に通ずるをいふ、感通、

かんおん 名 漢音 支那隋以前に其の北部に行はれし漢字
 の音、例へば行なかう、正をせいと讀むが如きもの、
 かんか 名 閑暇 (一)暇多き事、ひま、(二)太平無事の事、
 かんか 名 坎珂 志を得ぬ事、不遇、坎軻、蹇軻、
 かんが 名 閑雅 清くみやびやかなる事、人の容姿の品よ
 き事、
 かんがい 名 感慨 心に感じて慨く事、
 かんがい 名 陷害 人を陥れ害する事、
 かんがい 名 早害 降雨の無き爲、萬物に害を及す事、
 かんがい 名 眼界 眼に見ゆる限り、
 かんかう 名 間行 微行する事、忍びあるき、
 かんかう 名 勘考 考ふる事、思索、
 かんかう 名 刊行 印刷して世に公にする事、印行、發刊、
 「拙著を刊行す」、
 かんかう 名 鷹行 鷹の列をなして行くが如く相並びて進
 む事、「伯仲鷹行」、
 かんかく 名 看客 看る人、見物人、
 かんかく 名 扞格 かたくして中に入り難きこと、又當り
 さからふこと、
 かんかく 名 感覺 耳目等の感覺器によりて見たり聞け
 たりする事、
 かんかく 名 間隔 (一)物と物との隔て、(二)隊伍の左右

の間、距離に對して言ふ、
 かんがみ 名 鑑 (一)例に照し見る事、(二)手本、鑑鑑、「股
 の鑑み遠からず」、
 かんかん 副 坎々 喜ぶこと、
 かんかん 副 侃々 喜ぶたのしむこと、
 かんがん 名 汗顔 耻じて顔に汗をかき事、「汗顔此の事に
 候」、
 かんかんがくがく 副 侃侃諤諤 剛直なる狀に言ふ、
 かんきうじゆうとう 句 汗牛充棟 藏書の多きを形容し
 て言ふ、
 かんきふ 名 感泣 感じ喜びて泣く事、
 かんきん 名 閑吟 靜に詩歌などを吟ずる事、くちすさみ、
 かんきやう 名 寒郷 我が郷里の諺稱、
 かんきよ 名 間居 無事に家に居る事、
 かんきよ 名 閑居 閑靜なる住居、
 かんく 名 艱苦 艱み苦む事、難儀、艱難、辛苦、
 かんくわ 名 感化 感じて知らず識らず其れに移る事、
 かんくわ 名 干戈 (一)たてとほこと、戰爭、(二)轉じて
 戰爭、
 かんくわんりうりう 句 間關流離 艱難してさまよひあり
 くこと、
 かんげい 名 寒稽古 寒中に稽古を勵む事、

かんげい 名 感激 感じて奮發する事、
かんげつ 名 簡潔 簡易にして要領を盡せる事、簡明、「簡潔の文」、
かんげつ 句 汗血 汗を血の如くになす意にて、非常の勞をいふ、
かんげつねつ 名 間歇熱 隔日又は時を定めて熱の起る病、
かんげん 名 寒喧 寒きと暖きと、寒暖、「寒喧の挨拶」、
かんげん 名 甘言 欺く時などの巧なる言語、苦言に對して言ふ、
かんご 名 看護 病人を介抱する事、看病、
かんご 名 監護 監督して保護を加ふる事、
かんご 名 閑語 かんだんに同じ、閑語、「佇立閑語」、
かんごう 名 鉗口、箱口 口をふさぐこと、緘口に同じ、
かんごう 名 眼孔 (一)眼のくぼみ、眼窩、(二)見識、「眼孔小なり」、
かんごう 名 鑑査 考へて調査する事、めきき、
かんごう 名 乾燥 (一)乾きて濕氣の無き事、(二)興味の無き事、「乾燥無味」、
かんごう 名 諫諍 まのあたり其非を擧げて人を諫むる事、
かんごう 名 賈造 似せて造る事、偽造、「賈造紙幣」、

かんざつ 名 簡札 手紙のこと、
かんざつ 名 監察 人の所業を見張りしらぶること、目付に同じ、
かんじ 名 敢死 果敢にして死するものをいふ、
かんざつ 名 鑑札 官許の證を記したる札、免許札、
かんざん 名 閑散 閑暇にして用の無き事、ひま、
かんじ 名 幹事 其の會の事務を整理する役、
かんじいる 動 感入 深く感ず、
かんしき 名 鑑識 鑑査する見識、めきき、
かんしん 名 感心 心に感ずる事、感服、
かんしん 名 甘心 心に甘ずる事、快く思ふ事、
かんしん 名 寒心 心にぞつとする事、膽を冷す事、
かんじん 名 肝心 かんげうに同じ、
かんしや 名 感謝 感喜して謝意を述べらる事、
かんじやう 名 感状 軍司令官より陣中にて、拔群の戦功あるものに賜はる賞状、
かんじやう 名 干城 (一)まもりじら、守衛城、(二)國家の鎮護となるべき人、軍人、「國家の干城」、
かんじやう 名 感情 物事に感ずる情、氣持、
かんじやく 名 痛癢 動もすれば憤怒を發する事、
かんしよ 名 鴈書 音信、消息、かりのたまづき、
かんしよ 名 間食 三度の食事の外に食する事、あひだ

かんしよ 名 感觸 身に受くる感じ、「感觸を害す」、
かんしよ 名 無顔色 面目無きを言ふ、
かんせい 名 寒生 貧しき書生、貧生、
かんせい 名 汗青 史冊、書冊などに同じ、
かんせい 名 陥穽 おとし穴、
かんせい 名 箝制 おさへつけて自由に動かせぬこと、
かんせい 名 閑靜 物靜なる事、幽靜、「閑靜なる土地」、
かんせい 名 肝聲 いびきの聲、「肝聲雷の如し」、
かんせう 名 罕少 少きこと、まれなること、
かんせつ 名 間接 遠まはしなる事、直接ならぬ事、
かんせふ 名 干涉 其の本分にあらずして關係する事、干預、
かんせん 名 感染 感じ染む事、うつる事、「流行病に感染す」、
かんぜん 名 間然 批評すべきすき、「間然する所無し」、
かんぜん 名 眼前 目の前、まのあたり、目前、
かんそ 名 寒素 甚しく貧しきこと、貧素に同じ、
かんそ 名 閑窓 物靜なる家の窓、幽窓、
かんそ 名 盥嗽 顔を洗ひ口を嗽ぐ事、
かんそ 名 含嗽 口を嗽ぐ事、
かんそく 名 間不容息 甚だ急にして氣息を容

かんそん 名 寒村 (一)貧しき村里、(二)我が住める村の諺稱、
かんだい 名 艦隊 軍艦の隊、「常備艦隊」、
かんだう 名 勘當 長上の旨に背きて其の縁を絶たるる事、勘氣、勘事、「親の勘當」、
かんだう 名 間道 本道ならぬ路、わきみち、わけみち、
かんだん 名 肝膽 誠の心、心の底、肺肝、「肝膽を推く」、
かんだん 名 簡單 複雑ならぬ事、手短か、簡短、簡略、簡約、節約、
かんだん 名 感嘆 感心して賞美する事、「感嘆斜ならず」、
かんだん 名 間斷 物事の絶つ間、ひま、「間斷なく運る」、
かんだん 名 閑談 (一)物靜に語る事、閑話、閑語、「閑談暇刻」、(二)俗事を離れたる談話、
かんち 名 閑地 物靜なる土地、閑靜、
かんち 名 奸智 正しからざる智恵、わる智恵、邪智、「奸智に長く」、
かんちく 名 趕逐 おひ蹄すこと、烈しく逐ひ捕ふこと、
かんちく 名 含苦 其の内に含む事、
かんちやう 名 勘定 (一)勘へ定むる事、(二)金穀などを數へ算ぐる事、算用、計算、會計、(三)勘定して受け又は拂ふべき金「勘定を取る」、

かんぢゆう名 寒中 小寒大寒の節、三十日間の稱。
 かんてい名 鑑定 物事の眞偽善悪を見定むる事、審査。
 かんてふ名 間諜 しのびもの、まぼしもの、間者、細作。
 かんどう名 竿頭 竿のさき、「百尺竿頭一步を進む」。
 かんどう名 感動 甚しく感ずる事。
 かんどう名 監督 取締る事、又其の人。
 かんどう名 簡牘 手紙、書簡、日川文。
 かんどうちにあまひる句 肝腦塗地 (一)慘殺せられて身
 體を全うせず、(二)慘酷の極に陥る。
 かんなん名 艱難 かんくに同じ。
 かんじん名 堪忍 (一)堪へ忍ぶ事、忍耐、(二)他人の過
 失を免す事、勘辨。
 かんろう名 堪能 (一)事に堪へて能くする事、(二)技に
 巧なる事、「絲竹に堪能なり」。
 かんば名 看破 事の真相を看破る事。
 かんばい名 感慨 深く感じて忘れぬ事、感銘。
 かんばう名 感冒 病の名、かぜ、風邪。
 かんばせ名 顔 かほばせの意、顔のさま、「花の顔」。
 かんばつ名 早魃 夏日、雨の降らざる事、ひでり。
 かんばつをいれず句 間不容髮 利害の別る、とこひ、
 一髪を容る、間隙なきを言ふ。
 かんばのらう名 汗馬勞 將士の戦功に言ふ、

かんばん名 看板 (一)營業者が廣告の爲に櫛又は門など
 に掲げ置くもの。
 かんばん名 甲板 船の上部に張り詰めたる處、船板、で
 つき。
 かんぶく名 感服 深く感ずる事、敬服。
 かんぶつ名 膺物 似せて造りたる物、にせもの。
 かんぶん名 感奮 感じて奮起する事。
 かんべん名 簡便 手軽く便利なる事。
 かんべん名 勘辨 (一)勘へ辨ふる事、思ひ分くる事、(二)
 他人の過失を斟酌して免す事、勘忍、恕。
 かんぼく名 翰墨 文筆といふに同じ、「翰墨を事とす」。
 かんめい名 感銘 かんばいに同じ。
 かんもく名 眼目 めざす所、めど、主意、要點、「書中の
 眼目」。
 かんやう名 涵養 智徳など養ひ蓄ふる事、「徳性涵養」。
 かんゆう名 姦雄 姦智に長けたる人、「治世の臣亂世の
 姦雄」。
 かんよ名 乾淤 干あがりたる泥沙。
 かんらく名 陷落 陥る事、陥没、没落、「旅順陥落」。
 かんりん 翰林 學の林、文の林、學者社會をいふ。
 かんりやく名 簡略 簡單に略する事、手数の省かす事。
 かんろ名 甘露 甘雨ともいひて、天より降れば祥瑞とす、

かんろく名 干祿 仕へを求むること。
 かんるる名 感涙 忝しと感ずりて流す涙。
 かんわ名 閑話 (一)かんだんに同じ、(二)無益なる話、む
 だくり。
 かんる名 敢爲 進んで事を爲す事、「敢爲の氣象」。
 かんる名 寒威 寒の勢、寒さ、「寒威凜冽」。
 かめい名 下命 他人の命令を敬ひて言ふ語。
 かめい名 加盟 盟約に加入する事。
 かめい代下名 わたくし、拙者。
 かもなしふかもなし句 無可無不可 (一)善くも無し悪
 しくも無し、(二)過不及無し。
 かもん名 下問 自分より下の者に請問する事、「下問を耻
 ぢす」。
 かもう名 加養 養生をなす事。
 かもうに 副 斯様 斯くの如く、此の通に。
 かもがや 副 嗷嗷 人聲の喧しく立つに言ふ、喧嘩。
 からうじて 副 辛 からうじての音便、辛き思にて、やうや
 う、からがら、纒に。
 からがら 副 辛辛 からうじてに同じ、「命辛々逃ぐ」。
 からがら 副 憂憂 金物などの相觸れて發する聲。
 からがら 副 乾乾 物の乾きたるに言ふ、「からがら」に乾
 く。

からさめ名 幸目 つらき思。
 からくり名 繰 (一)からくる事、あやつる事、(二)繰の
 仕掛けにて自由に動す機關、機巧。
 からげつ 動 紫付 續り束ぬ、括る、からぐ。
 からさなき名 烏鳴 烏の鳴く事、俗問之に因りて凶年を
 知り得べしといふ、「烏鳴き悪し」。
 からつゆ名 乾梅雨 梅雨中に雨氣の無き事。
 がらん名 伽藍 梵語、精舎と譯す、佛道修行の處、寺、「七
 堂伽藍」。
 かりう名 下流 (一)かばし、(二)下流社會、社會の下
 等に位する人。
 かりう名 我流 我がまま勝手の流れ儀。
 かりまひ名 假住 假に住みて居る事、永く住まぬ處、寓
 居。
 かりごち名 假綴 書籍、帳簿、などを假に綴づる事、「假
 綴の本」。
 かるがる 副 輕輕 いと輕げに、かるがると。
 かるた名 骨牌 遊戲又は博奕の具、歌骨牌、花骨牌など種
 類多し。
 かるわざ名 輕業 身輕に行ふわざ、綱渡り、梯子乗りの
 類。
 かるる名 加累 他人に禍を及ぼすこと。

かたい 名 嘉禮 吉禮また手厚き禮。
 かたこれと 副 彼此 彼れや此れやと、兎角、
 かたん 名 可憐 憐むべき事、愛らしき事、「可憐の少女」
 哀憐、
 かるがるし 形 輕輕 沈着ならず、憤無し、かるがるし、輕
 卒なり、輕佻なり、「かるがるしき舉動」
 かるはすみ 名 輕舉 かるがるしく事を行ふ事、

かた

かたむし 名 氣壓 空氣の物を壓する力、
 かたむし 名 貴意 他人の意見を指して言ふ敬語、「貴意に任
 ず」
 かたむし 名 奇異 不思議なる事、奇怪、奇妙、「奇異の思をな
 す」
 かたむし 名 杞憂 將來を想像して苦勞する事、取越苦勞、
 かたむし 名 器宇 物の器量又品性「器宇宏遠」
 かたむし 名 舊惡 舊時の惡事、「舊惡露頭」、「舊惡を念は
 す」
 かたむし 名 舊友 舊くより交れる朋友、昔の友、
 かたむし 名 舊恩 舊く受けたる恩恵、
 かたむし 名 躬行 身みづから行ふこと、「躬行實踐」
 かたむし 名 舊交 舊き交際、前のよしみ、

かたむし 名 裝葛 装は冬の衣、葛は夏の衣、一たび裝葛
 をかふは一年経たること、
 かたむし 名 糾合 まとむる事、
 かたむし 名 舊誼 舊き交誼、以前のなじみ、
 かたむし 名 休休 節儉のこと、副詞として心のゆつたり
 したること、又心に道を樂みて安らかなる形容にもいふ、
 かたむし 名 九牛一毛 多くの事物中の極め
 て僅少なる部分に對して言ふ語、
 かたむし 名 久瀾 久しぶり、
 かたむし 名 救荒 不作の歲に施す、救助、
 かたむし 名 舊慣 舊き慣習、舊習、
 かたむし 名 休憩 きりそくに同じ、
 かたむし 名 九原 黄泉に同じ、
 かたむし 名 舊故 ふるきなじみ、舊友に同じ、
 かたむし 名 救護 救ひ護る事、
 かたむし 名 穹蒼 天の事、
 かたむし 名 舊作 詩歌文章などの舊く作りたるもの、
 かたむし 名 窮策 苦しませの策略、
 かたむし 名 舊師 舊き師匠、先師、
 かたむし 名 九死 九死一生の略、殆死なんばかりの危き境
 涯、萬死、「九死の境を出でて」
 かたむし 名 舊式 舊き式、昔のかた、舊式の服、

かたむし 名 舊識 舊く知れる人、舊知、
 かたむし 名 舊習 きりくわんに同じ、「舊習容易に改ら
 ず」
 かたむし 名 九仞功 稔年の勞に譬へて言ふ、「九仞
 の功を一擧に虧く」
 かたむし 名 舊情 舊きなきけ、昔の恩、
 かたむし 名 救恤 恤み救ふ事、
 かたむし 名 懸牛首賣馬肉 矛盾
 の意に言ふ、故事の部を見よ、
 かたむし 名 救助 救ひ助くる事、
 かたむし 名 執牛耳 (一)同盟の長と爲る、(二)かし
 ち立つ、

かたむし 名 九拜 (一)古の最敬禮、九度拜する事、(二)
 昔簡文に崇敬の意を表して己れの名の下に書く語、
 かたむし 名 舊弊 (一)舊來の悪しき癖、(二)舊習に泥み
 たる性質、因循、姑息、
 かたむし 名 氣運、機運 きざし、勢ひ、なり、運命、
 かたむし 名 休命 よき運命、美命、
 かたむし 名 糾問、糺問 問ひたすこと、尋問、吟味、
 かたむし 名 休養 休息して保養する事、
 かたむし 名 舊來 舊くより、從來、
 かたむし 名 舊臘 去年の十二月の事、客臘、
 かたむし 名 窮理 事物の理を深く究むるをいふ、格物、

かたむし 名 舊跡 舊く物事の有りし跡、古跡、遺跡、
 かたむし 名 休戚 喜憂、又安危に同じ、
 かたむし 名 九泉 よみち、黄泉、九原に同じ、
 かたむし 名 窮鼠 (一)逃げ路を失ひたる鼠、「窮鼠却て狗を
 齧む」(二)窮したる敵に譬へて言ふ、
 かたむし 名 休息 休み思ふ事、休、休憩、
 かたむし 名 窮措大 大は秀でたる士、則ち窮したる秀
 士、貧乏書生、
 かたむし 名 牛刀 牛を屠るに用ゐる庖刀、「牛刀を割くに爲
 る牛刀を用ゐん」

きんね 名 舊曆 舊く用ゐし曆、太陰曆、新曆に對して言ふ。

きんねん 名 氣焰 盛なる言辭の勢に言ふ、「氣焰萬丈」。

きんねん 名 義捐 金錢物品等を施して他を恵む事。

きんねん 名 記憶 心に留めて置きて忘れざる事。

きんねん 名 机下 (一)机の下、(二)書簡文の宛名の脇付に書く語、同輩に用ゐる「某君机下」。

きんねん 名 貴下 あなた、まげ、貴所、多くは書簡文に用ゐる。

きんねん 名 麾下 大將の旗の下、又近侍の士。

きんねん 名 氣慨 道ならぬ事を慨きて容易に屈せぬ氣象、意地、意氣。

きんねん 名 魏峨 きぎに同じ。

きんねん 名 寄稿 新聞雜誌等に寄附する原稿。

きんねん 名 奇行 普通ならざる行、かばりたる行。

きんねん 名 紀行 旅行の記事、紀行文。

きんねん 名 揮毫 書畫を書く事。

きんねん 名 氣懸 氣に懸る事、懸念、心配。

きんねん 名 飢渴 腹飢ふ咽渴の事。

きんねん 名 着替 着替ふる爲に用意したる衣、副衣。

きんねん 名 龜鑑 做ふべき善き例、手本、「萬世の龜鑑」。

きんねん 名 旗艦 司令官の乗り居る軍艦。

きんねん 名 祁寒 大寒に同じ。

きんねん 名 嘻嘻 笑ふ聲。

きんねん 名 熙熙 和樂の狀に言ふ。

きんねん 名 危疑 あやふみ疑ふこと、危慢。

きんねん 名 機宜 宜しき時機、「機宜に同じ」。

きんねん 名 義氣 義に富みたる氣象、「義氣凜然」。

きんねん 名 魏巍 山の高く聳ゆる狀に言ふ、魏峨、巍然、「巍々として聳ゆる」。

きんねん 名 危機一發 今一つ誤らば如何ともし難き程の危き事。

きんねん 名 箕裘 箕裘をつぐ、箕裘の業とは父の業を子の承けつぐこと。

きんねん 名 奇奇怪怪 奇怪を強めて言ふ語。

きんねん 名 聞濟 ききとどけに同じ。

きんねん 名 聞屈 聞き届くる事、問濟、承諾。

きんねん 名 危急存亡 亡ぶるか存するかといふ程危急なる事、「危急存亡の秋」。

きんねん 名 奇妙妙 奇妙を強めて言ふ語。

きんねん 名 歸郷 故郷に歸る事。

きんねん 名 起居 (一)朝夕の振舞たる、(二)安否、「御起居如何」。

きんねん 名 義舉 義の爲に事を舉ぐる事、「我が征討の義舉は、深く同情を内外に博せり」。

きんねん 名 岐嶷 幼者の狀貌の卓異なること。

きんねん 名 危懼 危を懼る事、不安心、「危懼の念」。

きんねん 名 崎嶇 (一)山路などの峻じき狀に言ふ、(二)轉じて困難なる事に言ふ、「崎嶇難行」。

きんねん 名 鞠育 子と愛撫すること。

きんねん 名 奇遇 思ひがけなく出會ふ事。

きんねん 名 屬寓 旅の住居、假の宿。

きんねん 名 規矩準繩 規則、標準。

きんねん 名 鞠躬 恐縮謹慎の狀に言ふ、「鞠躬盡力」。

きんねん 名 鞠訊 罪條を責めたこと。

きんねん 名 開道 きくなるの延、開く所に依れば、

きんねん 名 鞠問 鞠訊に同じ。

きんねん 名 奇貨 (一)得られぬ貨物、「奇貨居く可し」、(二)轉じて選り入からざる機會。

きんねん 名 奇禍 思ひ懸けぬ禍害。

きんねん 名 歸化 外國人の國籍を脱して他國民となること、「歸化人」。

きんねん 名 機會 たり、はずみ、「機會に乘ず」。

きんねん 名 奇怪 (一)奇妙に怪しき事、不思議、面妖、(二)語り昔むべき事、「奇怪に覺ゆ」。

きんねん 名 機關 活動の裝置をなしたる機關、(一)用ゐて我が爲にするもの、「機關新聞」。

きんねん 名 奇觀 珍しき不思議なる觀もの、「千古の奇觀」。

きんねん 名 奇計 奇謀、奇策などに同じ。

きんねん 名 技藝 わざと藝と、技術。

きんねん 名 喜劇 愉快なる演劇、悲劇に對して言ふ。

きんねん 名 劇版 版に刻む事、「劇版に付す」。

きんねん 名 機嫌 (一)心地、起居、「御機嫌如何」、(二)氣合氣色、「機嫌を損す」。

きんねん 名 危言 高言といふに同じ。

きんねん 名 寄語 先方に言ひ送る事。

きんねん 名 綺語 虚飾多く、實なくして人心を惑はしむる語、「狂言綺語」。

きんねん 名 貴公 書簡文に用ゐる對照の代名詞、もと長上に向ひて用ゐる、後には下輩に對して用ゐる。

きんねん 名 動開召 (一)開くの敬語、(二)轉じて、食ふ、飲む、治む、行ふなどの敬語。

きんねん 名 氣骨 倭骨に同じ、正義を守りて屈せざる氣象。

きんねん 名 騎虎勢 一旦手を下しては中止すべからざるに譬へて言ふ、「騎虎の勢下るを得ず」。

きんねん 名 記載 記し載する事。

きりぎりす 名 起草 草稿を書き起す事、起草。
きりぎりす 名 偽造 がんぞうに同じ、「私書偽造」
きりぎりす 名 箕帚妾 掃く女といふ意にて人の妻となる謙稱。

きりぎりす 名 貴札 書簡文に他人の手紙を敬ひ言ふ語、尊称。
きりぎりす 名 起算 計算し始むる事。
きりぎりす 名 奇事 不思議なる事、珍しき事。
きりぎりす 名 賞酬 書簡文に用ゐる語、御返事、貴答。
きりぎりす 名 旗幟鮮明 旗色のはつきりしたること、主義の明らかなること。

きりぎりす 名 期日 定めの日限。
きりぎりす 名 記事文 有りし事のままを記す文章。
きりぎりす 名 時人 奇人に同じ、人に異なる行爲ある人。
きりぎりす 名 疑心生暗鬼 疑へば疑ふ程益々恐怖の念を生ずること。
きりぎりす 名 徽章 朝子、胸、腕などに附くるしるし。
きりぎりす 名 氣象 天氣の具合、空模様、天候。
きりぎりす 名 寄宿 (一)他人の家に假に住む事、(二)多くの生徒等の合宿する所、「寄宿舎」。
きりぎりす 名 寄書 新聞雜誌などに寄附する文章。
きりぎりす 名 貴所 (一)貴下の住所、又貴下、多く書簡文に用ゐる、(二)僧の尊稱。

きりぎりす 名 記誦 古き文章などを記憶し誦讀すること。
きりぎりす 名 寄食 他家に身を寄せて其の養を受くる事、あるふらふ。
きりぎりす 名 氣隨 氣まゝ、我がまゝに同じ。
きりぎりす 名 歸省 父兄を省みんが爲に故郷に歸る事。
きりぎりす 名 犠牲 いけにへ、(一)獸を生きたがら神に供ふる事、(二)轉じて他の爲に我が身を捨つる事、「身を犠牲に供す」。

きりぎりす 名 氣絶 一時感覺を失ひて氣息の絶ゆる事。
きりぎりす 名 危然 嚴正なる貌。
きりぎりす 名 喟然 歎息する状に言ふ、「喟然として嘆す」。
きりぎりす 名 魏然 さきに同じ。
きりぎりす 名 基礎 物のもとゝ、ごだい、石ずゑ。
きりぎりす 名 寄贈 贈り寄する事。
きりぎりす 名 氣息 いき、呼吸、「氣息澄々」。
きりぎりす 名 驥足 才能に譬へて言ふ、「驥足を展す」。
きりぎりす 名 危殆 危き事、「危殆の位置」。
きりぎりす 名 祈禱 神佛に祈る事、「加持祈禱」。
きりぎりす 名 貴答 きしふに同じ。
きりぎりす 名 詭道 詭りて人の耳目を惑はす道。
きりぎりす 名 忌憚 忌み憚る事、遠慮。
きりぎりす 名 奇談 不思議なる談話、「珍聞奇談」。

きりぎりす 名 機軸 (一)地球の迴轉する時、其の軸と假定したる所、(二)從來無き所のもの、「機軸を出す」。

きりぎりす 名 吉瑞 吉事の前兆、めでたきしるし、吉兆。
きりぎりす 名 吉日 よき日、めでたき日、吉辰、吉日。
きりぎりす 名 歸着 (一)歸りて到着する事、歸宿、(二)事の落着く事。

きりぎりす 名 忌中 忌みに籠る間。
きりぎりす 名 喫煙 煙草を吸ふ事、「喫煙室」。
きりぎりす 名 形氣遣 氣遣ふべくあり、不安心なり。
きりぎりす 名 喫驚 びっくりする事。
きりぎりす 名 吉凶 吉と凶と。

きりぎりす 名 吉凶 吉と凶と。
きりぎりす 名 吉慶 めでたき事。
きりぎりす 名 吉左右 吉事の音信。
きりぎりす 名 屹然 山などの高く峙つこと。
きりぎりす 名 詰旦 夜のあけはなれ、あさ、つとめて、詰朝も同じ。

きりぎりす 名 吉兆 きちするに同じ。
きりぎりす 名 副急度 確に、相違なく、坡度。
きりぎりす 名 吉報 よき報知。
きりぎりす 名 喫飯 飯を食ふ事。
きりぎりす 名 詰問 責め詰めて問ひ糺す事、「罪状を詰問」。

きりぎりす 名 屹立 眞直に峙つ事、「屹立千仞」。
きりぎりす 名 機轉 氣轉 心のはたらし、氣のきくこと、機敏。

きりぎりす 名 歸途 かへりみち、歸路。
きりぎりす 名 悸動 驚愕の甚しき意、胸のどきどきすること。
きりぎりす 名 危篤 病篤くして死に迫れる事、病革。
きりぎりす 名 奇特 善行を褒むる語、神妙、殊勝、「奇特の少年」。

きりぎりす 名 忌日 人の死したる當日、命日、忌日の清善、きりぎりすをなむこと、縁木求魚 決して得べからざるに言ふ、「猶、木に緣りて魚を求むるがごとし」。
きりぎりす 名 礎 きわいたの略、衣を敷せて打撃す壘、砦。
きりぎりす 名 歸寧 家に歸りて父母の安否を訪ふこと。
きりぎりす 名 紀念 かたみに同じ。
きりぎりす 名 疑念 疑しき思、疑心。

きりぎりす 名 機能 身體各部機關の活動する能力をいふ。
きりぎりす 名 氣毒 人の憂なごを思ひ遣る事、諒。
きりぎりす 名 希望 希ひ望む事、ねがひ、のぞみ、冀望。
きりぎりす 名 企望 志し願ふ意。
きりぎりす 名 毅魄 猛く強き大丈夫のたましい。
きりぎりす 名 奇拔 著しく秀でたる事。

きはん 名 軌範 おきてとすべき模範、「文章軌範」。
 きはん 名 羈絆 ほだし、きりな「羈絆を脱す」。
 きび 名 機微 氣運の變化する兆。
 きびにふく 句 附驥尾 芋蠅の驥尾に附きて遠きに達するが如く、後進の先進に依りて事を爲すに言ふ。
 きぶ 名 寄附 事業を助けん爲、金銀物品などを贈る事、寄進、「寄附行爲」。
 きふかり 名 急行 急ぎて行く事、「急行列車」。
 きふふ 名 副汲汲 (一)心を傾くる状に言ふ、「汲々として急ぐ」。
 きふふ 名 副汲汲 不安の状に言ふ、「汲々乎として危い哉」。
 きふく 名 起伏 起きたると伏したると、「山脉起伏」。
 きふく 名 歸服 つきたがふこと、まつらふこと。
 きふく 名 忌服 いみと、ぶくと、即、喪に居る間。
 きふけき 名 急激 急にして激しき事。
 きふけつ 名 泣血 ちのなみだ、非常に悲しむる事、「泣血三年」。
 きふぜん 名 副翕然 口を合せて、異口同音に、「朝野翕然として」。
 きふそつ 名 急猝 俄か、倉卒に同じ。
 きぶん 名 奇聞 奇妙なる風聞、珍しき噂。
 きぶりり 名 急流 流れの早き事。

きぶをおふ 句 負笈 遊學する事に言ふ。
 きぶう 名 儀表 禮儀の表面に標準となるもの、「天下の儀表」。
 きべん 名 詭辯 人を陥着する辯舌、「詭辯を弄す」。
 きぼ 名 規模 (一)正しき例、手本、(二)仕組、「規模宏遠」。
 きみ 名 氣味 (一)香と味と、(二)氣もち、心もち、心地、「氣味悪し」。(三)けはひ、趣。
 きみつ 名 機密 政治上又は軍事上の秘密。
 きむ 名 義務 己れの爲すべき務、權利義務。
 きんい 名 錦衣玉食 衣食の美なる事。
 きんいつ 名 均一 ならし、平均、平等、「參錢均一」。
 きんえう 名 緊要 かんじやうに同じ。
 きんり 名 金鳥 日の異稱、「金鳥玉兔」。
 きんおうむけつ 名 金甌無缺 堅固にして完全なる事。
 きんかく 名 金革 兵器のこと。
 きんき 名 欣喜 喜ぶ事、歡喜、欣喜に堪へず、「欣喜奮躍」。
 きんきふ 名 緊急 緊要にして急ぐべき事、「緊急動議」。
 きんきん 名 副欽々 人をして樂ましむるをいふ。
 きんきん 名 副欣欣 いかにも喜しげなる状。
 きんきん 名 副閤々 中正にちやんとしたる状。
 きんきやう 名 近況 近頃の景況、「近況如何」。

きんくわん 名 金科玉條 金玉の如く貴ぶべき科條。
 きんけつ 名 余穴 かれもち、金満家。
 きんけつ 名 禁闕 禁裡、禁中に同じく皇居のこと。
 きんげん 名 謹言 謹んで申す、書簡文の末に書く語「恐惶謹言」。
 きんさ 名 欽差 勅使のこと、勅定を欽定といふ。
 きんさつ 名 緊捉 きびしくとらふこと。
 きんさつ 名 余策 金銀の調達。
 きんしやう 名 錦鏽 (一)にしきと、わひものと、「絳羅錦鏽」。(二)美しき織物。
 きんしん 名 金鷄勳章 軍功の秀でたる者に賜る勳章、功一級より七級まで有り。
 きんしん 名 謹言 謹んで言ふ。
 きんしん 名 謹慎 畏れ慎む事。
 きんしんしやう 名 錦心繡腸 俗事に拘ららず風流粗事に長ぜる人をいふ。
 きんじやうたうち 名 金城湯池 堅固にして近づくべからざる城塞。
 きんじゆく 名 窘感 苦しむこと、窮迫に同じ。
 きんじぶく 名 擒縦 捕ふること、ゆるす事、「七擒七縱」。

きんしよく 名 銀燭 燈火の美しく輝く状に言ふ。
 きんせかい 名 銀世界 雪の白く降り積りたる状に言ふ、又梅花の満開せる林の景色にも言ふ。
 きんせきのまじはり 名 金石交 礙る事無き堅き交。
 きんせん 名 欣羨 人を欽敬して羨むこと。
 きんせん 名 副欣然 笑ふ貌、欣然に同じ。
 きんせん 名 副欣然 喜ぶ状に言ふ。
 きんだ 名 勤惰 勤むると惰ると。
 きんたい 名 襟帶 山を以て蔽はるること、襟の如く、河を以て、圍まること、帯の如きをいふ、「山河襟帶の地」我が京都の如きをいふ。
 きんちやう 名 謹聽 謹みて聽く事。
 きんちよく 名 謹直 謹み深く正直なる事。
 きんは 名 金波 月光などの映りて金の如く光る波。
 きんみ 名 吟味 (一)詩歌を吟じ味ふ事、(二)轉じて精しく調ぶる事、精査、(三)罪を問ひ糺す事、糾問、詮義。
 きんゆう 名 金融 金銀の融通、かれまはり。
 きんらんのおきり 名 金蘭契 極めて睦まじき交際、親交。
 きめにめいす 名 銘肝 深く心に感じて忘れず。
 きりうき 名 疆場 (一)邊境、(二)田の畔。
 きやうらん 名 竟宴 物事をなし意へたる喜びの酒宴。

きやうちゆう 名 饗應 酒食を備へてなす事、馳走。
 きやうちゆうがいの 名 境涯 身の置き處、境遇。「一生の境涯」。
 きやうちゆうかう 名 強梗 猛くして強きこと。
 きやうちゆうかう 名 行幸 天皇のみゆき。
 きやうちゆうかん 名 狂簡 志大にして物事に簡略なること。
 きやうちゆうかうし 名 仰仰 仰山らし、大層らし。
 きやうちゆうかうし 名 境遇 きやうちゆうがいに同じ、「悪しき境遇」。
 きやうちゆうかうし 名 驚慌 驚きて怖ぢおそる事、「驚慌をなす」。
 きやうちゆうわん 名 郷關 故郷の界、「男子志を決して郷關を出」。
 きやうちゆうけい 名 行啓 皇后、東宮のみゆきを言ふ。
 きやうちゆうげん 名 郷愿 世俗に謹厚と稱せらるる人。
 きやうちゆうきう 名 競争 買けしと競ひ争ふ事、せりあひ、「生存競争」。
 きやうちゆうさん 名 仰山 (一)甚多く、些細なることを大きくすること。
 きやうちゆうし 名 凝視 見つむること、注視、注目。
 きやうちゆうせい 名 匡正 物事を正すこと、改良などの意。
 きやうちゆうたう 名 驚倒 大に驚く事、けいたう、「世を驚倒す」。
 きやうちゆうたう 名 嚮導 みちびきしるべ、案内。
 きやうちゆうたう 名 行住坐臥 行く事と、止まる事と、

すわる事と臥す事との意にて立居振舞をいふ、起居動作。
 きやうちうてん 名 仰天 大に驚く事。
 きやうちうねん 名 享年 世に生存したる年齢、行年、「享年六十歳」。
 きやうちうはく 名 強迫 強ひて迫る事。
 きやうちうりやう 名 強梁 力強き事、強梁。
 きやうちうれい 名 行列 列を作りて行く事、「提灯行列」。
 きやうちうる 名 行爲 意志のある動作、おこなひ、かうあ、
 きやうちうか 名 却下 願書などを下げ展す事。
 きやうちうじやう 名 逆上 熱の腦に上る事、のぼせ。
 きやうちうしゆ 名 逆修 逆に冥福を祈ること。
 きやうちはん 名 脚絆 脛に絡ふ衣、はばき、脛衣。
 きやうちめい 名 覬覦 窺ふともかく、上位を望み視ふ事。
 きやうちくく 名 窮屈 身の思ふままに動き得ぬ事。
 きやうちくく 名 窮策 事の窮りて出づる策略。
 きやうちめい 名 毀譽 毀りと譽れと、「毀譽褒貶」。
 きやうちうえつ 名 恐悅 恐れ懼みて悦ぶ事、「恐悅至極」。
 きやうちうかく 名 恐嚇 おごして恐れしむる事、恐嚇。
 きやうちうかく 名 恐喝 きやうちうかくに同じ、「恐嚇取財」。
 きやうちうきやう 名 供給 入用に供する事、需用に對して言ふ、
 きやうちうきやう 名 恟恟 又洵々ともかく、恐れを懼きて打腫ぐ状に言ふ、「人心恟々として」。

きやうちゆうのやう 副 兢兢 懼れ懼れおそる事、「戰戰兢兢」。
 きやうちゆうのやう 名 恐懼 恐れおそる事、書簡文の末などに用ふる「恐懼謹言」。
 きやうちゆうけい 名 凝結 凝り固る事、「凝結して流れず」。
 きやうちゆうしん 名 恐察 他人の事を推察する事。
 きやうちゆうしん 名 胸算 心の見積。
 きやうちゆうしん 名 矜式 敬ひ法ること。
 きやうちゆうしん 名 凶識 悪しきしるし、吉兆の反對。
 きやうちゆうしゆ 名 拱手 手をこまわきて禮すること、又爲すこととて居ることといふ。
 きやうちゆうしゆ 名 恐縮 恐れおそる事、「恐縮に堪へず」。
 きやうちゆうせん 名 丑然 足音、人のくる足音をいふ。
 きやうちゆうほう 名 凶報 めでたからわ報知、「火災の凶報」。
 きやうちゆうみ 名 興味 おもしろみ、「興味津津」。
 きやうちゆうか 名 舉家 一家の全體、家内中、全家、團家、運家。
 きやうちゆうかう 名 倨傲 傲慢のこと、おごり高ぶるをいふ。
 きやうちゆうかう 名 虛喝 虚勢を張りて恐喝する事、からおごし。
 きやうちゆうかう 名 獻款 哀泣する事、「獻款流涕」。
 きやうちゆうかん 名 醜金 金を集むる事、「醜金して寄附す」。
 きやうちゆうかん 名 曲學阿世 學說を曲解して世俗におもはれる事、「曲學阿世の徒」。
 きやうちゆうかん 名 玉顔 玉の如く美しき顔。

きやうちゆうき 名 屈旗 日の丸の旗。
 きやうちゆうぐわい 名 局外 其の區域の外、「局外中立」。
 きやうちゆうたん 名 極端 (一)至極の端、(二)極めて偏りたる事、「極端なる議論」。
 きやうちゆうてん 名 極點 行きつまりたる所、「文明の極點」。
 きやうちゆうてんせきちやう 名 局天踏地 天に背くぐまり地にのき足す、身を容るるに地無きを言ふ。
 きやうちゆうとん 名 玉兔 月の異稱、「金烏玉兔」。
 きやうちゆうひつ 名 曲筆 筆を曲げて有無をかきかふること、直筆の反對。
 きやうちゆうわい 名 巨魁 悪人の首領、渠魁。
 きやうちゆうわん 名 魚貫 魚の連続して行くが如きに言ふ、「魚貫して進む」。
 きやうちゆうけい 名 御慶 よろこび、「新年の御慶」。
 きやうちゆうかう 名 去就 去ると就くと、背くと従ふと、「去就を決す」。
 きやうちゆうじやう 名 虛弱 身體の弱き事。
 きやうちゆうしん 名 魚水親 魚の水に於けるが如く親む事、甚だ中よきこと。
 きやうちゆうせい 名 虚勢 勢の有る如く見する事、「虚勢を張る」。
 きやうちゆうせん 名 居然 坐して動かざる状に言ふ、居ながらにして、「居然八方を辨す」。

またの名 許諾 聽き入る事、承諾。
またの名 舉動 たちふるまひ、おなじ、舉止、動作。
またの名 句居移氣 人の氣は處に據りて移さる。
またの名 巨擘 (一)おやゆび、拇指、(二)首領。
またの名 葬魚腹 水死に言ふ。
またの名 虚名 實の添はぬ名、「虚名を博す」。
またの名 許容 許す事、許可、允許、「御許容被下度候」。
またの名 距離 へだたり。
またの名 副 煌煌 光り輝く状に言ふ、「月煌々として」。
またの名 貴覽 御覽、高覽、尊覽、電覽、「貴覽に供す」。
またの名 寄留 原籍の外に假に住む事。
またの名 規律 きまり、規則、取締。
またの名 器量 (一)才器、徳量、(二)容量。
またの名 技倆 わざ、うてまへ。
またの名 羈旅 たび、旅行。
またの名 綺麗 (一)美麗なる事、(二)清潔なる事。
またの名 副 切切 甚しく切れて、離れ離れに。
またの名 歸路 きとに同じ。
またの名 岐路 (一)路の岐るる處、「岐路に泣く」(二)わきまらに同じ、「岐路に迷ふ」。
またの名 既住 既に過ぎし方、過去、「既住は昔めす」。

またの名 疑惑 疑ひ惑ふ事。
またの名 奇偉 人よりも勝れて逞しきをいふ。
またの名 愚按 自分の考を言ふ謙稱、愚存。
またの名 寓意 他事に託して其の意を現す事、「寓意小説」。
またの名 寓居 假に住む處、かりすまひ、僑居。
またの名 空拳 すで、からでに同じ。
またの名 寓言 寓意の有る語、たとへばなし。
またの名 偶語 相對して語る事。
またの名 耦刺 さしちがへて死ねること。
またの名 空翠 空の色の緑なること。
またの名 副 偶然 思ひ懸け無く、ふと、「偶然邂逅す」。
またの名 空談 無用の談話、むだくち、「空談に時を移す」。
またの名 空中樓閣 空中にある樓閣の義、あり得べからざること、空想。
またの名 副 空漠 廣漠として何も無き狀に言ふ、「空漠たる原野」。
またの名 空文 活用せぬ法文、「空文に盡す」、死文、くうもん 名 寓目 目をつくること。

またの名 空論 (一)據無き議論、(二)無用の議論。
またの名 具眼 物の是非を判する眼識を具ふる事、「具眼の士」。
またの名 句切 (一)文章の句の切りめ、段落、(二)物事のかぎり。
またの名 煦煦 氣息を以て暖むる意、聊の恩惠。
またの名 拘拘 のびざる貌。
またの名 副 姁姁 やばらぎ睦むさま。
またの名 副 翻翻 快ささうに語り笑ふ貌。
またの名 副 區區 (一)まぢまぢなる事、(二)小き事。
またの名 副 踴躍 親む所なきに言ふ、「踴々として獨行す」。
またの名 副 區劃 わかち、かぎり、境界。
またの名 苦患 苦み懼みて難儀する事。
またの名 苦言 苦苦しき言、甘言に對して言ふ、「苦言は藥なり」。
またの名 副 種種 品數の多き事、いろいろ、さまざま。
またの名 副 草葉陰 蔭の陰、蔭所。
またの名 苦心 苦しき心、心測する事、「苦辛慘澹」。
またの名 具臣 役に立たぬ臣、員數に備はるのみなるをいふ。
またの名 苦情 (一)苦しき事情、(二)心の不平を陳べしめる事、「苦情を訴ふ」。

またの名 具狀 具に事の狀態を記して申告する事。
またの名 口授 口にて授け傳ふる事。
またの名 副 口舌 くちの轉、言ひ争ふ事、口説。
またの名 副 懼然 怪み驚く狀に言ふ、「懼然として席を失ふ」。
またの名 具瞻 衆庶の俱に仰ぎ瞻る事。
またの名 苦楚 困難辛苦するをいふ、艱難。
またの名 愚存 ぐあんに同じ。
またの名 副 形 (一)事多くして厭し、煩雜、(二)無用の繰言なり、くまぐま、嘔吐。
またの名 副 草臥 くだびるる事、疲勞、「草臥を休む」。
またの名 副 以管窺天 見る所の極めて小なるに譬へて言ふ。
またの名 驅馳 牛馬をかりて驅せしむること、又諸處に奔走しまはること。
またの名 愚痴 (一)おろかなる事、(二)言ひてかひなき事を歎く事、「愚痴を列ぶ」。
またの名 愚忠 我が心の中、謙遜していふなり。
またの名 副 口辨 辯となりたることば。
またの名 副 唇亡齒寒 (一)一を失へば他の近きものも、亦敗れ易きに譬へて言ふ。
またの名 口許 (一)口の邊、口端、(二)口の事、口付。